

一橋大学審査学位論文

博士論文

ステレオタイプの抑制における代替思考方略の検討
—ステレオタイプ内容モデルに注目して—

田戸岡 好香

一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

SD091011

THE INVESTIGATION OF THE REPLACEMENT THOUGHT STRATEGY
FOR STEREOTYPE SUPPRESSION:
FOCUSING ON THE STEREOTYPE CONTENT MODEL

TADO'OKA, Yoshika

Doctoral Dissertation
Graduate School of Social Sciences
Hitotsubashi University

目次

第 I 部 問題

Pp. 1-42

§ 序章	2
0-1. はじめに	2
0-2. 本研究の目的	2
0-3. 本論文の概要と構成	4
§ 第 1 章. 対人認知におけるステレオタイプ	6
1-1. 対人認知とステレオタイプ	6
1-1-1. ステレオタイプとは	7
1-1-2. ステレオタイプの利点と問題点	8
1-2. ステレオタイプの問題に対する社会心理学的 アプローチ	9
1-2-1. ステレオタイプの変容というアプローチ	9
1-2-2. ステレオタイプ化の統制というアプローチ	11
§ 第 2 章. ステレオタイプ抑制とその帰結	14
2-1. ステレオタイプ抑制後のリバウンド効果	14
2-2. リバウンド効果の生起メカニズム	17
2-2-1. 皮肉過程理論による説明	17
2-2-2. 動機づけによる説明	20
2-2-3. 制御資源枯渇による説明	20
§ 第 3 章. リバウンド効果の低減方略：代替思考に注目して	22
3-1. 思考抑制研究における代替思考方略	22
3-2. 対人認知文脈におけるステレオタイプ抑制	24
3-3. ステレオタイプ内容モデルに注目した代替思考方略	26
3-3-1. ステレオタイプ内容モデル	27
3-3-2. 本研究で提案する代替思考方略	29

§ 第4章. 実証研究の目的と概要	・ ・ ・ ・ ・ 33
4-1. 実証研究の目的	・ ・ ・ ・ ・ 33
4-2. 本研究で扱うステレオタイプ	・ ・ ・ ・ ・ 33
4-2-1. 慈悲的ステレオタイプ	・ ・ ・ ・ ・ 34
4-2-2. 嫉妬的ステレオタイプ	・ ・ ・ ・ ・ 34
4-2-3. 先行研究で扱われてきたステレオタイプ対象	・ ・ ・ ・ ・ 35
4-3. 抑制場面の設定	・ ・ ・ ・ ・ 36
4-4. リバウンド効果の測定法	・ ・ ・ ・ ・ 37
4-4-1. 表出の測定	・ ・ ・ ・ ・ 37
4-4-2. アクセシビリティの程度の測定	・ ・ ・ ・ ・ 37
4-4-3. 測定法による結果の相違	・ ・ ・ ・ ・ 38
4-4-4. 対人認知課題の特徴と利点	・ ・ ・ ・ ・ 39
4-5. 実証研究の概要	・ ・ ・ ・ ・ 41

第Ⅱ部 実証研究

Pp. 43-152

§ 第5章 慈悲的ステレオタイプにおける代替思考方略の有効性の検討	・ ・ ・ ・ ・ 44
5-1. 研究1：家庭的女性に対する別次元思考方略の検討	・ ・ ・ ・ ・ 45
5-1-1. 問題	・ ・ ・ ・ ・ 45
5-1-2. 方法	・ ・ ・ ・ ・ 46
5-1-3. 結果	・ ・ ・ ・ ・ 55
5-1-4. 考察	・ ・ ・ ・ ・ 58
5-2. 研究2：高齢者ステレオタイプの抑制における リバウンド効果の検討	・ ・ ・ ・ ・ 61
5-2-1. 問題	・ ・ ・ ・ ・ 61
5-2-2. 方法	・ ・ ・ ・ ・ 62
5-2-3. 結果	・ ・ ・ ・ ・ 72
5-2-4. 考察	・ ・ ・ ・ ・ 75

5-3. 研究3：高齢者に対する別次元思考方略の検討	77
5-3-1. 問題	77
5-3-2. 方法	78
5-3-3. 結果	83
5-3-4. 考察	87
5-4. 研究4：別次元思考方略の有効性と代替思考の 生成しやすさの検討	89
5-4-1. 問題	89
5-4-2. 方法	89
5-4-3. 結果	92
5-4-4. 考察	95
5-5. 第5章の示唆と限界	95
5-5-1. 研究1から研究4のまとめ	95
5-5-2. 本章の示唆と限界	96
 § 第6章 嫉妬的ステレオタイプの抑制と 代替思考方略の検討	 97
6-1. 嫉妬的ステレオタイプの抑制	97
6-1-1. 嫉妬的ステレオタイプに特有の問題	97
6-1-2. 嫉妬的ステレオタイプにおける代替思考方略	100
6-2. 研究5：キャリア女性に対する競争意識が 抑制に及ぼす影響	104
6-2-1. 問題	104
6-2-2. 方法	105
6-2-3. 結果	116
6-2-4. 考察	120
6-3. 研究6：金融ディーラーに対する競争意識が 抑制に及ぼす影響	122
6-3-1. 問題	122
6-3-2. 方法	122
6-3-3. 結果	129
6-3-4. 考察	133

6-4. 研究7：嫉妬的ステレオタイプの抑制における 別次元思考方略の有効性と制限条件の検討	135
6-4-1. 問題	135
6-4-2. 方法	136
6-4-3. 結果	143
6-4-4. 考察	151
6-5. 第6章の示唆と今後の展望	152

第Ⅲ部 総合考察

Pp. 153-167

§ 第7章 総合考察	154
7-1. 実証研究の結果のまとめ	154
7-1-1. 慈悲的ステレオタイプの抑制	155
7-1-2. 嫉妬的ステレオタイプの抑制	156
7-1-3. 結果のまとめ：研究方法の特徴の観点から	157
7-2. 本研究の意義	157
7-2-1. 抑制研究に与える示唆と意義： 個人差に注目して	158
7-2-2. 抑制研究に与える示唆と意義： 対人認知の観点から	159
7-2-3. 関連分野に与える示唆	160
7-2-4. 本研究の社会的意義	163
7-3. 今後の展望	164
7-4. 結論	166

引用文献

Pp. 168-179

付録

謝辞

第 I 部：問題

§ 序章

0-1. はじめに

私たちは「女性は優しい」、「黒人は乱暴だ」といったように、相手の性別や年齢、職業、人種など、その人がどういった集団に属するかという情報を手がかりに他者を判断することがある。こうしたある集団に属する人たちに対する固定的な知識をステレオタイプという。ステレオタイプを用いて他者を判断することは、自分と異なる集団に所属する人々を理解する上で役立つことがあるが、社会的に望ましくない結果を生むこともある。例えば、女性や高齢者は仕事に向かないなどと、自分よりも地位が低いと考えられる人々を無能だと考えてしまうことがあり、女性や高齢者などが雇用において不平等を被ることがある。他方で、キャリア女性やエリート官僚のように、自分よりも地位が高い人を見ると、仕事はできるが冷たい人物だろう、と否定的に考えてしまうことがある。

このように、自分と異なる集団に属する人に対して、否定的な認知を抱きやすい一方で、我々はそうしたステレオタイプを他者にあてはめて考えないように、抑制しようとすることがある。しかし、近年の研究では、そうした抑制後にはかえってステレオタイプに基づいて人を判断する傾向が強まってしまうことが指摘されている（リバウンド効果）。本論文では、ステレオタイプ抑制という観点から、否定的なステレオタイプを避けることが難しい理由を明らかにした上で、ステレオタイプを避けるための抑制方略を検討した。

0-2. 本研究の目的

現代社会では、グローバル化によって至る所で外国人を見かけるようになり、男性が中心的な役割を果たしていた労働現場へ女性が進出するなど、さまざまな集団に所属する人々が共生するようになってきた。そうした自分と異なる集団に所属する他者を理解する際に、ステレオタイプを当てはめて判断するだけでは、適切な対人関係を築いていくことはできない。また、平等主義的な規範の観点からも、他者を偏見の目で見るとは避けるべきことである。古くは欧米における黒人差別や日本における部落差別、雇用における男

女不平等など、私たちはこうした差別問題をなくし、人がどのようにすれば他者を平等に扱うことができるのか、という問題に関心を持ってきた。その問題への対処として、さまざまな差別是正政策や男女雇用機会均等法といった制度を整備することが行われてきたが、平等主義的規範が広まった現代においても差別は根強く残っている。

こうした差別が是正されない理由の一つとして、社会心理学では、私たちがなぜ他者をステレオタイプの的に判断してしまうのか、ということのメカニズムに注目してきた。人は知識を得たり、目の前の情報の意味を知りたいという動機を持っている。しかし、私たちの環境には大量の情報があり、そうした情報をすべて処理するには脳の能力に限界があるため、他者を簡便に理解するために (cognitive miser)、ステレオタイプが使用されるということが明らかになってきた (e.g., Allport, 1954; Bruner, 1957; Heider, 1944)。ステレオタイプとは、ある集団成員に対する過度に一般化されたイメージのことである。他者を判断する際に、ステレオタイプを当てはめて偏見を示すことは、上記のような社会的問題の一因となっており、平等主義的な価値観に照らせば忌避されるべき事柄である。しかし、社会心理学の多くの研究では、ステレオタイプは文化的によく学習されているために、他者を区分する手がかり (例えば黒人の顔写真) を得ただけで、自動的に活性化することが示されている (e.g., Devine, 1989)。また、そのようにステレオタイプが自動的に活性化すると、個別情報を正確に用いずに、ステレオタイプに基づいた対人認知を促してしまうことが明らかになっている。

こうしたステレオタイプを他者に当てはめることによる問題を避けるために、私たちはステレオタイプの的な判断を避けようと意識的に抑制を行うことが多い。しかし、抑制後にかえって当該ステレオタイプのアクセスビリティが上昇し、ステレオタイプに基づいて人を判断する傾向が強まることが知られており、これをリバウンド効果という (Macrae, Bodenhausen, Milne, & Jetten, 1994)。ステレオタイプの判断をしないことは非常に重要であるにもかかわらず、リバウンド効果を低減させる方略はこれまで示されてこなかった。そこで、本論文では、これまでの抑制研究を概観することで、ステレオタイプ抑制後のリバウンド効果がなぜ生じやすいのかを明らかにする。その上で、効果的な抑制方略を探るための実証的研究を行った。具体的には、ネガティブなステレオタイプ特性を抑制する際に、相補的なポジティブなステレオタイプ特性を代替思考として用いるとリバウンド効果が低減することを、実証研究によって示すことを目的とした。

0-3. 本論文の概要と構成

本論文は3部から成り立っている。「第Ⅰ部：問題」では、本論文の目的について述べていく。

「第1章：対人認知におけるステレオタイプ」では、先行研究に基づき、ステレオタイプおよびそれに関連した用語の定義を行っていく。また、対人認知場面でステレオタイプがどのように働き、私たちの判断や行動にどのように影響を与えるか、といったステレオタイプを適用する際の問題点について明らかにしていく。その上で、こうした問題に対して、これまで社会心理学がどのようにアプローチしてきたかを明らかにしながら、関連研究を概観していく。

「第2章：ステレオタイプ抑制とその帰結」では、第1章で述べたアプローチの中から、ステレオタイプ抑制に焦点を当てる。特に、ステレオタイプ抑制後に生起するリバウンド効果とは、どういった現象であるのかを詳細に紹介する。また、それに関するメカニズムに関して、先行研究のレビューを行う。

「第3章：リバウンド効果の低減方略：代替思考に注目して」では、リバウンド効果を低減する方略として、代替思考方略を取り上げる。特に思考抑制研究とステレオタイプ抑制研究の相違点を明らかにしながら論じていく。ステレオタイプ抑制研究における代替思考方略の限界を指摘した上で、ステレオタイプ内容モデルに注目することで、有効な代替思考を提案することができる、という仮説を導いていく。

「第4章：実証研究の目的と概要」では、第1章から第3章までの内容をまとめ、本研究の検討課題について整理する。そして、実証研究において扱うステレオタイプについて定義する。また、先行研究を概観しながら、本研究の従属変数となるリバウンド効果の測定に関して説明する。

次に、「第Ⅱ部：実証研究」では、仮説を検討するために行った7つの実験研究を具体的に説明していく。

「第5章：慈悲的ステレオタイプの抑制における代替思考方略の有効性の検討」では、「温かいが無能」という家庭的女性や高齢者に対して向けられるステレオタイプを題材として、本研究が提案する代替思考方略の有効性について検討した。

「第6章：嫉妬的ステレオタイプの抑制と代替思考方略の検討」では、「有能だが冷たい」というキャリア女性やエリート男性に対して向けられるステレオタイプを題材とした。こ

れまで嫉妬的ステレオタイプの抑制は検討されてこなかったため、前半では、リバウンド効果の生起について検討した。後半では、本研究が提案する代替思考方略の有効性とその限界点について検討した。

最後に、「第Ⅲ部：総合考察」では、第Ⅰ部および第Ⅱ部を総括して議論を行う。

「第 7 章：総合考察」では、第Ⅱ部で示した 7 つの実証研究で得られた研究知見を簡潔にまとめる。その上で、これらの研究の示唆や意義について、先行研究および関連領域の研究を含めながら議論をしていく。また、この研究知見の社会的意義についても述べていく。最後に、今後の展望について議論する。

§ 第1章

対人認知におけるステレオタイプ

1-1. 対人認知とステレオタイプ

我々は社会的生活の中で、いろいろな他者とかかわり合いながら生きており、相手がどういった人物なのかを日々判断して過ごしている。このように、様々な情報から他者を理解し、その特性を判断することを対人認知 (person perception) という。これまで社会心理学において、対人認知に関する多くの研究がなされ、対人認知がどのような過程で行われているかが明らかになってきた。

対人認知の過程を説明した代表的なモデルとして、Fiske & Neuberg (1990) の連続体モデルが挙げられる (図 1-1)。図 1-1 に示したように、Fiske & Neuberg (1990) によれば、我々が最初に他者に会った時には、その人を何らかのカテゴリーにあてはめる初期カテゴリー化が生じる。初期カテゴリー化とは人種、年齢、性別といったようなカテゴリーによって一瞬のうちに相手を知覚することである。そして、最小限の関心がなければ、その時点で印象形成は終了するが、もし関心があれば、その人物に注意を向け、最初に当てはめたカテゴリーが適切であるかどうかを判断する確証的カテゴリー化を行う。その際、人物の情報が初期のカテゴリーに当てはまれば、そのカテゴリーに基づいた印象が形成されるが、当てはまらない場合はもう一度他のカテゴリーを当てはめる再カテゴリー化を行うことになる。この再カテゴリー化の段階でも、人物の情報とカテゴリーが一致しない場合は、個々の情報に基づいた判断であるピースミール処理を行うこととなる。このように、このモデルでは、我々が対人認知をする際には、一度何らかのカテゴリーに当てはめ、そのカテゴリーに当てはまるかどうかという判断を連続的に行っていくと主張している。

このモデルの主張の重要な点は、対人認知の初期段階では、人をなんらかのカテゴリーにあてはめて判断することは必ず生起しており、対象への関心などに応じて、そうしたカテゴリーによる判断を、その後の処理によって調整していく必要があるという点である。私たちの周囲には多くの情報があふれかえっているため、情報処理に負荷をかけることなく対人認知を流暢に行うためには、こうしたカテゴリー化による処理がデフォルトとして行われるのである。

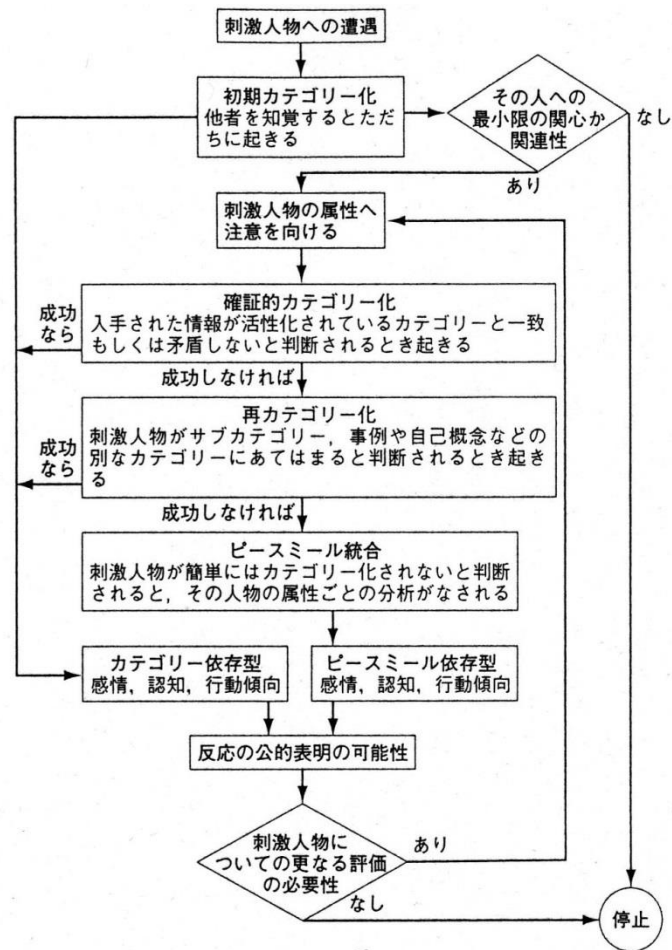


図 1-1. Fiske & Neuberg (1990) の連続体モデル (山本・原, 2006 より)

1-1-1. ステレオタイプとは

Fiske & Neuberg (1990) の連続体モデルのように、我々は対人認知をする時にカテゴリーに基づいた判断を行う。こうしたカテゴリーには固有のイメージが存在しており、そのイメージはステレオタイプ (stereotype) とよばれる。ステレオタイプとは、元々は印刷用の原型から作られる鉛版のことで、パターンを複写するためのものである。人々が様々な事象を認知する時に、イメージとしての型を用いている様子から、人の情報処理において用いられる一般的なイメージという意味でウォルター・リップマンがステレオタイプという言葉を用い始めた (Lippman, 1922)。すなわち、ステレオタイプとは、社会的集団に対する過度に一般化された画一化したイメージや信念のことである。ステレオタイプは社会的集団に対するイメージであるため、それには「黒人は攻撃的である」というようなネガティブなものから、「イタリア人は陽気である」といったポジティブなものまで含まれる。

他方、ステレオタイプと同様の意味合いで使われることが多いのが偏見（prejudice）や差別（discrimination）である。元来、態度は認知と感情と行動の3つの成分から構成されると考えられてきており、その考えに従うと、ステレオタイプは認知的成分、偏見は感情的成分、そして差別が行動的成分だとみなされている（Fiske, 1998）。態度概念のうち、感情成分を強調したものが偏見である。偏見はある社会的集団や個人に対する否定的な感情であり、通常、ステレオタイプのようにポジティブな内容は含まれないと考えられることが多い。また、そうした偏見感情に基づく、ある集団成員に対するネガティブな行動が差別である。例えば、「黒人は攻撃的だ」という認知的イメージはステレオタイプであり、「黒人は嫌いだ」という感情が偏見、「黒人を雇わない」という行動が差別ということになる。このように、現存する偏見や差別の根底には、集団に対する画一化されたイメージとしてのステレオタイプが存在するのである。

1-1-2. ステレオタイプの利点と問題点

ステレオタイプは私たちが日常を過ごす上で欠かすことのできない「合理的」なツールである。我々の社会には膨大な情報が溢れているが、それを認知するための処理資源は限られている。しかし、ステレオタイプを利用することで、単純化した処理をすることができ、その結果、我々は処理資源を節約した認知を行うことができる。こうしたステレオタイプを他者にあてはめて判断することをステレオタイプ化（stereotyping）やステレオタイプの適用（stereotype application）という。このように、ステレオタイプは複雑な世界を少ない資源で理解するためには有用なものであり、人が対人認知の過程でステレオタイプを用いることは古くからよく知られている（e.g., Cohen, 1981）。

しかし、人種・民族・性別など、さまざまな集団にステレオタイプを適用することは、対人認知を歪める恐れがある。その古典的な研究として、例えば Cohen (1981)は、参加者にある女性が行動するビデオを見せた。その際、半分の参加者にはこの女性は「司書」とであると告げ、もう半分の参加者にはこの女性は「ウェイトレス」とであると告げた。ビデオの視聴後に、記憶テストを行ったところ、職業のイメージに一致した情報の方が、一致しない情報よりも、再認成績が高かった。参加者は職業ステレオタイプに一致した情報により注意を向けていたため、よく記憶されていたと考えられる。また、記憶だけでなく、他者に対する判断にも影響を及ぼすことが示されている。Duncan (1976)は、白人大学生の参加者に、あるターゲット人物が白人を肩でこづくようなビデオを視聴させた。その際、半分

の参加者にはターゲット人物が黒人のビデオを、もう半分の参加者には白人のビデオを見せた。すると、白人のビデオを見た場合にはターゲット人物の行動を「ふざけていた」と解釈したのに対し、黒人のビデオを見た場合には「この人は乱暴だ」というように解釈した。このように、映像による様々な個別情報があつたとしても、ステレオタイプに一致したようなデータのみに基づいて判断したり、解釈するなど、ステレオタイプを利用することで対人認知が歪んでしまう場合がある。

さらに、こうした個別データがない場合には、よりステレオタイプに依存した対人認知がなされてしまう。こうした社会心理学の知見に基づけば、例えば、女性に対して「働き手にならなそうだ」、「リーダーとしては不向きだ」などとステレオタイプの判断をしてしまうことがあると考えられる。このように、仕事の応募者や勤務者がどういったカテゴリーに所属しているかという情報が採否や昇進に影響を及ぼす一因となっているために、制度を整えたとしても男女格差が埋まらないということがあるだろう。

1-2. ステレオタイプの問題に対する社会心理学的アプローチ

差別是正のために社会的な制度を整えることは重要である。しかし、同時に、そもそもなぜ人はステレオタイプを他者にあてはめてしまうのかを明らかにした上で、どのようにすればステレオタイプの判断を避けることができるのかを明らかにすることも必要であろう。すなわち、社会心理学の立場から、ステレオタイプの判断を行ってしまうことのメカニズムを理解することは、差別問題への対応を考えるうえで寄与できる部分があるだろう。そこで本論文では、特にメカニズムに注目をする社会的認知研究の立場から、ステレオタイプの判断に伴うメカニズムを明らかにした上で、それを避ける可能性を探ることとした。

1-2-1. ステレオタイプ変容というアプローチ

社会心理学では、ステレオタイプの判断を避けるために、これまで大きく分けて二つのアプローチをとってきた。

一つ目は、ステレオタイプの内容そのものを変容させるというアプローチである。20 世紀初頭の古典的ステレオタイプ研究では、ステレオタイプの内容を測定することが試みら

れてきた。Katz & Braly (1933) はアメリカの白人大学生の中で持たれているテレオタイプの内容を測定し、黒人に対してネガティブなステレオタイプが持たれていることが明らかになった。その後の縦断研究によって、黒人に対するネガティブなステレオタイプが弱まってきたことが示されているものの (Dovidio & Gaertner, 1991)、近年では、偏見を示すことが望ましくないという規範を意識したために、あからさまな表出を避けているだけではないかという指摘がなされている (Devine, 1989)。実際、ステレオタイプは文化的によく学習されているために、集団と強く関連付けられるようになると考えられている (Bandura, 1977)。そのため、従来はこうした連合を変容させることは困難であると考えられていた (e.g., Bargh, 1999; Fazio, Jackson, Dunton, Williams, 1995)。

しかし近年、こうした集団とステレオタイプ知識との連合を消去することで、ステレオタイプの問題をなくそうという試みがなされており、多量の訓練や時間をかけた学習によってある程度の変容が生じることが示されている。例えば、Kawakami, Dovidio, Moll, Hermesen, & Russin (2000) の研究では、白人／黒人の顔写真と性格特性を参加者に呈示し、ステレオタイプの組み合わせ (i.e., 白人とポジティブな性格特性、あるいは黒人とネガティブな特性) には “No” と反応し、反ステレオタイプの組み合わせ (i.e., 白人とネガティブな特性、あるいは黒人とポジティブな特性) には “Yes” と反応する訓練を繰り返した。その結果、ステレオタイプの自動的な活性化が抑制されるようになった。同様に、Kawakami, Phills, Steele, & Dovidio (2007) の研究では、黒人の写真を自分に近づけ、白人の写真を自分から遠ざけるという接近回避行動を繰り返したところ、黒人に対するステレオタイプが低減した (同様の知見は Phills, Kawakami, Tabi, Nadolny, & Inzlicht, 2011)。

また、ある態度対象とポジティブ／ネガティブな刺激を同時に呈示することで、その対象への態度が刺激のバイレンスの方向に変化するという評価的条件付けによっても、ステレオタイプ変容は生じる。Olson & Fazio (2006) では、黒人写真とポジティブ刺激 (e.g., 子犬の写真) および白人刺激とネガティブ刺激 (e.g., 蜂の写真) を繰り返し対呈示された場合には、ステレオタイプの連合が弱まっていた。また、野寺・唐沢 (2005) では、女性とネガティブなステレオタイプの特性 (e.g., 女性 - 依存的) を対呈示した場合に必ず嫌悪音を与える罰あり条件と、女性ステレオタイプとは無関係な 2 語 (e.g., 参加 - 最終的) を対呈示した際に嫌悪音を与える統制条件を設けたところ、罰あり条件では女性に対するステレオタイプが活性化しなくなった。

また、接近回避といった行動や、対呈示を行わなくても、反ステレオタイプ事例を見せ

続けるだけでも効果があることがわかっている。Dasgupta & Greenwald (2001)では、評判の良い黒人著名人（e.g., スポーツ選手）と評判の悪い白人著名人（e.g., 犯罪者）といった反ステレオタイプの事例を呈示し続けると、ステレオタイプの連合が弱まった。

より直接的な介入として、Rudman, Greenwald, Mellot, & Schwartz (1999) は偏見問題に関する授業を1学期受講した生徒は、受講前よりも人種差別的な連合が弱まっていた。

以上の結果は、従来変容しないと考えられてきたステレオタイプ自体を変容させるという点で、長期的に望ましい効果を得られる可能性が高く、社会的に意義のある方略である。こうしたアプローチは長い時間や訓練を通して反ステレオタイプの態度を形成していくアプローチである。

1-2-2. ステレオタイプ化の統制というアプローチ

しかし、私たちが生活していく中では、そうした長期的な訓練を行うことが難しい場合もあるだろう。そこで二つ目のアプローチとして、より短期的にステレオタイプ化を意図的に統制する試みもなされている。ステレオタイプは文化的によく学習されているために、黒人の顔写真などの他者を区分する手がかりを得ただけで、自動的に活性化することが示されている（e.g., Devine, 1989）。例えば、Devine (1989, 実験2) は閾下刺激によって黒人ステレオタイプを活性化させた後、ターゲット人物の印象を尋ねた。その結果、低偏見者であっても高偏見者と同じように、ターゲット人物を黒人ステレオタイプに当てはまるように、攻撃的であると評定した。ただし、実験3において、ステレオタイプが活性化してしまったことに気づいた場合には、ターゲット人物を攻撃的だと評定しなくなった。以上の研究から、ステレオタイプの活性化は自動的に生じるものであり、その影響が判断や行動に出ないようにするためには、意図的な統制が必要であると考えられている。このように、自動的な過程で生じたステレオタイプの活性化を、統制的な過程によって制御しようとする、という考え方は二過程理論とよばれる（Brewer, 1988; Devine, 1989; Fiske & Newberg, 1990）。

こうしたアプローチの研究では、4つの主要な理論的概念がある（Amodio & Devine, 2010; Devine & Monteith, 1999; Gilbert, 1999）。

一つ目に、二過程理論を基に、自動的過程と統制的過程を独立のものと捉え、行動表出の段階で自動的なバイアスを意図的反応によって置き換える「上書き（override／replacement）」である。自動的なステレオタイプの活性化が避けられないものであるという

ことを前提としているものの、それを行動に移すときには意識的に非偏見的な反応をとることができる。例えば、黒人の顔という刺激が呈示されれば黒人に対するステレオタイプは活性化するものの、意識的には偏見的な反応はしないようにできる。この考え方は、前述した連続体モデルにおいても含意されている（Fiske & Newberg, 1990）。ただし、こうした統制的な過程には認知資源が必要であるため、認知資源が不十分な時には上書きがうまくいかない可能性が指摘されており、ステレオタイプの活性化そのものを抑える必要があるだろう。

二つ目に、バイアスがある場合にそのバイアスの源泉に気づき、修正を実行する「修正（correction）」である。自動的なステレオタイプの活性化に気付くことで、それを意識的に修正することができる。修正が成功するためには、私たちの判断は気付かないうちにバイアスがかかるおそれがあるということを認識し、それを修正しようという動機づけをもち、実際に修正できるだけの資源が必要となる（Wilson & Brekke, 1994）。このように、バイアスの修正を行うためには多くのステップが必要であるが、修正を実行できた場合でも、過剰な修正が行われる場合がある（Harber, 1998; Wegener & Petty, 1997）。例えば、Friend & Vinson (1974) の刑罰判断に関する実験では、「美人は性格が良い」というステレオタイプに基づいた判断を行わないように教示された参加者は、美人な被告人に対して過剰に刑罰を重くしていた。このように、修正を行おうとした結果、必要以上の修正がなされてしまう場合がある。

三つ目に、拮抗する概念の活性化反応によって、当該ステレオタイプの活性化を置き換える「抑止（inhibition）」である。例えば中国人女性は「中国人」と「女性」という二つのカテゴリーに所属している。そうした場合、中国人女性が箸を持っている場面を見ると、中国人概念が活性化し、女性ステレオタイプの活性化が低減する（Macrae, Bodenhausen, & Milne, 1995）。こうした知見から、Wittenbrink, Judd, & Park (2001) は、教会（ポジティブ文脈）の前にいる黒人か、落書きされた壁のある通り（ネガティブ文脈）の前にいる黒人の刺激を呈示した。その結果、ネガティブな文脈よりもポジティブな文脈にいる黒人に対する偏見的反応が低減していた。このように、同じ黒人であっても、その状況的文脈によって黒人ステレオタイプの活性化を抑止できることが示されている。

そして四つ目に、ステレオタイプのような望まない思考を考えないようにする「抑制（suppression）」である。抑制は意識的な意図によってステレオタイプの判断を避けるという点で、抑止とは区別される。また、活性化した知識を表出しないように統制する上書き

や修正とは異なり、抑制はステレオタイプの判断を避けるために、そもそも頭の中にステレオタイプの思考を思い浮かばないように排除しようとする、内的な思考に対するアプローチである。このアプローチは、過去の失敗やトラウマなどを思い浮かばないようにしようとする思考抑制の考え方に基づくものである。上書きや修正では、資源を枯渇させてしまう可能性や過剰修正の問題がある。そのため、ステレオタイプを避けるためには、そもそも頭の中にステレオタイプが思い浮かばないようにするという抑制が重要であり、一般的に、ステレオタイプを避けるべき場面では、こうした抑制が行われやすいことが指摘されている (Monteith, Sherman, & Devine, 1998, for a review)。

このように、ステレオタイプの意識的統制には 4 つのアプローチが考えられる。現実の生活場面では、これら 4 つの過程は同時に作動し、偏見的な反応を統制すると考えられているが、外集団成員に出会った時には、抑制が行われやすいという指摘から、本研究では抑制というアプローチに注目することとした。

§ 第2章 ステレオタイプ抑制とその帰結

2-1. ステレオタイプ抑制後のリバウンド効果

抑制は、ステレオタイプをあてはめられる対象に出会った時に行うため、対象が限定されず、即座に行うことができる。実際、ステレオタイプを避けるべき場面に直面した場合には、ステレオタイプの判断をしないように抑制が行われることが多いということが指摘されている (Monteith *et al.*, 1998, for a review)。

このように、ステレオタイプの反応を避けるためには、意識からステレオタイプの思考を追い出そうとする抑制というアプローチがとられるものの、思考を抑制すると、かえってステレオタイプのアクセシビリティが上昇してしまい、思いつきやすくなってしまいうという逆説的な効果が多くの領域で示されてきている (e.g., シロクマ, Wegner, Schneider, Carter, & White, 1987; 前の恋人, Wegner & Gold, 1995; 気分, Wegner, Erber, & Zanakos, 1993; 抑うつ的な思考, Wenzlaff, Wegner, & Roper, 1988; 以前経験した気分や出来事, Howell & Conway, 1992)。そして、思考と同様に、ステレオタイプの場合でも、抑制をすると逆説的な結果に終わることが示されてきている。抑制した後に、ステレオタイプが活性化して、後の判断や行動におけるアクセシビリティ¹が上昇する現象は、リバウンド効果という。Macrae *et al.* (1994) は、リバウンド効果が判断、行動、当該ステレオタイプのアクセシビリティといったそれぞれの水準で生じることを示している。欧米ではネオナチなどの排外主義的な集団にスキンヘッド男性が多かったことから、スキンヘッド男性は「排他的」や「暴力的」といったステレオタイプを持たれている。Macrae *et al.* (1994) では、あるスキンヘッド男性の写真を呈示し、その人物の典型的な一日の記述を求めた。この時、抑制条件ではステレオタイプの記述を避けるよう教示し、統制条件ではこうした教示をしなかった。すると、抑制条件は統制条件に比べて教示どおりステレオタイプを記述せず、抑制するこ

¹ アクセシビリティ (accessibility; 接近可能性) とは、知識へのアクセスのしやすさのこと。状況的な要因によって変化し、知覚者が最近接触した知識や、繰り返し利用した知識はアクセシビリティが高くなる。アクセシビリティの高い知識は容易に心に浮かぶため、情報を解釈する際の手がかりとして使われ、判断に影響を及ぼすことが知られている (森, 2001)。

とができた。しかし、その後、別のスキンヘッド男性の写真を呈示し、特に抑制教示をせずに同様の記述を求めると、抑制条件は統制条件よりもステレオタイプの記述が増えていた（実験 1）。また、実験 2 ではステレオタイプ抑制後の行動への影響を検討した。実験 1 と同様に、スキンヘッド男性の写真を呈示し抑制操作を行った。その後、スキンヘッドの男性と実際に相互作用をしてもらおうと参加者に説明し、別の部屋に連れて行った。別室には、スキンヘッド男性のものだと思われる荷物と置かれたパイプ椅子がいくつか置かれていた。実験者は、相手はすぐに戻ってくると思うので、パイプ椅子を広げて座って待っているように参加者に告げた。その際、参加者が椅子を置いた位置が、スキンヘッド男性に対する行動指標となっていた。実験の結果、統制条件に比べて、抑制後にはスキンヘッドの男性からより離れて座ることが明らかになった。このことは、抑制後のリバウンド効果が行動においても生起することを示している。さらに実験 3 では、これまで示されたステレオタイプの記述の増加（実験 1）や回避的な行動の促進（実験 2）は、抑制後に当該ステレオタイプのアクセシビリティが上昇するためであることを明らかにした。具体的には、これまでと同様のステレオタイプ抑制の操作を行った後、語彙決定課題を行った。語彙決定課題とは、パソコンの画面上に呈示された文字列が、単語か単語でないかを素早く判断するという課題である。単語の中にはスキンヘッドに対するステレオタイプに関連した単語（e.g., 暴力的）と、無関連な単語が含まれていた。当該ステレオタイプが思いつきやすくなっているほど、ステレオタイプ関連語に対する反応が速くなることから、当該ステレオタイプのアクセシビリティが高いということを示すことになる。このようにして、スキンヘッドに対するステレオタイプのアクセシビリティを測定した。実験の結果、統制条件に比べて、抑制条件では当該ステレオタイプに対する反応が早くなっており、抑制後にはステレオタイプのアクセシビリティが上昇することが示された。このように、私たちは一時的であれば、ステレオタイプの反応を抑制することができる。しかし、抑制によってステレオタイプのアクセシビリティが高まってしまい、その後の判断や行動においてはステレオタイプの反応を避けることが困難になってしまうのである。

このようにステレオタイプの抑制後にリバウンド効果が生起することが示されてから（Macrae *et al.*, 1994）、リバウンド効果がどういった側面に現れるのかという点についてもいくつかの研究で示されるようになってきた。例えば、ステレオタイプ抑制が記憶に与える影響として、抑制後にはステレオタイプ一致情報の方が不一致情報よりも記憶に残ることが示された（Macrae, Bodenhausen, Milne, & Wheeler., 1996; Sherman, Stroessner, Loftus, &

DeGuzman., 1997)。また、行動への影響として、ステレオタイプに一致した行動が増加することも示されている。例えば、スポーツ選手のステレオタイプを抑制すると、その後の知的課題の遂行が低下したり、高齢者のステレオタイプを抑制すると歩く速度が遅くなるということが明らかになっている (Follenfant & Ric, 2009; Wyer, Mazzoni, Perfect, Calvini, & Neilens, 2010)。このように、様々な形で抑制後にはリバウンド効果が生起するということが頑健に示されてきた。

また、教示による抑制だけでなく、平等主義的規範の高まりによって抑制を行った場合でもリバウンド効果が生起する問題は指摘されている。Wyer, Sherman, & Stroessner (1998) では、ある黒人男性の典型的な一日を書くよう求める課題において、その課題が黒人が組織する団体によって行われる研究であると教示された参加者は自発的抑制を行っており、その後ステレオタイプのアクセシビリティを測定したところリバウンド効果が生起していた。また、鏡を見ることによって客体的自覚状態が高まり社会的規範に敏感になった参加者も、同様に自発的な抑制を行っていた (Macrae, Bodenhausen, & Milne, 1998)。以上のように、実験上の教示がなくても、私たちは社会的規範に従ってステレオタイプを自発的に抑制することがあるが、その抑制は皮肉にもリバウンド効果を生起させてしまうことがある。

日本においても、ジェンダーに関する分野では、勤労における男女差別をなくすべく制定された男女雇用機会均等法が制定されていることや、平等主義的性役割観が持たれている (鈴木, 1994) ことが示されている。また、偏見抑制尺度に関する研究では、一般的には規範を意識するために偏見の抑制を行うことが示されている (高林・村田, 2005; 高林・村田・埴田, 2007)。このように、現代社会において、ステレオタイプの判断をしないことは非常に重要であるにもかかわらず、リバウンド効果を生起させずに、ステレオタイプを効果的に抑制する方略を示した研究は少ない。そのため、本論文では、短期的にステレオタイプを避ける方略として、ステレオタイプ抑制を取り上げ、社会的認知研究の立場から、抑制のメカニズムに注目し、リバウンド効果を低減させる方略を探ることを目的とした。よって本研究の目的は、ステレオタイプ抑制においてリバウンド効果が生起するのはなぜか、というメカニズムを明らかにし、その上でどのような抑制方略がリバウンド効果を低減させるのかを明らかにすることである。

2-2. リバウンド効果の生起メカニズム

ステレオタイプ抑制後のリバウンド効果を低減させる方略を探るためには、リバウンド効果の生起メカニズムを確認しておく必要があるだろう。メカニズムについてはいくつかの説明がなされているが、ここでは代表的な説明を3つとりあげることとする。

2-2-1. 皮肉過程理論による説明

一つ目に、思考抑制研究で支持されてきた Wegner (1994)の皮肉過程理論 (Ironic-Process Theory) による説明がある (図 2-1)。この理論によれば、抑制過程は二つの過程から構成されるという。一つは、抑制対象を意識から追い出そうとする実行過程 (operating process) である。もう一つは、抑制対象となる思考が意識内に生じていないかをチェックする自動的な監視過程 (monitoring process) である。この過程では、抑制対象が意識内に生じていないかを自動的に監視するために、避けるべき対象の表象を活性化しておくことが必要となる。もしも実行過程が十分機能しない場合には、抑制対象が意識内に侵入したことを監視過程が察知し、実行過程に合図を発し、対象を排除するために抑制意図が強まる。そうすると、図 2-1 に示したように、監視過程がより嚴重に働き、結果として抑制対象へのアクセスビリティが過度に高まるという一連の循環が生起してしまうのである。このように、すばやく抑制対象を察知するためには監視過程が必要であるが、実行過程の働きが不十分な場合には、嚴重になった監視過程がリバウンド効果を生起させるのである。しかし、実行過程がうまく機能している場合には、抑制対象が意識内に生じないため、監視過程が嚴重にならず、抑制対象のアクセスビリティは必要以上に高まることはなくなる。

こうした二つの過程によって抑制は行われ、監視過程が抑制対象のアクセスビリティを高めることとなる。ただし、こうした抑制対象のアクセスビリティの上昇がなぜその後の判断や行動にまで影響を及ぼすのかという点に関しては、初期には二つの説明がなされてきた。

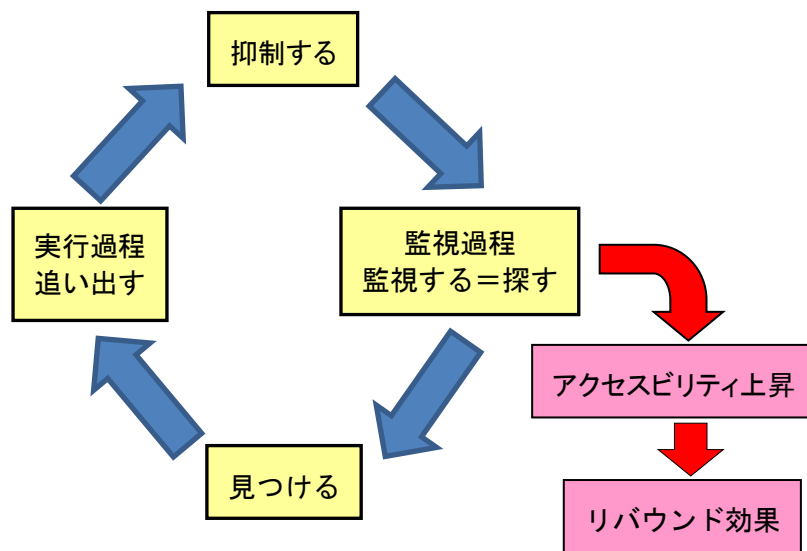


図 2-1. 皮肉過程理論のモデル図

初期の説明の一つ目として、実行過程が認知負荷などの何らかの理由で損なわれた時に、アクセスビリティが上昇した抑制対象が意識上に思い浮かんでしまうため、リバウンド効果が生起すると説明されてきた。確かに、Wegner & Erber (1992) および Wegner *et al.*, (1993) は認知負荷がある状況では、認知資源に依存した実行過程が働かず、代替思考を生成することができないために、リバウンド効果が生じると示した。しかし、そもそも Wegner *et al.* (1987) がリバウンド効果を示した状況は、単にシロクマについて考えないように教示されるだけであった。つまり、認知負荷がかかった状況ではなく、実行過程が損なわれたとは考えにくい (Macrae *et al.*, 1994; Renaud & McConnell, 2002)。よって現在では、実行過程が損なわれることでリバウンド効果が生じる場合は確かにあるが、認知負荷はリバウンド効果の調整要因でしかないと指摘されている (Macrae *et al.*, 2004)。

二つ目の説明として、抑制対象と代替思考との認知的連合による説明が試みられた (Wegner *et al.*, 1987)。Wegner *et al.* (1987) によれば、抑制をしている時には、実験室内にあるような身の回りのもの (e.g. 鉛筆やパソコン、カーテンなど) を、抑制対象から意識をそらす代替思考として用いている。抑制時にはそういった代替思考を用いることでうまく抑制することができるが、身の回りのものを代替思考として利用してしまうために、抑制対象と代替思考との間に認知的連合が形成されてしまう。その結果、実験室内の物が抑制対象を思い出す引き金として働き、その後のリバウンド効果が生起すると説明した。例えば、シロクマを抑制する際に部屋のカーテンを代替思考として利用すると、時間が経過

した後でも、そのカーテンを見ただけでシロクマを思い出してしまうということが生じうるといふ。

しかし、Macrae *et al.* (1994, 実験 2) は、リバウンド効果の生起メカニズムはこの説明では不十分であると実証した。彼らは前述した実験と同様に、写真の人物の典型的な一日を記述させ、その際抑制操作をした。つづいて、写真の人物に会うと称し、実験参加者を隣の部屋へ連れて行き、抑制時と周囲の環境を変化させた。部屋にはターゲット人物の荷物のみがあり、空いている席に座るように教示した。ここで実験参加者が荷物からどの程度離れた席に座るかがリバウンド効果の測度であった。もし抑制対象と代替思考の連合がリバウンド効果を生起させているとすれば、環境を変えることで連合した対象物はなくなったため、リバウンド効果は生起しないはずである。しかし実験の結果、抑制条件は統制条件よりもターゲット人物の荷物から離れた位置に着席した。これは、抑制した後には、スキンヘッドの暴力的であるというステレオタイプのアクセスビリティが上昇していたために、抑制条件の参加者はターゲット人物からより離れた位置に座ったのだと考えられる。この結果から、周囲の環境を変えて抑制対象と代替思考との認知的連合をなくした状況であってもリバウンド効果が生起することを示し、代替思考との連合による説明では不十分であると明らかにした。

以上のように、いずれの説明もリバウンド効果が生起するメカニズムの説明としては不十分であることが指摘された。そこで、Macrae *et al.* (1994) はステレオタイプ抑制の研究において、Wegner (1994) の皮肉過程理論を拡張し、リバウンド効果の生起メカニズムを頻用性プライミング (repetitive priming) によって説明した。頻用性プライミングとは、Higgins (1989) が構成概念の活性化のシナプスモデルの中で用いた用語で、ある構成概念が頻繁に活性化し、そのアクセスビリティが非常に高くなることである。Macrae *et al.* (1994) は、ある構成概念が頻繁に活性化した時には、一度だけ活性化した時よりも、活性化の減衰がゆっくりしているということから、抑制をした場合にも、頻用性プライミングが生じているためにリバウンド効果が生起すると説明した。すなわち、ある対象を抑制すると、監視過程が働くことで抑制対象は頻繁に活性化することとなる (hyperaccessible)。対象の活性化が繰り返されると、活性化の減衰は遅くなり、そのため後の判断や行動にまで影響を与えるのだと提案した。この考えに基づき、Macrae *et al.* (1994) は、実験 3 において抑制後のステレオタイプのアクセスビリティの上昇の程度を測定した結果、抑制後であっても当該ステレオタイプのアクセスビリティが上昇していることを示し、頻用性プライミングによる説

明が妥当であることを確認した。

また、Galinsky & Moskowitz は、抑制後に全く関連のない課題を 5 分間 (Galinsky & Moskowitz, 2000, 2007)、もしくは 20 分間 (Galinsky & Moskowitz, 2007) 行った後でも、リバウンド効果が生じることを示した。これは、抑制による頻用性プライミングの結果、活性化の減衰が遅いためにリバウンド効果が生起するという主張を支持する結果であった。これらの結果から、抑制による弊害は、その直後だけでなく、比較的長い時間にわたって判断や行動に影響を及ぼすことを示唆しており、ステレオタイプ抑制の研究の重要性を意識させた (大江, 2007)。

以上のように、現在のところ、抑制後のリバウンド効果のメカニズムは、Macrae *et al.*(1994) が提案した皮肉過程における頻用性プライミングによる説明が有力であると思われる。

2-2-2. 動機づけによる説明

以上の皮肉過程理論は認知的な説明であるが、その他にも、動機づけによる説明を行う立場がある。初期の抑制研究で指摘されていた説明では、リバウンド効果は抑制教示によって思考や記述を制限されたことへのリアクタンスによって生じると考えられていた (Brehm, 1966)。ただし、Wyer *et al.* (1998)のように、抑制教示によらず自発的に抑制した場合であってもリバウンド効果が生起していることから、リアクタンスによる説明は限界が指摘されている。また、動機づけ推論モデル (Foster & Liberman, 2001, 2004) では、抑制時に参加者が感じる困難感がステレオタイプ表出の動機づけを高めていると想定している。すなわち、抑制時にステレオタイプを避けることが困難だと参加者が感じた場合、自分にはステレオタイプを表出したいという動機づけがあるためではないだろうかと参加者自身が推測し、リバウンド効果が生起すると仮定している。ただし、この理論では、表出への動機づけがない場合でもリバウンド効果が生起する現象 (Macrae *et al.*, 1998) や、そもそも抑制が困難になる理由を説明できない (木村, 2003) という問題がある。

2-2-3. 制御資源枯渇による説明

また、近年では、抑制を自己制御の一種として捉え、リバウンド効果を説明する立場がある。思考や行動を抑制することは自己制御であり、そうした制御を行うためには制御資源が必要である (Baumeister, Bratslavsky, Muraven, & Tice, 1998)。抑制のような自己制御を行うと制御資源が枯渇するため、その後にステレオタイプの判断を避けられなくなり、

リバウンド効果が生起するという説明がなされている (Gailliot, Plant, Butz, & Baumeister, 2007; Gordijn, Hindriks, Koomen, Dijksterhuis, & Van Knippenberg, 2004)。実際, Gordijn *et al.* (2004)では, ステレオタイプ抑制をした参加者は自己制御を行ったと回答していた。また, アナグラム課題の遂行が低下したことから, 実際に資源枯渇も生じていたと考えられる。ただし, こうした説明はステレオタイプの表出が増加することの説明にはなるが, なぜ枯渇するとステレオタイプのアクセシビリティが上昇するのかという点までは説明できていない。そのため, 制御資源の枯渇はステレオタイプの表出の点に関わっていると考えられる。

以上のように, いくつかの立場から抑制後のリバウンド効果の生起は説明できるものの, 動機づけ理論や制御資源枯渇による説明は限界点が指摘されており, これらのモデルだけでは説明できない。そのため, 現在でも皮肉過程理論による説明が優勢となっており, その他の説明はそれを補足するような理論として捉えられることが一般的である (木村, 2003)。本論文ではこうした現状を踏まえ, 皮肉過程理論の立場からリバウンド効果の低減方略を検討することとした。

§ 第3章

リバウンド効果の低減方略：代替思考に注目して

3-1. 思考抑制研究における代替思考方略

前述したように、皮肉過程理論によれば、すばやく抑制対象を察知するためには監視過程が必要であるが、実行過程の働きが不十分な場合には、嚴重になった監視過程がリバウンド効果を生起させる。他方、実行過程がうまく機能すれば、抑制対象が意識内に生じないため、監視過程が嚴重にならず、抑制対象のアクセスビリティは必要以上に高まることはなくなり、リバウンド効果は低減される。

では、実行過程が機能してリバウンド効果が生じないためにはどうしたらよいだろうか。思考抑制の研究では、代替思考²を用いることが適切な方略となることが示されている（木村, 2004; Wegner *et al.*, 1987）。例えば、思考抑制の研究において、Wegner *et al.* (1987) は、実験 1 において、参加者にシロクマについて意識的に考えるように、もしくは、シロクマを考えないようにという指示を与えた後、5 分間思い浮かんだ思考をすべて言語化するように求めた。すると、抑制するように言われた場合には一時的にはシロクマに関する言及がなく、思考を排除することができた。しかし、その後もう一度 5 分間思考を言語化させると、意識的にシロクマを考えるように言われた参加者よりも、抑制後の参加者の方がシロクマについての思考が増加していた。すなわち、単純にシロクマを抑制した場合には、リバウンド効果が生起していた。そこで、Wegner *et al.* (1987) は実験 2 において、シロクマを考えないように求めた際に、代わりに代替思考として赤のフォルクスワーゲンを考えるように指示した。すると、代替思考を用いた場合には、抑制後であってもシロクマに関する言及が増加せず、リバウンド効果が生起しないことを示した。

² 一般的に、意識、非意識に関係なく、抑制対象から注意をそらすための思考のことを“distracter”という。他方、意識的に積極的に用いる思考を“代替思考”という（木村, 2003）が、これらの単語の厳密な使い分けはなされていないようである。本研究では、特に理論的に問題がない限り、抑制対象から注意をそらす思考を“代替思考”という単語で統一して用いた。

これは、図 3-1 に示したように、代替思考によって実行過程がうまく機能すれば、抑制対象が意識内に生じないため、監視過程が厳重にならず、抑制対象のアクセシビリティは必要以上に高まることはなくなる。このように、代替思考を与えることで、リバウンド効果を生起させる一連の循環を停止させることができるため、リバウンド効果は低減されることが考えられる。

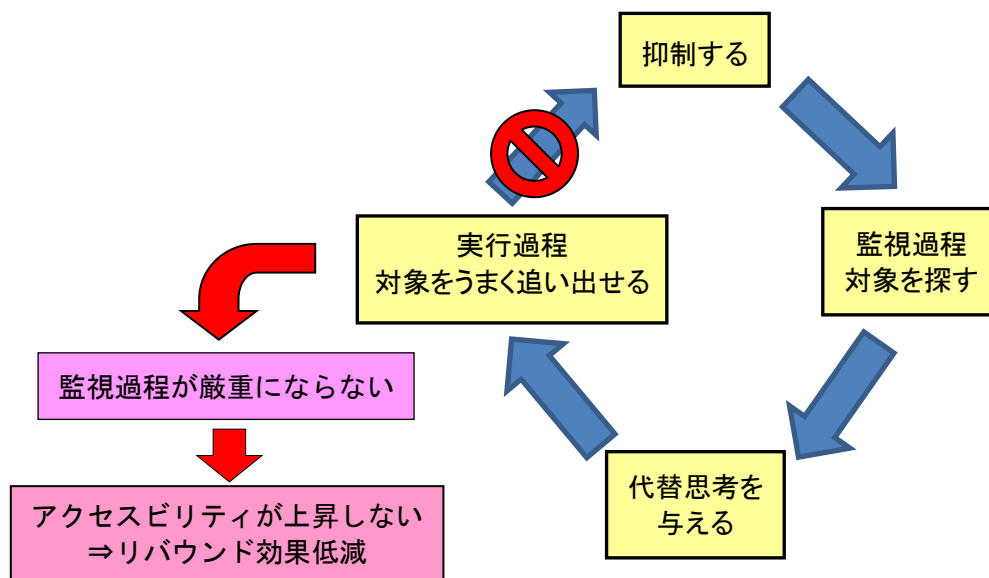


図 3-1. 代替思考方略が抑制過程に及ぼす影響

また Kelly & Kahn (1994) は、シロクマを抑制するよう指示された条件と、実験参加者が普段から思い浮かんでしまう思考（侵入思考）を抑制する条件を比較した。すると、最初にシロクマを抑制した条件では、後にシロクマに関する思考が増加するリバウンド効果が生起したが、よく経験する侵入思考を抑制した条件では侵入思考は増加せず、リバウンド効果が生起しなかった。Kelly & Kahn (1994) は、両条件の抑制時の代替思考の内容を分析し、後者の条件の場合は、日常的に抑制を経験しており、代替思考が見つかりやすいため、リバウンド効果が生起しなかったということを示唆している。これらの研究結果は、リバウンド効果を低減させるためには、抑制時に代替思考を用いる方略が有効であることを示している（同様の知見は、木村, 2005; Boden & Baumeister, 1997）。

3-2. 対人認知文脈におけるステレオタイプ抑制

以上のように、思考抑制では代替思考を与えることによるリバウンド効果の低減が示されているにもかかわらず、ステレオタイプ抑制においては、有効な代替思考はこれまではほとんど示されていない (e.g., Galinsky & Moskowitz, 2007; Oe & Oka, 2003)。言い換えれば、ステレオタイプ抑制における代替思考は、思考抑制における代替思考ほど容易に見つかるものではないのだろう。それは、ステレオタイプ抑制の時には、考えてよいことが限定されるためであると考えられる。Macrae *et al.* (1994) の研究では、スキンヘッド男性について記述する時、ステレオタイプの記述を避けるよう求められた。このように、ステレオタイプ抑制は対人判断という文脈で行われる (Galinsky & Moskowitz, 2007)。対人判断では、通常、判断対象を無視することができないという特徴がある。そのため、単なる思考抑制のように、シロクマとは無関連な赤のフォルクスワーゲンを考えるわけにはいかず、ステレオタイプ抑制では、ステレオタイプに該当する人物について考えながら、その人物の特定の側面だけを抑制する必要があるのである。例えば、思考抑制で抑制対象として用いられるシロクマを例にすると、思考抑制では「シロクマ」に関する思考そのものを抑制する。しかし、ステレオタイプ抑制では「クマは白い」というラベルと特性が結びついていた時に、クマについて考えながら、「白い」という特性だけを考えないようにする必要があるということである。より現実には即した例では、黒人と話している時には、「黒人だから攻撃的だ」と考えないようにしながら、その相手を認知し続けなければならない。このような時には、相手の属性 (e.g., 黒人であるということ) を無視することはできないため、代替思考は判断対象の人物に関する事柄である必要がある。

このように、ステレオタイプを抑制する時には、対象自体について考えながら、特定のステレオタイプだけを抑制する必要がある。こうした特徴があるために、ステレオタイプ抑制では、ステレオタイプとは反対の意味を持つ反ステレオタイプが代替思考として用いられやすい (Galinsky & Moskowitz, 2007)。例えば、黒人ステレオタイプ (e.g., 「黒人は攻撃的だ (hostile)」) を抑制させると、「黒人は正直だ (honest)」などの反ステレオタイプの特性が代替思考として用いられることが示されている。このように、ステレオタイプ抑制においては、単なる対義語だけではなく、カテゴリーラベルと反ステレオタイプを組み合わせた思考 (e.g., 「黒人は」 + 「正直だ」) を代替思考として用いることになる。

ただし、反ステレオタイプを代替思考としても、リバウンド効果が低減しないことが明

らかになっており (Galinsky & Moskowitz, 2007), 反ステレオタイプは代替思考として有効ではないと考えられる。実際, Oe & Oka (2003) は代替思考として反ステレオタイプを用いた場合でも, リバウンド効果が生起してしまうことを示した。具体的には, 女性ステレオタイプを題材として, 「女性は__」から始まる文章を作成するという課題において, 女性ステレオタイプ (e.g., 「女性は弱い」) を抑制する際, 反ステレオタイプ (e.g., 「女性は強い」) を用いて文章を完成させた条件では, 代替思考を用いたにもかかわらず, リバウンド効果が生起することを示している。このように, 反ステレオタイプは代替思考として用いられやすいものの, 抑制後のリバウンド効果を低減できるわけではない。

ではなぜ, 反ステレオタイプは適切な代替思考となり得ないのだろうか。先述の Kelly & Kahn (1994) の実験では, 日常的に経験する侵入思考を抑制した場合にはリバウンド効果が低減した。これは, 抑制経験があるために, リバウンド効果を避けるための代替思考を実験参加者が見つけやすかったためだと説明されている。また, Renaud & McConnell (2002) は, 自分の望ましくない側面を抑制する時, 自己複雑性³が高い参加者ほど, リバウンド効果が生じにくいことを示した。これは, 抑制をする時, 自己複雑性が高い参加者は, 抑制する側面以外の自己表象を代替思考として生成することが容易だったためだと考えられている。これらの研究の結果は, 抑制時に代替思考を生成するのが容易な場合には, リバウンド効果が低減する可能性を示唆している。

他方, ステレオタイプ抑制で代替思考として用いられやすい反ステレオタイプは, 代替思考として生成することが難しいと考えられる。Oe & Oka (2003) によると, 図 3-2 に示したように, 代替思考として反ステレオタイプを生成する際には, 抑制するステレオタイプと反ステレオタイプの連結に注意を向けざるを得ない。そのため, ステレオタイプから注意をそらすための代替思考が, むしろステレオタイプへの注意を向けてしまうことになり, 生成が難しい。

³ 自己複雑性とは, 自己表象の複雑さを意味する (Linville, 1985)。ここでの複雑さとは, 自己を多くの側面で捉え, それらの側面に違いがあるという認識を維持しているかどうかということ。例えば, 自己複雑性が高い場合には, テストの成績が悪いために「学生としての自分」が損なわれたとしても, その他の側面 (e.g., 「誰かの娘としての自分」, 「テニス部での自分」など) があることで, 身体的・精神的傾向に悪影響を及ぼしにくい。

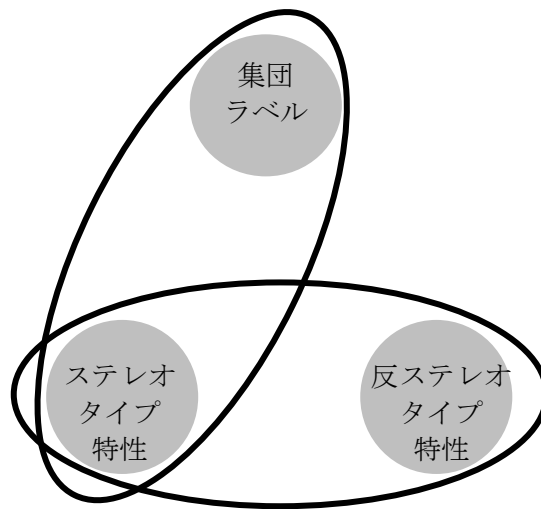


図 3-2. 概念間の連結への注意(Oe & Oka, 2003 より)

また、反ステレオタイプは、元来持っている知識とは反対の思考である。よって、抑制対象の表象に含まれないため、反ステレオタイプの思考を抑制対象と結びつけることが難しい。そのため、代替思考として与えられても、生成することが困難であると考えられる。このように代替思考を容易に生成することができないと、抑制対象から注意をそらすという代替思考の役割を果たせず、抑制対象が意識上に侵入しやすいだろう。その結果、監視過程は厳重になりやすく、代替思考を用いても、リバウンド効果が低減し難いのだと思われる。このようにステレオタイプ抑制は対人判断の文脈で行われるということが、代替思考方略による抑制を困難にしていると考えられる。

3-3. ステレオタイプ内容モデルに注目した代替思考方略

それでは、ステレオタイプを抑制する際に、生成することが容易な思考とはどのようなものだろうか。上述のように、ステレオタイプ抑制は対人判断文脈で行われるため、相手の特徴について考える必要がある。こうした点を考慮し、ステレオタイプの表象の内容について注目することが重要であると考えた。

これまでのステレオタイプ抑制の研究においては、ステレオタイプをポジティブ - ネガ

ティブの一次元上で捉えた上で、ネガティブなステレオタイプの抑制が試みられてきた (Monteith *et al.*, 1998, for a review)。すなわち、ステレオタイプを抑制する時には、概してネガティブなステレオタイプを抑制するという意味合いが強い。このように、ネガティブな側面のみに注目してきたため、代替思考として、その一次元上における反対のポジティブな特性（反ステレオタイプ）に研究の焦点が集まり、適切な代替思考の内容が示されてこなかったと考えられる。

3-3-1. ステレオタイプ内容モデル

しかし近年、ステレオタイプの内容はネガティブな一次元上で捉えられないものであるということが指摘されている。ステレオタイプの一般的な内容について言及したものとして、ステレオタイプ内容モデルがあげられる (Stereotype Content Model: Cuddy, Fiske, & Glick, 2008; Fiske & Cuddy, 2006; Fiske, Cuddy, & Glick, 2007; Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002)。ステレオタイプには様々な内容があるが、個々の内容が異なっているにもかかわらず、大きくわけて人柄と能力という二つの次元から捉えられるという。このモデルでは、ステレオタイプの内容は外集団との関係性から決定されると想定している。このモデルによると、我々はなじみのない他者や外集団を認知する際に、最初に二つの疑問を抱くという。一つは、対象集団が仲間なのか敵なのか、ということで、対象集団と競争関係にあるかどうかを探る。すなわち、人柄はその集団が自分と競争関係にあるか否かで決定され、競争関係にある場合には「冷たい」とみなされ、協力関係にある場合には「温かい」とみなされる。二つ目の疑問は、対象集団と自分もしくは内集団との地位関係がどうなっているかということである。能力は、こうした地位の上下関係にあるか否かで決定される。

以上のように、対象集団との競争関係および地位関係から人柄と能力に関するステレオタイプをそれぞれ予測するため、ステレオタイプには四つのクラスターがある (Fiske & Taylor, 2008a, 2008b)。それぞれのクラスターの詳細を表 3-1 に示した。ステレオタイプには能力と人柄の評価がともに高いもしくはともに低いクラスターが存在する。中流階級の人や内集団、クリスチャンの人に対して向けられる「温かく有能」というステレオタイプ、およびホームレスや薬物依存者に対する「冷たく無能」というステレオタイプである。他方、これら二次元の評価はそれぞれ独立にポジティブもしくはネガティブな内容を形成するため、一方の次元 (e.g., 人柄) がポジティブなら、他方の次元 (e.g., 能力) がネガティブになるという、両面価値的ステレオタイプが特に多くみられる。例えば、高齢者に対す

るステレオタイプは、無能であるだけではなく、温かい人柄であるという内容を含んでおり、慈悲的なステレオタイプを抱かれている。反対に、キャリア女性に対しては、有能だが冷たいという嫉妬的ステレオタイプが抱かれるということが明らかになっている (Fiske & Cuddy, 2006; Fiske *et al.*, 2002)。

表 3-1. ステレオタイプ内容モデルの 4 類型 (Fiske & Taylor, 2008b)

		能力	
		低	高
人柄	高 集団	障害者, 高齢者	中流階級, 内集団
	偏見	慈悲, 憐れみ	称赞, 誇り
	低 集団	貧乏人, ホームレス, 薬物中毒者	金持ち, アジア人, ユダヤ人
	偏見	嫌悪	妬み

実際、アメリカにおける 5 つの研究 (Cuddy, Fiske, Glick, 2007; Fiske *et al.*, 2002; Fiske, Xu, Cuddy, & Glick, 1999) では、1165 名の回答者に対してさまざまな集団を呈示し、その集団に対する能力、温かさ、地位、競争関係について評定を求めた。図 3-3 に結果の一部を示した。調査の結果、ステレオタイプ内容モデルでの想定どおり、地位が能力に関する評定を、競争関係が温かさに関する評定を予測していた。また、温かさと能力の評定についてクラスター分析をした結果、多くのサンプルで前述したような 4 つのクラスター (温かさ・有能×高・低) が確認された。そのうち、83%の集団が一方の次元よりも他方の次元が高い両面価値的ステレオタイプであった。さらに同様の調査はアメリカ以外の 17 か国のサンプルでも検討されており、日本を含む集団主義文化の東アジアにおいても、両面価値的ステレオタイプが多く存在することが確認されている (Cuddy, Fiske, Kwan, Glick, Demoulin, Leyens, Bond, Croizet, Ellemers, Sleebos, Htun, Yamamoto, Kim, Maio, Perry, Petkova, Todorov, Rodríguez-Bailón, Morales, Moya, Palacios, Smith, Perez, Vala, & Ziegler, 2009 study2)。

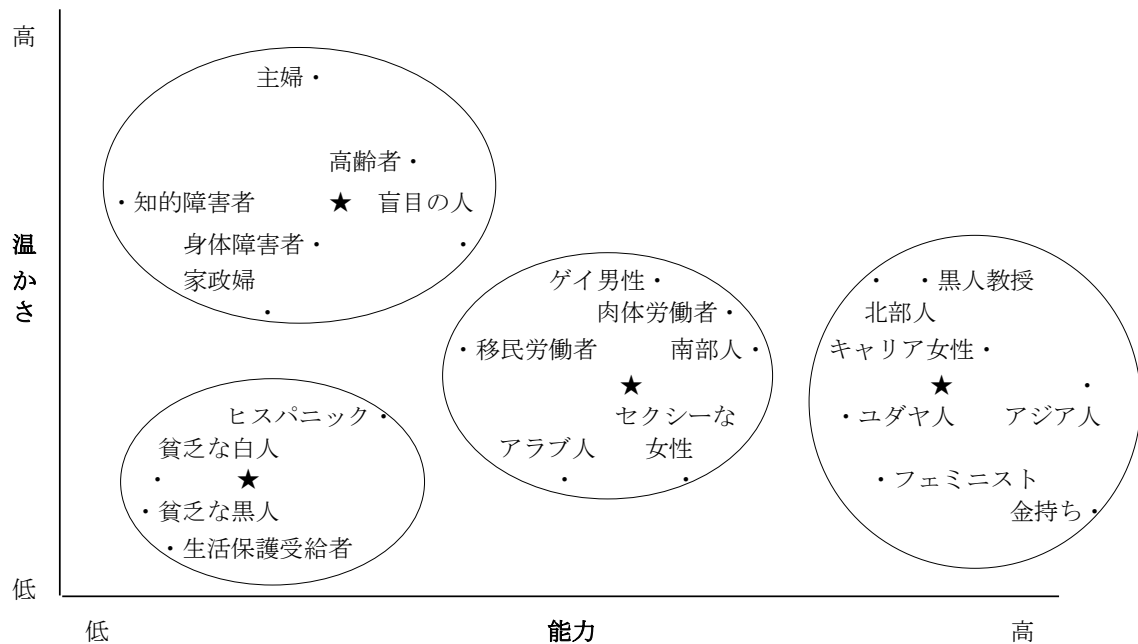


図 3-3. Fiske *et al.* (2002)で見られた 4 つのクラスター

注. 上記の調査結果は Fiske *et al.* (2004) の学生回答者の結果について、日本語訳をしてまとめたものである。縦軸が温かさを示しており、評定値が高いほどその集団が温かいと評定されたことを意味する。横軸は能力を示しており、評定値が高いほど有能であると評定されたことを意味する。

3-3-2. 本研究で提案する代替思考方略

対人認知研究においては、我々が多くの情報をどのように処理し、統合するのかについて、いくつかの次元が働いているという主張は以前からなされてきた (e.g., Asch, 1946; 川西, 2000; Rosenberg, Nelson, & Vivekananthan, 1968)。いくつかの次元を想定するかという点や、それらの次元の名称はそれぞれの研究で異なっているものの、人柄と能力に関する独立した次元を想定している点は、いずれの研究でも共通してみられる (林, 1978)。ステレオタイプの内容においても、こうした次元を想定した点がステレオタイプ内容モデルの画期的な点であった。

このモデルに注目することで、リバウンド効果を低減させるのに有効な代替思考方略を提案できる可能性がある。ステレオタイプを抑制する時には、概してネガティブなステレオタイプを抑制するという意味合いが強い。これを、両面価値的なステレオタイプに当てはめると、人柄次元もしくは能力次元いずれかの、ネガティブな評価の方のステレオタイプの特性を抑制するということになる。ネガティブな特性を抑制する際、ステレオタイプ

が二次元から構成されることを前提とすると、両面価値的ステレオタイプを抱かれている対象に関しては、他方の次元のポジティブな特性を代替思考として用いることができるだろう。例えば、図 3-4 に示したように、「無能だが温かい」という慈悲的ステレオタイプでは、「無能」を抑制する際には、他方の人柄次元の「温かい」というポジティブな特性を代替思考として用いることができる。この特性は抑制対象のステレオタイプの内容に含まれるため、容易に生成することができるだろう。代替思考として容易に生成できる場合、抑制対象 (i.e., 「無能」) から注意をそらす役割を果たし、監視過程が厳重にならないため、リバウンド効果が低減する可能性があるだろう。

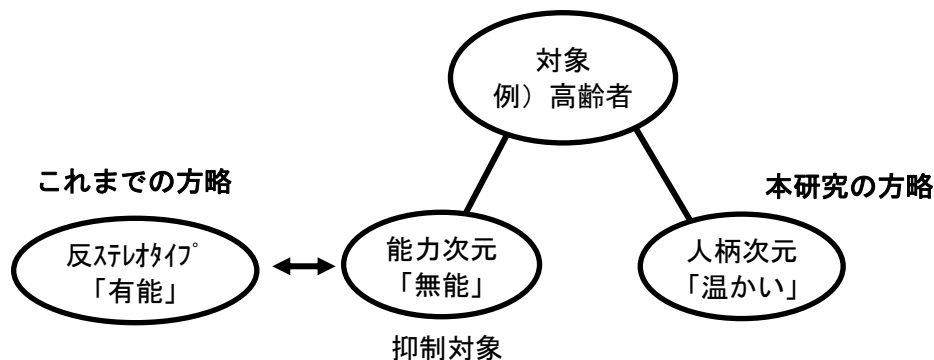


図 3-4. 慈悲的ステレオタイプにおける代替思考方略 (第 5 章)

他方, 図 3-5 に示したように、「有能だが冷たい」という嫉妬的ステレオタイプでは、「冷たい」というネガティブな特性を抑制する際には、他方の能力次元の「有能」というポジティブな特性を代替思考として用いることができる。

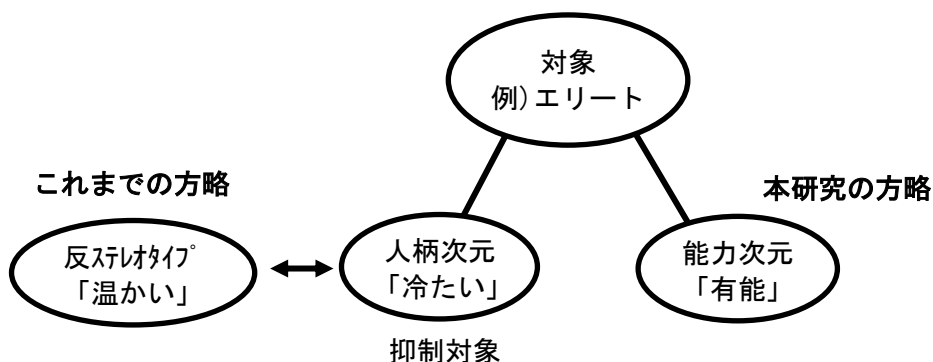


図 3-5. 嫉妬的ステレオタイプにおける代替思考方略 (第 6 章)

よって、本研究では、一般的に特に多くみられる「無能だが温かい」もしくは「有能だが冷たい」という両面価値的ステレオタイプにおいて、一方の次元のネガティブな特性（e.g., 無能もしくは冷たい）を抑制する際に、他方の次元のポジティブな特性（e.g., 温かいもしくは有能）を代替思考とする方略の有効性を検討することを目的とした。なお、以降、本方略は別次元思考方略と記述することにした。

なお、両面価値的ステレオタイプについて、それらが相補的に働くという議論が近年出てきたことには注意しておく必要がある。我々はこの世界が公正であると信じており、またそうあってほしいと望むため、現状を正当化することがある（Jost & Banaji, 1994; Jost, Pietrzak, Liviatan, Mandisodza, & Napier, 2007）。そうした私たちにとって、両面価値的ステレオタイプは現状を正当化する機能があると考えられている。すなわち、ある対象集団に対する一方の次元の評価が低い時に、他方の次元の評価を上げる、もしくは逆に、一方の次元の評価が高い時に他方の次元の評価を下げるというように、相補的に働くことで、この世界が公正なものであるという認識を維持しようとすることがある（Cuddy, Norton, & Fiske, 2005）。こうした知見に基づけば、ステレオタイプ対象のポジティブな側面を考えるという本研究の別次元思考方略は、かえってネガティブな側面を思い浮かびやすくさせるのではないか、という疑念が生じるだろう。

ただし、それぞれの次元のステレオタイプは、地位の関係から能力を、競争関係から温かさを予測するのであって、それぞれ別の知覚から生じたものである。よって、対人認知の二次元モデルでも説明されてきたように（e.g., Roesenberg *et al.*, 1968）、基本的には、能力と人柄という二次元は独立しているもので、一方の次元のステレオタイプを思いついた場合に、他方の次元のステレオタイプも不可避免的に思いついてしまうというものではないと考えられる。

また、本研究の主張を補足するものとして、検索誘導性忘却という現象があげられる。これは、ある情報を検索することで、それに関連した別の情報の検索が抑制されるという現象であり、特に同じカテゴリーに属する情報の場合に生起しやすい（Anderson, Bjork, & Bjork, 1994; 月本・川口, 2006）。例えば、記憶課題において様々な情報を記憶した後、「オレンジ」というフルーツに関する情報を思い出すと、同じフルーツのカテゴリーに属する「バナナ」という情報が、フルーツとは無関連な情報（e.g., 「カラス」）よりも思い出しにくくなる。この現象を本研究にあてはめれば、ステレオタイプ対象のポジティブな一側面（e.g., 「高齢者は温かい」）を意識的に考えたところで、別のネガティブな側面（e.g., 「高

齡者は無能」) が相補的に思いつきやすくなってしまうという現象は、むしろ生起しにくいと考えられる。これらの知見から、能力と人柄の二次元は独立であるという前提にたって、本研究の提案する別次元思考方略は有効であると考え、以降の議論を進めていくこととする。

§ 第4章 実証研究の目的と概要

4-1. 実証研究の目的

これまで示してきたように、偏見的な反応を避けようとする場合、私たちはステレオタイプ抑制を行うことが多い。それにもかかわらず、そうした意図がかえってステレオタイプのアクセシビリティを高め、リバウンド効果を生起させてしまう。思考抑制研究とは異なり、これまでのステレオタイプ抑制研究では代替思考方略の限界が指摘されてきた。

そこで本研究では、なぜ代替思考を用いてもリバウンド効果が生起してしまうのか、というメカニズムを社会的認知研究のアプローチによって明らかにしていく。具体的には、特に代替思考方略の成否が、抑制時に代替思考を生成しやすいかどうか依存していると想定する。実証研究では、その点を明確にすべく、先行研究 (Galinsky & Mosckowitz, 2007) で指摘されているように、実際に抑制する際には反ステレオタイプが用いられていることを明らかにし、さらに代替思考として生成しにくいことを実証する。

こうしたメカニズムを解明した上で、ステレオタイプ内容モデルに注目し、リバウンド効果のような弊害を生じさせることなく、ステレオタイプを抑制する代替思考方略を提案する。具体的には、両面価値的ステレオタイプを題材として、ネガティブなステレオタイプ特性を抑制する際に、相補的なポジティブなステレオタイプ特性を代替思考とする別次元思考方略を用いるとリバウンド効果が低減することを、実証研究によって示す。

4-2. 本研究で扱うステレオタイプ

以上のように、本研究では、ステレオタイプ内容モデルに基づき、リバウンド効果を低減させる代替思考を検討する。その際、特に多くみられる両次元のポジティブ・ネガティブの評価が一致しない両面価値的ステレオタイプを研究対象とすることとした。

4-2-1. 慈悲的ステレオタイプ

第 5 章では、人柄次元の評価は高いが能力次元は低い「温かいが無能」という慈悲的ステレオタイプ (benevolent stereotype) を題材として、代替思考の効果を検討した。慈悲的ステレオタイプは協力関係にある弱者に対して向けられるステレオタイプであり、特に家庭的女性や高齢者が代表例となる。ジェンダーステレオタイプでは、専業主婦などの伝統的性役割観に沿った女性は、好意的にみられるが (Haddock & Zanna, 1994)、保護の対象とみなされるため、仕事などの能力面に関しては無能だというイメージをもたれる (Glick & Fiske, 1996)。また、高齢者に対しても、知的能力 (Rubin & Brown, 1975) や遂行能力が若者に比べて低いとみなされるものの、友好的で温かいと考えられている (Andreolotti, Maurice, & Whalen, 2001)。同様のステレオタイプは方言話者 (e.g., イギリスのスコットランド訛り) にもみられる (Bradac, 1990; Ruscher, 2001)。また、身体障害など、自分ではコントロールできない理由で不利を被っている場合にも、慈悲的ステレオタイプを向けられ、同情や憐みを生じさせる。ただし、ホームレスや中毒者などのように、その状態になったのは本人に責任があると知覚される場合には、憐みは減少すると考えられている (Winer, Perry, & Magnusson, 1988)。

こうした慈悲的ステレオタイプにおいて、「無能」というネガティブなステレオタイプの特性を抑制する時に、「温かい」という別次元の特性を用いればリバウンド効果が低減するか否かを、第 5 章の実証研究において検討する。

4-2-2. 嫉妬的ステレオタイプ

他方、ステレオタイプ内容モデルによれば、社会的地位が高いとみなされている集団であつても、否定的なステレオタイプを抱かれ、差別の対象となることがある (Fiske *et al*, 2002)。このモデルによれば、エリートやキャリア女性といった集団は、地位が高いため、有能であるということを認められながらも、競争的な対象として区分されるため冷たいとみなされる嫉妬的ステレオタイプ (envious stereotype) が向けられる。例えば、キャリア女性は「仕事はできるが性格が悪く扱いづらい」とみなされ、昇進や社会進出を阻まれる一因となることがある (Glick & Fiske, 2001a, 2001b)。また、高学歴者などのエリート男性にも同様のステレオタイプが抱かれており、雇用時や仕事場面において、人物評価自体が学歴に左右される問題が指摘されている (池上, 1999 ; 佐々木, 1997)。このように、エリートやキャリア女性といった集団は、有能であるということを認められながらも、冷たいと

ネガティブにみなされる。

学歴偏重主義による受験戦争の激化や、社会における実力主義の普及などによって、こうした優れた他者を意識する機会は頻繁に生じうると考えられ、嫉妬的ステレオタイプを他者にあてはめることによる弊害が生じる可能性がある。それにもかかわらず、これまでマイノリティや社会的地位が低いとされる対象に対するネガティブなステレオタイプの抑制のみが検討されており、高地位者に対するステレオタイプの抑制は検討されてこなかった。そこで、本論文では、これまで検討されてこなかった地位の高い集団に対する嫉妬的ステレオタイプの抑制に関して第 6 章において検討することで、ステレオタイプ抑制の適用範囲の拡張を目指す。具体的には、これまで嫉妬的ステレオタイプの抑制は検討されてこなかったため、第 6 章の前半では、抑制後にリバウンド効果が生起するかどうかという点に関して検討する。その点を明らかにした上で、第 6 章の後半では、抑制後のリバウンド効果の低減方略として、別次元思考方略の有効性について議論する。具体的には「冷たい」というネガティブなステレオタイプの特性を抑制する時に、「有能」という別次元の特性を用いればリバウンド効果が低減するか否かを検討する。

4-2-3. 先行研究で扱われてきたステレオタイプ対象

これまでのステレオタイプ抑制研究では、スキンヘッド男性 (Gordjin *et al.*, 2004; Macrae *et al.*, 1994) や黒人 (Galinsky & Moskowitz, 2007; Monteith *et al.*, 1998; Wyer *et al.*, 1998; Wyer, 2007) に対するステレオタイプを題材とした研究が多かった。しかし、本研究では、上述したように、両面価値的なステレオタイプを題材とし、実証研究を行った。

その理由として、ステレオタイプ抑制研究で扱われることが多いスキンヘッドに対するステレオタイプは日本では共通して抱かれていないと考えられる。また、黒人に対しても、現代では様々なタイプの黒人が存在し、そのステレオタイプは複雑なものとなってきた。例えば、Fiske *et al.* (2002) によれば、黒人教授は「有能だが冷たい」というクラスターに含まれるが、貧乏な黒人は「無能で冷たい」というクラスターに含まれており、黒人に対するステレオタイプの内容は一元的なものではないことが示されている (本論文の p.29 の図 3-3 参照)。以上のように、現代における日本では、スキンヘッドや黒人に対するステレオタイプの内容が共有されていないため、本研究で扱うには適切ではないと考えた。

加えて、ステレオタイプ内容モデルでは、さまざまな対象に対するステレオタイプが存在するが、その多くは両面価値的なステレオタイプであることを指摘しているためである

(e.g., Fiske *et al.*, 2002)。現実においてよく見られるステレオタイプを題材とし、その抑制方略を検討することで、現存する差別問題の解消に一定の示唆を与えることになるだろう。

4-3. 抑制場面の設定

以上のように、本研究では「無能だが温かい」という慈悲的ステレオタイプと「有能だが冷たい」という嫉妬的ステレオタイプを題材に、ステレオタイプ抑制の検討を行う。

こうした両面価値的ステレオタイプを向けられる集団は、特に労働場面において不利益を被ることが多かった。例えば、慈悲的ステレオタイプの対象である家庭の女性は、保護の対象とみなされ、職場においては男性よりも低い評価を受けることが多いという指摘がなされている (Davison & Burke, 2000; 金井・佐野・若林, 1991)。また、高齢者の場合も、人間関係よりも業務遂行に関する課題において無能であると判断されやすい (Avolio, & Barrett, 1987; Rosen, & Jerdee, 1976; 日本においてはKoyano, 1989参照)。他方、嫉妬的ステレオタイプを向けられるキャリア女性は、有能であることは認められながらも、その分性格が冷たく扱いづらいと考えられたり、リーダーには向かないと判断されるなど、ステレオタイプが昇進に影響を及ぼすことがある (Glick & Fiske, 2001a, 2001b; 若林・宗方, 1986)。また、エリート男性は学歴などの点から雇用において有利な側面があるものの、昨今は多くの企業が人柄を重視する傾向にあり、そうした人物評価自体が学歴に影響されることが危惧されている (佐々木, 1997)。

このように、雇用場面や労働場面において、両面価値的なステレオタイプを抱かれる集団成員に対する偏見や差別が問題となる場合があるだろう。そこで、こうした現状を受け、本研究では、抑制操作をする際の場面として、ステレオタイプ対象の人物が働いている場面や、就職活動などの雇用される場面を設定することとした。これまでのステレオタイプ抑制研究では、ターゲット集団の成員の写真を呈示し、その人物の典型的な一日を記述するという課題が用いられることが多かったが (e.g., Macrae *et al.*, 1994)、前述のような場面設定を行うことで、本研究の知見が実際の社会的問題に対して一定の示唆を与える可能性があるだろう。

4-4. リバウンド効果の測定法

次に、本節では、リバウンド効果の測定方法について概観し、本研究において用いる手法について述べる。

ステレオタイプを抑制した後のリバウンド効果は多くの研究で確認されてきたが(for a review, Monteith *et al.*, 1998), その測定方法は様々である。リバウンド効果の測定方法としては、大きく分けて、「表出」の測定と「アクセスビリティの程度」の測定の二つに分類することができる。そこで、それぞれの測定法を概観した上で、本研究で主に用いた測定法について言及する。

4-4-1. 表出の測定

まず、表出の測定とは、抑制後にステレオタイプのアクセスビリティが上昇した結果、その影響が当該ステレオタイプに当てはまるターゲット人物への評価判断や行動にどの程度表れるかを測定するものである。一般的なものとしては、Macrae *et al.* (1994) で用いられたような、ターゲット人物の典型的な一日を描写する記述課題が多く用いられてきた (Galinsky & Moskowitz, 2000, 実験 1; Kimura, 2006; Macrae *et al.*, 1994, 実験 1; Monteith, Spicer, & Tooman, 1998)。また、同様の課題について記述ではなく、発話させる課題もある (Macrae *et al.*, 1998, 実験 6)。その他には、ターゲットとなるカテゴリーの人物の写真を呈示し、印象評定をするという手法 (及川, 2005; 田戸岡・工藤, 2007, 実験 1; 田戸岡・村田, 2008; Tadooka, Takabayashi, & Murata, 2008) や、ターゲット人物からどのくらい離れて座るか、というような実際の行動への影響も検討されてきた (Macrae *et al.*, 1994, 実験 2)。

4-4-2. アクセスビリティの程度の測定

他方、抑制時の監視過程によって当該ステレオタイプのアクセスビリティが上昇した程度も測定されてきた。アクセスビリティの指標としてよく用いられているのが、呈示された文字列が単語か、単語でないかをすばやく判断するという語彙決定課題である (Galinsky & Moskowitz, 2000, 実験 1; Gordijn *et al.*, 2004, 実験 3; Macrae *et al.*, 1994, 実験 3; Oe & Oka, 2003; 大江・繁耕, 2007; 田戸岡・工藤, 2007, 実験 2; 田戸岡・村田, 2008; Wyer, 2007, 実験 2)。語彙決定課題では、抑制をした後に、ステレオタイプに関連した単語の同定が速くなることが、当該ステレオタイプのアクセスビリティ上昇の指標となる。

また、曖昧な人物の印象を評定する対人認知課題 (person perception task) も用いられてきた (Galinsky & Moskowitz 2007, 実験 2・3; Wyer 2007, 実験 1; Wyer *et al.*, 1998, 実験 2; Wyer *et al.*, 2000)。この課題が、先述したリバウンド効果の表出を測定する印象評定課題と異なる点は、カテゴリーラベルを与えないという点である。先述の印象評定課題では、ステレオタイプ化のターゲットとなる人物の写真を呈示し、その人物の印象を回答するという手続きをとる。例えば、外国人労働者の写真を見ながらステレオタイプ抑制した後、別の外国人労働者の写真を呈示され、印象評定を行う (e.g., 及川, 2005)。しかし、対人認知課題の文章では、ターゲット人物のカテゴリー情報は与えられない。例えば、黒人ステレオタイプ (e.g., 「攻撃的」) を抑制した後、カテゴリー情報のないやや攻撃的な人物の文章を読み、その印象を評定する。当該ステレオタイプのアクセスビリティが上昇しているほど、その人物をステレオタイプに一致した印象に評定することが知られており (e.g., Srull & Wyer, 1979), リバウンド効果の指標として用いることができる。もし、印象評定課題のようにカテゴリーラベルを与えてしまうと、その情報によってステレオタイプの知識が活性化してしまい、抑制段階で生じたアクセスビリティの上昇を純粋に測定することができなくなってしまう。他方、対人認知課題では、カテゴリーラベルを与えずに他のターゲットへの影響を測定することで、その段階での純粋なアクセスビリティを測定することができるため、近年多くの研究でアクセスビリティの指標として用いられるようになってきた。

4-4-3. 測定法による結果の相違

以上のようにリバウンド効果の生起の測定法について言及したが、本研究では主にアクセスビリティの程度の測定により、リバウンド効果の生起を示すこととした。

表出の測定は多くの研究で用いられてきた手法ではあるが、意識的な過程が介在するため、プロセスが明らかにできないという欠点がある。すなわち、表出の測定においてリバウンド効果が生起しなかった場合、当該ステレオタイプのアクセスビリティが上昇していないためなのか、それとも、アクセスビリティは上昇しているものの、意識的に表出を抑制したために、一見リバウンド効果が生じていないように見えるだけなのか、がわからないのである。後者のように、アクセスビリティが上昇している場合は、その表出を統制する意図が途切れた瞬間にリバウンドしてしまう可能性があるだろう。実際、Galinsky & Moskowitz (2000) では、抑制後に語彙決定課題においてはステレオタイプのアクセスビリティが上昇しており、リバウンド効果が見られたが、表出を測定する記述課題ではリバウン

ド効果が見られなかった（同様の結果は、田戸岡・村田，2008）。この指標による結果の違いは、記述課題の際に、自発的な表出の統制が生じたためであると Galinsky & Moskowitz (2000) は説明している。

実際の行動や評価においてステレオタイプの影響がみられなくなることは、社会的に非常に重要ではあるが、自発的統制はいつまでも続けられるものではない。そのため、その根底にある抑制後のステレオタイプのアクセスビリティの上昇を防ぐことこそが、抑制研究の目指すべきものであろう。そこで、本論文では、研究 1 において印象評定課題による表出の測定を行い、その限界を指摘する。それを受けて、研究 2 から研究 7 では、ステレオタイプのアクセスビリティ上昇の指標として、対人認知課題を用いて、抑制後のリバウンド効果を検討することとした。

なお、それぞれの指標の利点と問題点を表 4-1 としてまとめて示した。

表 4-1. リバウンド効果の測定法

	表出の測定	アクセスビリティの測定
測定方法	記述課題 発話課題 印象評定課題 行動指標	語彙決定課題 対人認知課題
利点	実際の対人認知に近い形で測定することができる。	意図的な統制が最小限に抑えられるので、プロセスを明確に示すことができる。
問題点	意図的な統制が可能であるため、プロセスを明確に示せない。 要求特性の影響を受けやすい。	表出の測定に比べて、実際の対人認知に即した形ではない。

4-4-4. 対人認知課題の特徴と利点

ステレオタイプ抑制における対人認知課題で用いられる文章は、Srull & Wyer (1979) が作成した文章が代表的である（Galinsky & Moskowitz, 2007, 実験 2・3; Wyer, 2007; Wyer *et al.*, 1998）。用いられた文章を和訳したもの（池上, 1992）を表 4-2 として以下に示した。ここからは対人認知課題で用いられる文章の特徴、および課題の利点を示す。

表 4-2. Srull & Wyer (1979) の曖昧な行動記述文

先日私は、以前友達だったドナルドに町でばったり出会った。たまたま 2 人とも仕事が休みの日だったので、彼の家に行くことにした。彼の家に着いてまもなくすると、セールスマンがやってきてドアをノックした。しかし、ドナルドはそのセールスマンを中へ入れようとはしなかった。彼は、私に、大家が彼の部屋を修繕してくれるまでは、家賃を払わないつもりだとも言った。私たちはしばらく話をし、昼食をとった。そしてその後、ドライブに出かけた。ドナルドの車がその日の朝故障したとかで、ドライブには私の車で出かけた。彼は、車の修理工にその日のうちに修理してくれなければ、別のところへ修理に出すと言った。私たちは、1 時間くらい公園で過ごし、その後金物屋に立ち寄った。私は、品物を探すのに夢中になっていたが、ドナルドはその間に何か小さな部品を買っていた。それからほどなく、私は、彼が店員に向かってお金を返してくれと言っているのを聞いた。結局私が探していた品物はその店にはなかった。私たちはそこを出て、2, 3 ブロック先にある別の店に向かった。2 軒目の店の入り口のところに赤十字社の車が停まっていた、献血をしてほしいと頼まれた。ドナルドは、自分が糖尿の傾向があるからと嘘をついて断った。もっと早く気づいてもよさそうなのに、私たちは、2 軒目の店に入ろうとして初めて、その店がもう閉まっていることに気がついた。いつのまにかすっかり遅くなっていたのだ。私は、ドナルドが修理工場に車を受け取りに行くのを送って行った。私たちは、また近いうちに会おうと約束して別れた。

対人認知課題の文章の特徴は、曖昧な記述文（森，2000）である，という点である。曖昧な記述文とは、文章の中で描かれている人物が、ある特性を持っているかどうかははっきりしない，という意味である。表 4-2 に示した Srull & Wyer (1979) の文章は、「敵意性」という特性を持っているかどうかははっきりしない文章であり，この程度の行動であれば，特に敵意的とも考えられないという行動を繰り返している。つまり，敵意的かどうかを判断するには，診断性の低い文章と考えられる（森，2000）。このような文章を読んだ時に，通常であれば，やや敵意的だ，と判断することになるのだが，何らかのプライミングにより敵意性概念のアクセスビリティが上昇している場合には，文章の人物をより敵意的だと評価するようになる。よって，この文章の人物への評価が，アクセスビリティの指標となるのである。

この課題を本研究において採用した理由は以下の 2 点である。

一点目に，カテゴリー情報を与えると，意識的な統制が働いてしまうという点である。前述したように，リバウンド効果の表出を測定する印象評定課題（e.g., 及川，2005）では，写真を呈示することで，カテゴリー情報を与えることになり，意識的な統制がされてしま

い、社会的望ましさがリバウンド効果の測定に影響を与えてしまう可能性がある。しかし、対人認知課題では、カテゴリー情報が与えられないため、純粋なアクセスビリティの程度を測定することができる。Wyer *et al.* (2000) では、抑制後にカテゴリー情報が入っている文章を読んだ場合はリバウンド効果が生起しなかったが、カテゴリー情報が入っていない文章を読んだ場合には、リバウンド効果が生じたことを示している。この結果から、カテゴリー情報を呈示された場合には、かえって意識的な統制が生じるため、純粋なアクセスビリティの指標とはできないことを指摘している。このことから、カテゴリー情報を含まない文章を用いた対人認知課題を用いれば、プロセスをより明らかに示すことができるだろう。

二点目に、実際の対人認知に近い形で測定することができるという点である。アクセスビリティの指標として、語彙決定課題 (e.g., Macrae *et al.*, 1994) も用いられるが、参加者の語彙力やデフォルトの反応スピードなど個人間や個人内の誤差が大きい。そのため、リバウンド効果の測度として、信頼性が低い可能性がある。また、語彙決定課題は単語に対する反応速度を測定するという、実験室以外では行われない手法である。しかし、対人認知課題は、文章からその人物の特性について推測し評定するという手法であり、比較的实际の対人認知場面に近い形だと考えられる。すなわち、対人認知課題は語彙決定課題に比べて外的妥当性が高い。よって対人認知課題はリバウンド効果の測度として、より妥当で信頼できる指標となると考えられる。

以上のような理由から、本研究では、対人認知課題によって、抑制後のリバウンド効果の測定を行うこととした。

4-5. 実証研究の概要

以上の議論を踏まえ、本研究では、対人認知としてのステレオタイプ抑制という観点から、ステレオタイプ抑制が困難になるメカニズムを明らかにする。その上で、ステレオタイプ内容モデルに基づき、リバウンド効果を低減させる適切な代替思考の内容について検討した。特に、ステレオタイプを能力と人柄の二次元で構成されるものとして捉え、社会的に問題視されるネガティブな特性を抑制することを検討する。

第 5 章および第 6 章では、七つの実証研究をとおして、ネガティブなステレオタイプの

抑制において、抑制する特性とは別の次元の特性を代替思考とする別次元思考方略の有効性を検討する。

第 5 章では、家庭的女性および高齢者に向けられる「無能だが温かい」という慈悲的ステレオタイプを題材とし、抑制においては反ステレオタイプの特性が代替思考として生成しにくいためリバウンド効果が生起することを示す。その上で、「無能」を抑制するとき、「温かい」という別次元のポジティブな特性を代替思考とすると、リバウンド効果が低減するかを検討した。

第 6 章では、両面価値的ステレオタイプのもう一領域である「有能だが冷たい」という嫉妬的ステレオタイプを題材として、別次元思考方略の有効性を検討した。ただし、こうしたステレオタイプの対象となるエリート男性やキャリア女性に対する抑制はこれまで検討されてこなかったため、第 6 章前半において、抑制後のリバウンド効果の生起を検討した。その上で、「有能だが冷たい」というステレオタイプの、「冷たい」を抑制する時に、「有能」という別次元のポジティブな特性を代替思考とするとリバウンド効果が低減するかを検討した。

第Ⅱ部：実証研究

§ 第5章

慈悲的ステレオタイプにおける代替思考方略の有効性の検討

第5章では、4つの実証研究を通して、慈悲的ステレオタイプにおける別次元思考方略の有効性を検討した。慈悲的ステレオタイプとは、低地位で競争的でない集団に向けられる能力は低い、人柄は高いという両面価値的なステレオタイプである。例えば、専業主婦や高齢者は「無能だが温かい」というステレオタイプに向けられる。この慈悲的ステレオタイプを題材として、ネガティブなステレオタイプの特性（i.e., 無能）を単純に抑制した場合、および反ステレオタイプ（i.e., 有能）を代替思考として抑制した場合にはリバウンド効果が生起するが、抑制する特性とは別の次元の特性（i.e., 温かい）を代替思考として抑制すればリバウンド効果が低減するというを示す。

研究1では家庭的な女性に対するステレオタイプを題材とし、代替思考を操作することで、本論文が提案する別次元思考方略の有効性を検討した。研究2から研究4では高齢者に対するステレオタイプを題材とした⁴。具体的には、研究2では高齢者ステレオタイプの「無能」という一方の次元を抑制する際に用いられる代替思考を検討した。その上で、リバウンド効果が生起するかを検討した。研究3では、代替思考を操作することで別次元思考方略の有効性を検討した。研究4では、研究3での知見の頑健性を確かめることと、抑制する特性とは別次元の代替思考が実際に生成しやすいのかを検討することを目的とした。

⁴ 研究2から研究4は次の論文において発表した内容を博士論文の主張に従って構成しなおしたものである。田戸岡好香・村田光二 (2010). ネガティブなステレオタイプの抑制におけるリバウンド効果の低減方略：代替思考の内容に注目して 社会心理学研究, **26**, 46-56. また、これらの研究は日本社会心理学会大学院生海外発表支援制度補助を受けて、16th General meeting of European Association of Social Psychology (Stockholm, Sweden) のシンポジウムにおいて成果の骨子を発表した (Tado'oka, Y., & Murata, K. (2011). A strategy for preventing post suppressional stereotype rebound based on the stereotype content model. Symposium presented in Rebound revisited: Recent developments in theory and research)。

なお、本論文の全体の主張を確かなものにするため、研究2および研究3は修士論文において用いたデータを再度用い、追加分析を行った。

5-1. 研究 1：家庭的女性に対する別次元思考方略の検討

5-1-1. 問題

研究 1 では、家庭的女性に対するステレオタイプを題材とし、ステレオタイプ抑制において有効な代替思考方略を検討した。女性に対するステレオタイプ・偏見には、敵意的なものと慈悲的なものの二つの形態があることが指摘されている（両面価値的性差別理論：Ambivalent Sexism Theory; Glick & Fiske, 1996, 2001a; 2001b）。この理論によると、キャリア女性のような非伝統的な女性は「有能だが冷たい」というステレオタイプを向けられ、男性への支配に抵抗する人物として敵意的な性差別（hostile sexism）の対象となる。他方、専業主婦などの家庭的で伝統的な女性は「温かいが無能」というステレオタイプを向けられ、守るべき存在として慈悲的な性差別（benevolent sexism）の対象となる。家庭的女性に対する慈悲的な偏見は、女性を「温かい」とポジティブに捉えているように見えるが、守るべき存在であるため、労働現場にはふさわしくないとみなし、家庭に押しとどめるように機能していることが指摘されている。こうしたステレオタイプが見られることは日本においても確認されており（高林, 2007）、男女間の不平等を持続させる可能性があるだろう。そこで本研究では、専業主婦のような家庭的女性が労働現場において「無能である」というステレオタイプを向けられないようにするには、どうすればよいかを、ステレオタイプ抑制という観点から検討する。

研究 1 では、単純に抑制した場合にリバウンド効果が生起することを確認するため、代替思考を用いない単純抑制条件を設けた。また、ステレオタイプ抑制では、反ステレオタイプが代替思考として用いられやすいが、リバウンド効果を低減させられないことが示されている（Galinsky & Moskowitz, 2007）。そこで、反ステレオタイプを代替思考として用いてもリバウンド効果が生起してしまうことを確認するため、代替思考として反ステレオタイプの特性（専業主婦の有能さ）を用いる有能思考条件を設けた。加えて、リバウンド効果を低減できる代替思考方略を提案するために、抑制する特性とは別の次元のポジティブなステレオタイプの特性を代替思考とする別次元思考方略の有効性を検討する。具体的には、専業主婦ステレオタイプの内容の一つで、抑制する次元（有能 - 無能）とは異なる次元（温かさ - 冷たさ）に注目し、専業主婦の温かさを代替思考とする温かさ思考条件を設けた。上記の条件設定によって、抑制操作をしない統制条件に比べて、単純抑制条件と有能思考条件はリバウンド効果が生起するが、温かさ思考条件ではリバウンド効果が低減す

るだろう，という仮説を検討した。

5-1-2. 方法

方法の概要

本実験は、3つのフェーズで構成された。無関連な短い実験を2つ行うというカバーストーリーのもと、第1フェーズを「実験1」、第2・第3フェーズを「実験2」として、実験を実施した。

第1の「抑制フェーズ」では、専業主婦の仕事場面を書く記述課題によって抑制操作を行った。その際、単純抑制条件では専業主婦のネガティブなイメージに基づいて記述しないよう教示した。有能思考条件では抑制教示に加え、従来の専業主婦とは反対の仕事ができるというイメージに基づいて書くよう教示した。温かさ思考条件では抑制教示にくわえ、専業主婦の人柄の良さに関するイメージに基づいて書くよう教示した。統制条件ではこうした教示はしなかった。第1フェーズが終了した後、実験者が変わった。第2の「フィラーフェーズ」では100マス計算を行った。つづいて第3の「測定フェーズ」において、女性の写真を呈示し、その人物の印象を評定するよう求めた。この評定がリバウンド効果の測度であった。

3つのフェーズが終了した後、それぞれのフェーズの関連に気づいたか否かをチェックし、実験の目的および操作などについてデブリーフィングを行い、実験を終了した。

実験計画

実験は統制条件・単純抑制条件・有能思考条件・温かさ思考条件の一要因四水準の被験者間計画であった。

第1の抑制フェーズでは専業主婦の写真を呈示し、その人物の仕事場面について記述するよう求め、その際に抑制操作および代替思考の操作を行った。

参加者を実験の条件に無作為に割り当て、授業内において質問紙を配布し、集団実験を行った。

仮説

研究1では以下の仮説を検討した。単純抑制条件および有能思考条件は、抑制後にリバウンド効果が生起するが、温かさ思考条件ではリバウンド効果が低減するだろう。すなわ

ち、測定フェーズにおいて、単純抑制条件と有能思考条件は統制条件と温かさ思考条件に比べて、女性をより無能に評定するだろう。仮説を示すグラフを図 5-1-1 に示した。

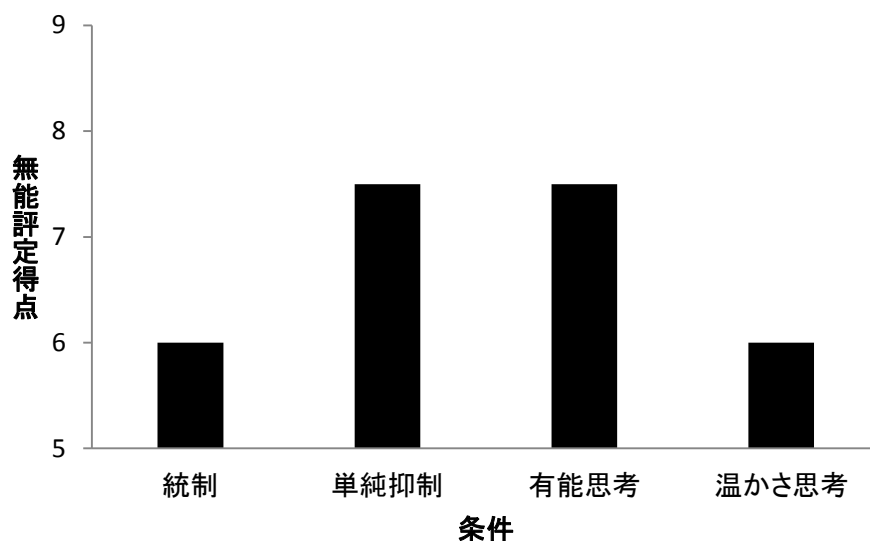


図 5-1-1. 測定フェーズにおける無能評定得点に関する仮説

注. 無能評定得点が高いほど、写真の女性を無能だと評定したことを意味する。

実験参加者

実験参加者は東京都内の大学で心理学関連の授業を受講している学生 74 名であった（男性 37 名、女性 37 名、平均年齢 19.86 歳、 $SD=1.19$ ）。参加者は実験に参加することで授業の出席点を与えられた。74 名の実験参加者を無作為に条件に割り当てた結果、統制条件は 18 名、単純抑制条件は 19 名、有能思考条件は 18 名、温かさ思考条件は 19 名であった。

実験材料・刺激

抑制フェーズ

質問紙の構成 質問紙は 7 ページで構成された B5 サイズの冊子であった。本実験では、二つの無関連な実験を行うというカバーストーリーであったため、実験ごとに質問紙の構成や体裁を変更した。抑制フェーズにおける質問紙の文字は、明朝体で記載した。

表紙には「限られた情報から日常の出来事の詳細を記述する過程を調べている」というカバーストーリーを明記した。質問紙を開くと、2 ページ目には課題の説明を明記した。この課題では女性が働く場面について想像してもらおうと記述しており、その時の場面設定お

よび女性の人物プロフィールを以下の表 5-1-1 のように呈示した。

表 5-1-1. 抑制フェーズで呈示した女性のプロフィール

以下のプロフィールの女性は、これまで専業主婦をしてきましたが、
不景気なこともあって、ある企業のパート社員として働くことになりました。

<人物プロフィール>

経歴	年齢は 35 歳。主人と息子 1 人、娘 1 人の 4 人家族。高校卒業後に結婚し、専業主婦をしてきた。これまでパートなどはせずに、ずっと子育てに専念してきた。
趣味	お菓子作り、ガーデニング
よく見る TV 番組	韓流ドラマ、ワイドショー
夫に求めるもの	経済力、優しさ、誠実さ、包容力、リーダーシップ、 隠し事はしないでほしい。
将来	子育てが終わったら、夫と旅行などをして楽しくやっていきたい。
与えられた仕事の 内容	フォーマットにそって、迅速かつ正確に各種データを入力する。ミス が許されない仕事なので、常に緊張感を持って業務にあたる必要がある。 その他、電話対応などの一般事務を行うよう求められている。

3 ページには、上記の場面設定のもとで、「専業主婦は__」から始まる文章を記述するよう求め、課題の注意事項を明記した。その際の注意事項として、a.) 専業主婦の仕事ぶりについて、どんな様子で働くと思うかを書き入れること、b.) 終了の合図があるまでは 5 分間課題を続けること、を明記した。

そして、単純抑制条件では、課題の説明の最後に、強調のために以下のように下線を引いた記述によって抑制操作をした。

「専業主婦はてきぱきと動けず、仕事に向かない」などといったイメージがあります。

そういった専業主婦のイメージに基づいて書かないように注意してください。

有能思考条件および温かさ思考条件では、上記の抑制操作に加え、代替思考を操作す

る教示を与えた。有能思考条件では、強調のために以下のように下線を引いた記述によって代替思考を呈示した。

代わりに「どんな仕事もてきぱきできる」というように、従来の専業主婦とは反対のイメージに基づいて書くようにしてください。

温かさ思考条件では、強調のために以下のように下線を引いた記述によって代替思考を呈示した。

代わりに「人あたりがいい」というように、家庭的女性の人柄の良さに関するイメージに基づいて書くようにしてください。

なお、統制条件では上記のような抑制操作および代替思考操作の記述はなかった。

4, 5 ページには「専業主婦は__」で始まる文章を書くための空欄を 10 個設けた。その際、参加者が想像しやすいように、以下のように具体的な場面を呈示し、それに続けて「この専業主婦は__」で始まる文章を記述する欄を設けた（表 5-1-2）。

表 5-1-2. 抑制フェーズにおける場面設定一覧

①急な電話が入った時、 ②複雑なデータ入力を頼まれた時、 ③上司からの急な命令に対して、 ④顧客からのクレームに対して、 ⑤新しい仕事を教わった時、 ⑥顧客からの無茶な要望に対して、 ⑦突然の来客に対して、 ⑧パソコンが動かなくなってしまった時、 ⑨マニュアルにないことに対処する時、 ⑩チームを組んでいる他のパート社員がミスをした時、	この専業主婦は～～
--	----------------------

6, 7 ページには, 記述課題が終了した後に課題への感想を回答してもらうとして, 課題の指示に従ったかどうかに関する項目を 3 つ尋ねた。

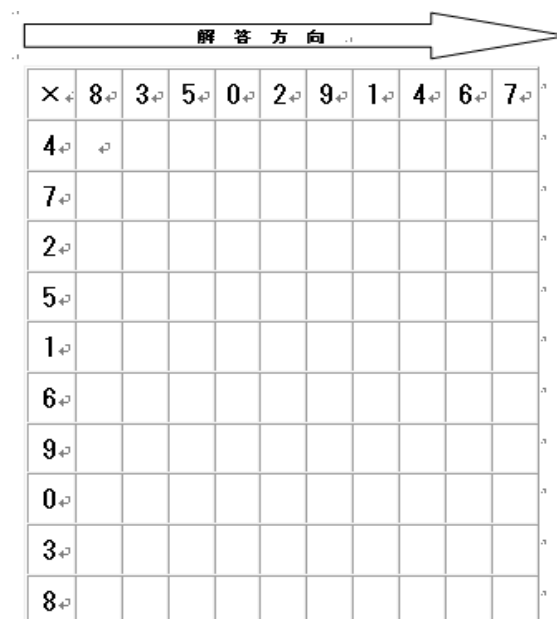
フィラーフェーズ

100 マス計算 抑制フェーズと測定フェーズが無関係であることを強調するために, 第二フェーズではフィラー課題として 100 マス計算を行った。フィラー課題として非言語課題を用いたのは, ステレオタイプのアクセシビリティの上昇が干渉されるのを防ぐためであった。100 マス計算とは 0~9 の数字を縦と横にそれぞれランダムに 10 マスずつ配置し, その数字の交わったマスに, 縦と横のそれぞれの数字をかけた積を記入するという課題であった。

質問紙の構成 質問紙はフィラーフェーズと測定フェーズを合わせて, A4 用紙で 7 ページで構成された。質問紙はすべてゴシック体で記述した。

フィラーフェーズの質問紙は 1 ページから 3 ページまでであった。

1 ページ目には「人の瞬間的な判断に関する検討」というカバーストーリーを明記した。1 つ目の課題として「①数字に対する瞬間的な判断」を調べるとタイトルを示し, 課題の説明を例を挙げて明記した。2, 3 ページには, 縦 10 マス, 横 10 マスの 100 マス計算をそれぞれ一題ずつ, 合計 2 問配置した。その例を図 5-1-2 に示した。



×	8	3	5	0	2	9	1	4	6	7
4										
7										
2										
5										
1										
6										
9										
0										
3										
8										

図 5-1-2. 100 マス計算の例

測定フェーズ

刺激写真 測定フェーズの記述課題では、及川（2005）の手続きを参考に、女性の写真を1枚呈示し、その人物の印象を評定するよう求めた。刺激写真は、40代女性に見えるもので、顔がはっきりとうつつていることを基準に選出した。女性はブラウスを着ており、肩までの写真であった。なお、さまざまな影響を排除するために背景は消去し、白い状態にした。用いた写真は付録Aに示した。

写真はMicrosoft 2010 Power Pointにおいて女性の情報とともに呈示するように作成した。呈示したスライドのイメージ図を以下に示した（図5-1-3）。このスライドを教室の前方のスクリーンにプロジェクターで呈示した。

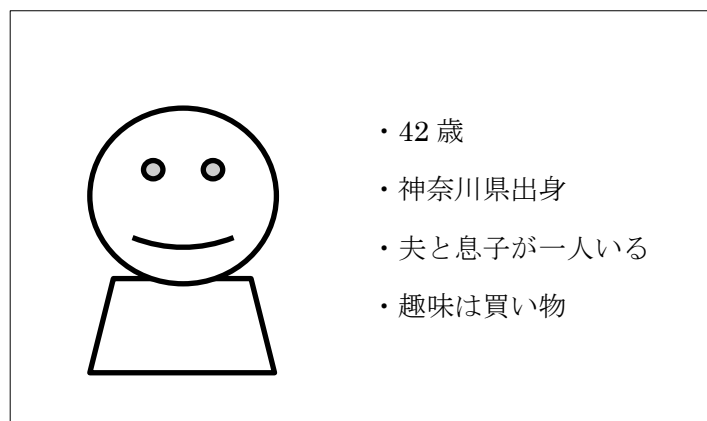


図5-1-3. 測定フェーズで呈示した写真と情報のイメージ

評定項目 評定に用いた項目は、高林（2007）および沼崎（2006）を参考に、女性の無能ステレオタイプに関する評定語として「無能な」「決断力のない」「指導力のない」を用いた。加えて、独自の項目として、「頭の悪い」「仕事の手際の悪い」「覚えの悪い」「たどたどしい」「のんびりした」といった項目を加え、8語を能力ステレオタイプ語として用いることとした。また、温かさステレオタイプに関する評定語として、高林（2007）および沼崎（2006）を参考に、「あたたかい」「親しみやすい」「優しい」を用いた。加えて、独自の項目として、「思いやりのある」「温和」「感じのよい」といった項目を加え、6語を人柄ステレオタイプ語として用いることとした。

ただし、以上の14語のみを評定項目として呈示すると、実験意図に気づかれる可能性が

あるため、「積極的な」「うわさ好き」などの女性の無能さや温かさといったステレオタイプとは無関係なフィラー語を 6 語用いた。さらに、逆転項目を設け、ステレオタイプ語とフィラー語をランダムに配置した。

質問紙の構成 フィラーフェーズに引き続き、4 ページ目からが測定フェーズの質問紙であった。

4 ページでは、「課題②人物に対する瞬間的な印象判断」というカバーストーリーを明記した。課題の説明として、これから前に写真とその人物の情報が呈示されるので、その写真と情報を基に、どのような人物だと思うかを答えてもらう、という内容を示した。

5 ページでは、呈示された人物と情報を見ながら、この人物に対する印象として、最もあてはまると思った数字に○をするよう教示した。質問紙には前述の評定語が書かれており、9 件法で回答するようになっていた（1:全く当てはまらない～9:非常に当てはまる）。

6 ページ、7 ページでは、実験全体に関するアンケートと称し、実験 1（抑制フェーズ）に関する項目、実験 2（フィラーフェーズ、測定フェーズ）に関する項目、実験全体に関する項目、参加者の属性を尋ねる項目の 4 種類で構成された。

実験 1（抑制フェーズ）に関する質問項目は 3 種類あった。1 つ目に、操作チェックの一環として、記述課題時に専業主婦のネガティブなイメージを書かないように努力したかを 7 件法で回答するよう求めた（1：全く努力しなかった～7：非常に努力した）。2 つ目に、課題の指示通りに書くのはどのくらい難しかったかを 7 件法で回答を求めた（1:全く難しくなかった～7：非常に難しかった）。3 つ目に、参加者の母親の仕事を尋ねる項目として、専業主婦・パート社員・フルタイムの社員・自営業・その他の中から選択するよう求めた。

実験 2（フィラーフェーズ、測定フェーズ）にきちんと取り組んだかを調べるために、「数字の課題にきちんと取り組んだ」「女性のプロフィールをきちんと見た」「すべての単語について瞬間的に判断した」「途中で集中が途切れることがあった（逆転項目）」「一生懸命取り組んだ」について 7 件法で回答を求めた（1：全くあてはまらない～7：非常にあてはまる）。

実験全体に関する質問項目では、実験意図への気づきを調べるために、課題間の関連など気づいたことを自由に記述する空欄を設けた。

質問紙の最後では、参加者の属性を調べるため、参加者の性別、学年、年齢、留学生か否かを尋ねた。

手続き

本実験は2名の実験者で行った。第1の抑制フェーズを実験1として第一実験者が実施し、第2・第3フェーズを実験2として2人目の実験者が実施した。

実験を開始する前に、第一実験者は実験参加者に挨拶をし、カバーストーリーとして「日常の記述に関する実験」と「人の瞬間的な判断に関する実験」の2つの無関連な短い実験に参加してもらったと伝えた。回答は匿名の状態で整理され、個人の回答が明らかになることはないという実験参加者に説明し、匿名性の保証をした。つづいて実験への影響を排除するために携帯電話の電源を切るよう実験参加者に教示し、電源を切ったことを確認した後、実験を開始した。

実験全体の流れは図5-1-4に示したとおりであった。

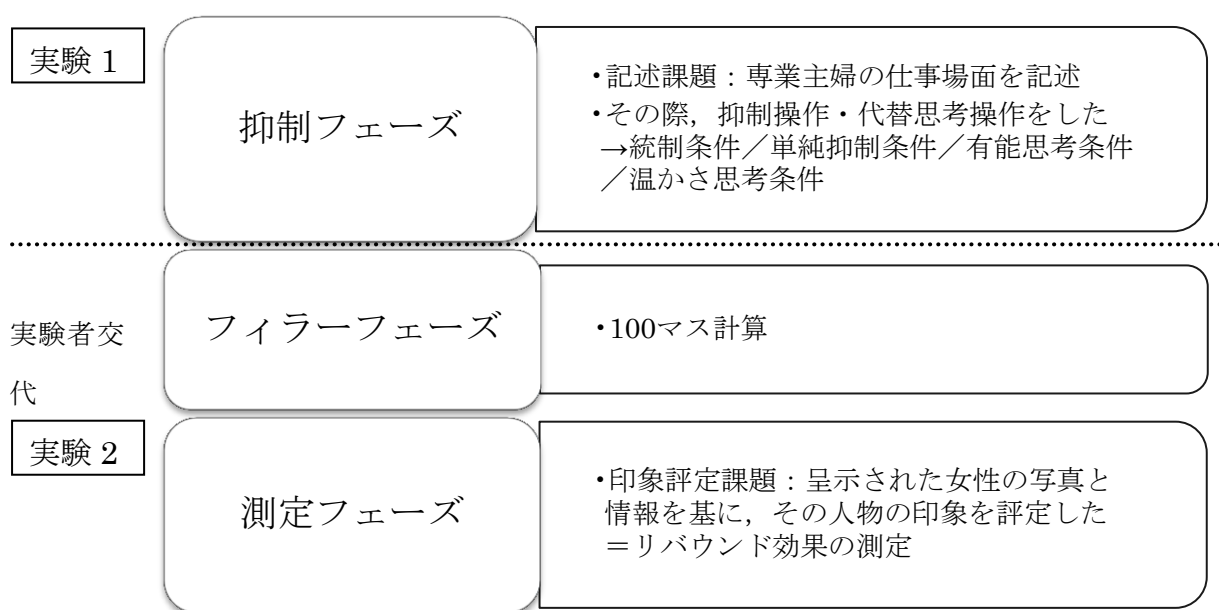


図5-1-4. 実験の流れ

第1の抑制フェーズでは、「限られた情報から日常の出来事の詳細を記述する過程を調査」しているというカバーストーリーのもと、専業主婦の仕事場면을記述するよう求めた。指示があるまで開かないよう注意してから、冊子状にしたB5サイズの質問紙を配布した。つづいて、調査用紙を開くよう求め、この実験では専業主婦が働く場面について想像してもらったと伝えた。仕事場面および女性のプロフィールの説明をした後、『専業主婦はー』で始まる文章を5分間でできるだけ多く作るよう求めた。その際、抑制操作を質問紙上の教示

により行った。単純抑制条件では、『専業主婦はてきぱきと動けず、仕事に向かない』などといったイメージがあります。そういった専業主婦のイメージに基づいて書かないように注意してください。」と教示をした。有能思考条件および温かさ思考条件では、この抑制操作に加え、代替思考を操作する教示を与えた。有能思考条件では、「代わりに『どんな仕事もてきぱきできる』というように、従来の専業主婦とは反対のイメージに基づいて書くようにしてください。」と教示し、温かさ思考条件では、「代わりに『人あたりがいい』というような、家庭的女性の人柄の良さに関するイメージに基づいて書くようにしてください。」と明記してあった。統制条件では抑制操作および代替思考操作はしなかった。質問などがないことを確認した後、課題を開始した。課題の開始と同時にストップウォッチを作動させ、5分間経過した時点で書くのを止めた。つづいて、今行った調査についての質問として、実験への集中の程度について7件法で回答を求めた（1：全くあてはまらない～7：非常にあてはまる）。全員の回答が済んだことを確認し、第一実験者は、以上で1つ目の実験は終了であると伝えた。

つづいて、第二実験者が、2つ目の実験では、「人が瞬間的に物事を判断する過程」について調べており、これから瞬間的な判断に関する種類の異なる2つの課題を行うと伝えた。第二実験者は合図があるまで質問紙を開かないよう注意してから、A4サイズの質問紙を配布した。そして1つ目の課題としてフィラーフェーズを行った。この課題では数字に対する瞬間的な判断を調べており、2分間で、かけ算をやってもらおうと伝えた。100マス計算のやり方の説明をした後、注意事項として、解答は左上のマスから右に向かって解き、横一行がすべて解き終わったら、次の行に進むようにすること、時間内にできるだけ多く、正確に解答するように教示した。質問がないことを確認した後、課題を開始した。課題の開始と同時にストップウォッチを作動させ、1分30秒が経過した時点で残り30秒であることを伝え、2分間経過した時点で解答を止めた。以上で一つ目の課題は終了であると伝えた。

つづいて、2つ目の課題では「人が印象を瞬間的に判断する過程について調べる」というカバーストーリーを伝え、課題の説明をした。教室の前方にあるスクリーンにプロジェクターで女性の写真と情報を呈示した。この人物の印象について、質問紙上の形容詞にどの程度あてはまるかを9件法で回答するように求めた（1：まったくあてはまらない～9：非常によくあてはまる）。評定に用いた単語は、専業主婦の能力ステレオタイプ語として「頭の悪い」「有能な（逆）」「決断力のない」「仕事の手際が良い（逆）」「覚えの悪い」「たどたどしい」「指導力のない」「のんびりした」の8語、人柄ステレオタイプとして「温かい」「思

いやりのある」「親しみやすい」「温和」「感じの良い」「優しい」の 6 語、およびフィラーの 6 語の、合計 20 語であった。

評価が終わった人から、順次 2 つの実験に関するアンケートに回答するよう教示した。参加者の回答がすべて終わったことを確認し、実験は以上で終了であると伝えた。

最後に実験のデブリーフィングをし、実験内容及び仮説を口外しないよう依頼を行い、実験を終了した。

5-1-3. 結果

データの整理

実験意図を明確に指摘した者はいなかったため、全 74 名のデータを用いて分析を行った。

分析の結果

抑制フェーズ

抑制フェーズにおける操作の有効性を確認するため、記述された文がどの程度専業主婦ステレオタイプ（能力、人柄）に当てはまるかを、条件がわからない状態で 1 名の評定者がそれぞれ 9 件法で評定した⁵。それぞれ記述無能ステレオタイプ度（1：有能～5：どちらともいえない～9：無能）、および記述温かさステレオタイプ度（1：冷たい～5：どちらともいえない～9：温かい）とした。条件ごとの平均値と標準偏差を表 5-1-3 に示した。

統制条件以外の 3 条件が専業主婦の無能さを抑制していたかを検討するために、記述無能ステレオタイプ度に対して一元配置の分散分析を行ったところ、条件の効果が有意であった ($F(3, 70)=33.57, p<.01$)。多重比較（Bonferroni の検定）の結果、単純抑制条件、有能思考条件、温かさ思考条件はいずれも統制条件より記述無能ステレオタイプ度が低かった ($ps<.01$)。このことから、抑制の操作は有効であったと考えられる。また、単純抑制条件および有能思考条件において、反ステレオタイプの有能さを代替思考としていることを確認するために、記述無能ステレオタイプ度について、中点（5：どちらともいえない）からの差の検定を行った。その結果、統制条件は有意に中点よりも記述無能ステレオタイプ度が高く ($t(17)=5.38, p<.001$)、無能さを記述していた。他方、単純抑制条件および有能思考条件は有意に中点より記述無能ステレオタイプ度が低く（それぞれ $t(18)=3.26, p<.01$; $t(17)=6.23, p<.001$ ）、有能さを記述していた。このことは、単純に抑制を行った場合には、

⁵ 抑制フェーズにおいて記述された文の具体例を付録 F に示した。

抑制する特性と同次元上の反ステレオタイプを代替思考として用いることを示している。また、有能思考条件では教示通り有能さに基づいて記述しており、代替思考の操作は有効であったと考えられる。なお、温かさ思考条件は中点との差はなかった ($t(18)=0.57, ns.$)。

また、温かさ思考条件の代替思考の操作が有効かを検討するため、記述温かさステレオタイプ度に対して同様の分散分析を行った。その結果、条件の効果が有意であった ($F(3, 43)=12.00, p<.01$)。多重比較 (Bonferroni の検定) の結果、温かさ思考条件はいずれの条件よりも記述温かさステレオタイプ度が高かった ($ps<.05$)。よって、温かさ思考条件の代替思考操作も有効であったと考えられる。

表 5-1-3. 抑制フェーズにおける記述ステレオタイプ度

	統制条件	単純抑制条件	有能思考条件	温かさ思考条件
記述無能ステレオタイプ度	6.89 (1.49)	4.05 (1.27)	3.17 (1.25)	4.78 (0.41)
記述温かさステレオタイプ度	5.11 (0.47)	5.37 (0.50)	5.33 (0.69)	6.16 (1.21)

注. 括弧内は標準偏差を示す。値が高いほど、抑制フェーズにおいて専業主婦ステレオタイプに基づいて記述したことを意味する。

抑制フェーズに関する事後報告

第 3 フェーズの印象評定後に、第 1 フェーズに関する質問への回答を事後的に求めたので、その質問に関する分析結果を報告する。

抑制フェーズでの抑制意図 操作チェックの一環として、抑制フェーズにおいて専業主婦のネガティブなイメージを書かないように努力したかを 7 件法で尋ねた (1: 全く努力しなかった～7: 非常に努力した)。回答に対して一元配置の分散分析を行った結果、条件の効果が有意で ($F(3, 66)=4.11, p<.05$)、単純抑制条件 ($M=4.17, SD=1.89$)、有能思考条件 ($M=4.71, SD=1.89$)、温かさ思考条件 ($M=4.35, SD=2.15$) はいずれも統制条件 ($M=2.39, SD=1.34$) よりも専業主婦の能力次元のステレオタイプを書かないように努力していた ($ps<.10$)。これは前述した実際の記述の結果と整合しており、この結果からも抑制操作は成功していたと考えられる。

測定フェーズ

リバウンド効果の生起 第3フェーズの印象評定課題においてリバウンド効果の測定を行った。評定は9件法で、逆転項目を逆転し、それ以外については評定値をそのまま用いた。「頭の悪い」「有能な（逆）」「決断力のない」「仕事の手際が良い（逆）」「覚えの悪い」「たどたどしい」「指導力のない」「のんびりした」の能力ステレオタイプ8語への評定値について、信頼性係数を算出したところ（クロンバックの $\alpha=.78$ ）、「のんびりした」を除外した7語の信頼性係数の値が高かった（ $\alpha=.82$ ）ため、7語の評定値を合算平均し、無能評定得点とした。

無能評定得点に対して、統制条件・単純抑制条件・有能思考条件・温かさ思考条件を独立変数とした1要因の分散分析を行った結果、条件の効果が有意であった（ $F(3,70)=3.89$, $p<.05$ ）。結果は図5-1-5に示した。多重比較（Bonferroniの検定）の結果、単純抑制条件と統制条件には有意差は見られなかった（ $ns.$ ）。有能思考条件は統制条件よりも女性を無能だと評定していた（ $p=.072$ ）。他方、温かさ思考条件と統制条件には有意差は見られなかった（ $ns.$ ）。また、有能思考条件は統制条件だけでなく、単純抑制条件（ $p<.05$ ）および温かさ思考条件（ $p<.10$ ）よりも女性を無能だと評定していた。この結果は、有能思考条件でのみリバウンド効果が生起していたことを示唆している。

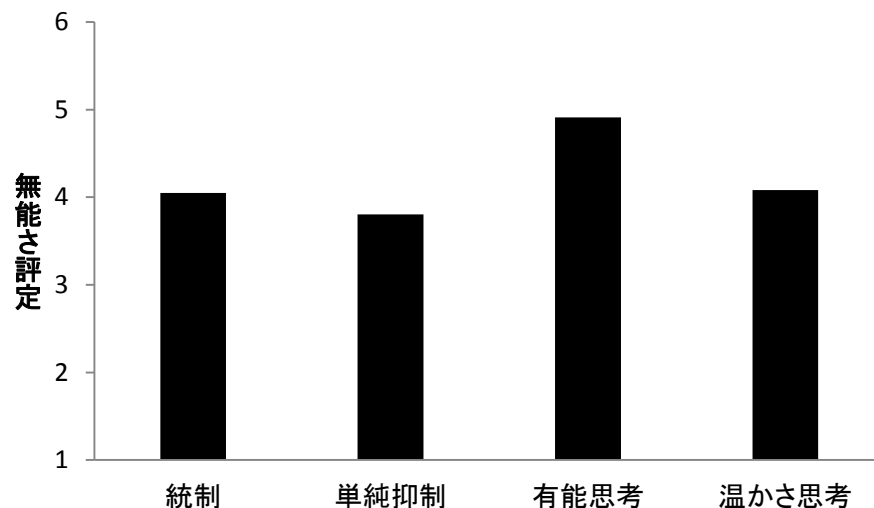


図5-1-5. 測定フェーズにおける無能評定得点

注. 値が高いほど写真の女性を無能と評定したことを意味する

その他の項目の評定 同様に、「温かい」「思いやりのある」「親しみやすい」「温和」「感じの良い」「優しい」の人柄ステレオタイプ 6 語への評定を合算平均し、温かさ評定得点とした（クロンバックの $\alpha=.90$ ）。この得点が高いほど写真の女性を温かいと評定したことを意味する。一要因の分散分析を温かさ評定得点について行った結果、条件の効果は見られなかった($F(3,70)=.44, ns.$)。条件ごとの平均値は表 5-1-4 に示した。

表 5-1-4. 印象評定課題における評定値

	統制条件	単純抑制条件	有能思考条件	温かさ思考条件
無能評定得点	4.05 (0.82)	3.80 (0.95)	4.91 (1.01)	4.08 (1.33)
温かさ評定得点	6.45 (1.42)	6.43 (1.33)	6.04 (1.11)	6.32 (1.02)

注. 値が高いほど写真の女性をステレオタイプに沿って評定したことを意味する。

なお、括弧内は標準偏差である。

その他の分析結果

本研究の仮説とは直接関連しない質問項目に対する分析では、いずれも条件間で有意な差が認められなかったため、本論文での報告は割愛する。

5-1-4. 考察

本研究では、家庭的女性に対する能力次元のステレオタイプを抑制する時に、実際に代替思考を操作することで、リバウンド効果を低減させる有効な代替思考方略を検討した。

抑制時における記述と思考

分析の結果、抑制教示を受けた 3 つの条件は、統制条件よりも専業主婦の無能さを記述していなかった。また、これら 3 つの抑制をした条件では、統制条件よりも抑制の努力をしたと報告された。これらの結果から、抑制操作は有効であったといえる。

単純抑制条件は有能さに基づいて記述しており、抑制をする時には反ステレオタイプを代替思考として用いるということが示された(cf. Galinsky & Moskowitz, 2007)。また、代替思考を操作した条件については、統制条件と比べて、有能思考条件は有能さに基づいて、温かさ思考条件では温かさに基づいて記述しており、代替思考の操作は有効であったといえるだろう。

リバウンド効果の生起と本実験の示唆

印象評定における無能ステレオタイプ語の評定値をリバウンド効果の指標とした。実験の結果、仮説通り、用いる代替思考によってリバウンド効果の生起が異なった。すなわち、反ステレオタイプを代替思考とした有能思考条件ではリバウンド効果が生起し、別次元思考方略の温かさ思考条件ではリバウンド効果が低減した。これは、別次元思考方略の有効性を示していた。

ただし、仮説とは異なり、単純抑制条件ではリバウンド効果が生起しなかった。その理由として、以下の2点が考えられる。

1点目に、抑制フェーズにおける情報呈示の影響が挙げられる。一般的なステレオタイプ抑制研究では、ステレオタイプ対象の写真を呈示し、その人物の一日について記述する際に抑制操作をする、といった手法がとられる。このように、与えられる情報は顔写真のみであることが多い（代表的なものとして Macrae *et al.*, 1994）。こうしたパラダイムは、求職における面接場面や初対面などの対人判断場面を想定しているため、相手の見た目に関する情報のみがあり、それ以外の情報が少ない場面を設定していると考えられる（Galinsky & Moskowitz, 2007）。しかし本研究では、写真を呈示するのではなく、家庭的女性の経歴や趣味などの情報を多数与え、その上で抑制教示を行った。このように、先行研究に比べて、情報を与えすぎたために、単純抑制条件においては代替思考が考えやすくなり、その結果として、リバウンド効果が生起しなかった可能性があるだろう。そこで、以降の研究では、実際の対人判断場面を想定した先行研究のパラダイムを踏襲することとした。すなわち、顔写真を呈示し、必要最低限の場面設定だけを行い、抑制教示を行うことで、リバウンド効果の生起と低減をさらに詳しく検討することとした。

2点目に、研究1ではステレオタイプの表出を測定したため、ステレオタイプのアクセシビリティが高まっても意図的に表出しないように統制した可能性があるだろう。実際、Monteith *et al.* (1998) では、黒人に対するステレオタイプ抑制を行った後、黒人男性の行動文を読み印象評定を行った研究では、ステレオタイプの適用は強まらなかったものの、当該ステレオタイプのアクセシビリティは上昇していた。本研究の課題では、はじめに、専業主婦の仕事場面において無能に基づいて書かないように教示を行った。その後、女性の写真を呈示し印象を評定するよう求めた。二つの実験であるというカバーストーリーを教示していたものの、抑制教示を受けた参加者は、抑制フェーズと測定フェーズの関連に気づき、意図的な統制をしていた可能性があるだろう。この可能性を示唆するデータとして、

印象評定課題の評定値はいずれの条件においても低かった。このことから、本研究で用いた印象評定課題では、ネガティブなステレオタイプを表出することは望ましくないのではないかという、社会的望ましさへの懸念が働きやすかった可能性がある。もし、一見ステレオタイプ化が統制できていたとしても、ステレオタイプのアクセスビリティの上昇が生じていれば、統制の努力が失われた瞬間にステレオタイプの判断が生起してしまう危険性がある（cf. 二過程理論 Brewer, 1988; Devine, 1989; Fiske & Neuberg, 1990）。よって、顕在的な尺度だけでなく、ステレオタイプのアクセスビリティの上昇を測定し、検討しておく必要があるだろう。そこで、以降の研究では、対人認知課題を用いて、リバウンド効果の指標としてステレオタイプのアクセスビリティを測定することとした。

5-2. 研究 2：高齢者ステレオタイプの抑制における

リバウンド効果の検討⁶

5-2-1. 問題

研究 1 によって、家庭的女性のステレオタイプを抑制する際に、別次元思考方略が有効であることが示された。さらに、この代替思考方略の有効性と一般化可能性を検討するため、慈悲的ステレオタイプの代表例である、高齢者を題材とした実験を行った。「高齢者は無能だが温かい」というステレオタイプは、日本 (Koyano, 1989) をはじめ、多くの国で認められており (Fiske & Cuddy, 2006)、汎文化的なステレオタイプであると言える (Cuddy *et al.*, 2005)。

まず研究 2 では、統制条件と単純抑制条件を設けて、高齢者ステレオタイプにおいてリバウンド効果が生起することを確認する。ステレオタイプ抑制に関する先行研究では、ステレオタイプを抑制するとリバウンド効果が生起することが示されてきている (e.g., Macrae *et al.*, 1994)。しかし、従来のステレオタイプ抑制の研究では、ステレオタイプをポジティブ・ネガティブの一次元で捉えてきたため、その内容を考慮せずに、ステレオタイプ全体を抑制した研究のみが報告されてきた (Monteith *et al.*, 1998 参照, for a review)。そのため、一方の次元の特性のみを抑制した後でもリバウンド効果が生起するかどうかは確認されていない。また、研究 1 では、先行研究とは異なった抑制パラダイムを用いたために、単純抑制条件でのリバウンド効果を確認することができなかった。そこで、研究 2 では、先行研究の抑制パラダイムを踏襲した上で、高齢者に対する両面価値的なステレオタイプを題材とし、統制条件と単純抑制条件の 2 条件を設定した実験を行うこととした。そうすることで、特定の次元のステレオタイプ特性のみを抑制する場合においても、リバウンド効果が生起するかを確認することを目的とした。

⁶ 本研究は日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループダイナミクス学会第 56 回大会合同大会におけるポスター発表を加筆修正したものである (田戸岡好香・村田光二 (2009) ネガティブなステレオタイプの抑制におけるリバウンド効果—ステレオタイプの両面価値性と代替思考に注目して—)。また、本研究の一部は 11th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology (Las Vegas, Nevada) における発表にも含まれていた (Tado'oka, Y., & Murata, K. (2010) Grandpa is not slow but kind: The effects of replacement thought strategy on stereotype suppression.)。

なお、研究 1 の結果を受けて、リバウンド効果の測定時における意図的な統制の影響を排除するため、これ以降の研究では対人認知課題によってステレオタイプのアクセスビリティを測定し、検討することとした。具体的には、高齢者の「無能」という能力次元のネガティブなステレオタイプ特性を抑制すると、統制条件に比べて、ターゲット人物をより無能に評定するだろうという仮説を検討した。

また、Galinsky & Moskowitz (2007) によれば、ステレオタイプを抑制する時には、反ステレオタイプが代替思考として用いられることが示されている。そこで、本研究では、抑制時に記述された内容を分析し、代替思考の内容を検討することも目的とした。

5-2-2. 方法

方法の概要

研究 1 と同様に、本実験は、3 つのフェーズで構成され、無関連な短い実験を 2 つ行うというカバーストーリーのもと、第 1 フェーズを「実験 1」、第 2・第 3 フェーズを「実験 2」として、実験を実施した。

第 1 の「抑制フェーズ」では、高齢男性の仕事場面を書く記述課題によって抑制操作を行った。その際、単純抑制条件では高齢者のネガティブなイメージに基づいて記述しないよう教示した。統制条件ではこうした教示はしなかった。第 1 フェーズが終了すると、実験者が変わり、第 2 フェーズに移った。第 2 の「フィラーフェーズ」では 100 マス計算を行い、つづいて第 3 の「測定フェーズ」に移った。このフェーズでは、ある人物の文章をパソコン上に呈示し、その人物の印象を評定させる対人認知課題を行った。この評定がリバウンド効果の測度であった (cf. Galinsky & Moskowitz, 2007)。

3 つのフェーズが終了した後、それぞれのフェーズの関連に気づいたか否かをチェックし、実験の目的および操作などについてデブリーフィングを行い、実験を終了した。

実験計画

実験は、統制条件と単純抑制条件の一要因二水準の被験者間計画であった。

第 1 の抑制フェーズでは高齢男性の写真を呈示し、その人物の仕事場面について記述させ、その際に抑制操作をした。よって、独立変数は抑制フェーズの抑制操作の有無であった。

参加者を実験の条件に無作為に割り当て、一度の実験につき 1~2 名の小集団で実施した。

仮説

研究 2 では以下の仮説を検討した。

仮説 1. 高齢者の能力次元のステレオタイプである「無能」を抑制する時には、同次元の反ステレオタイプである「有能」を代替思考として用いるだろう。つまり、抑制フェーズにおいて、抑制しなかった統制条件に比べて、無能ステレオタイプを抑制した単純抑制条件は有能さに基づいて記述するだろう。

仮説 2. 高齢者の無能ステレオタイプを抑制すると、リバウンド効果が生じるだろう。つまり、抑制フェーズで「無能」というステレオタイプ特性を抑制した単純抑制条件は、統制条件に比べて、測定フェーズにおいて文章の人物をより無能だと評定するだろう。

実験参加者

実験参加者は東京都内の大学で心理学関連の授業を受講している学生 21 名であった（男性 11 名、女性 10 名、平均年齢 19.33 歳、 $SD=0.91$ ）。参加者は実験に参加することで授業の出席点を与えられた。21 名の実験参加者を無作為に条件に割り当てた結果、統制条件は 10 名、単純抑制条件は 11 名であった。なお、実験参加者の中に、以下で述べる予備調査の協力者はいなかった。

実験材料・刺激

抑制フェーズ

質問紙の構成 質問紙は 6 ページで構成された B5 サイズの冊子であった。本実験では、二つの無関連な実験を行うというカバーストーリーであったため、実験ごとに質問紙の構成や体裁を変更した。抑制フェーズにおける質問紙の文字は、明朝体で記載した。

表紙には「視覚的情報から日常の出来事の詳細を記述する過程を調べている」というカバーストーリーを明記した。質問紙を開くと、2 ページ目には課題の説明を明記した。この課題では高齢者が働く場面について想像すると記述してあり、その時の場面設定を以下のように記述した。

新宿駅の売店では朝の混雑している時間帯の店員を募集していましたが、なかなか応募者が来ませんでした。結局採用したのは、写真の高齢の男性でした。この人は現在、朝の混雑している時間帯のシフトで働き始めて1週間が経ちました。

上記の場面設定のもとで、Oe & Oka (2003) を参考に、「高齢の男性は__」から始まる文章を記述するよう求めた。その際の注意事項として、a.) 高齢男性の仕事の内容ではなく、仕事ぶりなどを、動作や様子を表わす言葉で書き入れること、b.) 1つの文章には1つの事柄だけを書き入れ、同じ文章は書かないこと、c.) 終了の合図があるまでは5分間課題を続けること、を明記した。

そして、単純抑制条件では、課題の説明の最後に、強調のために以下のように下線を引いた記述によって抑制操作をした。なお、統制条件では以下の記述はなかった。

ちなみに「高齢者は新しいことがうまくできない、動作が遅い」などといったイメージがあります。現在、高齢者の社会参加が多方面に広がっていますので、そういった高齢者のイメージに基づいて書かないように注意してください。そうすることはこの課題でとても重要なことなので、最大限の努力を払ってください。

3、4 ページには「高齢の男性は__」で始まる文章を書くための空欄を15個設けた。

5 ページには、指示があるまで先のページには進まないよう明記した。

6 ページには、記述課題が終了した後に課題への感想を回答してもらうとして、課題の指示に従ったかどうかを尋ねる項目を3つ尋ねた。

刺激写真 抑制フェーズの記述課題では、Macrae *et al.*(1994)の手続きを参考に、高齢男性の写真を1枚呈示し、その人物の仕事場面を書くよう求めた。刺激写真は、年齢が65歳以上に見えて、顔がはっきりとうつつていることを基準に、最終的に2枚の写真を実験刺激の候補として選出した。

どちらの写真が本実験の刺激として適切であるかを調べるため、予備調査を行った。写真はEPSONのL版(89×127mm)の写真用紙(光沢EG)にインクジェットプリンタでカラ

一印刷し、ラミネート加工をした。なお、さまざまな影響を排除するために背景は消去し、白い状態にした。予備調査として 10 名の協力者に 2 枚のうちどちらかの写真を呈示し、その人物の仕事場面について 5 分間で記述させた。詳細な手続きは本実験の統制条件と同様であった。その記述について、「動作が遅い」、「レジがうまく打てない」などの高齢者の無能さに関するステレオタイプがどの程度書かれているかを 1 名の評定者がどちらの写真に関する記述かがわからない状態でコーディングした。その結果、より無能さに関する記述が多かった写真を高齢者ステレオタイプを表す写真と判断し、実験刺激として用いることとした。なお、実験刺激として選出された写真において、無能さに関する記述数の割合は、全文章数に対して 65.78%、選定されなかった写真では 45.62%であった。用いた写真は付録 A に示した。

フィラーフェーズ

100 マス計算 抑制フェーズと測定フェーズが無関連であることを強調するために、第二フェーズでは研究 1 と同様にフィラー課題として 100 マス計算を行った。

測定フェーズ

装置 Panasonic 社製のノート型のパーソナル・コンピュータ Let's note Y7 型を用いた。液晶のサイズは 15 型であった。実験を遂行するためのプログラムとして、Millisecond Software 社製実験制御ソフトの Inquisit ver.2.0 によって文章の呈示をし、対人認知課題を行った。またその際の反応時間を msec.の単位で測定した。なお、各文字列は、白色の背景に 40 ポイントのゴシック体の黒文字で表記された。呈示された画面の詳細については付録 B に添付した。

プログラムの内容としては、まず課題の説明が呈示され、その後課題の文章が一文ずつ呈示された。文章は全部で 22 文あり、スペースキーを押すと一文ずつ進んだ。22 文すべての呈示が終わると、文章の人物に対する印象評定の説明に自動的に移った。印象評定の説明が終わると、画面の中央に評定語が一語ずつ画面の中央に表示された。その画面の下の部分に「1：全くあてはまらない～5：どちらともいえない～9：非常にあてはまる」と示され、これに基づいて評定するよう求めた。評定はあてはまると思う数字を入力し、Enter キーを押して決定するようになっていた。Enter キーを押すと次の評定語に自動的に切り替わった。すべての評定語の評定が終わると、画面に課題が終了したことを伝える画面が表示

された。

文章 対人認知課題における文章は、やや無能な印象を与える「佐々木さん」という人物の物語であった。文章の作成方法は森 (2000, pp.35-36) を参考に、ターゲット人物がやや無能な行動をとるが、それが状況によるものなのか、特性によるものなのかが曖昧な文章を作成した。まず、やや無能な行動を示すと考えられる文を 37 文作成し、実験に参加しない 24 名に 9 件法 (1: 全く無能でない～9: 非常に無能である) で評定を求め、行動文を選出した。選出の際の条件としては、a.) 評定の平均値が 5.0 (中点) 以上で、b.) 天井効果が起こるほど極端な値ではなく (7.0 以下)、人によって評価のわかる曖昧な行動文を選出するために c.) 標準偏差の値が他の文よりも大きい (1.5 以上) 行動文を 4 文選出した (cf. 森, 2000)。4 文の具体的な数値については表 5-2-1 に示した。

表 5-2-1. 行動記述文の無能さ評定

やや無能な行動文	平均値 (SD)
・電話が鳴っていたが、うかうかしていたら切れてしまった。	5.13 (1.83)
・料理をする時、塩を入れたのを忘れてもう一回入れてしま い、とても塩辛くなってしまった。	6.13 (2.13)
・買い物メモを忘れて、何を買うのかわからなくなった。	6.38 (1.64)
・支度をするのに時間がかかった。	5.29 (1.83)

注. 評定値は 9 件法で、点数が高いほど行動文が無能と評定されたことを意味する。

次に、選出した 4 文の行動文を含んだ文章を作成した。文章は森 (2000) と同様、主人公である「私」と印象評定のターゲットである友人の「佐々木さん」のある一日の行動を描写したものであった。作成した文章がやや無能な行動を示す文章であるかを確認するため、15 名に「覚えの悪い」「忘れっぽい」「にぶい」「遅い」「のろま」という高齢者の無能さを示すステレオタイプ語に 9 件法 (1: 全くあてはまらない～9: 非常にあてはまる) で評定を求めた。上述したステレオタイプ語の合算平均は 7.29 と高めであり、さらに標準偏差も 1.02 と小さかった。これは先述した b.) 天井効果が起こるほど極端な値ではなく (7.0 以下)、c.) 標準偏差の値が大きい (1.5 以上)、という行動文選出のための条件を満たしておらず、やや無能で曖昧な文章というには不十分なものであった。

そこで、上述の行動文の大筋の意味は変更せずに、言い回しなどを変更した文章を改めて作成し、同様の手続きで13名の協力者に評定を求めた。まず、行動文の記述を変更したため、4つの行動文それぞれについての無能さの評定を求めた結果、表5-2-2に示したように、いずれも予備調査1の文章を選出した条件(a~c)を満たしていた。また、文章全体に対して、「覚えの悪い」「忘れっぽい」「ゆっくりした」「遅い」「おぼつかない」を高齢者の無能ステレオタイプ語として評定を求めた。なお、先述の予備調査で用いた「にぶい」「のろま」はネガティブすぎる単語であると判断し、2回目の予備調査では除外した。評定の結果、無能さの評定平均値は6.89と高すぎず、標準偏差も1.95と大きかった。これは行動文を選定したa~cの条件を満たしていたので、この文章をやや無能で曖昧な文章として適切であると判断した。使用した文章は付録Cとして添付した。

表5-2-2. 行動記述文の無能さ評定

やや無能な行動文	平均値(SD)
・家の電話が鳴ったが、うかうかしていると電話は切れてしまった。	5.31 (1.93)
・さっき砂糖を入れたのに、もう一度いれてしまい、お菓子が甘めになってしまった。	6.54 (1.61)
・食卓の上に買い物のメモがあるのを見つけて、人参を買いそびれたことに気づいた。	5.77 (1.74)
・出かける準備を始めたのだが、支度するのに時間がかかってしまい、開始時刻ギリギリになってしまった。	5.23 (2.30)

注. 評定値は9件法で、点数が高いほど行動文が無能と評定されたことを意味する。

評定項目 評定に用いた項目は、予備調査に基づいて選出した、高齢者の能力に関するステレオタイプ語（以下、無能ステレオタイプ語と表記）が5語、人柄に関するステレオタイプ語（以下、温かさステレオタイプ語と表記）が5語、フィラー語を8語の合計18項目であった。高齢者の無能ステレオタイプを表す評定語は、12名の協力者に対して予備調査を行い選出した。予備調査では保坂・袖井(1988)およびKoyano(1989)を参考に選出した単語に対して、それぞれの項目が高齢者にどのくらい当てはまると思うかを7件法で回答させた（1：全くあてはまらない～7：非常によくあてはまる）。予備調査の結果から、高齢者に当てはまると回答された（5.0以上）単語の中から、「ゆっくりした」「忘れっぽい」「遅

い」「覚えの悪い」「おぼつかない」の 5 語を無能ステレオタイプ語として選出した。同様に、温かさステレオタイプを表す評定語は、13 名の協力者に対して予備調査を行い選出した。それぞれの項目が高齢者にどのくらい当てはまると思うかを 7 件法で回答させた（1：全くあてはまらない～7：とてもよくあてはまる）。予備調査の結果から、高齢者に当てはまると回答された（5.0 以上）単語の中から、「優しい」「親しみやすい」「温かい」「穏やか」「思いやりのある」の 5 語を温かさステレオタイプ語として選出した。それぞれの単語の評定値は表 5-2-3、表 5-2-4 に示した。

ただし、以上の 10 語のみを評定項目として呈示すると、実験意図に気づかれる可能性があるため、「珍しい」「するどい」などの高齢者ステレオタイプとは無関係なフィラー語を 8 語用いた。さらに、逆転項目を設け、ステレオタイプ語とフィラー語をランダムに配置した。

表 5-2-3. 無能ステレオタイプ語の予備調査の結果

	ゆっくりした	忘れっぽい	遅い	覚えの悪い	おぼつかない
平均値	6.17	5.83	5.17	5.33	5.83
(SD)	(1.27)	(0.72)	(1.80)	(1.56)	(0.83)

注. 値が高いほど高齢者に当てはまると評定されたことを意味する。

表 5-2-4. 温かさステレオタイプ語の予備調査の結果

	優しい	親しみやすい	温かい	穏やか	思いやりのある
平均値	5.54	5.23	5.54	5.00	5.15
(SD)	(0.97)	(0.83)	(0.78)	(0.91)	(0.80)

注. 値が高いほど高齢者に当てはまると評定されたことを意味する。

実験後の質問紙の構成

3 つのフェーズが終了した後、実験全体に関するアンケートと称した質問紙への回答を求めた。質問紙は A4 用紙で 3 ページで構成され、ゴシック体で記述した。質問項目は実験 1（抑制フェーズ）に関する項目、実験 2（フィラーフェーズ、測定フェーズ）に関する項目、実験全体に関する項目、参加者の属性を尋ねる項目の 4 種類で構成された。

実験 1（抑制フェーズ）に関する質問項目は 3 種類あった。1 つ目に、操作チェックの一環として、記述課題時に高齢者の無能イメージを書かないように努力したかを 7 件法で回

答するよう求めた（1：全く努力しなかった～7：非常に努力した）。2 つ目に、現在祖父や祖母と同居しているかを尋ねた。3 つ目に、自分の祖父や祖母を思い出しながら書いたかどうかを 7 件法で回答を求めた（1：全く思い出さずに書いた～7：非常に思い出しながら書いた）。

実験 2（フィラーフェーズ、測定フェーズ）に関する質問項目は大きく分けて 2 種類あった。1 つ目に、100 マス計算が出来た程度を 7 件法で回答を求めた（1:全くできなかった～7：非常にできた）。2 つ目に、対人認知課題にきちんと取り組んだかを調べるために、「瞬間的に判断した」「文章をきちんと読んだ」「途中で集中が途切れた(逆転項目)」「一生懸命取り組んだ」について 7 件法で回答を求めた（1：全くあてはまらない～7：非常にあてはまる）。

実験全体に関する質問項目では、実験意図への気づきを調べるために、課題間の関連など気づいたことを自由記述する空欄を設けた。質問紙の最後では、参加者の属性を調べるため、参加者の性別、年齢、留学生か否かを尋ねた。

手続き

本実験は 2 名の実験者で行った。第 1 の抑制フェーズを実験 1 として第一実験者が実施し、第 2・第 3 フェーズを実験 2 として 2 人目の実験者が実施した。実験者効果を排除するために、第二実験者にはいずれの条件を実施するのかわからないようにした。

第一実験者が実験参加者を実験室に招き入れ、参加者は互いに背中合わせになり、十分な距離を置いて配置した所定の座席に着席した。なお、その位置関係を図 5-2-1 として示した。

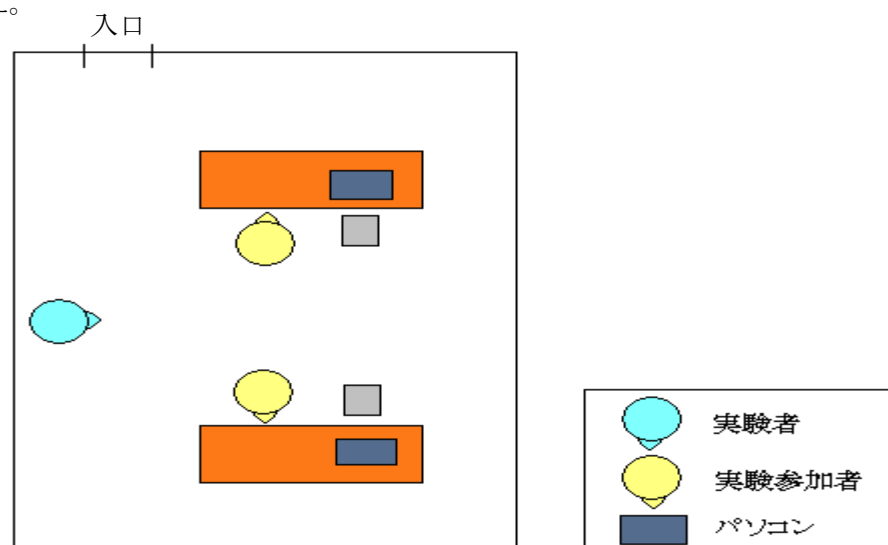


図 5-2-1. 実験室における位置関係

実験を開始する前に、第一実験者は実験参加者に挨拶をし、カバーストーリーとして「日常の記述に関する実験」と「人の瞬間的な判断に関する実験」の 2 つの無関連な短い実験に参加してもらおうと伝えた。回答は匿名の状態で整理され、個人の回答が明らかになることはないという実験参加者に説明し、匿名性の保証をした。その後、実験への参加を承諾する場合には、承諾書にサインをしてもらった。なお、承諾書にサインをしなかった参加者はいなかった。つづいて実験への影響を排除するために携帯電話の電源を切るよう実験参加者に教示し、電源を切ったことを確認した後、実験を開始した。

実験全体の流れは図 5-2-2 に示したとおりであった。

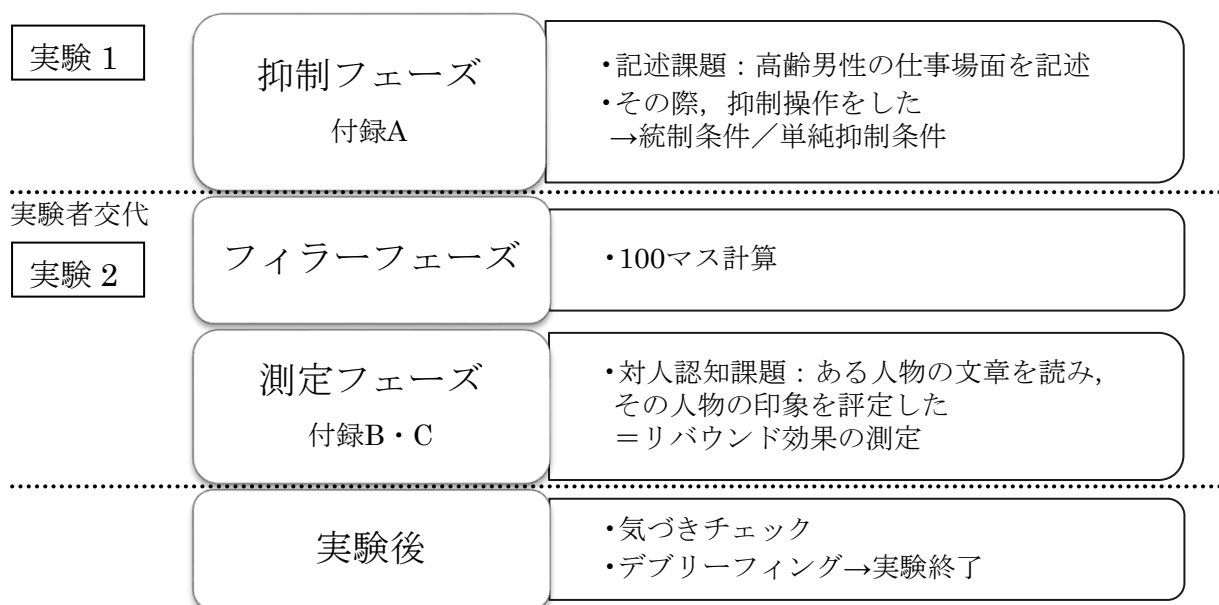


図 5-2-2. 実験の流れ

第 1 の抑制フェーズでは、Macrae *et al.*(1994)にならい、「視覚的情報から日常の出来事の詳細を記述する過程を調査」しているというカバーストーリーのもと、高齢男性の仕事場면을記述するよう求めた。指示があるまで開かないよう注意してから、冊子状にした B5 サイズの質問紙と高齢男性の写真が入った封筒を配布した。つづいて、写真を封筒から取り出し、調査用紙を開くよう求め、この実験では高齢者が働く場面について想像してもらおうと伝えた。仕事場面の説明をした後、『高齢の男性は—』で始まる文章を 5 分間でできるだけ多く作るよう求めた。その際、抑制操作として、単純抑制条件では、『高齢者は新しいことがうまくできない、動作が遅い』などといったイメージがあります。現在、高齢者の

社会参加が多方面に広がっていますので、そういった高齢者のイメージに基づいて書かないように注意してください。そうすることはこの課題でとても重要なことなので、最大限の努力を払ってください。」と教示をした。他方、統制条件ではこのような教示はしなかった。質問などがないことを確認した後、課題を開始した。課題の開始と同時にストップウォッチを作動させ、5分間経過した時点で書くのを止めた。つづいて、今行った調査についての質問として、実験への集中の程度についての質問項目に7件法で回答を求めた（1：全くあてはまらない～7：非常にあてはまる）。全員の回答が済んだことを確認し、事前に机上に用意した大きな封筒の中に写真と質問紙をしまうよう伝えた。第一実験者は、以上で1つ目の実験は終了であると伝え、それぞれの参加者の封筒を回収し、退室した。

その後、第二実験者が入室し、2つ目の実験では、「人が瞬間的に物事を判断する過程」について調べており、これから瞬間的な判断に関する種類の異なる2つの課題を行うと伝えた。第二実験者は合図があるまで質問紙を開かないよう注意してから、A4サイズの質問紙と質問紙を入れる大きな白い封筒を配布した。そして1つ目の課題としてフィラーフェーズを行った。この課題では数字に対する瞬間的な判断を調べており、2分間で、かけ算をやってもらおうと伝えた。100マス計算のやり方の説明をした後、注意事項として、解答は左上のマスから右に向かって解き、横一行がすべて解きおわったら、次の行に進むようにすること、時間内にできるだけ多く、正確に解答するように教示した。質問がないことを確認した後、課題を開始した。課題の開始と同時にストップウォッチを作動させ、1分30秒が経過した時点で残り30秒であることを伝え、2分間経過した時点で解答を止めた。質問紙を閉じて机上の封筒の中に入れるよう求め、一つ目の課題を終了した。

つづいて、次の課題はパソコンで行うので、パソコンの前に席を移動するよう求め、測定フェーズを開始した。2つ目の課題では「人が印象を瞬間的に判断する過程について調べる」というカバーストーリーを伝え、対人認知課題の説明をした。このフェーズでは、パソコンに呈示される「佐々木さん」という人物の文章を読み、その物語の情報を基に佐々木さんがどのような人物だと思うかを考え、「佐々木さん」の印象に関していくつかの質問に答えてもらうということを伝えた。なお、文章は参加者のペースで読んで構わないが、その後の印象評定はできるだけすばやく行うよう求めた。それは、ステレオタイプのアクセスビリティの指標である印象判断に関しては、時間をかけると社会的望ましさや自己呈示が回答に影響を与えてしまう場合があるため、そうした可能性を排除するためであった。課題の説明が終わると、準備ができ次第、文章を読み始めるよう教示した。文章はパソコ

ン上に一文ずつ呈示され、スペースキーを押すと次の文章に進んだ。文章をすべて読み終わると、すぐに印象評定の説明が表示された。画面に単語が表示されるので、その単語が「佐々木さん」の印象にどの程度あてはまるかを9件法ですばやく回答するよう求めた(1: まったくあてはまらない~9: 非常によくあてはまる)。評定に用いた単語は、高齢者の無能ステレオタイプ語として「ゆっくりした」「忘れっぽい」「すばやい(逆)」「覚えの悪い(逆)」「おぼつかない」の5語、温かさステレオタイプ語として「優しい」「親しみやすい」「冷たい(逆)」「穏やか」「思いやりのない(逆)」の5語、およびフィラーの8語の、合計18語であった。評定が終了したら、第二実験者は2つ目の実験は終了であると伝えた。

その後、2つの実験に関するアンケートだと説明し、実験意図への気づきなどを調べる質問紙に回答した。参加者の回答が終わったことを確認し、質問紙を封筒に入れるよう求め、実験は以上で終了であると伝えた。

最後に実験のデブリーフィングをし、実験内容及び仮説を口外しないよう依頼を行い、実験参加者の同意が得られたら、実験を終了した。

5-2-3. 結果

データの整理

参加者の中に実験意図を明確に指摘したものはいなかった。パソコンの不具合で回答が中断した1名を除き、全20名のデータを用いて分析を行なった(男性10名、女性10名、平均年齢19.30歳、 $SD=0.92$)。条件ごとの人数は統制条件10名、単純抑制条件10名であった。

分析の結果

抑制フェーズ

抑制フェーズにおいて、単純抑制条件の参加者が高齢者の無能さを抑制したことを検討するために、以下のように記述内容の分析を行った⁷。まず、2名の評定者が条件がわからない状態で、実験参加者が記述した文を独立にコーディングした。記述文がどの程度高齢者のステレオタイプに当てはまるかを、能力に関して「1: 非常に有能~5: どちらともいえない~9: 非常に無能」の9件法で、人柄(冷たい-温かい)に関して同様の9件法でそ

⁷ 抑制フェーズにおいて記述された文の具体例を付録Fに示した。なお、研究2から研究4はいずれも高齢者を題材としたため、3つの研究を通して頻繁に記述された内容をまとめた。

れぞれ評定した。評定者間の相関が高かったため（能力： $r=.96$ ，人柄： $r=.78$ ），合算平均をそれぞれ記述無能ステレオタイプ度，記述温かさステレオタイプ度とした。そして，記述無能ステレオタイプ度に対して両条件間で差の検定をしたところ，単純抑制条件（ $M=4.05$ ， $SD=1.28$ ）は統制条件（ $M=7.75$ ， $SD=1.34$ ）よりも有意に記述無能ステレオタイプ度が低かった（ $t(18)=6.32$ ， $p<.01$ ）。よって，抑制操作は有効であったと考えられる。

また，ステレオタイプ抑制においては，反ステレオタイプの特性が用いられることが指摘されている（Gakinsky & Moskowitz, 2007）。本研究のように一方の次元の特性（i.e.，無能）だけを抑制した場合でも，同次元上の反ステレオタイプ特性（i.e.，有能）を代替思考として使用するのかを検討するために，記述無能ステレオタイプ度について，中点（5：どちらともいえない）からの差の検定を行った。その結果，統制条件は有意に中点よりも記述無能ステレオタイプ度が高く（ $t(9)=6.50$ ， $p<.001$ ），無能さを記述していた。他方，単純抑制条件は有意に中点よりも記述無能ステレオタイプ度が低く（ $t(9)=2.35$ ， $p<.05$ ），有能さを記述していた。このことは，単純に抑制を行った場合には，抑制する特性と同次元上の反ステレオタイプ特性を代替思考として用いることを意味しており，仮説 1 を支持する結果であった。

なお，記述温かさステレオタイプ度に対して同様の検定をしたが，統制条件（ $M=6.35$ ， $SD=1.11$ ）と単純抑制条件（ $M=5.70$ ， $SD=0.89$ ）の間に有意差は見られなかった（ $t(18)=1.45$ ， $ns.$ ）。

抑制フェーズに関する事後報告

第 3 フェーズが終了した後に，第 1 フェーズに関する質問への回答を事後的に求めたので，その質問に関する分析結果を報告する。

抑制フェーズでの抑制意図 操作チェックの一環として，抑制フェーズにおいて高齢者のネガティブなイメージを書かないように努力したかを 7 件法で尋ねた（1：全く努力しなかった～7：非常に努力した）。回答について独立したサンプルの t 検定を行った結果，単純抑制条件（ $M=5.60$ ， $SD=1.78$ ）は統制条件（ $M=2.50$ ， $SD=1.18$ ）よりも有意に高齢者のステレオタイプを書かないように努力していた（ $t(18)=4.60$ ， $p<.001$ ）。これは前述した実際の記述無能ステレオタイプ度の結果と整合しており，この結果からも抑制操作は成功していたと考えられる。

測定フェーズ

リバウンド効果の生起 測定フェーズの対人認知課題においてリバウンド効果の測定を行った。評価はステレオタイプのアクセシビリティを測定するため、深く考えず思ったとおりにはばやく評価するよう求めた。そのため、印象評価の回答時間について、単語ごとに回答時間の平均値と標準偏差を算出し、回答時間が $3SD$ 以上遅いデータを除外した（全体の 1.39%）⁸。

評価は 9 件法で、逆転項目を逆転し、それ以外については評価値をそのまま用いた。「ゆっくりした」「忘れっぽい」「すばやい（逆転項目）」「覚えの良い（逆転項目）」「おぼつかない」の無能ステレオタイプ語の 5 語への評価を合算平均し、無能評価得点とした ($\alpha=.61$)。無能評価得点が高いほど、文章の人物を無能だと評価したことになり、無能ステレオタイプのアクセシビリティが上昇したことを意味する。

無能評価得点に対して、統制条件・単純抑制条件の独立したサンプルの t 検定を行った結果、図 5-2-3 に示したように、単純抑制条件 ($M=7.70, SD=.61$) は統制条件 ($M=6.91, SD=.78$) よりも有意に無能評価得点が高かった ($t(18)=2.52, p<.05$)。つまり、文章の人物について、単純抑制条件の参加者は統制条件の参加者よりも無能だと評価していた。これは、仮説 2 を支持する結果であった。

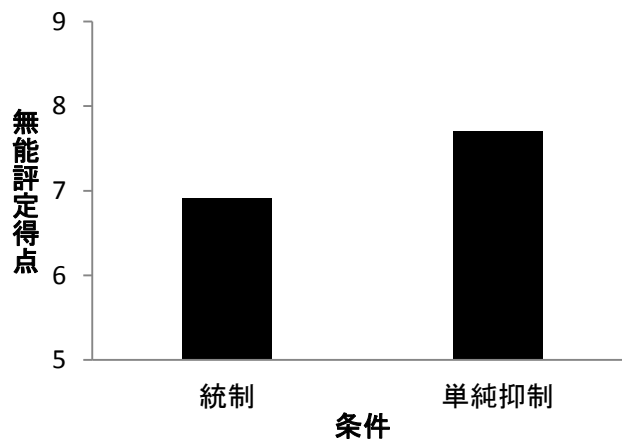


図 5-2-3. 測定フェーズにおける無能評価得点

注. 無能評価得点が高いほど文章の人物を無能だと評価したことを意味する。

⁸ 本研究と同様の課題はアクセシビリティの指標としてこれまでのステレオタイプ抑制の研究で使われているが、反応時間そのものは従属変数とされていない。本課題では、評価を 1~9 の数字を押すことで行っており、これらの数字を押すまでの距離が均一ではなかった。このようにキー押しまでの反応時間を統制することが困難なため、反応時間をアクセシビリティの指標として使用することはしなかった。

その他の項目の評定 同様に、「優しい」「親しみやすい」「冷たい(逆転項目)」「穏やか」「思いやりのない(逆転項目)」の温かさステレオタイプ語の5語への評定を合算平均し、温かさ評定得点とした ($\alpha=.71$)。この得点が高いほど文章の人物を温かいと評定したことを意味する。同様の t 検定を温かさ評定得点について行った結果、統制条件 ($M=6.65, SD=.61$) と単純抑制条件 ($M=6.65, SD=1.48$) の間に有意差はなかった ($t(12.01)=.00, ns.$)。また、8語のフィラー語についてそれぞれ同様の分析を行ったが、統制条件と単純抑制条件の間に有意差はなかった ($ps>.15$)。

その他の分析結果

本研究の仮説とは直接関連しない質問項目に対する分析では、いずれも有意な差が認められなかったため、本論文での報告は割愛する。

5-2-4. 考察

本実験では、高齢者ステレオタイプを題材として、能力次元の「無能」というステレオタイプ特性を抑制した後に、リバウンド効果が生起するかどうかを検討した。

抑制時における記述と思考

抑制フェーズにおいて、単純抑制条件は統制条件よりも高齢者の無能さを記述していなかった。また、単純抑制条件では統制条件よりも抑制の努力をしていたことが示された。これらの結果から、抑制操作は有効であったといえる。また、単純抑制条件は統制条件よりも有能さに関して記述しており、人柄に関する記述には差がなかった。これらの結果から、Galinsky & Moskowitz (2007) が示したように、抑制をする時には、抑制をするステレオタイプ特性と同次元上の反ステレオタイプ特性（本研究では有能さ）を代替思考として使用していることが示され、仮説1が支持された。

リバウンド効果の生起

何かを考えないように抑制する時には、その思考が思い浮かんでいないかどうかを監視する監視過程が働くと指摘されている (Wegner, 1994)。同様に、高齢者ステレオタイプの「無能さ」を抑制する場合でも、監視過程の働きによって「無能さ」のアクセシビリティが高まるリバウンド効果が皮肉にも生起すると考えられる。本研究では、高齢者の能力次

元のステレオタイプ特性を抑制した後に、やや無能な行動をする人物の文章を読み、その人物について評定することで、ステレオタイプのアクセシビリティを測定し、リバウンド効果が生じたかどうかを検討した。

実験の結果、測定フェーズにおいて、単純抑制条件は統制条件よりも文章の人物を無能だと評定しており、仮説 2 を支持する結果であった。一方で、人柄評定得点やフィルター項目に対しては条件間で有意差はみられなかった。つまり、単純抑制条件では、抑制した無能ステレオタイプのアクセシビリティだけが統制条件よりも上昇していたと解釈できる。このことから、仮説どおり、高齢者の無能ステレオタイプを抑制した後に、リバウンド効果が生起していたことが確認された。

本実験の示唆

本実験では、統制条件に比べて、抑制をする際、高齢者の様子をステレオタイプとは反対に有能に記述していた。また、抑制した後には無能ステレオタイプのアクセシビリティが上昇していた。これは、抑制する時に、有能さを代替思考として用いているにもかかわらず、抑制後のリバウンド効果が生起してしまったということを意味している。このことから、反ステレオタイプを代替思考として用いる方略は、一般的に採用される方略である（cf. Galinsky & Moskowitz, 2007）にもかかわらず、抑制には有効ではないと示された。よって、ステレオタイプを効果的に抑制するためには、単純に抑制するだけでなく、もっと有効な方略が必要だろう。そこで、研究 3 では、実際に使用する代替思考を操作し、ステレオタイプ抑制に有効な代替思考を検討することとした。

5-3. 研究 3：高齢者に対する別次元思考方略の検討⁹

5-3-1. 問題

研究 2 において、高齢者の能力次元の無能というステレオタイプを抑制すると、抑制時には反ステレオタイプである有能を代替思考として使用していることが示された。それにもかかわらず、抑制後には当該ステレオタイプのアクセシビリティが上昇するリバウンド効果が生起することが明らかになった。

このように、ステレオタイプの抑制では、代替思考方略の限界が指摘されてきたが(e.g., Oe & Oka, 2003), 思考抑制においては、概して、代替思考を用いることが抑制後のリバウンド効果を低減させるのに有効であると示されている (e.g., Wegner *et al.*, 1987)。これらの結果の違いは、適切な代替思考が生成しやすかったか否かが関わっていると考えられる。すなわち、代替思考が生成しやすければ、抑制対象から注意をそらすことができるため、抑制が容易になるだろう。その結果、監視過程は厳重ではなくなるため、リバウンド効果が低減するだろう。しかし、研究 1 および研究 2 のように、代替思考として生成される反ステレオタイプは、元来持っている知識とは反対の思考であるため、ステレオタイプに比べて生成するためには意識的な努力が必要であり、生成しにくかったと考えられる。このように代替思考を容易に生成することができないと、抑制対象から注意をそらすという代替思考の役割を果たせず、抑制対象が意識上に侵入しやすいだろう。その結果、監視過程が厳重になり、リバウンド効果が生起すると考えられる。

そこで、本研究では、抑制時に生成しやすい代替思考として、多くのステレオタイプが両面価値的であるということに注目し、抑制する特性とは別の次元のポジティブなステレオタイプに注目することとした。すなわち、高齢者の能力次元のステレオタイプである「無能」を抑制する時に、人柄次元のステレオタイプである「温かさ」を代替思考として利用するという方略である。代替思考としての人柄次元のステレオタイプは、抑制対象の表象に含まれるものであるため、生成しやすいだろう。代替思考として生成しやすければ、抑制は容易になり、監視過程は厳重に働く必要はないため、リバウンド効果が低減すると考

⁹ 本研究は、日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループダイナミクス学会第 56 回大会合同大会における口頭発表の一部（実験 1）を加筆修正したものである（田戸岡好香・村田光二 (2009). ネガティブなステレオタイプの抑制におけるリバウンド効果の低減—ステレオタイプの両面価値性に注目した代替思考方略—）。

えられる。

以上のように、本研究では、実際に抑制時の代替思考を操作し、ステレオタイプ抑制において有効な代替思考を探ることを目的とする。

5-3-2. 方法

方法の概要

本実験は、研究 2 と同様に 3 つのフェーズで構成された。

第 1 の「抑制フェーズ」では、「実験 1」として高齢男性の仕事場面を書く記述課題によって抑制操作を行った。その際、単純抑制条件では高齢者のネガティブなイメージに基づいて記述しないよう教示した。有能思考条件では抑制教示に加え、従来の高齢者とは反対のイメージに基づいて書くよう教示した。温かさ思考条件では抑制教示にくわえ、高齢者の人柄の良さに関するイメージに基づいて書くよう教示した。統制条件ではこうした教示はしなかった。第 1 フェーズが終了すると実験者が変わり、「実験 2」として第 2・第 3 フェーズに移った。第 2 の「フィラーフェーズ」では 100 マス計算を行った。つづいて第 3 の「測定フェーズ」では、ある人物の文章をパソコン上に呈示し、その人物の印象を評定させる対人認知課題を行った。この評定がリバウンド効果の測度であった。

3 つのフェーズが終了した後、それぞれのフェーズの関連に気づいたか否かをチェックし、実験の目的および操作などについてデブリーフィングを行い、実験を終了した。

実験計画

実験は統制条件・単純抑制条件・有能思考条件・温かさ思考条件の一要因四水準の被験者間計画であった。

第 1 の抑制フェーズでは高齢男性の写真を呈示し、その人物の仕事場面について記述させ、その際に抑制操作および代替思考の操作を行った。

参加者を実験の条件に無作為に割り当て、一度の実験につき 1～2 名の小集団で実施した。

仮説

研究 3 では以下の仮説を検討した。単純抑制条件および有能思考条件は、抑制後にリバウンド効果が生起するが、温かさ思考条件ではリバウンド効果が低減するだろう。すなわち、測定フェーズにおいて、単純抑制条件と有能思考条件は統制条件と温かさ思考条件に

比べて、無能さに関して曖昧な人物をより無能に評定するだろう。なお、仮説を示すグラフを図 5-3-1 に示した。

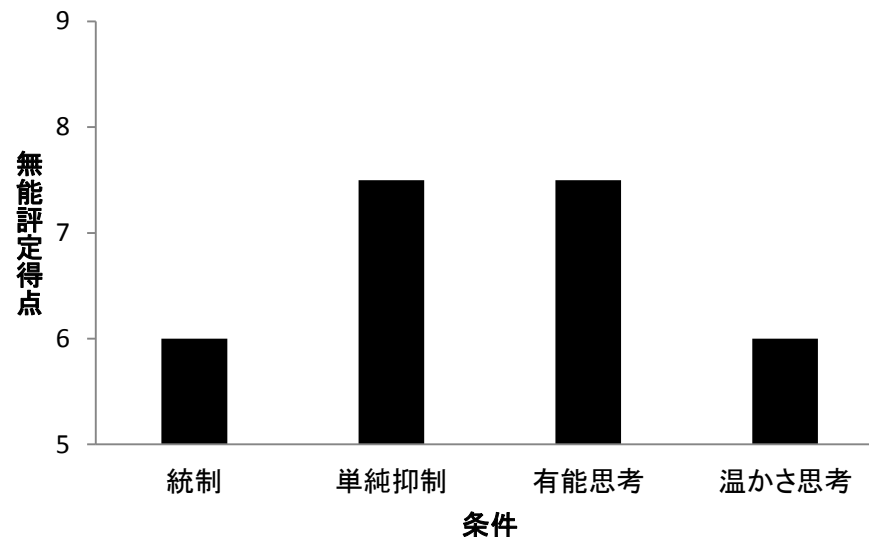


図 5-3-1. 測定フェーズにおける無能評定得点に関する仮説

注. 無能評定得点が高いほど、文章の人物を無能だと評定したことを意味する。

実験参加者

実験参加者は東京都内の大学の心理学関連の授業を受講している大学生 54 名であった（男性 41 名，女性 13 名，平均年齢 19.31 歳， $SD=0.82$ ）。参加者は実験に参加することで授業の出席点を与えられた。54 名の実験参加者を無作為に条件に割り当てた結果，統制条件は 12 名，単純抑制条件は 14 名，有能思考条件は 14 名，温かさ思考条件は 14 名であった。

実験材料・刺激

研究 3 は研究 2 とほぼ同様の手続きで実施したため，変更点についてのみ言及する。

抑制フェーズの教示

研究 3 では「有能思考条件」および「温かさ思考条件」の 2 条件を追加した。高齢者が働く場面を書く課題において，この 2 条件の参加者に，単純抑制条件と同様の抑制教示を以下のように与えた。

ちなみに「高齢者は新しいことがうまくできない、動作が遅い」などといったイメージがあります。現在、高齢者の社会参加が多方面に広がっていますので、そういった高齢者のイメージに基づいて書かないように注意してください。そうすることはこの課題でとても重要なことなので、最大限の努力を払ってください。

その後、引き続き代替思考を操作する教示を与えた。

有能思考条件では、強調のために以下のように下線を引いた記述によって代替思考を呈示した。

もし、そのような考えが思い浮かんだり、書きたくなった場合は、代わりに「新しいことなどをてきぱきできる」というように、従来の高齢者とは反対のイメージに基づいて書くようにしてください。

温かさ思考条件では、強調のために以下のように下線を引いた記述によって代替思考を呈示した。

もし、そのような考えが思い浮かんだり、書きたくなった場合は、代わりに「人あたりが良い」というような、高齢者の人柄の良さに関するイメージに基づいて書くようにしてください。

測定フェーズの評定項目

リバウンド効果を測定する対人認知課題において、研究 2 で用いた無能ステレオタイプ語の 5 語に加え、「のろま」「あわただしい」を加えた。「のろま」は動作に関する単語であり、「遅い」「ゆっくりした」などと同様の意味を持つ単語であると考えた。また、研究 2 の記述課題における統制条件の参加者の記述を参考に、仕事場面において慣れない仕事をあわただしく行っている様子を想定し、「あわただしい」を高齢者の無能ステレオタイプ語として追加した。

よって、無能ステレオタイプ語は「ゆっくりした」「遅い」「忘れっぽい」「覚えの悪い」「おぼつかない」「のろま」「あわただしい」の 7 語であった。また、フィラー項目として、

温かさステレオタイプ語を 5 語、フィラー語を 8 語用いた。さらに、逆転項目を設け、ステレオタイプ語とフィラー語をランダムに配置した。

実験後の質問項目

抑制フェーズにおける記述課題時の思考を調べるために、第 3 フェーズが終了した後に質問紙への回答を求めた。実際に書いたかどうかは関係なく、高齢者の能力に関するネガティブなイメージがどの程度思い浮かんだかを 7 件法で回答を求めた (1:全く考えなかった～7: 非常によく考えた)。

手続き

研究 3 は研究 2 とほぼ同様の手続きで実施した。

研究 2 と同様に、第 1 の抑制フェーズを実験 1 として第一実験者が実施し、第 2・第 3 フェーズを実験 2 として第二実験者が実施した。実験者効果を排除するために、第二実験者にはいずれの条件を実施するのかわからないようにした。

第一実験者が実験参加者を実験室に招き入れ、カバーストーリーとして「日常の記述に関する実験」と「人の瞬間的な判断に関する実験」の 2 つの無関連な短い実験に参加してもらいと伝えた。匿名性の保証をし、実験への参加を承諾する場合には承諾書にサインをもらい、実験を開始した。

第 1 の抑制フェーズでは、「視覚的情報から日常の出来事の詳細を記述する過程を調査」しているというカバーストーリーのもと、高齢男性の仕事場面を記述するよう求めた。指示があるまで開かないよう注意してから、質問紙と高齢男性の写真が入った封筒を配布した。つづいて、この実験では高齢者が働く場面について想像してもらいと伝えた。仕事場面の説明をした後、『高齢の男性は—』で始まる文章を 5 分間でできるだけ多く作るよう求めた。その際、統制条件以外の 3 つの条件では、抑制操作として、『「高齢者は新しいことがうまくできない、動作が遅い」などといったイメージがあります。現在、高齢者の社会参加が多方面に広がっていますので、そういった高齢者のイメージに基づいて書かないように注意してください。そうすることはこの課題でとても重要なことなので、最大限の努力を払ってください。』と教示をした。単純抑制条件は以上の教示のみ与えられた。有能思考条件では上記の抑制教示に加えて、「もし、そのような考えが思い浮かんだり、書きたくなった場合は、代わりに『新しいことなどをてきぱきできる』というように、従来の高齢

者とは反対のイメージに基づいて書くようにしてください。」と教示し、代替思考の操作を行った。また、温かさ思考条件では抑制教示に加えて、「もし、そのような考えが思い浮かんだり、書きたくなった場合は、代わりに『人あたりが良い』というような、高齢者の人柄の良さに関するイメージに基づいて書くようにしてください。」と教示し、代替思考の操作を行った。統制条件では抑制操作の教示および代替思考の操作の教示はしなかった。質問がないことを確認した後、課題を開始した。課題の開始と同時にストップウォッチを作動させ、5分間経過した時点で書くのを止めた。つづいて、今行った調査についての質問として、実験への集中の程度についての項目に7件法で回答を求めた（1：全くあてはまらない～7：非常にあてはまる）。全員の回答が済んだことを確認し、1つ目の実験を終了した。

つづいて、第二実験者が入室し、2つ目の実験では、「人が瞬間的に物事を判断する過程」について調べており、これから瞬間的な判断に関する種類の異なる2つの課題を行うと伝えた。1つ目の課題としてフィラーフェーズを行った。この課題では2分間で100マス計算を行った。

つづいて、測定フェーズを開始した。2つ目の課題では「人が印象を瞬間的に判断する過程について調べる」というカバーストーリーを伝え、対人認知課題の説明をした。このフェーズではパソコンに呈示される「佐々木さん」という人物の文章を読み、その物語の情報を基に佐々木さんがどのような人物だと思うかを考え、「佐々木さん」の印象に関していくつかの質問に答えてもらうということを伝えた。なお、文章は参加者のペースで読んで構わないが、この課題では人の瞬間的な印象の判断を調べているので、印象の判断はできるだけすばやく行うよう求めた。文章をすべて読み終わると、すぐに印象評定の説明が表示された。画面に表示された単語が「佐々木さん」の印象にどの程度あてはまるかを9件法ですばやく回答するよう求めた（1：まったくあてはまらない～9：非常によくあてはまる）。評定に用いた単語は、高齢者の無能ステレオタイプ語として「ゆっくりした」「忘れっぽい」「のろま」「すばやい(逆)」「あわただしい」「覚えの悪い(逆)」「おぼつかない」の7語および、温かさステレオタイプ語5語、フィラー語8語の合計20語であった。評定が終了したら、第二実験者は2つ目の実験は終了だと伝えた。

つづいて、2つの実験に関するアンケートだと説明し、実験意図への気づきなどを調べる質問紙に回答した。参加者の回答が終わったことを確認し、質問紙を封筒に入れるよう求め、実験は以上で終了であると伝えた。

最後に実験のデブリーフィングをし、実験内容及び仮説を口外しないよう依頼を行い、

実験参加者の同意が得られたら、実験を終了した。

5-3-3. 結果

データの整理

手続きの不備などにより実験が一時中断された 5 名、および実験意図を明確に指摘した 1 名を分析から除外した。

また、測定フェーズにおける印象評定の回答時間について、単語ごとに回答時間の平均値と標準偏差を算出し、回答時間が $3SD$ 以上遅いデータを除外した（全体の 2.29%）。その際、20 項目中 17 項目において回答時間が $3SD$ 以上遅かった 1 名は、85% ものデータが除外されたので、分析から除外することとした。

以上のように、7 名を除外した全 47 名のデータを用いて分析を行なった（男性 35 名、女性 12 名、平均年齢 19.28 歳、 $SD=0.80$ ）。条件ごとの人数は、統制条件は 11 名、単純抑制条件は 10 名、有能思考条件は 13 名、温かさ思考条件は 13 名であった。

分析の結果

抑制フェーズ

抑制フェーズにおける操作の有効性を確認するため、研究 2 と同様の分析を行った。まず、記述された文がどの程度高齢者ステレオタイプ（能力、人柄）に当てはまるかを、2 名の評定者がそれぞれ 9 件法で評定した。評定者間の相関が高かったため（能力： $r=.90$ 、人柄： $r=.88$ ）、合算平均をそれぞれ記述無能ステレオタイプ度、記述温かさステレオタイプ度とした。条件ごとの平均値と標準偏差を表 5-3-1 に示した。

統制条件以外の 3 条件が高齢者の無能さを抑制していたかを検討するために、記述無能ステレオタイプ度に対して一元配置の分散分析を行ったところ、条件の効果が有意であった（ $F(3, 43)=25.69, p<.01$ ）。多重比較（Bonferroni の検定）の結果、単純抑制条件、有能思考条件、温かさ思考条件はいずれも統制条件より記述無能ステレオタイプ度が低かった（ $ps<.01$ ）。このことから、抑制の操作は有効であったと考えられる。また、単純抑制条件および有能思考条件において、反ステレオタイプの有能さを代替思考としていることを確認するために、記述無能ステレオタイプ度について、中点（5：どちらともいえない）からの差の検定を行った。その結果、統制条件は有意に中点よりも記述無能ステレオタイプ度が高く（ $t(10)=9.31, p<.001$ ）、無能さを記述していた。他方、単純抑制条件および有能思考

条件は有意に中点よりも記述無能ステレオタイプ度が低く（それぞれ $t(9)=2.61, p<.05$; $t(12)=2.94, p<.05$ ），有能さを記述していた。このことは，単純に抑制を行った場合には，抑制する特性と同次元上の反ステレオタイプの特性を代替思考として用いることを示している。また，有能思考条件では教示通り有能さに基づいて記述していたことから，代替思考の操作は有効であったと考えられる。なお，温かさ思考条件では中点との差は見られなかった（*ns.*）。

また，温かさ思考条件の代替思考の操作が有効かを検討するため，記述温かさステレオタイプ度に対して同様の分散分析を行った。その結果，条件の効果が有意であった（ $F(3, 43)=12.00, p<.01$ ）。多重比較（Bonferroni の検定）の結果，温かさ思考条件はいずれの条件よりも記述温かさステレオタイプ度が高かった（ $ps<.05$ ）。よって，温かさ思考条件の代替思考操作も有効であったと考えられる。

表 5-3-1. 抑制フェーズにおける記述ステレオタイプ度

	統制条件	単純抑制条件	有能思考条件	温かさ思考条件
記述無能ステレオタイプ度	7.68 (0.96)	3.75 (1.51)	3.92 (1.32)	4.69 (0.97)
記述温かさステレオタイプ度	4.82 (0.75)	5.65 (0.67)	5.58 (0.73)	6.81 (1.05)

注. 括弧内は標準偏差を示す。値が高いほど，抑制フェーズにおいて高齢者ステレオタイプに基づいて記述したことを意味する。

抑制フェーズに関する事後報告

第 3 フェーズが終了した後に，第 1 フェーズに関する質問への回答を事後的に求めたので，その質問に関する分析結果を報告する。

抑制フェーズでの抑制意図 操作チェックの一環として，抑制フェーズにおいて高齢者のネガティブなイメージを書かないように努力したかを 7 件法で尋ねた（1：全く努力しなかった～7：非常に努力した）。回答に対して一元配置の分散分析を行った結果，条件の効果が有意で（ $F(3, 43)=26.70, p<.001$ ），単純抑制条件（ $M=5.90, SD=0.88$ ），有能思考条件（ $M=5.77, SD=1.24$ ），温かさ思考条件（ $M=5.38, SD=1.50$ ）はいずれも統制条件（ $M=1.82, SD=1.25$ ）よりも高齢者の能力次元のステレオタイプを書かないように努力していた（ $ps<.001$ ）。これは

前述した実際の記述無能ステレオタイプ度の結果と整合しており、この結果からも抑制操作は成功していたと考えられる。

抑制フェーズでの思考 抑制フェーズにおいて思い浮かんだ思考に違いがあるのかを検討するために、高齢者の能力に関するネガティブなイメージ(無能ステレオタイプ)がどの程度思い浮かんだかを7件法で回答を求めた(1:全く考えなかった～7:非常によく考えた)。この回答について一元配置の分散分析を行った結果、条件の効果が有意で($F(3, 43)=3.56$, $p<.05$)、多重比較(Bonferroni の検定)の結果、温かさ思考条件 ($M=5.00$, $SD=1.23$) は統制条件 ($M=6.64$, $SD=0.51$) に比べて高齢者の無能さが思い浮かばなかったと報告した($p<.05$)。単純抑制条件 ($M=5.30$, $SD=1.06$) および有能思考条件 ($M=5.77$, $SD=1.83$) は統制条件とそうした差はなかった (ns.)。

測定フェーズ

リバウンド効果の生起 第3フェーズの対人認知課題においてリバウンド効果の測定を行った。評定は9件法で、逆転項目を逆転し、それ以外については評定値をそのまま用いた。「ゆっくりした」「忘れっぽい」「のろま」「すばやい(逆転項目)」「あわただしい」「覚えの悪い(逆転項目)」「おぼつかない」の能力ステレオタイプ7語への評定を合算平均し、無能評定得点とした(クロンバックの $\alpha=.61$)。無能評定得点が高いほど、文章の人物を無能だと評定したことになり、これは無能ステレオタイプのアクセシビリティが上昇したことを意味する。

無能評定得点に対して、統制条件・単純抑制条件・有能思考条件・温かさ思考条件を独立変数とした一要因の分散分析を行った結果、条件の効果が有意傾向であった($F(3,43)=2.23$, $p<.10$)。結果は図5-3-2に示した。ただし、多重比較(Bonferroni の検定)の結果、いずれの条件間にも有意差は見られなかった($ps>.23$)。そこで、仮説に沿ったパターンが見られているかを確認するために、計画比較を行った。仮説では、単純抑制条件および有能思考条件は統制条件および温かさ思考条件に比べて、ターゲット人物を無能に評定するだろうと予測した。そこで、統制条件および温かさ思考条件に-1、リバウンド効果が生起すると予測される単純抑制条件および有能思考条件に+1の重みづけをした計画比較を行った(cf. 森・吉田 1990; Winer, 1971)。その結果、統制条件と温かさ思考条件は単純抑制条件と有能思考条件よりも無能評定得点が有意に低かった($t(43)=2.54$, $p<.05$)。この結果により、

仮説が支持された。

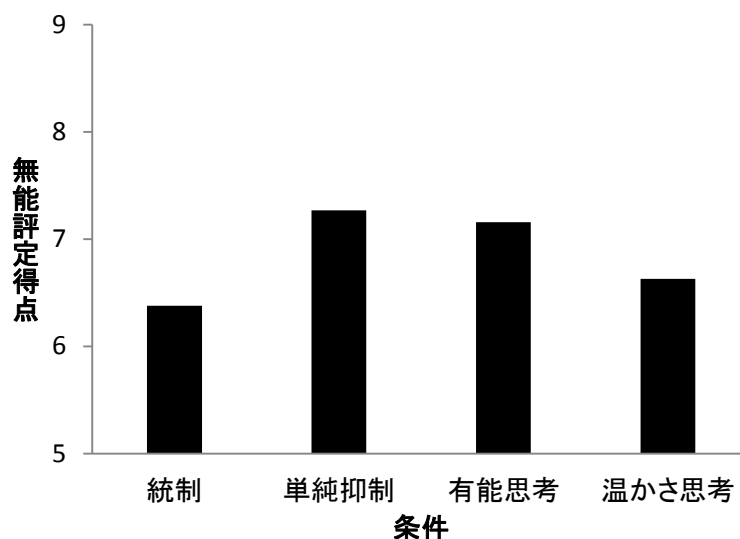


図 5-3-2. 測定フェーズにおける無能評定得点

注. 値が高いほど文章の人物を無能と評定したことを意味する。

その他の項目の評定 同様に、「優しい」「親しみやすい」「冷たい(逆転項目)」「穏やか」「思いやりのない(逆転項目)」の人柄ステレオタイプ 5 語への評定を合算平均し、温かさ評定得点とした（クロンバックの $\alpha=.83$ ）。この得点が高いほど文章の人物を温かいと評定したことを意味する。一要因の分散分析を温かさ評定得点について行った結果、条件の効果は見られなかった（ $F(3,43)=.87, ns.$ ）。条件ごとの平均値は表 5-3-3 に示した。

表 5-3-3：対人認知課題における評定得点

	統制条件	単純抑制条件	有能思考条件	温かさ思考条件
無能評定得点	6.38 (1.21)	7.27 (0.99)	7.16 (0.78)	6.63 (0.86)
温かさ評定得点	6.12 (1.42)	6.90 (1.37)	6.81 (1.25)	6.85 (1.22)

注. 値が高いほど文章の人物をステレオタイプに沿って評定したことを意味する。

なお、括弧内は標準偏差である。

その他の分析結果

本研究の仮説とは直接関連しない質問項目に対する分析では、いずれも条件間で有意な差が認められなかったため、本論文での報告は割愛する。

5-3-4. 考察

本研究では、高齢者ステレオタイプの能力次元のステレオタイプ特性を抑制する時に、実際に代替思考を操作することで、リバウンド効果を低減させる有効な代替思考方略を検討した。

抑制時における記述と思考

分析の結果、抑制教示を受けた 3 つの条件は、統制条件よりも高齢者の無能さを記述していなかった。また、これら 3 つの抑制をした条件では、統制条件よりも抑制の努力をしたと報告された。これらの結果から、抑制操作は有効であったといえる。

研究 2 と同様に、単純抑制条件は有能さに基づいて記述しており、抑制をする時には反ステレオタイプを代替思考として用いるということが、研究 3 でも示された (cf. Galinsky & Moskowitz, 2007)。また、代替思考を操作した条件については、統制条件と比べて、有能思考条件は有能さに基づいて、温かさ思考条件では温かさに基づいて記述しており、代替思考の操作は有効であったといえるだろう。

さらに注目すべきは、抑制フェーズにおいて無能ステレオタイプが思い浮かんだと感じた主観的な程度の報告についてである。統制条件に比べて温かさ思考条件では、抑制時に無能さに関する思考が思い浮かびにくかった。他方で、温かさ条件以外の 3 条件の間に有意差は見られなかった。このことから、温かさについて思考することで、抑制自体が非常に容易に、うまくいっていると解釈することができるだろう。

リバウンド効果の生起と本実験の示唆

これまでのステレオタイプ抑制研究では、抑制をする時に反ステレオタイプの特性を代替思考として用いても、リバウンド効果の低減につながらないと示されており (Oe & Oka, 2003)、本論文の研究 2 でも同様の結果がえられた。これは、反ステレオタイプは代替思考としては生成しにくかったためだと考えられる。一方、生成しやすい適切な代替思考があれば、抑制が容易になり、監視過程が嚴重に働かないためにリバウンド効果が低減される

可能性がある。そこで、本実験では、生成しやすい代替思考として、人柄次元のステレオタイプに注目した。実際に抑制時の代替思考を操作し、代替思考方略によってリバウンド効果が低減する可能性を検討した。

実験の結果、仮説どおり、単純抑制条件および有能思考条件では、統制条件よりも、ターゲット人物を無能だと評定していた。この結果は、単純に「無能」というステレオタイプ特性を抑制した場合、および代替思考として能力次元の反ステレオタイプ特性を用いた場合には、ステレオタイプのアクセシビリティが高まるリバウンド効果が生起したことを示している。他方、温かさ思考条件は、単純抑制条件および有能思考条件に比べて、ターゲット人物を無能だと評定しなかった。よって、人柄次元の温かさを代替思考とした場合には、リバウンド効果が低減したことが示された。すなわち、本実験で示したように、抑制するステレオタイプ特性とは異なる次元のポジティブなステレオタイプ特性を代替思考として利用すれば、抑制後のリバウンド効果が生起しないことが示唆され、代替思考方略の有効性を示したといえるだろう。

ただし、本実験の結果は、温かさ思考条件と、無能評定得点が低い統制条件をまとめた計画比較を行ったために得られた結果なのではないか、という指摘があるかもしれない。よって、本実験の結果の解釈には慎重を期する必要がある、抑制する特性とは別の次元のポジティブなステレオタイプの特性を代替思考とする方略の有効性に関しては、さらに検討する必要があるだろう。そこで、研究 4 では、別次元思考方略の有効性をさらに検討することとした。

5-4. 研究 4：別次元思考方略の有効性と

代替思考の生成しやすさの検討¹⁰

5-4-1. 問題

研究 3 では、反ステレオタイプの特性を代替思考として用いるとリバウンド効果が生じ、他方、抑制する特性とは別の人柄次元の温かさを代替思考とするとリバウンド効果が低減することが示唆された。しかし、研究 3 で用いた計画比較による分析から結論できることには限界がある。また無能評定得点の信頼性係数が高くなかった。したがって、抑制するのとは別次元の「温かさ」を代替思考として用いることがリバウンド効果を低減するという結果を再検討することが望ましいだろう。よって、研究 4 の目的は、抑制する特性とは別の次元のポジティブな特性を代替思考として用いる方略の頑健さを示すことである。そこで、研究 2, 3 で繰り返しリバウンド効果が確認されている単純抑制条件と、別の次元のポジティブな特性を代替思考とする温かさ思考条件とを比較する研究 4 を実施した。

また、研究 4 では副次的に、代替思考の生成しやすさについても検討した。本研究では、これまでのステレオタイプ抑制において代替思考方略が有効でなかったのは、代替思考として用いる反ステレオタイプを抑制時に生成するのが困難で、代替思考の役割を果たしていないためだと考えた。反対に、代替思考を生成するのが容易であれば、リバウンド効果を低減させられると考え、抑制する特性とは別の次元のポジティブな特性を代替思考とする方略を検討してきた。そこで、研究 4 では、別の次元のポジティブな特性である温かさに関する思考は、反ステレオタイプの特性である有能さに関する思考に比べて、代替思考として生成するのが容易であるということの傍証を得ることをもう一つの目的とした。

5-4-2. 方法

方法の概要

本実験は、研究 2, 3 と同様に 3 つのフェーズで構成された。

第 1 の「抑制フェーズ」では、「実験 1」として高齢男性の仕事場面を書く記述課題によ

¹⁰ 本研究は、日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループダイナミクス学会第 56 回大会合同大会における口頭発表の一部(実験 2)を加筆修正したものである(田戸岡好香・村田光二(2009) ネガティブなステレオタイプの抑制におけるリバウンド効果の低減—ステレオタイプの両面価値性に注目した代替思考方略—)。

って抑制操作を行った。その際、単純抑制条件では高齢者のネガティブなイメージに基づいて記述しないよう教示した。温かさ思考条件では抑制教示にくわえ、高齢者の人柄の良さに関するイメージに基づいて書くよう教示した。第 1 フェーズが終了すると実験者が変わり、「実験 2」として第 2・第 3 フェーズに移った。第 2 の「フィルターフェーズ」では 100 マス計算を行い、第 3 の「測定フェーズ」では、ある人物の文章をパソコン上に呈示し、その人物の印象を評定させる対人認知課題を行った。この評定がリバウンド効果の測度であった。

3 つのフェーズが終了した後、それぞれのフェーズの関連に気づいたか否かをチェックし、実験の目的および操作などについてデブリーフィングを行い、実験を終了した。

実験計画

実験は単純抑制条件および温かさ思考条件の一要因二水準の被験者間計画であった。

第 1 の抑制フェーズでは高齢男性の写真を呈示し、その人物の仕事場面について記述させ、その際に抑制操作および代替思考の操作を行った。

参加者を実験の条件に無作為に割り当て、一度の実験につき 1～2 名の小集団で実施した。

仮説

研究 4 では以下の 2 つの仮説を検討した。

仮説 1. 温かさ思考条件はリバウンド効果が低減するだろう。すなわち、測定フェーズにおいて、単純抑制条件は温かさ思考条件に比べて無能さに関して曖昧な人物をより無能に評定するだろう。

仮説 2. 代替思考の生成に関して、抑制するのとは別次元の「温かさ」に関する思考は、反ステレオタイプである「有能」に関する思考よりも、抑制フェーズにおいて生成しやすいだろう。

実験参加者

実験参加者は東京都内の大学において心理学関連の授業を受けている学生 23 名であった（男性 13 名、女性 10 名、平均年齢 19.30 歳）。参加者は実験に参加することで授業の出席点を与えられた。23 名の実験参加者を、単純抑制条件もしくは温かさ思考条件のいずれかに無作為に割り当てた結果、単純抑制条件 12 名、温かさ思考条件 11 名であった。

実験材料・刺激

研究 4 は研究 2・3 とほぼ同様の手続きで実施したため、変更点についてのみ言及する。

測定フェーズの評定項目

研究 3 において結果が仮説を支持するのに不十分だった理由として、対人認知課題における無能評定得点の信頼性が低かったことが考えられる。そこで、評定語として、「のんびり」「ぼんやり」の 2 語を加えた。よって、無能ステレオタイプ語は「ゆっくりした」「遅い」「忘れっぽい」「覚えの悪い」「おぼつかない」「のろま」「あわただしい」「のんびり」「ぼんやり」の 9 語、温かさステレオタイプ語 5 語、フィラー語 8 語の計 22 語について印象評定を求めた。さらに、逆転項目を設け、ステレオタイプ語とフィラー語をランダムに配置した。

手続き

研究 4 は研究 2・3 とほぼ同様の手続きで実施した。

第 1 の抑制フェーズを実験 1 として第一実験者が実施し、第 2・第 3 フェーズを実験 2 として 2 人目の実験者が実施した。実験者効果を排除するために、第二実験者にはいずれの条件を実施するのかがわからないようにした。

第一実験者はカバーストーリーとして「日常の記述に関する実験」と「人の瞬間的な判断に関する実験」の 2 つの無関連な短い実験に参加してもらったと伝えた。

第 1 の抑制フェーズでは、「視覚的情報から日常の出来事の詳細を記述する過程を調査」しているというカバーストーリーのもと、高齢男性の仕事場面を記述するよう求めた。この実験では高齢者が働く場面について想像してもらったと伝えた。仕事場面の説明をした後、『高齢の男性は—』で始まる文章を 5 分間でできるだけ多く作るよう求めた。その際、抑制操作として、『高齢者は新しいことがうまくできない、動作が遅い』などといったイメージがあります。現在、高齢者の社会参加が多方面に広がっていますので、そういった高齢者のイメージに基づいて書かないように注意してください。そうすることはこの課題でとても重要なことなので、最大限の努力を払ってください。」と教示をした。単純抑制条件は以上の教示のみ与えられた。温かさ思考条件では抑制教示に加えて、「もし、そのような考えが思い浮かんだり、書きたくなった場合は、代わりに『人あたりが良い』というような、高齢者の人柄の良さに関するイメージに基づいて書くようにしてください。」と教示し、

代替思考の操作を行った。課題を 5 分間行った後、第一実験者は、以上で 1 つ目の実験は終了であると伝え、それぞれの参加者の封筒を回収し、退室した。

つづいて、第二実験者が入室し、2 つ目の実験では、「人が瞬間的に物事を判断する過程」について調べており、これから瞬間的な判断に関する種類の異なる 2 つの課題を行うと伝え、1 つ目の課題としてフィラーフェーズを行った。この課題では数字に対する瞬間的な判断を調べていると伝え、2 分間で 100 マス計算を行った。

つづいて、測定フェーズを開始した。2 つ目の課題では「人が印象を瞬間的に判断する過程について調べる」というカバーストーリーを伝え、対人認知課題の説明をした。このフェーズではパソコンに呈示される「佐々木さん」という人物の文章を読み、その物語の情報を基に佐々木さんがどのような人物だと思うかを考え、「佐々木さん」の印象を 9 件法で回答するよう求めた（1：まったくあてはまらない～9：非常によくあてはまる）。評定に用いた単語は、高齢者の無能ステレオタイプ語として「ゆっくりした」「忘れっぽい」「のろま」「すばやい(逆)」「あわただしい」「覚えの良い(逆)」「おぼつかない」「のんびり」「ぼんやり」の 9 語および、温かさステレオタイプ語 5 語、フィラー語 8 語の合計 20 語であった。評定が終了したら、第二実験者は 2 つ目の実験は終了だと伝えた。

つづいて、2 つの実験に関するアンケートだと説明し、実験意図への気づきなどを調べる質問紙に回答した。その際、抑制時の代替思考の生成しやすさについて尋ねた。抑制フェーズの記述課題において、有能さと温かさを思いつくのがどの程度難しかったかをそれぞれ 7 件法で回答を求めた（1：全く難しくなかった～7：非常に難しかった）。参加者の回答が終わったことを確認し、質問紙を封筒に入れるよう求め、実験は以上で終了であると伝えた。

最後に実験のデブリーフィングをし、実験内容及び仮説を口外しないよう依頼を行い、実験参加者の同意が得られたら、実験を終了した。

5-4-3. 結果

データの整理

全 23 名のデータを用いて、測定フェーズの対人認知課題の印象評定を従属変数として、リバウンド効果が生じたかを検討した。実験 1, 2 と同様に、印象評定において、回答時間が 3SD 以上遅いデータを単語ごとに除外した（全体の 0.97%）。

分析の結果

測定フェーズ

リバウンド効果の生起 測定フェーズの対人認知課題においてリバウンド効果の測定を行った。評価は 9 件法で、逆転項目を逆転し、それ以外については評価値をそのまま用いた。「ゆっくりした」「忘れっぽい」「のろま」「すばやい (逆転項目)」「あわただしい」「覚えの悪い (逆転項目)」「おぼつかない」「のんびり」「ぼんやり」の能力ステレオタイプ 9 語への評価を合算平均し、無能評価得点とした (クロンバックの $\alpha=.70$)。無能評価得点が高いほど、文章の人物を無能だと評価したことになり、これは無能ステレオタイプのアクセシビリティが上昇したことを意味する。

無能評価得点に対して、両条件間で差の検定をしたところ、温かさ思考条件 ($M=6.61$, $SD=0.90$) は、単純抑制条件 ($M=7.35$, $SD=0.79$) よりも、有意に無能評価得点が低かった ($t(21)=2.11$, $p<.05$)。つまり、温かさ思考条件の参加者は、単純抑制条件の参加者ほどにはターゲット人物を無能だと評価していなかった。これは仮説 1 を支持する結果であった。結果は図 5-4-1 に記した。

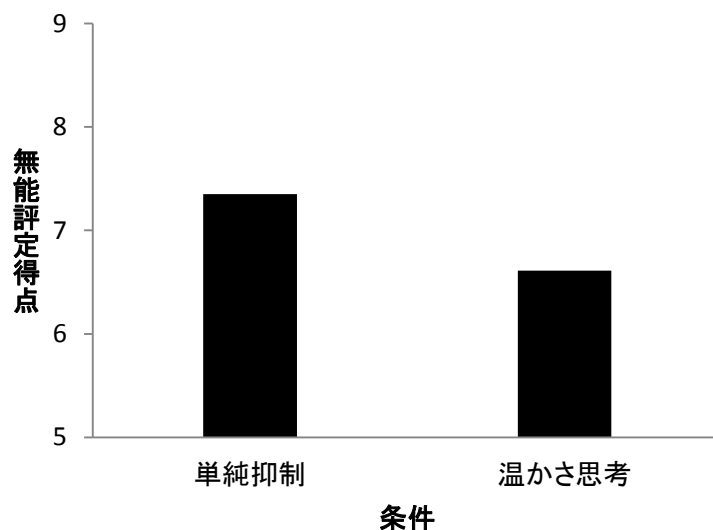


図 5-4-1. 測定フェーズにおける無能評価得点

注. 値が高いほど文章の人物を無能と評価したことを意味する。

その他の項目の評価 同様に、「優しい」「親しみやすい」「冷たい (逆転項目)」「穏やか」「思いやりのない (逆転項目)」の人柄ステレオタイプ 5 語への評価を合算平均し、温かさ評

定得点とした ($\alpha=.66$)。この得点が高いほど文章の人物を温かいと評定したことを意味する。温かさ評定得点について t 検定を行った結果、単純抑制条件 ($M=6.94, SD=0.96$) と温かさ思考条件 ($M=7.14, SD=0.83$) には有意な差が見られなかった ($t(21)=.51, ns.$)。

代替思考の生成に関する分析結果

実験の最後に、記述課題での抑制時に、有能さと温かさがそれぞれどの程度思いつくのが難しかったかをそれぞれ 7 件法で尋ねた。それぞれの評定値に対して、条件（単純抑制条件／温かさ思考条件）×代替思考の内容（有能さ／温かさ）の混合要因の分散分析を行った（前者が被験者間要因、後者が被験者内要因であった）。その結果、代替思考の内容の主効果のみ有意であった ($F(1,21)=7.17, p<.05$)。温かさ ($M=3.74, SD=1.71$) は有能さ ($M=5.00, SD=1.65$) よりも、思いつくのが難しくなかったと評定された。これは仮説 2 を支持する結果であった。結果は図 5-4-2 に示した。

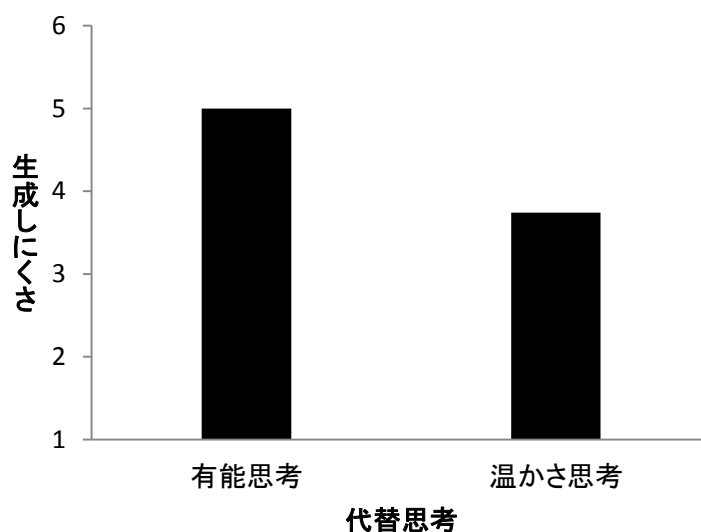


図 5-4-2. 抑制時の代替思考の生成しにくさ

注. 値が高いほど代替思考が生成しにくかったことを意味する。

その他の分析結果

本研究の仮説とは直接関連しない質問項目に対する分析では、いずれも条件間で有意な差が認められなかったため、本論文での報告は割愛する。

5-4-4. 考察

研究 4 では、研究 3 に引き続き、抑制する特性とは別の次元のポジティブな特性を代替思考とする方略によってリバウンド効果が低減する可能性を検討した。研究 3 では、無能評定得点の信頼性係数が高くなかったという問題があったため、その点を修正した実験を行った。その結果、研究 3 と同様に、温かさ思考条件では当該ステレオタイプのアクセシビリティが上昇しなかった。これによって、人柄次元のポジティブな特性である温かさを代替思考に用いると、抑制後のリバウンド効果が低減されることが示された。

また、その際、反ステレオタイプの特性の有能さよりも、ポジティブなステレオタイプの特性の温かさの方が代替思考としての生成しにくさを感じていなかったことが示された。このことは、リバウンド効果を低減させるには、生成が容易なものを用いると効果的であるということを示唆している。

5-5. 第 5 章の示唆と限界

5-5-1. 研究 1 から研究 4 のまとめ

本章では、「無能だが温かい」という慈悲的ステレオタイプを題材として、ステレオタイプ内容モデルに基づいて、抑制後のリバウンド効果を低減させる代替思考の内容を検討した。具体的には、研究 1 では家庭的女性に対するステレオタイプを、研究 2 から研究 4 では高齢者に対するステレオタイプを扱った。能力次元のステレオタイプの特性 (i.e., 無能) を抑制する時、単純に抑制した場合、および同次元上の反対の特性 (i.e., 有能) を代替思考として用いた場合には、抑制後にリバウンド効果が生起することを示した (研究 1, 2, 3)。しかし、ステレオタイプ内容モデルで論じられる、他方の次元の人柄に関するステレオタイプの特性 (i.e., 温かさ) を代替思考とした時には、リバウンド効果が低減する可能性も示した (研究 1, 3, 4)。また、リバウンド効果を低減させた人柄次元に関する思考 (i.e., 温かさ) は、反ステレオタイプに関する思考 (i.e., 有能) よりも、生成が容易であることを示した (研究 4)。このことから、抑制時に生成しやすい代替思考を用いたため、別次元思考方略はリバウンド効果を低減させることができたということが明らかになった。

5-5-2. 本章の示唆と限界

これまでのステレオタイプ抑制研究では、代替思考方略の限界が指摘されていた (e.g., Galinsky & Moskowitz, 2007)。しかし本章で一貫して示したように、抑制するのとは別の次元のポジティブなステレオタイプ特性のように、生成が容易な代替思考を用いれば、リバウンド効果を低減することができるということが明らかになった。さらに、家庭的女性および高齢者のステレオタイプを題材としたことで、本方略の有効性と一般化可能性を示した。

このように本研究には一定の意義があるものの、問題点が残っている。本研究で提案した、抑制する特性とは別の次元のポジティブなステレオタイプの特性を用いるという代替思考方略のさらなる一般化に関する問題がある。本研究では、能力次元の評価はネガティブだが、人柄次元の評価はポジティブな家庭的女性や高齢者に対する慈悲的ステレオタイプを題材とした。しかし、両面価値的ステレオタイプには、能力次元の評価はポジティブだが、人柄次元の評価はネガティブな、「有能だが冷たい」という嫉妬的ステレオタイプも存在する (Fiske *et al.*, 2002)。本研究の代替思考方略に当てはめれば、「冷たい」という人柄次元のネガティブなステレオタイプの特性を抑制する際に、他方の「有能」という能力次元のポジティブな特性を代替思考として用いるという方略が考えられる。ただし、その有効性については議論が必要であろう。本研究で代替思考として用いた人柄（温かさ）次元は、対人認知研究において古くから印象形成の中心特性とされ、特に影響力の強いものであると考えられてきた (Asch, 1946)。さらに、集団間関係においても温かさの認知が重要だということが示されている。例えば、Fiske *et al.* (2007) によれば、適応的に生きるためには、他者の競争意図の有無を知覚することが重要であるため、競争意図の知覚から生じる温かさの認知が能力の認知に先立って行われるということが示されている。これらの知見から、人柄次元への反応は能力次元に優先される可能性がある。そのように仮定すると、「有能だが冷たい」というステレオタイプにおいては、抑制するべき冷たいという人柄次元への反応が優先されるため、能力次元のポジティブな特性である有能さが適切な代替思考として働かない可能性も考えられる。よって、本章で提案してきた別次元思考方略の有効性について、「有能だが冷たい」という嫉妬的ステレオタイプにおいてもリバウンド効果が低減するかどうかを、検討していく必要があるだろう。

§ 第6章

嫉妬的ステレオタイプの抑制と代替思考方略の検討

6-1. 嫉妬的ステレオタイプの抑制

第5章の研究から、慈悲的ステレオタイプにおいて、能力次元のネガティブな特性を抑制するとリバウンド効果が生起すること、および、リバウンド効果の低減には別次元思考方略が有効であることが示された。第6章では両面価値的ステレオタイプのもう一領域である嫉妬的ステレオタイプの抑制を検討する。問題部分で指摘したように、思考抑制とは異なり、ステレオタイプ抑制は対人判断の場面で行われることを前提とすると、本研究で扱う嫉妬的ステレオタイプの抑制においても対人判断場面を想定する必要があるだろう。これまで人柄次元の特性の抑制は検討されてこなかったが、対人判断場面を前提とすると、嫉妬的ステレオタイプ対象に特有の問題があると考えられる。そこで、第6章の前半では、対人判断文脈における抑制という点を考慮した上で、嫉妬的ステレオタイプの抑制を検討する。

6-1-1. 嫉妬的ステレオタイプに特有の問題

ステレオタイプ内容モデルによれば、ステレオタイプは両面価値的なものが多くみられることが明らかになっている (Fiske *et al.*, 2002)。第5章では、高齢者などに向けられる慈悲的ステレオタイプの抑制を検討し、「無能」というネガティブな特性を抑制すると、リバウンド効果が生起することが示された。第5章で検討した能力に関する特性は、社会構造における地位の高低と対応しており、高齢者のような低地位な集団成員に対しては「無能」というステレオタイプが共有されている。そのため、代替思考として反対の「有能」と考えることは難しく、抑制後のリバウンド効果を避けることは難しいと考えられる。

他方、嫉妬的ステレオタイプは、高地位で競争的な集団にむけられる「有能だが冷たい」という両面価値的なものである。人柄次元の内容を規定しているのは社会構造における競争関係の有無であり、キャリア女性やエリート男性は社会的に利益を搾取しているとみなされるために「冷たい」というステレオタイプを抱かれている。

このように競争的な高地位者は「冷たい」というステレオタイプを一般的に持たれるが、

私たちはいつも高地位者をネガティブに捉えるわけではない。例えば、不景気など危機的な状態に陥った場合には高地位集団に敵意を向けるが、他方で、社会が安定している時には、こうした対象に敵意を向けずに、協力したり、温かいと感知することが多いということが指摘されている (Cuddy *et al.*, 2008)。このように、能力次元の特性に比べて、嫉妬的ステレオタイプの人柄次元の特性が顕現的になるか否かは、自分にとって外集団成員がどういった存在なのかによって変化しやすいと考えられる。同様に、個人レベルにおいても、Tesser (1988)の自己評価維持モデルによれば、自己に関連した領域で優れている他者の存在は自己評価に影響を及ぼすためネガティブな感情を抱く一方で、自己に関連していない領域においては、その他者の有能さを賞賛しネガティブな気持ちを抱かないと考えられている。すなわち、高地位者に対しては、社会的構造における競争性に基づいて、知識として「冷たい」という表象があるものの、自己との関係によってその内容が顕現的になるか否かが変わる可能性がある。進化的な観点からも、我々が生き残るためには他者の意図を読み取ることが重要であったため、人柄に関する判断は優先されやすいことが明らかになっており (Fiske *et al.*, 2007)、自己との関係性が特に重要になると考えられる。

以上のように、人柄次元のステレオタイプに関しては、自己と抑制対象との関係性について考慮する必要があると考えられるが、どういった関係性が抑制場面では影響を及ぼすのだろうか。対人認知場面において抑制を行うという点が代替思考の生成を困難にし、リバウンド効果を生起させるという第5章の知見を考慮すると、嫉妬的ステレオタイプの抑制においても対人判断場面を想定する必要がある。嫉妬的ステレオタイプの抑制に関わる対人判断場面として、有能な外集団成員が認知者の目の前に存在するという状況があるだろう。学歴偏重主義による受験戦争の激化や、社会における実力主義の普及などによって、私たちがこうした優れた他者を意識する機会は頻繁に生じうると考えられ、嫉妬的ステレオタイプを他者にあてはめることによる弊害が生じる可能性がある。例えば、昨今、多くの女性が社会進出を果たしており、男性は、本来自分達が優位であるはずの仕事という場において、キャリア女性に対して競争意識を感じることもあるだろう。ステレオタイプ内容モデルでは、人柄次元の内容は外集団との社会構造における競争関係の有無が規定すると考えられているが、能力次元を規定する地位関係とは異なり、自己と抑制対象との関係性によって競争意識が異なってくる可能性があるだろう。

もし対象に対して競争意識がある場合には、嫉妬的ステレオタイプ対象の「冷たい」というステレオタイプの特性が顕現化するため、反ステレオタイプの「温かい」は代替思考

として考えにくくなるだろう。すると、抑制対象から注意をそらすことができないため、抑制対象が意識内に侵入し監視過程が厳重になり、リバウンド効果が生起するだろう。他方で、対象に対して競争意識がない場合には、「高地位集団の成員は冷たい」という表象は知識としてあるものの、ネガティブなステレオタイプが顕現的にならない可能性がある。その場合、反ステレオタイプの「温かい」を代替思考として考えることが困難でないため、抑制対象から注意をそらすことができる。その結果、監視過程が厳重にならず、リバウンド効果が低減する可能性があるだろう。以上の流れを図 6-1 に示した。

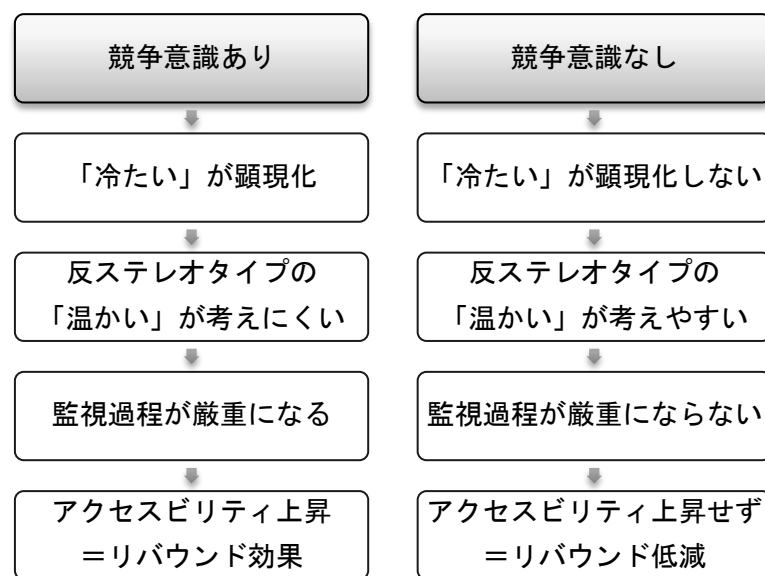


図 6-1. 嫉妬的ステレオタイプ対象に対する競争意識が抑制過程に及ぼす影響

これまでの抑制研究では、抑制後のリバウンド効果の生起は頑健なものだと考えられてきた。しかし、人柄次元のステレオタイプ抑制の場合には、個人的な競争意識がリバウンド効果の生起をわけると考えられる。嫉妬的ステレオタイプのような人柄次元のネガティブ特性に関する抑制はこれまで検討されてこなかったため、第 6 章では、まずは 2 つの実験を通して、競争意識の知覚が嫉妬的ステレオタイプの抑制に及ぼす影響を示す（研究 5・6）¹¹。すなわち、嫉妬的ステレオタイプの抑制では外集団成員に対する競争意識がリバウンド効果の生起を調整すると示すことを一つの目的とする。

¹¹ 研究 5 および研究 6 は以下の論文において発表した内容を博士論文の主張に従って構成しなおしたものである。田戸岡好香・石井国雄・村田光二（審査中）競争意識の知覚が嫉妬的ステレオタイプの抑制に及ぼす影響。

なお、本研究では、これまでのステレオタイプ抑制のパラダイムを踏襲しながら、競争意識の知覚が抑制後のリバウンド効果に及ぼす影響を検討することとした。すなわち、抑制対象の写真を呈示したうえで抑制教示を行うこととした。そのため、研究 5 および研究 6 では、ライバル関係のような直接的な競争関係を操作するのではなく、事前の課題のフィードバック（研究 5）や抑制対象と参加者の関連性（研究 6）によって間接的に競争意識の知覚を操作・測定することとした。具体的には、研究 5 では、キャリア女性に対する嫉妬的ステレオタイプを題材として、男性参加者にキャリア領域に関するネガティブなフィードバックを与えるか否かを操作することで、外集団（i.e., キャリア女性）への競争意識の知覚を操作した。研究 6 では、金融ディーラーの男性を題材として、参加者である大学生が経済に関わる分野を専攻しているか否かによって、競争意識の知覚を変えた。このように、直接的に何かを競い合うような競争関係になくとも、高地位集団の成員に対して競争意識を知覚しやすいような場面を設定することで、競争意識が抑制後のリバウンド効果に及ぼす影響を検討することとした。

6-1-2. 嫉妬的ステレオタイプにおける代替思考方略

以上のように、嫉妬的ステレオタイプの抑制における弊害が生起する状況が特定のだとすれば、高地位な外集団成員との競争状況を前提として、リバウンド効果の低減可能性を検討する必要があるだろう。そこで、別次元思考方略は、外集団に競争意識を知覚している状況であっても有効なのかどうかを探ることを第 6 章の 2 つ目の目的とし、第 6 章の後半（研究 7）で実証していく。

第 5 章の実験結果から、抑制する特性とは別の次元のステレオタイプの特性は代替思考として考えやすいため、リバウンド効果を低減させると示されてきた。嫉妬的ステレオタイプにおける別次元思考方略は、脅威をうける対象を「有能だ」と考えることである。自分にとって重要な領域での他者の優れた遂行が自己価値に脅威を及ぼすという指摘があるように（Tesser, 1988）、競争的な状況において外集団成員の有能さを強調することは、自分が搾取される可能性が強まるため、自己価値に対する脅威を与える可能性があるだろう。

では、このような脅威状況は、ステレオタイプ抑制過程にどのような影響を及ぼすのだろうか。近年の研究では、人は自己価値に脅威を感じる時には、ワーキングメモリの機能が低下するという知見が示されてきている（Eysenck & Calvo, 1992）。ワーキングメモリとは、情報を一時的に保ちながら処理するための構造である。例えば、数学の問題を解く

ときには、数字を一時的に記憶しながら、計算などの処理をする必要があり、ワーキングメモリが必要だと考えられている。実際、男女の数学の成績の性差を調べていると伝えられた女性参加者は、「女性は数学ができない」というステレオタイプを確証してしまうのではないかという脅威を感じた結果、ワーキングメモリの容量が少なくなっており、数学の問題を解く処理ができず、成績が低下していた (Schmader & Johns, 2003)。同様に、数学不安が高い参加者は、数学の能力が測定されると伝えられると、ワーキングメモリが減少していた (Ashcraft & Kirk, 2001)。特に、こうした自己価値への脅威を感じる場面では、不安に関連した思考が生成されるため、言語的ワーキングメモリの機能が低下するという (Beilock, Rydell, & McConnell., 2007)。このことを前提とすると、有能な外集団に対するネガティブな「冷たい」というステレオタイプを抑制する際、当該集団からの脅威を知覚した場合には、不安関連思考によって言語的ワーキングメモリが低下することになる。思考抑制では、望まない思考を排除しながら、代替思考を生成するという二つの処理を同時に行う必要があるため、ワーキングメモリが必要だと考えられている。実際、ワーキングメモリが少ない参加者はリバウンド効果が生じやすいことがいくつかの研究で示されている (Brewin & Smart, 2005; Geraets, Merckelbach, Jelicic, & Habets, 2007)。このように、抑制時に言語的ワーキングメモリが不安関連思考で占められると、ステレオタイプであっても代替思考を考える余裕がなくなり、生成が困難になる可能性があるだろう。具体的には、「冷たい」というステレオタイプを抑制する際に、別次元の「有能」というポジティブなステレオタイプの特性を代替思考として用いようとするが、抑制対象に脅威を感じている場合には、言語的ワーキングメモリが低下するために、ステレオタイプの特性であっても考えにくくなるだろう。そのため、抑制対象から注意をそらすことができず、抑制対象である「冷たい」という思考が侵入し、嚴重になった監視過程によって「冷たい」というステレオタイプのアクセシビリティが過度に上昇するだろう。こうした過程によって、有能な外集団成員に脅威を感じる場合には、別次元思考方略を用いても抑制後のリバウンド効果が生起すると考えられる。

ただし、近年の研究では、自尊感情が脅威に対する緩衝材になることが知られている (Pyszczynski, Greenberg, Solomon, Arndt, & Schimel, 2004)。すなわち、自尊感情が高い場合には脅威に耐性があるため、抑制対象を有能であると認めることができ、ワーキングメモリが低下しないだろう。この場合、有能思考はステレオタイプなので生成しやすく、抑制対象から注意をそらすことができるため、結果としてリバウンド効果が低減すると考えら

れる。すなわち、特に高自尊感情者において、別次元思考方略は有効な可能性があるだろう。このように、別次元思考方略は脅威を生じさせるため、その有効性は限定されたものであるだろう。こうした方略の有効性と制限条件を示すことが第 6 章の二つ目の目的である。こうした代替思考の有効性について、図 6-2 として図式化した。

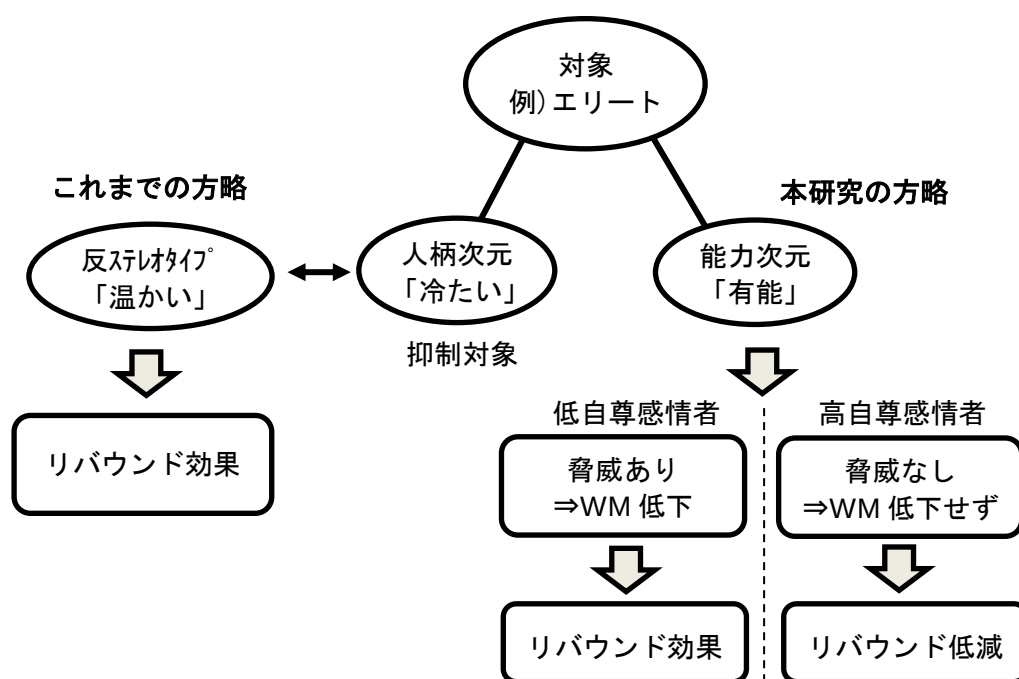


図 6-2. 嫉妬的ステレオタイプにおける代替思考方略 (第 6 章)

※WM はワーキングメモリの略である。

以上をまとめると、嫉妬的ステレオタイプの抑制においては、ターゲットに対する競争意識によってリバウンド効果が生じやすくなると考えられるため、第 6 章では、はじめに嫉妬的ステレオタイプの抑制が困難になる状況を明らかにする（研究 5 および研究 6）。その上で、別次元思考方略の有効性を検討するが、有能思考は脅威を生じさせる場合があるため、方略の一定の有効性と限界点を示す（研究 7）ことを目的とする。このことから、高地位集団を否定的に考えないためには、抑制対象が自己にとってどのようなものと捉えられるかといった点を考慮することが重要であると示唆されるだろう。昨今は受験競争や成果・業績を求められるような競争的な状況が多く、外集団成員に対する競争意識を感じる状況は頻繁に生じうる。そのため、このことを前提として、本方略の効果の有効範

囲と限界点を示すことは、より現実に即したステレオタイプ抑制を考える上で重要な知見となるだろう。

6-2. 研究 5：キャリア女性に対する競争意識が抑制に及ぼす影響¹²

6-2-1. 問題

第 6 章の研究 1 で述べたように、女性に対するステレオタイプ・偏見には、敵意的なものと慈悲的なものの二つの形態がある (Glick & Fiske, 1996, 2001a, 2001b)。両面価値的性差別理論によると、キャリア女性のような非伝統的な女性は「有能だが冷たい」というステレオタイプを向けられ、男性への支配に抵抗する人物として敵意的な性差別 (hostile sexism) の対象となる。こうした「有能だが冷たい」という認知は嫉妬的ステレオタイプと呼ばれ、男性の中で一般的に持たれている (Glick & Fiske, 2001；高林, 2007)。そこで、研究 5 ではキャリア女性に対するステレオタイプを題材とし、参加者を男性に限定した実験を行った。

その上で、キャリア女性への競争意識を知覚しやすい状況を操作することで、外集団への競争意識の知覚がステレオタイプ抑制に及ぼす影響を検討した。ネガティブなフィードバックなどによって自己評価が低くなった時には、他者に対して批判的になったり、敵意的になりやすい (Baumeister, Smart, & Boden, 1996)。そこで本研究では、ある領域においてネガティブなフィードバックを受けた後には、その領域において優れた人に対して競争意識を知覚しやすいと考え、テストのネガティブなフィードバックを与えることで競争意識の知覚の操作を行った。具体的には、キャリア形成に関すると称したテストを行わせた後に、ネガティブなフィードバックを受けた場合には、その領域で活躍しているキャリア女性に競争意識を知覚しやすくなるだろう。こうした競争意識の知覚の操作に加え、キャリア女性の「冷たい」という人柄に関するステレオタイプを抑制するか否かを操作した。以上の操作によって、研究 5 では、キャリア関連領域におけるネガティブなフィードバックによってキャリア女性に対して競争意識を感じやすくなった参加者は、「キャリア女性は冷たい」というステレオタイプを抑制した後、ターゲット人物をより冷たいと評定するリバウンド効果が生起し、フィードバックを受けない参加者ではリバウンド効果が生起しないだろう、という仮説を検討した。

¹² 本研究は日本社会心理学会第 52 回大会におけるポスター発表を加筆修正したものである (田戸岡好香・村田光二 (2011) 脅威が嫉妬的ステレオタイプの抑制に及ぼす影響)。

6-2-2. 方法

方法の概要

本実験は、4つのフェーズで構成された。無関連な短い実験を2つ行うというカバーストリーのもと、第1・第2フェーズを「実験1」、第3・第4フェーズを「実験2」として、実験を実施した。

第1の「テストフェーズ」では、外集団への競争意識を知覚しやすい状況にするために、適性テストと称した図形問題を行った後、ネガティブなフィードバックを返すか返さないかを操作した。第2の「抑制フェーズ」では、キャリア女性の仕事場面を書く記述課題によって抑制操作を行った。その際、抑制条件ではキャリア女性のネガティブなイメージに基づいて記述しないよう教示した。統制条件ではこうした教示はしなかった。第2フェーズが終了すると、実験者が変わり、第3の「フィラーフェーズ」では100マス計算を行った。つづいて第4の「測定フェーズ」では、ある人物の文章をパソコン上に呈示し、その人物の印象を評定させる対人認知課題を行った。この評定がリバウンド効果の測度であった。

4つのフェーズが終了した後、それぞれのフェーズの関連に気づいたか否かをチェックし、実験の目的および操作などについてデブリーフィングを行い、実験を終了した。

実験計画

実験計画は2（ネガティブフィードバック：なし／あり）×2（抑制操作：統制／抑制）の被験者間計画であった。

第1のテストフェーズでは、適性テストと称した課題を行った後、実際の成績には関係なく、ネガティブなフィードバックを返すか否かを操作した。

第2の抑制フェーズではキャリア女性の写真を呈示し、その人物の仕事場面について記述させ、その際に抑制操作を行った。

仮説

研究5では以下の仮説を検討した。キャリア関連領域におけるネガティブなフィードバックによってキャリア女性に対して競争意識を知覚やすくなった参加者は、「キャリア女性はやりたい」というステレオタイプを抑制した後、リバウンド効果が生起するが、フィードバックを受けない参加者ではリバウンド効果が生起しないだろう。すなわち、測定フェー

ズにおいて、フィードバックあり条件では、抑制条件は統制条件よりも文章の人物を冷たいと評定するだろう。しかし、フィードバックなし条件では統制条件と抑制条件にそういった差は生じないだろう。なお、仮説を示すグラフを図 6-2-1 に示した。

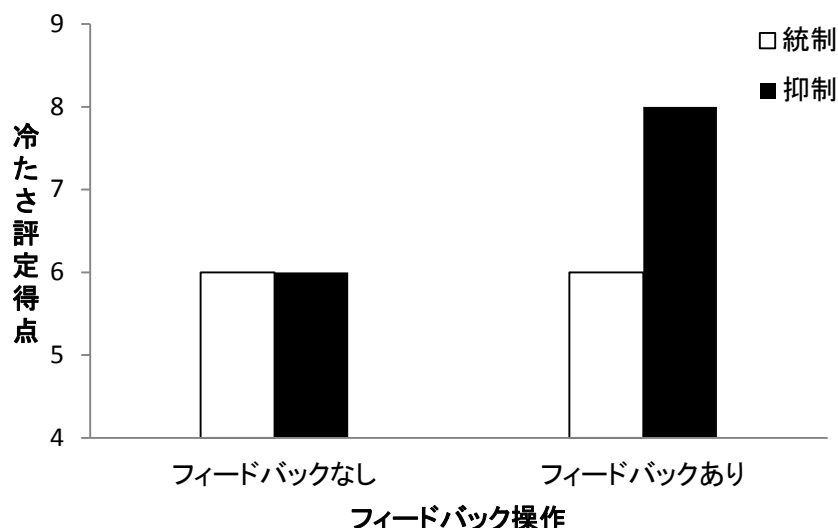


図 6-2-1. 測定フェーズにおける冷たさ評定得点に関する仮説

注. 冷たさ評定得点が高いほど、文章の人物を冷たいと評定したことを意味する。

実験参加者

実験参加者は東京都内の大学において心理学関連の授業を受講している男子大学生 74 名であった（平均年齢 19.45 歳， $SD=1.16$ ）。参加者は実験に参加することで授業の出席点を与えられた。実験計画は（ネガティブフィードバック：なし／あり）×2（抑制操作：統制／抑制）の参加者間計画で、実験参加者をいずれかの条件に無作為に割り当てた。なお、内訳は、フィードバックなし・統制条件 18 名、フィードバックなし・抑制条件 18 名、フィードバックあり・統制条件 16 名、フィードバックあり・抑制条件 22 名であった。

実験材料・刺激

テストフェーズ

課題とフィードバックの内容 最初のテストフェーズでは適性テストと称した課題を行った。Microsoft 2010 の Power Point を用いて、課題の呈示、課題への回答、およびフィードバックを行った。

フィードバックなし条件ではスライドが 23 枚、フィードバックあり条件ではスライドが 26 枚であった。スライドの詳細は付録 D に示した。

1 枚目のスライドでは「大学生における適性テストの実施」という課題のタイトルを示した。個人の能力を測定していると思わせるために、右下にはランダムな ID を振っておいた。2 枚目では、パソコンを操作する練習であると伝え、参加者自身の性別をクリックするように求めた。これによって自分が男性であることを意識させた。3 枚目から 5 枚目までは、以下の図 6-2-2 を用いて課題の説明を行った。課題は 5 つの連続した図形の法則性を考え、「？」の部分にあてはまる図形を選択肢の中から選ぶというものであった。なお、以下の図 6-2-2 の解答は、三角形は反時計回りに 90 度ずつ移動しており、三角形の色は白黒交互になっているので、「？」の直前の図形から 90 度三角形が移動し、色が黒である図形 (D) が正解であった。

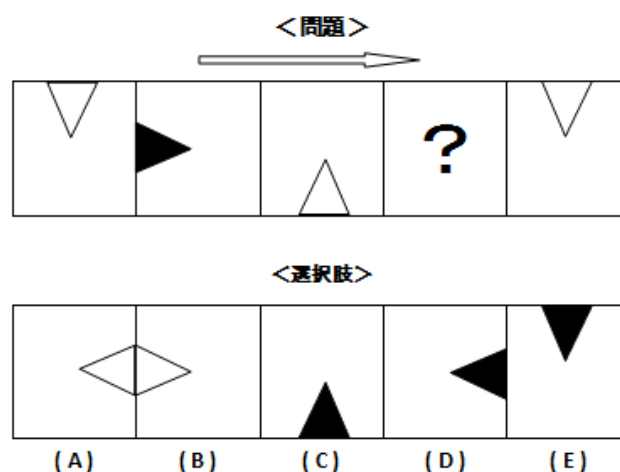


図 6-2-2. テストフェーズの例題

なお、時間制限を設けないことで、すべての問題に解答できてしまうと、参加者が課題を簡単と感じてしまい、ネガティブフィードバックの信憑性が薄れる可能性がある。そこで、参加者には 1 問につき 30 秒の制限時間があることを伝えた。スライド 6 枚目から 20 枚目までは 15 問の問題を 1 題ずつ掲載した。スライドの右上には、残り 5 秒になるとカウントダウンが表示されるようになっていた。参加者が A~E のいずれかの選択肢をクリックするか、30 秒が経過すると、自動的に次の問題に移行するようになっていた。問題がすべて終了すると、21 枚目において、指示があるまでそのまま待つように教示した。

22 枚目以降の詳しい内容は以下の表 6-2-1 に示した通りであった。22 枚目では、適性テストで調べていた内容について説明をした。23 枚目以降は条件ごとに異なっており、フィードバックなし条件では、結果は実験が終わった後に知らせると教示した。フィードバックあり条件では、参加者に結果の集計を行っている信じさせるような画面を呈示した後、実際の成績とは無関係に、D 判定で、仕事に関する能力が低いといった旨のネガティブな判定結果を伝えた。

両条件において、スライドの最後のページにおいて、質問紙上で課題への感想に回答を求めた。

表 6-2-1. 22 枚目以降の条件ごとのスライド内容

	フィードバックなし条件	フィードバックあり条件
22 枚目	このテストでは、いくつかの能力を測定するために、難易度や種類が異なるさまざまな問題が含まれていました。このテストで測定した能力は、「空間認知能力」「洞察力・推論力」「正確さ」でした。A 判定（すべての能力において優れている）～E 判定（すべての能力において劣っている）の 5 段階で判定結果をお返します。	
23 枚目	テストの結果は、すべての実験が終わった後にお知らせいたします。 質問紙の 4 ページに進み、感想をお答え下さい。	「結果の集計」というボタンをクリックすると集計が始まるようになっていた。
24 枚目	なし	集計を行っていることを示す画面が示された。
25 枚目	なし	評価：D 判定 総評：いずれの能力においても、全体的に低い傾向にあります。きめ細かい視点で問題を読み解いたり、効率的に作業を行う力がやや欠けている傾向にあります。重要な仕事を任された時に、致命的なミスを犯したり、人より作業が遅くなってしまう可能性があります。

質問紙の構成 適性テストの実施はパソコン上で行ったが、同時に質問紙を配布した。本実験では、二つの無関連な実験を行うというカバーストーリーであったため、実験ごとに質問紙の構成や体裁を変更した。テストフェーズと抑制フェーズは、その後の測定フェーズとは無関連な実験であると強調するため、B5用紙に明朝体で記載した。

テストフェーズの質問紙は全4ページであった。質問紙の1ページ目には、自己のキャリア形成に関わる課題として、一般的な大学生に適性テストを実施している、というカバーストーリーを明記した。

2ページ目は、課題の最中にメモ欄として使用するよう白紙になっていた。

3ページ目は指示があるまで次のページに進まないよう書かれており、4ページ目では、現在の気分を尋ねるために「楽しい」「疲れた」などの12項目を7件法で尋ねた(1:全くあてはまらない～7:非常にあてはまる)。また、今行った課題に関する感想として、「テストは難しかった」、「適当に答えた」、「このテストは信頼できない」、「よく考えて答えた」、「今後の参考になると思う」といった項目に7件法で回答するようになっていた(1:全くあてはまらない～7:非常にあてはまる)。

抑制フェーズ

質問紙の構成 質問紙は6ページで構成されたB5サイズの冊子であった。

表紙には「他者に関するキャリア形成として、この課題では、他者が働いている場면을想像する過程を調べている」というカバーストーリーを明記した。質問紙を開くと、2ページ目には課題の説明を明記した。この課題ではキャリア女性が働く場面について想像すると記述しており、その時の場面設定が以下のように記述されていた。

写真の人物はある大手企業の営業部に勤務している女性です。営業部は業績主義であるため、それぞれの地区担当者同士がいつも競い合っています。この写真の人物は最も業績の良いA地区を担当しています。この営業部には、他の地区担当の男性社員や女性の派遣社員が働いています。

上記の場面設定のもとで、Oe & Oka (2003) を参考に、「キャリア女性は__」から始まる文章を記述するよう求めた。その際の注意事項として、a.) キャリア女性の仕事の内容ではなく、他地区担当である他の男性社員や派遣社員に接する態度や仕事ぶりなどを、動作や

様子を表わす言葉で書き入れること、b.) 1つの文章には1つの事柄だけを書き入れ、同じ文章は書かないこと、c.) 終了の合図があるまでは5分間課題を続けること、を明記した。

そして、抑制条件では、課題の説明の最後に、強調のために以下のように下線を引いた記述によって抑制操作をした。なお、統制条件では以下の記述はなかった。

ちなみに「キャリア女性は他人に冷たい」などといったイメージがあります。現在では女性の社会進出が進んでいますので、そういったイメージに基づいて書かないように注意してください。そうすることはこの課題でとても重要なことなので、最大限の努力を払ってください。

3, 4 ページには「キャリア女性は__」で始まる文章を書くための空欄を 15 個設けた。

5 ページには、指示があるまで先のページには進まないよう明記してあった。

6 ページには、記述課題が終了した後に課題への感想を回答してもらうとして、課題の指示に従ったかどうかを尋ねる項目を 3 つ尋ねた。

刺激写真 抑制フェーズの記述課題では、Macrae *et al.* (1994) の手続きを参考に、キャリア女性の写真を 1 枚呈示し、その人物の仕事場面を書くよう求めた。刺激写真は、スーツを着た女性であることを基準に、6 枚の写真を実験刺激の候補として選出した。いずれの写真が本実験の刺激として適切であるかを調べるため、予備調査を行った。予備調査として 14 名の調査協力者に 6 枚の写真を呈示し、それぞれの女性に対して以下の特徴がどの程度あてはまると思うか、として「感じの悪い」、「優しい（逆）」、「親しみにくい」、「冷たい」、「思いやりのない」といった冷たさに関する形容詞 5 語に対して 9 件法（1：全くあてはまらない～9：非常にあてはまる）で回答を求めた。その数値が最も高かった写真を、「冷たい」というキャリア女性のステレオタイプにあてはまるものとして、本研究で使用するものとした。

なお、キャリア女性に対する「冷たい」というステレオタイプが一般的に持たれているかを検討するために、この写真に対する冷たさ評定の合算平均値 ($\alpha=.78$) に対して、中点（5：どちらともいえない）との差の検定を行ったところ、写真のキャリア女性に対して有意に冷たいという評定 ($M=5.94, SD=1.08$) をしていた ($t(13)=3.28, p<.01$)。よって、本実験を行った大学においては、キャリア女性に対して冷たいというステレオタイプが持たれて

いることが確認された。

写真は EPSON の L 版 (89×127mm) の写真用紙 (光沢 EG) にインクジェットプリンタでカラー印刷し、ラミネート加工をした。用いた写真は付録 A に示した。

フィルターフェーズ

100 マス計算 抑制フェーズと測定フェーズが無関連であることを強調するために、第 3 フェーズではフィルター課題として 100 マス計算を行った。質問紙はこれまでの研究と同様であったため、ここでの記述は割愛する。

測定フェーズ

装置 文章の呈示および印象評定は、Millisecond Software 社製実験制御ソフトの inquisit ver3.0 を使用した。使用したパソコンおよびプログラム内容は研究 2 から研究 4 で用いたものと同様であった。よって、ここでの記述は割愛する (詳細は第 5 章の研究 2 を参照)。

文章 対人認知課題における文章は、やや冷たい印象を与える「佐々木さん」という人物の物語であった。文章の作成方法は森 (2000, pp.35-36) を参考に、ターゲット人物がやや冷たい行動をとるが、それが状況によるものなのか、特性によるものなのかが曖昧な文章を作成した。まず、やや冷たい行動を示すと考えられる文を 33 文作成し、実験に参加しない 15 名に 9 件法 (1: 全く冷たくでない～9: 非常に冷たい) で評定を求め、行動文を選出した。選出の際の条件としては、a.) 評定の平均値が 5.0 (中点) 以上で、b.) 天井効果が起こるほど極端な値ではなく (7.0 以下)、人によって評価のわかる曖昧な行動文を選出するために c.) 標準偏差の値が他の文よりも大きい (1.5 以上) 行動文を 4 文選出した (cf. 森, 2000)。4 文の具体的な数値については表 6-2-2 に示した。

表 6-2-2. 行動記述文の冷たさ評定

やや冷たい行動文	平均値 (SD)
・飼っていたペットの世話ができなくなったので、知人にあげてしまった。	5.30 (1.88)
・電車で人のかばんにあたってしまったが、謝らなかった。	6.06 (1.72)
・近所の人に「こんにちは」と声をかけられ、目を合わせずに軽く会釈した。	5.58 (1.68)
・職場の後輩から電話が来たが、仕事の話は休日はしない主義だからと言って電話を切った。	6.37 (1.53)

注. 評定値は 9 件法で、点数が高いほど行動文が冷たいと評定されたことを意味する。

次に、選出した 4 文の行動文を含んだ文章を作成した。文章は森（2000）と同様、主人公である「私」と印象評定のターゲットである友人の「佐々木さん」のある一日の行動を描写したものであった。作成した文章がやや冷たい行動を示す文章であるかを確認するため、15 名に「感じの悪い」、「優しい（逆）」、「親しみにくい」、「冷たい」、「思いやりのない」というキャリア女性の冷たさを示すステレオタイプ語に 9 件法（1：全くあてはまらない～9：非常にあてはまる）で評定を求めた。評定の結果、冷たさの評定平均値は 6.45 と高すぎず、標準偏差も 1.22 と大きかった。よってこの文章をやや冷たく曖昧な文章として適切であると判断した。使用した文章は付録 E として添付した。

評定項目 評定に用いた項目は、高林（2007）および沼崎（2006）を参考に、キャリア女性の「冷たい」というステレオタイプに関する評定語として「優しい（逆）」、「冷たい」、「親しみにくい」を用いた。加えて、独自の項目として、「感じの悪い」、「思いやりのない」といった項目を加え、5 語を冷たさステレオタイプ語として用いることとした。また、有能ステレオタイプに関する評定語として、高林（2007）および沼崎（2006）を参考に、「決断力のある」、「有能な」を用いた。加えて、独自の項目として、「知的な」、「頭の悪い」といった項目を加え、4 語を有能ステレオタイプ語として用いることとした。

ただし、以上の 9 語のみを評定項目として呈示すると、実験意図に気づかれる可能性があるため、「積極的」「華やか」などのキャリア女性ステレオタイプとは無関係なフィラー語を 6 語用いた。さらに、ステレオタイプ語とフィラー語をランダムに配置した。

実験後の質問紙の構成

4つのフェーズが終了した後、実験全体に関するアンケートと称した質問紙への回答を求めた。質問紙はA4用紙で4ページで構成され、ゴシック体で記述された。質問項目は実験1（テストフェーズ、抑制フェーズ）に関する項目、実験2（フィラーフェーズ、測定フェーズ）に関する項目、実験全体に関する項目、参加者の属性を尋ねる項目の4種類で構成された。

実験1（テストフェーズ、抑制フェーズ）に関する質問項目は3種類あった。1つ目に、ネガティブフィードバックの操作チェックとして、フィードバックあり条件の参加者へのみ、フィードバックされた結果がどのようなものだったかを、7件法で回答を求めた（1：悪かった～7：良かった）。2つ目に、キャリア関連領域におけるネガティブなフィードバックを受けた後に、キャリア女性に対する競争意識を知覚しやすくなったかを確認するため、「キャリア女性に対して競争意識を感じた」という項目への回答を7件法で求めた（1：全く感じなかった～7：非常に感じた）。3つ目に、操作チェックの一環として、記述課題時にキャリア女性の冷たいイメージを書かないように努力したかを7件法で回答するよう求めた（1：全く努力しなかった～7：非常に努力した）。

実験2（フィラーフェーズ、測定フェーズ）に関する質問項目は大きく分けて2種類あった。1つ目に、100マス計算が出来た程度を7件法で回答を求めた（1：全くできなかった～7：非常にできた）。2つ目に、対人認知課題にきちんと取り組んだかを調べるために、「瞬間的に判断した」「文章をきちんと読んだ」「途中で集中が途切れた(逆転項目)」「一生懸命取り組んだ」について7件法で回答を求めた（1：全くあてはまらない～7：非常にあてはまる）。

実験全体に関する質問項目では、実験意図への気づきを調べるために、課題間の関連など気づいたことを自由に記述する空欄を設けた。質問紙の最後では、参加者の属性を調べるため、参加者の年齢および留学生か否かを尋ねた。

手続き

本実験は2名の実験者で行った。第1・第2フェーズを実験1として第一実験者が実施し、第3・第4フェーズを実験2として第二実験者が実施した。実験者効果を排除するために、第二実験者にはいずれの条件を実施するのかがわからないようにした。

第一実験者が実験参加者を実験室に招き入れ、十分な距離を置いて配置した所定の座席に着席させた。参加者の配置は互いに背中合わせになるか、ついたてが立てられており、

お互いの存在を意識しないようになっていた。その位置関係を図 6-2-3 として示した。

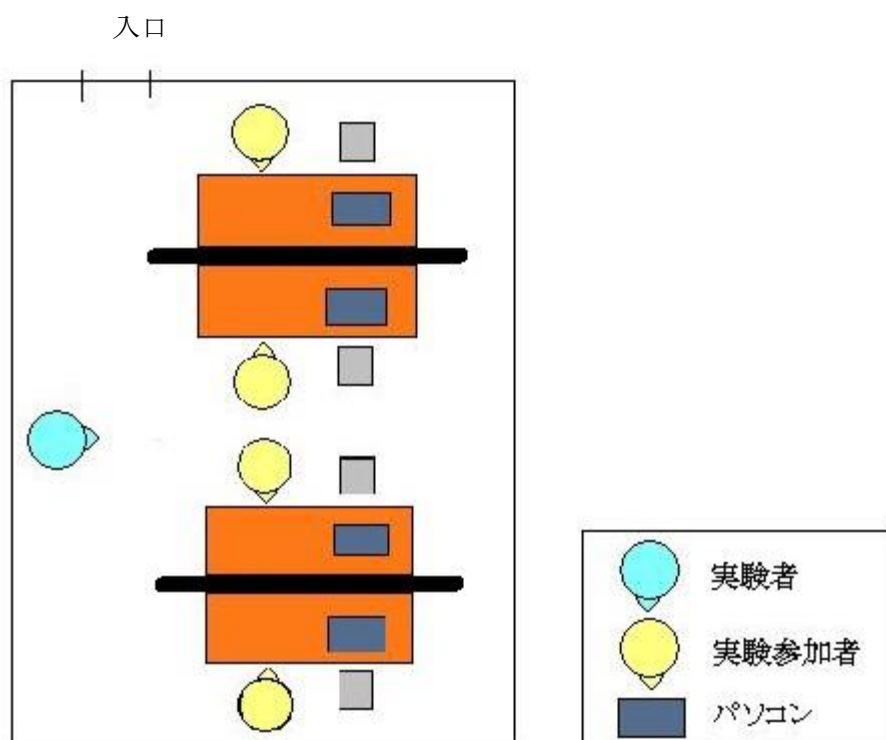


図 6-2-3. 実験室における位置関係

実験を開始する前に、第一実験者は実験参加者に挨拶をし、カバーストーリーとして「大学生のキャリア形成に関する実験」と「人の瞬間的な判断に関する実験」の 2 つの無関連な短い実験に参加してもらおうと伝えた。回答は匿名の状態で整理され、個人の回答が明らかになることはないことを実験参加者に説明し、匿名性の保証をした。その後、実験への参加を承諾する場合には、承諾書にサインをしてもらった。なお、承諾書にサインをしなかった参加者はいなかった。つづいて実験への影響を排除するために携帯電話の電源を切るよう実験参加者に教示し、電源を切ったことを確認した後、実験を開始した。

第 1 のテストフェーズでは、自己のキャリア形成に関わる課題として、一般的な大学生に適性テストを実施しているというカバーストーリーを伝えた。適性テストの信憑性を高めるために、「これから行う適性テストは、もともと特定の業界・職種向けに作成されたものだが、今では幅広い業界で実施され、採用時の選考に使用されている」と伝えた。外集団への競争意識を知覚しやすい状況にするために、石井・沼崎 (2011) を参考に、ネガティブなフィードバックを返すか返さないかを操作した。具体的には、「自己のキャリア形成に

関わる課題」として、適性テストと称した図形問題をパソコン上で15問行った。すべての問題が終わった後、「このテストはこれまでの研究によって、将来の成功に関わることがわかっている」として、「A判定：全ての能力が優れている～E判定：全ての能力が劣っている」の5段階で結果を返すと伝えた。その上で、フィードバックなし条件では、実験後に結果を知らせるとして、結果は与えなかった。他方、フィードバックあり条件では、実際のテストの結果に関わらず、D判定で、仕事に関する能力が低いといった旨のネガティブな判定結果を伝えた。その後、課題への感想に回答を求めた。

つづいて、抑制フェーズにおいて、他者のキャリア形成に関する実験として、他者が働いている場面を想像する過程を調べているというカバーストーリーを伝え、キャリア女性の働きぶりを想像させた。大手企業の営業部に勤務している女性として、キャリア女性のカラー写真を呈示し、その人物が働く様子を「キャリア女性は__」で始まる文章で5分間で記述するよう求めた。その際、抑制操作として、抑制条件では「キャリア女性は他人に冷たい」といったイメージに基づいて書かないよう抑制教示を与えた。他方で、統制条件ではそうした教示は与えなかった。課題を5分間行った後、今行った調査についての質問として、実験への集中の程度について7件法で回答を求めた（1：全くあてはまらない～7：非常にあてはまる）。全員の回答が済んだことを確認し、第一実験者は、以上で1つ目の実験は終了であると伝え、退室した。

つづいて、第二実験者が、2つ目の実験では、「人が瞬間的に物事を判断する過程」について調べており、これから瞬間的な判断に関する種類の異なる2つの課題を行うと伝えた。そして1つ目の課題としてフィラーフェーズを行った。この課題では数字に対する瞬間的な判断を調べており、2分間で、かけ算をやってもらおうと伝えた。これまでの研究と同様に、100マス計算のやり方の説明をした後、課題を2分間行った。

2つ目の課題では「人が印象を瞬間的に判断する過程について調べる」というカバーストーリーを伝え、対人認知課題の説明をした。文章をパソコンの画面上で1文ずつ計26文呈示した後、ターゲット人物に対する印象を評定するよう求めた。なお、文章は参加者のペースで読んで構わないが、その後の印象評定はできるだけすばやく行うよう求めた。これは、印象判断はステレオタイプのアクセシビリティの指標であり、時間をかけると社会的望ましさや自己呈示が回答に影響を与えてしまう可能性があるためであった。評定は「優しい（逆）」、「冷たい」、「親しみにくい」、「感じの悪い」、「思いやりのない」といった冷たさステレオタイプ語を5語、「決断力のある」、「有能な」、「知的な」、「頭の悪い」といった

有能ステレオタイプ語を 4 語、 およびフィラーの 6 語の、 合計 15 語であった。その単語が「佐々木さん」の印象にどの程度あてはまるかを 9 件法ですばやく回答するよう求めた（1：まったくあてはまらない～9：非常によくあてはまる）。評価が終了したら、第二実験者は 2 つ目の実験は終了であると伝えた。

つづいて、2 つの実験に関するアンケートだと説明し、実験意図への気づきなどを調べる質問紙に回答した。参加者の回答が終わったことを確認し、実験は以上で終了であると伝えた。

最後に実験のデブリーフィングをした。特に、本実験はネガティブな偽のフィードバックを含んでいたため、実際の成績には関係なくネガティブなフィードバックを行っていたことを説明し、希望者には課題の正解を伝えた。また、実験の目的のためにやむを得なかったという点を詳細に伝えた上で、データの使用を承諾しない場合にはデータを破棄することも可能であることを伝えた。なお、データの破棄を希望する参加者はいなかった。

6-2-3. 結果

データの整理

実験中にパソコンの動作が止まった 4 名、 および回答に不備のあった 2 名を分析から除外し、全 68 名（平均年齢 19.43 歳）のデータを分析に用いた（フィードバックなし・統制条件 18 名、フィードバックなし・抑制条件 18 名、フィードバックあり・統制条件 15 名、フィードバックあり・抑制条件 17 名）。

分析の結果

テストフェーズ

ネガティブフィードバックの操作チェックとして、フィードバックを受けた人へのみ、与えられた結果について尋ねたところ（1：悪かった～7：良かった）、平均値は 1.89 ($SD=0.99$) で、中点(4.00)よりも有意に低かった ($t(34)=12.59, p<.01$)。よって、フィードバックの操作は有効であったと考えられる。

抑制フェーズ

抑制フェーズにおける操作の有効性を確認するため、記述された文がどの程度キャリア女性ステレオタイプ（人柄，能力）に当てはまるかを，評定者は条件がわからない状態で，9件法で評定し，それぞれ記述冷たさステレオタイプ度（1：非常に温かい～5：どちらともいえない～9：非常に冷たい），記述有能ステレオタイプ度（1：非常に無能～5：どちらともいえない～9：非常に有能）とした¹³。

記述冷たさステレオタイプ度について，2（ネガティブフィードバック：なし／あり）×2（抑制操作：統制／抑制）の分散分析を行った。その結果，フィードバック操作および抑制操作の主効果が有意であった（それぞれ $F(1, 64)=8.05, p<.01$; $F(1, 64)=60.77, p<.01$ ）。ネガティブフィードバックあり条件（ $M=5.75, SD=1.57$ ）は，フィードバックなし条件（ $M=5.08, SD=1.42$ ）よりも，キャリア女性を冷たいと記述していた。また，抑制条件（ $M=4.43, SD=1.09$ ）は，統制条件（ $M=6.42, SD=1.20$ ）よりもキャリア女性を冷たいと記述していなかった。なお，交互作用は有意ではなかった（ $F(1, 64)=2.73, ns.$ ）。以上の結果から，抑制条件は統制条件よりもキャリア女性に対するネガティブなステレオタイプを抑制しており，抑制操作は有効であったと考えられる。

加えて，統制条件において「キャリア女性冷たい」というステレオタイプが記述されていたことを確認するために，さらに中点（5）からの差の検定を行った。その結果，統制条件は中点よりも有意に評定値が高く，キャリア女性の冷たさを記述していた（ $t(32)=6.82, p<.01$ ）。他方，抑制条件では，中点よりも有意に評定値が低いことから，教示通りステレオタイプを抑制していた（ $t(34)=3.10, p<.01$ ）。また，この結果は代替思考として「温かい」という反ステレオタイプを使用していたことも示唆している。

なお，両面価値的ステレオタイプにおいては，他方の次元の「有能」特性を代替思考として使用した可能性もあるため，記述有能ステレオタイプ度についても同様に分析を行った。その結果，いずれの主効果，交互作用も有意ではなく（ $F_s(1, 64)<1$ ），有能さを代替思考として使用した可能性は排除された。

¹³抑制フェーズにおいて記述された文の具体例を付録Fに示した。

テストフェーズ・抑制フェーズに関する事後報告

第4フェーズの印象評定後に、第1フェーズに関する質問への回答を事後的に求めたので、その質問に関する分析結果を報告する。

抑制フェーズでの抑制意図 操作チェックの一環として、抑制フェーズにおいてキャリア女性のネガティブなイメージを書かないように努力したかを7件法で尋ねた（1：全く努力しなかった～7：非常に努力した）。回答に対してフィードバック操作×抑制操作の分散分析を行ったところ、抑制操作の主効果のみ有意であった（ $F(1, 64) = 63.04, p < .001$ ）。フィードバック操作の主効果および交互作用は有意ではなかった（それぞれ $F(1, 64) = 1.64, ns.$, $F(1, 64) = 0.28, ns$ ）。抑制条件（ $M = 5.03, SD = 1.27$ ）は統制条件（ $M = 2.24, SD = 1.58$ ）よりもキャリア女性のネガティブなイメージを書かないように努力していた。これは前述した実際の記述冷たさステレオタイプ度の結果と整合しており、この結果からも抑制操作は成功していたと考えられる。

競争意識の知覚 本研究では、参加者にキャリア関連領域におけるネガティブなフィードバックを与えた後、同様の場面で活躍するキャリア女性を呈示すると、キャリア女性への競争意識を感じると予測した。そこで、ネガティブなフィードバックによってキャリア女性への競争意識を知覚したかを検討した。キャリア女性に対して競争意識を感じた程度を尋ねた項目に対して、フィードバック操作×抑制操作の分散分析を行ったところ、フィードバック操作の主効果のみ有意傾向であった（ $F(1, 64) = 3.92, p = .052$ ）。抑制操作の主効果および交互作用は有意ではなかった（それぞれ $F(1, 64) = 2.14, ns.$, $F(1, 64) = 0.06, ns$ ）。フィードバックあり条件（ $M = 3.09, SD = 1.71$ ）はフィードバックなし条件（ $M = 2.19, SD = 1.67$ ）よりもキャリア女性に対して競争意識を感じやすくなっていた。以上のことから、本研究の想定通り、ネガティブなフィードバックによって、キャリア女性に対する競争意識を相対的に高く感じていたことが示唆された。

測定フェーズ

リバウンド効果の生起 第4フェーズの印象評定課題においてリバウンド効果の測定を行った。評定に長時間かかった回答は、社会的望ましさを考慮していた可能性があり、ステレオタイプのアクセシビリティを反映した指標として望ましくないため、除外することとした。Bargh & Chartrand (2000) に基づき、単語ごとに印象評定の回答時間の平均値と標

準偏差を算出し、回答時間が 3SD 以上遅いデータを除外した（全体の 0.60%）。

評価は 9 件法で、逆転項目を逆転し、それ以外については評価値をそのまま用いた。「優しい（逆）」、「冷たい」、「親しみにくい」「感じの悪い」、「思いやりのない」の冷たさステレオタイプ 5 語への評価値を合算平均し、冷たさ評価得点（ $\alpha=.70$ ）とした。この得点が高いほど、冷たさに関するステレオタイプのアクセシビリティが上昇したことを意味する。この値に対して同様の分散分析を行ったところ、フィードバックの主効果および抑制操作の主効果は有意ではなかったが（それぞれ $F(1, 64) = 2.31, ns.$; $F(1, 64) = 0.62, ns$ ），予測していた交互作用のみ有意であった（ $F(1, 64) = 4.24, p < .05$ ）。結果は図 6-2-4 に示した。下位検定（Bonferroni）の結果、フィードバックがない場合には、統制条件（ $M=5.84, SD=1.07$ ）と抑制条件（ $M=5.50, SD=1.11$ ）に差はなかった。他方で、フィードバックがあった場合、抑制条件（ $M=6.45, SD=0.98$ ）は統制条件（ $M=5.69, SD=1.19$ ）よりも冷たさ評価得点が高かった（ $p = .055$ ）。また、抑制条件において、フィードバックあり条件（ $M=6.45, SD=0.98$ ）はフィードバックなし条件（ $M=5.50, SD=1.11$ ）よりも冷たさ評価得点が高かった（ $p < .05$ ）。以上の結果から、仮説に沿って、ネガティブなフィードバックによってキャリア女性に対して競争意識を感じやすくなった参加者のみ、キャリア女性に対するステレオタイプの抑制後にターゲット人物をより冷たいと評価していた。

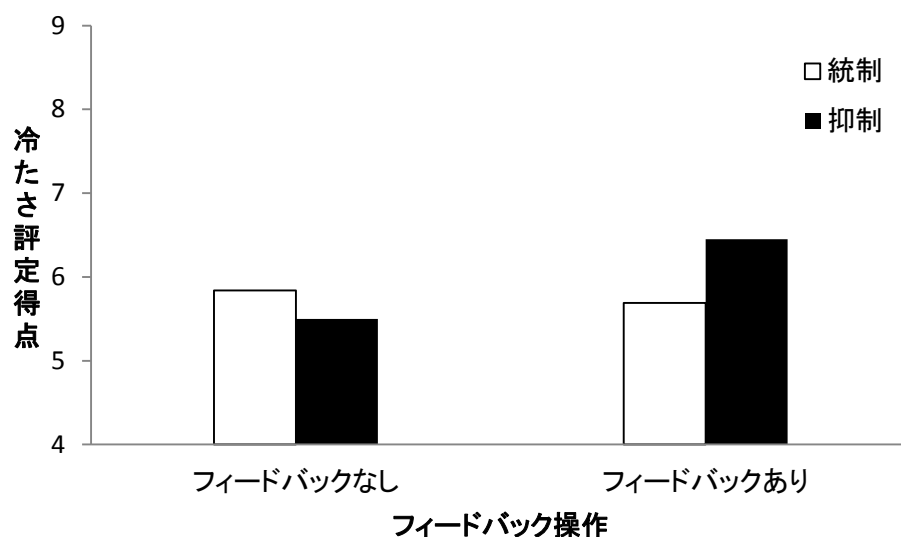


図 6-2-4. 測定フェーズにおける冷たさ評価得点

注. 値が高いほど文章の人物を冷たいと評価したことを意味する

その他の項目の評定 同様に、「決断力のある」、「有能な」「知的な」、「頭の悪い（逆）」の有能ステレオタイプ 4 語への評定を合算平均し、有能評定得点とした ($\alpha=.64$)。この得点が高いほど文章の人物を有能と評定したことを意味する。この値に対して同様の分散分析を行ったところ、いずれの主効果、交互作用も有意ではなかった ($F(1,64) < 2.72, ns.$)。条件ごとの平均値は表 6-2-3 に示した。

表 6-2-3. 印象評定課題における評定値

	FB なし・統制	FB なし・抑制	FB あり・統制	FB あり・抑制
冷たさ評定得点	5.84 (1.07)	5.50 (1.11)	5.69 (1.19)	6.45 (0.98)
有能評定得点	4.33 (1.14)	5.03 (1.00)	4.85 (1.29)	5.12 (1.36)

注. 値が高いほど文章の人物をステレオタイプに沿って評定したことを意味する。

なお、括弧内は標準偏差である。

その他の分析結果

本研究の仮説とは直接関連しない質問項目に対する分析では、いずれも条件間で有意な差が認められなかったため、本論文での報告は割愛する。

6-2-4. 考察

研究 5 では、テストのネガティブなフィードバックを与えることで外集団に対する競争意識の知覚を操作し、嫉妬的ステレオタイプの抑制に競争意識の知覚が及ぼす影響を検討した。

抑制時における記述と思考

分析の結果、抑制条件では統制条件よりもキャリア女性の冷たさを記述していなかった。また、抑制条件では、統制条件よりも抑制の努力をしたと報告された。これらの結果から、抑制操作は有効であったといえる。

リバウンド効果の生起と本実験の示唆

対人認知課題における冷たさ評定得点をリバウンド効果の指標とした。実験の結果、ネガティブフィードバックを受けていない場合にはリバウンド効果が生起しなかったが、ネ

ガティブフィードバックを受けた場合にはリバウンド効果が生じた。ネガティブフィードバックによって外集団への競争意識の知覚が相対的に強まっていることが確認されており、競争意識の知覚がリバウンド効果の生起に影響を及ぼすという本研究の仮説を支持する結果であった。

なお、抑制操作の有無にかかわらず、ネガティブフィードバックを受けた後は、フィードバックを受けていない場合よりも、キャリア女性の冷たさに関する記述が増えていた。ただし、その後の対人認知課題では、フィードバックあり条件で統制条件の参加者は他の条件に比べて冷たさ評定が高まっていなかった。ステレオタイプなどの特性概念のアクセシビリティの上昇は時間経過によって減衰するという知見を考慮すると (Higgins, 1989), フィラーフェーズを挟んだことで、アクセシビリティの一時的な高まりが減衰し、対人認知課題で冷たさ評定得点が高くならなかったと考えられる。一方で、競争意識を知覚しながら抑制した場合には、抑制の過程によって繰り返しステレオタイプのアクセシビリティが高まった (hyperaccessible) 結果、フィラー課題を挟んでもアクセシビリティが減衰せず、対人認知課題において冷たさ評定が高まり、リバウンド効果が示されたと考えられよう (Macrae *et al.*, 1994)。

このように、研究 5 では、キャリア領域においてネガティブなフィードバックを与えた後、キャリア領域で活躍する女性を呈示することで、外集団への競争意識の知覚を操作した。これによって外集団への競争意識の知覚がリバウンド効果に及ぼす影響を実証することができた。実際、ネガティブなフィードバックを与えられた参加者は、与えられなかった参加者よりも、キャリア女性に対して相対的に競争意識を感じていた。ただし、本研究では、競争意識の源泉がネガティブフィードバックであるのか、キャリア女性であるのか、といった点が曖昧であった。そこで、研究 6 では、より競争意識の源泉を明確にするために、参加者と抑制対象者との関係に焦点をあて、抑制対象に感じる競争意識を測定することで、研究 5 の知見に対する代替説明を排除し、仮説の妥当性と一般性をさらに検討する。

6-3. 研究 6：金融ディーラーに対する競争意識が抑制に及ぼす影響¹⁴

6-3-1. 問題

研究 5 の限界点を考慮し、研究 6 では、エリート男性に対する嫉妬的ステレオタイプを題材として、競争意識がステレオタイプ抑制に及ぼす影響を検討した。

エリート男性は元来競争的に捉えられやすい対象であるが、有能な他者への認知や感情は自己が重要だと考えている分野と関連しているか否かによって左右されることから (Tesser, 1988)、研究 6 では分野の関連性に注目した。なお、エリート男性として金融ディーラーを取り上げ、参加者が所属する学部を独立変数として、競争意識を知覚するかどうかを変えた。具体的には、商学部や経済学部のように、抑制対象である金融ディーラーと自分の専攻分野に関連がある場合には、特に競争意識を知覚しやすいと想定した。他方、その他の学部では、金融ディーラーと自分の専攻分野に関連がないため、競争意識を知覚しにくいと考えられる。よって研究 6 では、金融ディーラーに対して競争意識を感じやすい関連学部の参加者は、「金融ディーラーは冷たい」というステレオタイプを抑制した場合、抑制後にターゲット人物をより冷たいと評定するリバウンド効果が生起するが、無関連学部の参加者ではリバウンド効果が生起しないだろう、という仮説を検討した。

6-3-2. 方法

方法の概要

本実験は、3つのフェーズで構成された。無関連な短い実験を2つ行うというカバーストリーのもと、第1フェーズを「実験1」、第2・第3フェーズを「実験2」として、実験を実施した。

第1の「抑制フェーズ」では、金融ディーラーの仕事場面を書く記述課題によって抑制操作を行った。その際、抑制条件では金融ディーラーのネガティブなイメージに基づいて記述しないよう教示した。統制条件ではこうした教示はしなかった。第1フェーズが終了すると、実験者が変わり、第2フェーズの「フィラーフェーズ」では100マス計算を行った。つづいて第3の「測定フェーズ」では、ある人物の文章をパソコン上に呈示し、その

¹⁴ 本研究は、13th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology (San Diego, California) における発表を加筆修正したものである (Tado'oka, Y., & Murata, K. (2012). Consequences of suppressing envious stereotypes under threat from suppressed target.)。

人物の印象を評定させる対人認知課題を行った。この評定がリバウンド効果の測度であった。

3つのフェーズが終了した後、それぞれのフェーズの関連に気づいたか否かをチェックし、実験の目的および操作などについてデブリーフィングを行い、実験を終了した。

実験計画

実験計画は 2（学部：無関連学部／関連学部）×2（抑制操作：統制／抑制）の被験者間計画であった。

参加者の所属する学部を尋ね、商学部や経済学部などの金融ディーラーに関連する学部か、それ以外の無関連な学部かを独立変数とした。

第 1 の抑制フェーズでは金融ディーラーの男性の写真を呈示し、その人物の仕事場面について記述させ、その際に抑制操作を行った。

仮説

研究 6 では以下の仮説を検討した。金融ディーラーに対して競争意識を感じやすい関連学部の参加者は、「金融ディーラーは冷たい」というステレオタイプを抑制した場合、抑制後にリバウンド効果が生起するが、無関連学部の参加者ではリバウンド効果が生起しないだろう。すなわち、測定フェーズにおいて、関連学部の参加者では、抑制条件は統制条件よりも文章の人物を冷たいと評定するだろう。しかし、無関連学部の参加者では、統制条件と抑制条件にそういった差は生じないだろう。なお、仮説を示すグラフを図 6-3-1 に示した。

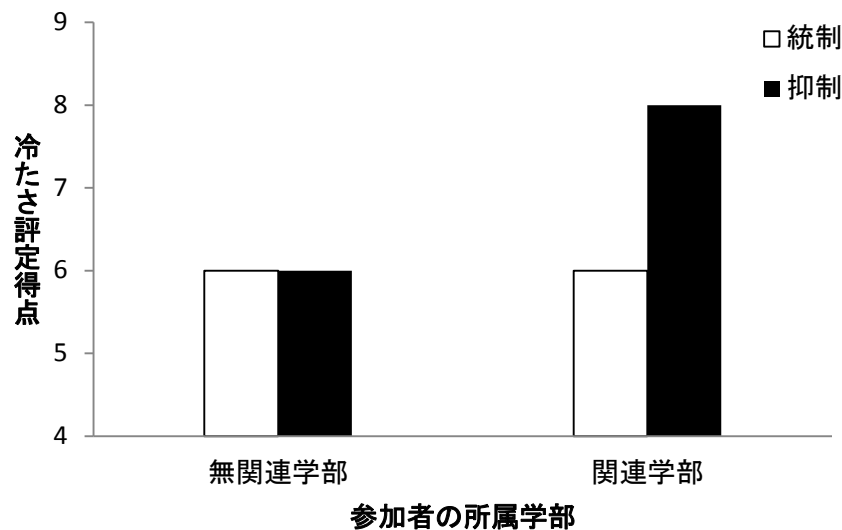


図 6-3-1. 測定フェーズにおける冷たさ評定得点に関する仮説

注. 冷たさ評定得点が高いほど、文章の人物を冷たいと評定したことを意味する。

実験参加者

東京都内の大学で心理学関連の授業を受講している大学生 63 名が実験に参加した（男性 52 名，女性 11 名，平均年齢 19.16 歳， $SD=1.08$ ）¹⁵。参加者は実験に参加することで授業の出席点を与えられた。実験計画は 2（所属学部：無関連／関連）× 2（抑制操作：統制／抑制）の参加者間計画で，実験参加者を抑制操作のいずれかの条件に無作為に割り当てた。なお，内訳は，無関連・統制 19 名，無関連・抑制 14 名，関連・統制 13 名，関連・抑制 17 名であった。

実験材料・刺激

先述のように，実験の構成は研究 5 のテストフェーズを除外した 3 つのフェーズで構成されていた。そこで変更点についてのみ詳述していく。

¹⁵ 研究 6 の実験参加者は，都内の 2 校の大学から募集した。分析に用いた参加者数の内訳は，1 校は関連学部 14 名，無関連学部 17 名であった。もう 1 校は関連学部 13 名，無関連学部 14 名という内訳であった。なお，操作チェック項目およびリバウンド効果の指標に対して，大学を要因に加えた抑制操作×所属学部×大学の 3 要因の分散分析を行ったが，大学の主効果および大学を要因に含んだ交互作用のいずれも有意ではなかった（ $F_{s(1,50)} < 1$ ）。よって，本論文ではこれ以降，大学を要因に含めない分析を呈示することとした。

抑制フェーズ

抑制フェーズのステレオタイプ対象を、キャリア女性から金融ディーラーに変更するに伴い、質問紙および刺激写真を変更した。

質問紙の構成 質問紙は6ページで構成されたB5サイズの冊子であった。

表紙には「視覚的情報から日常の出来事の詳細を記述する過程を調べている」というカバーストーリーを明記した。質問紙を開くと、2ページ目には課題の説明を明記した。この課題では金融ディーラーの男性が働く場面について想像すると記述しており、その時の場面設定が以下のように記述されていた。

写真の人物はある証券会社に勤務する金融ディーラーで、この証券会社には、彼以外にも多くの金融ディーラーや女性の派遣社員などが勤務しています。彼は株の相場を読み解き、顧客から預かった資金を運用し、さまざまな手段を使って多額の利益を上げることで報酬を得ています。これまで一人で資金運用をすることが多かったのですが、今度の顧客は大口なので、部下と組んで仕事をするようになりました。

上記の場面設定のもとで、Oe & Oka (2003) を参考に、「金融ディーラーは__」から始まる文章を記述するよう求めた。その際の注意事項として、a.) 金融ディーラーの仕事の内容ではなく、この人物の仕事ぶりや、部下や派遣の女性社員に接する態度などを動作や様子を表わす言葉で書き入れること、b.) 1つの文章には1つの事柄だけを書き入れ、同じ文章は書かないこと、c.) 終了の合図があるまでは5分間課題を続けること、を明記した。

そして、抑制条件では、課題の説明の最後に、強調のために以下のように下線を引いた記述によって抑制操作をした。なお、統制条件では以下の記述はなかった。

ちなみに「金融ディーラーのようなエリート男性は他人に冷たい」などといったイメージがありますが、そういったイメージに基づいて書かないように注意してください。そうすることはこの課題でとても重要なことなので、最大限の努力を払ってください。

3, 4 ページには「金融ディーラーは__」で始まる文章を書くための空欄を 15 個設けた。

5 ページには、指示があるまで先のページには進まないよう明記してあった。

6 ページには、記述課題が終了した後に課題への感想を回答してもらうとして、課題の指示に従ったかどうかを尋ねる項目を 3 つ尋ねた。

刺激写真 抑制フェーズの記述課題では、Macrae *et al.*(1994)の手続きを参考に、金融ディーラーの男性の写真を 1 枚呈示し、その人物の仕事場面を書くよう求めた。刺激写真は、スーツを着た男性で、顔がはっきりとうつつていることを基準に、8 枚の写真を実験刺激の候補として選出した。いずれの写真が本実験の刺激として適切であるかを調べるため、予備調査を行った。予備調査として 16 名の調査協力者に 8 枚の写真を呈示し、それぞれの男性に対して以下の特徴がどの程度あてはまると思うか、として「感じの悪い」、「優しい(逆)」、「自己中心的な」、「冷たい」、「思いやりのない」、「親切的な(逆)」といった冷たさに関する形容詞 6 語に対して 9 件法 (1: 全くあてはまらない~9: 非常にあてはまる) で回答を求めた。その数値が最も高かった写真 ($M=6.24$, $SD=1.16$) を、「冷たい」という金融ディーラーのステレオタイプにあてはまるものとして、本研究で使用するものとした。写真は EPSON の L 版 (89×127mm) の写真用紙 (光沢 EG) にインクジェットプリンタでカラー印刷し、ラミネート加工をした。用いた写真は付録 A に示した。

なお、金融ディーラーに対する「冷たい」というステレオタイプが一般的に持たれているかを検討するために、本実験を行った大学において 28 名の協力者に予備調査を行った。調査では、金融ディーラーに対してどのようなイメージを持っていますか、として上記の冷たさに関する形容詞 6 語に対して 9 件法 (1: 全くあてはまらない~9: 非常にあてはまる) で回答を求めた。これらの合算平均値に対して、中点 (5: どちらともいえない) との差の検定を行ったところ、金融ディーラーに対して有意に冷たいという評定 ($M=5.89$, $SD=1.34$) をしていた ($t(27)=3.51$, $p<.01$)。よって、本研究を行った大学においては、金融ディーラーに対して冷たいというステレオタイプが持たれていることが確認された。

測定フェーズ

対人認知課題における装置および文章は、研究 5 で用いたものと同様であった。よって、ここでの記述は割愛する (詳細は研究 5 を参照)。

評定項目 研究5の冷たさステレオタイプ語の信頼性係数があまり高くなかったため ($\alpha = .70$), 評定項目を改善することとした。評定に用いた項目は, 高林(2007)および沼崎(2006)を参考に, 金融ディーラーの「冷たい」というステレオタイプに関する評定語として「優しい(逆)」, 「冷たい」, を用いた。加えて, 独自の項目として, 「感じの悪い」, 「思いやりのない」「自己中心的な」「親切的な(逆)」といった項目を加え, 6語を冷たさステレオタイプ語として用いることとした。また, 有能ステレオタイプに関する評定語として, 研究5と同様の「決断力のある」, 「有能な」, 「知的な」, 「頭の悪い(逆)」といった4語を有能ステレオタイプ語として用いることとした。

ただし, 以上の10語のみを評定項目として呈示すると, 実験意図に気づかれる可能性があるため, 「積極的」「華やか」などの金融ディーラーステレオタイプとは無関係なフィラー語を6語用いた。さらに, ステレオタイプ語とフィラー語をランダムに配置した。

実験後の質問紙の構成

3つのフェーズが終了した後, 実験全体に関するアンケートと称した質問紙への回答を求めた。質問紙はA4用紙で3ページで構成し, ゴシック体で記述した。質問項目は実験1(抑制フェーズ)に関する項目, 実験2(フィラーフェーズ, 測定フェーズ)に関する項目, 実験全体に関する項目, 参加者の属性を尋ねる項目の4種類であった。

実験1(抑制フェーズ)に関する質問項目は2種類あった。1つ目に, 操作チェックの一環として, 記述課題時に金融ディーラーの冷たいイメージを書かないように努力したかを7件法で回答するよう求めた(1:全く努力しなかった~7:非常に努力した)。2つ目に, 参加者の所属する学部によって金融ディーラーに対する競争意識を知覚しやすくなるかを確認するため, 「金融ディーラーに対して競争意識を感じた」という項目への回答を7件法で求めた(1:全く感じなかった~7:非常に感じた)。

実験2(フィラーフェーズ, 測定フェーズ)に関する質問項目は大きく分けて2種類あった。1つ目に, 100マス計算が出来た程度を7件法で回答を求めた(1:全くできなかった~7:非常にできた)。2つ目に, 対人認知課題にきちんと取り組んだかを調べるために, 「瞬間的に判断した」「文章をきちんと読んだ」「途中で集中が途切れた(逆転項目)」, 「一生懸命取り組んだ」について7件法で回答を求めた(1:全くあてはまらない~7:非常にあてはまる)。

実験全体に関する質問項目では, 実験意図への気づきを調べるために, 課題間の関連など気づいたことを自由に記述する空欄を設けた。

質問紙の最後では、参加者の属性を調べるため、参加者の性別、年齢、留学生か否かを尋ねた。また、今回の独立変数である学部についても尋ねた。

手続き

本実験は2名の実験者で行った。第1フェーズを実験1として第一実験者が実施し、第2・第3フェーズを実験2として第二実験者が実施した。実験者効果を排除するために、第二実験者にはいずれの条件を実施するのかがわからないようにした。

実験を開始する前に、第一実験者はカバーストーリーとして「日常の記述に関する実験」と「人の瞬間的な判断に関する実験」の2つの無関連な短い実験に参加してもらおうと伝えた。回答は匿名の状態で整理され、個人の回答が明らかになることはないと言明し、実験参加者に説明し、匿名性の保証をした。その後、実験参加承諾書にサインを記入してもらった後、実験を開始した。

第1の抑制フェーズにおいて、Macrae *et al.*(1994)にならい、「視覚的情報から日常の出来事の詳細を記述する過程を調査」しているというカバーストーリーのもと、金融ディーラーの働きぶりを想像させた。金融ディーラーの男性のカラー写真を呈示し、その人物が働く様子を「金融ディーラーは__」で始まる文章で5分間で記述するよう求めた。その際、抑制操作として、抑制条件では「金融ディーラーは他人に冷たい」といったイメージに基づいて書かないよう抑制教示を与えた。他方で、統制条件ではそうした教示は与えなかった。課題を5分間行ったら、今行った調査についての質問として、実験への集中の程度について7件法で回答を求めた（1：全くあてはまらない～7：非常にあてはまる）。全員の回答が済んだことを確認し、1つ目の実験を終了した。

つづいて、第二実験者が、2つ目の実験として、瞬間的な判断に関する種類の異なる2つの課題を行うと伝えた。以下の手続きは研究5と同様であった。1つ目の課題としてフィラーフェーズにおいて100マス計算を行った。つづいて、2つ目の課題として対人認知課題を行った。文章を呈示した後、ターゲット人物に対する印象を評定するよう求めた。評定は「優しい（逆）」、「冷たい」、「感じの悪い」、「思いやりのない」、「自己中心的な」、「親切的な（逆）」といった冷たさステレオタイプ語を6語、「決断力のある」、「有能な」、「知的な」、「頭の悪い（逆）」といった有能ステレオタイプ語を4語、およびフィラーの6語の、合計16語であった。その単語がターゲット人物である「佐々木さん」の印象にどの程度あてはまるかを9件法ですばやく回答するよう求めた（1：まったくあてはまらない～9：非常

によくあてはまる)。

つづいて、2つの実験に関するアンケートだと説明し、実験意図への気づきなどを調べる質問紙に回答した。参加者の回答が終わったことを確認し、最後に、実験の目的および操作についてデブリーフィングを行い、実験を終了した。

6-3-3. 結果

データの整理

実験参加者の中に実験目的を明確に指摘した者はいなかった。実験中にパソコンの動作が止まった2名、回答に不備のあった2名、および実験手続きに不備のあった1名を分析から除外し、全58名のデータを用いて分析を行なった(無関連・統制18名、無関連・抑制13名、関連・統制11名、関連・抑制16名)。なお、参加者の性別を要因として含んだ分析を行ったが、いずれの分析においても、性別を含む有意な効果は見られなかったため、以降の分析では参加者の性別は要因として含めなかった。

分析の結果

抑制フェーズ

抑制フェーズにおける操作の有効性を確認するため、記述された文がどの程度金融ディーラーのステレオタイプ(人柄、能力)に当てはまるかを、評定者は条件がわからない状態で、それぞれ9件法で評定し、それぞれ記述冷たさステレオタイプ度(1:非常に温かい~5:どちらともいえない~9:非常に冷たい)、記述有能ステレオタイプ度(1:非常に無能~5:どちらともいえない~9:非常に有能)とした¹⁶。

記述冷たさステレオタイプ度に対して、2(所属学部:無関連/関連)×2(抑制操作:統制/抑制)の分散分析を行ったところ、所属学部の主効果および交互作用は有意ではなかった($F(1, 54) < 1$)が、抑制操作の主効果が有意であった($F(1, 54) = 25.12, p < .01$)。抑制条件($M=4.72, SD=1.25$)は統制条件($M=6.86, SD=1.89$)よりもネガティブなステレオタイプの記述が少なかった。以上の結果から、抑制操作は有効であったと考えられる。統制条件において「金融ディーラーは冷たい」というステレオタイプが記述されていたことを確認するために、さらに中点(5)からの差の検定を行った。その結果、統制条件は中点よりも有意に評定値が高く、金融ディーラーの冷たさを記述していた($t(28) = 5.32, p < .01$)。他

¹⁶ 抑制フェーズにおいて記述された文の具体例を付録Fに示した。

方、抑制条件では中点と有意差はなかったものの ($t(28)=1.19, ns.$)、冷たさに関しては記述していないということを示しており、教示通りステレオタイプを抑制していたことが示唆された。

なお、両面価値的ステレオタイプにおいては、他方の次元の「有能」特性を代替思考として使用した可能性もあるため、同様に記述有能ステレオタイプ度についても分析を行った。その結果、いずれの主効果、交互作用も有意ではなく ($F(1, 54)<1$)、有能さを代替思考として使用した可能性は排除された。

抑制フェーズに関する事後報告

第3フェーズの印象評定後に、第1フェーズに関する質問への回答を事後的に求めたので、その質問に関する分析結果を報告する。

抑制フェーズでの抑制意図 操作チェックの一環として、抑制フェーズにおいて金融ディーラーのネガティブなイメージを書かないように努力したかを7件法で尋ねた (1: 全く努力しなかった～7: 非常に努力した)。回答に対して所属学部×抑制操作の分散分析を行ったところ、抑制操作の主効果が有意であった ($F(1, 54) = 43.68, p < .001$)。抑制条件 ($M = 4.69, SD = 1.58$) は統制条件 ($M = 1.83, SD = 1.54$) よりも金融ディーラーのネガティブなイメージを書かないように努力していた。また、関連学部の主効果は有意傾向であり ($F(1, 54) = 3.63, p < .10$)、関連学部 ($M = 3.93, SD = 2.20$) は無関連学部 ($M = 2.68, SD = 1.89$) よりも抑制意図が強い傾向がみられた。ただし、所属学部と抑制操作の交互作用は有意ではなかった ($F(1, 64) = 0.31, ns.$) ので、抑制操作の有効性は示されていると考えられる。また、前述した実際の記述冷たさステレオタイプ度の結果も考慮すると、抑制操作は成功していたと考えられる。

競争意識の知覚 本研究では、参加者が所属する学部によって、抑制対象との関連性が異なると、競争意識の知覚が異なると予測した。そこで、所属する学部によって競争意識の知覚が異なるかを調べるために、金融ディーラーに対して競争意識を感じた程度に対して同様の分散分析を行った。その結果、抑制操作の主効果および交互作用は有意ではなく ($F(1, 54)<1$)、所属学部の主効果のみ有意であった ($F(1, 54)=5.36, p < .05$)。関連学部 ($M=2.89, SD=2.24$) の参加者は、無関連学部 ($M=1.74, SD=1.24$) の参加者よりも金融ディ

ーラーの男性に対して競争意識を感じやすくなっていた。よって、本研究の前提どおり、抑制対象に対して関連のある学部に所属している場合には、そうでない場合よりも相対的に競争意識を感じていた。

測定フェーズ

リバウンド効果の生起 第 3 フェーズの印象評定課題においてリバウンドの測定を行った。評定に長時間かかった回答は、社会的望ましさを考慮していた可能性があり、ステレオタイプのアクセシビリティを反映した指標として望ましくないため、除外することとした。Bargh & Chartrand (2000) に基づき、単語ごとに印象評定の回答時間の平均値と標準偏差を算出し、回答時間が 3SD 以上遅いデータを除外した（全体の 1.44%）。

評定は 9 件法で、逆転項目を逆転し、それ以外については評定値をそのまま用いた。「優しい（逆）」、「冷たい」、「感じの悪い」、「思いやりのない」「自己中心的な」「親切的な（逆）」の冷たさステレオタイプ 6 語への評定値を合算平均し、冷たさ評定得点（ $\alpha=.86$ ）とした。この得点が高いほど、冷たさに関するステレオタイプのアクセシビリティが上昇したことを意味する。この値に対して同様の 2×2 の分散分析を行ったところ、いずれの主効果も有意ではなく（ $F(1, 54) < 1$ ），交互作用のみ有意であった（ $F(1, 54)=4.45, p<.05$ ；図 6-3-2 参照）。下位検定（Bonferroni）の結果、抑制条件において、関連学部（ $M=7.33, SD=1.08$ ）は無関連学部（ $M=6.40, SD=1.20$ ）よりも冷たさ評定得点が高かった（ $p<.05$ ）。また、関連学部において、抑制条件（ $M=7.33, SD=1.08$ ）は統制条件（ $M=6.38, SD=1.63$ ）よりも冷たさ評定得点が高い傾向にあった（ $p=.056$ ）。他方、無関連学部では、統制条件（ $M=6.85, SD=1.17$ ）と抑制条件（ $M=6.40, SD=1.20$ ）に有意な差は見られなかった（*ns.*）。すなわち、関連学部の学生は他の条件に比べて抑制後にターゲット人物に対して冷たいと評定する傾向にあった。

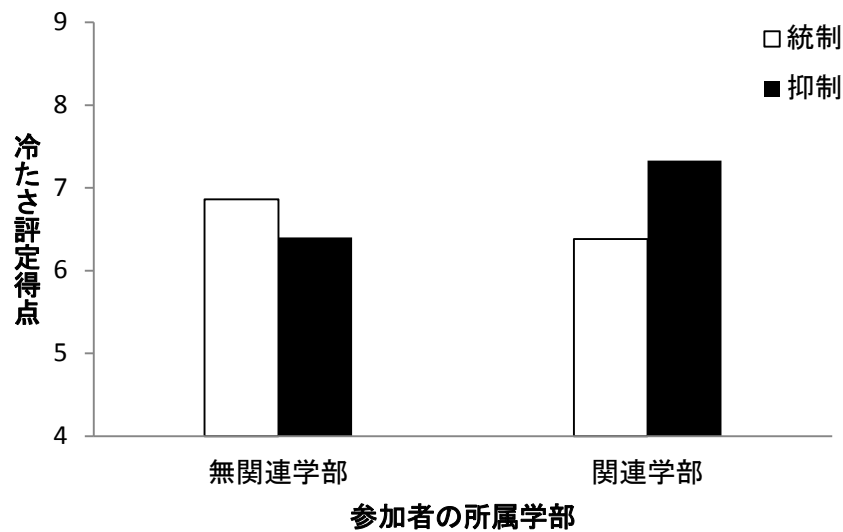


図 6-3-2. 測定フェーズにおける冷たさ評定得点

注. 値が高いほど文章の人物を冷たいと評定したことを意味する

その他の項目の評定 同様に、「決断力のある」、「有能な」、「知的な」、「頭の悪い（逆）」の有能ステレオタイプ 4 語への評定を合算平均し、有能評定得点とした ($\alpha=.64$)。この得点が高いほど文章の人物を有能と評定したことを意味する。この値に対して同様の分散分析を行ったところ、いずれの主効果、交互作用も有意ではなかった ($F(1,64) < 1, ns.$)。条件ごとの平均値は表 6-3-1 に示した。

表 6-3-1. 印象評定課題における評定値

	無関連・統制	無関連・抑制	関連・統制	関連・抑制
冷たさ評定得点	6.86 (1.17)	6.40 (1.20)	6.38 (1.63)	7.33 (1.08)
有能評定得点	4.51 (0.88)	4.63 (0.92)	4.90 (1.19)	4.61 (1.31)

注. 値が高いほど文章の人物をステレオタイプに沿って評定したことを意味する。

なお、括弧内は標準偏差である。

その他の分析結果

本研究の仮説とは直接関連しない質問項目に対する分析では、いずれも条件間で有意な差が認められなかったため、本論文での報告は割愛する。

6-3-4. 考察

研究 6 では、エリート男性に対する嫉妬的ステレオタイプを題材として、外集団への競争意識の知覚がステレオタイプ抑制に及ぼす影響を検討した。

抑制時における記述と思考

分析の結果、抑制条件では統制条件よりも金融ディーラーの男性の冷たさを記述していなかった。また、抑制条件では、統制条件よりも抑制の努力をしたと報告された。これらの結果から、抑制操作は有効であったといえる。

リバウンド効果の生起と本実験の示唆

対人認知課題における冷たさ評定得点をリバウンド効果の指標とした。実験の結果、想定していた交互作用が有意であり、仮説は支持された。すなわち、関連学部は無関連学部よりも金融ディーラーに対して競争意識を感じやすくなっており、抑制後にリバウンド効果が生起していた。なお、研究 6 では参加者の所属する学部によって抑制対象との関連性が異なると想定していたため、本研究の結果が関連学部では金融ディーラーに対するステレオタイプの知識があったために生じた結果だろうと解釈されるかもしれない。しかし、抑制フェーズでの参加者の記述では、学部によって差はなかったことから、関連学部でのみステレオタイプの知識を持っていたという代替説明は排除できよう。以上のことから、研究 6 においても、外集団成員に感じる競争意識がリバウンド効果の生起を調整することが示唆された。

研究 5 および研究 6 のまとめと示唆

本研究では、外集団に対する競争意識の知覚がステレオタイプ抑制に及ぼす影響を検討した。研究 5 および研究 6 の結果、外集団に対して競争意識を知覚しにくい場合には、リバウンド効果を生起させずにステレオタイプを抑制することができた。しかし、競争意識を知覚しやすい場合にはリバウンド効果が生起した。これまで検討されてきた高齢者などのステレオタイプとは異なり、本研究で扱った人柄次元に関するステレオタイプは自己との関係性によって顕現化の程度が異なるため、個人的な競争意識の知覚がリバウンド効果の生起を調整した。

研究 5 ではキャリア関連分野でネガティブフィードバックを受けた場合に、研究 6 では

抑制対象との関連性が高い分野を専攻している場合に、それぞれの分野で活躍する有能な外集団成員に競争意識を感じやすいと想定した。本実験で扱った競争意識は、抑制対象と何かを競い合うといった直接的な競争関係を扱った文脈ではなかったが、象徴的な競争意識でさえ嫉妬的ステレオタイプの抑制に影響を与えているという点は興味深い結果である。本研究はこれまでの抑制研究のパラダイムを踏襲するため、直接的な競争関係を設定しなかったが、そのような競争関係を設定した場合であっても、同様の結果が生じると考えられる。そこで、研究 7 では、参加者と抑制対象をより直接的な競争関係に置くような場面設定を行い、ステレオタイプ抑制に及ぼす影響を検討する。

さらに、研究5および研究6には社会的な意義もあると考えられる。競争社会の現代において、本研究で取り上げたような外集団への競争意識を知覚する状況は頻繁に生じうる。上述のようなキャリア女性に限らず、学歴偏重主義や受験戦争の激化によって、高学歴者にも同様のステレオタイプが向けられる可能性がある。また、領土や資源をめぐる国家や民族同士の競争から、外集団に対する敵意的な感情を抱くことも多い (Alexander, Brewer, & Hermann, 1999)。現代ではこうした競争意識を感じる状況は多いが、本研究の知見によれば、こうした状況におけるステレオタイプ抑制は困難である。むしろ、競争状況においてステレオタイプを避けようとする行為自体が、結果的に偏見の表出を強化させてしまう危険性があるということも本研究は示唆しているといえよう。

このように、研究 5 および研究 6 では、嫉妬的ステレオタイプの抑制における弊害が生起する状況を特定することで、現存する偏見問題の理解に示唆を与えることができた。ただし、今後はこうした競争関係があることを前提としたうえで、競争関係を越えステレオタイプに対処する方略を提案する必要があるだろう。そこで、第 5 章において有効だと示された別次元思考方略は、外集団に競争意識を知覚している状況であっても有効なのかどうかを、研究 7 において検討することとした。

6-4. 研究 7：嫉妬的ステレオタイプの抑制における

別次元思考方略の有効性と制限条件の検討¹⁷

6-4-1. 問題

実力主義や成果主義など、現代では競争的な場面に直面することが多い。そうした場面では、競争状況自体をなくすことは困難であり、高地位な他者に対して競争意識を感じることは少なくない。また、研究 5 および研究 6 で明らかになったように、抑制対象に競争意識を知覚している場合には、抑制をしてもリバウンド効果が生起してしまう。このように、嫉妬的ステレオタイプが社会的に特に問題となるのは、こういった競争状況であると考えられる。そこで、研究 7 では、競争状況を前提とした上で、リバウンド効果低減のための代替思考方略の有効性を検討する。本研究では、大学生を参加者とし、参加者と抑制対象とのより直接的な競争関係場面を設定した。大学生は、相対的に自分よりも高偏差値な大学生に対して「有能だが冷たい」というステレオタイプを抱きやすいことが確認されている（沼崎，2013）。そこで、抑制対象を典型的な高偏差値大学である東京大学の学生とし、就職活動場面で競争相手となるような場면을呈示した。

研究 5 および研究 6 で示したように、競争意識を知覚すると、ステレオタイプが顕現的になるため、リバウンド効果が生起した。研究 7 では、第 5 章で有効性が示された別次元思考方略が、競争状況でも有効なのかを検討する。別次元のポジティブな特性（i.e., 有能）はステレオタイプであるため、生成が容易であり、リバウンド効果を低減させる可能性があるだろう。ただし、有能さは脅威を感じさせる場合があるため、その有効性は限られたものになるかもしれない。すなわち、高自尊感情者のような脅威に耐性がある場合（Pyszczynski *et al.*, 2004）には、本方略は有効であるが、低自尊感情者のように脅威に脆弱な場合には不安関連思考がワーキングメモリを占めるため、ステレオタイプであっても生成が難しく、リバウンド効果が低減しない可能性がある。このように、高地位者の場合には脅威を生じさせる可能性があるため、別次元思考方略の有効性とその制限条件を検討する。具体的には、事前に自尊感情を測定しておき、実験室において抑制時の代替思考を操作する。研究 1 から研究 4 において示されたように、嫉妬的ステレオタイプの抑制にお

¹⁷ 研究7は以下の論文において発表した内容を博士論文の主張に従って構成しなおしたものである。田戸岡好香・村田光二・石井国雄（印刷中）嫉妬的ステレオタイプの抑制における代替思考方略の効果 対人社会心理学研究。

いても、反ステレオタイプを代替思考とした場合にはリバウンド効果が生起することを確認するため、反ステレオタイプの特性（東大生の温かさ）を用いる温かさ思考条件を設けた。加えて、東大生ステレオタイプの内容の一つで、抑制する特性（冷たい）とは異なる次元（有能－無能）に注目し、東大生の有能さを代替思考とする有能思考条件を設けた。

6-4-2. 方法

方法の概要

実験の前に、個人差調査として自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）への回答を求めた。

本実験は、三つのフェーズで構成された。無関連な短い実験を二つ行うというカバーストーリーのもと、第1フェーズを「実験1」、第2・第3フェーズを「実験2」として、実験を実施した。

第1の「抑制フェーズ」では、就職活動においてライバルである東大生とグループワークをするというシナリオを呈示した。課題では、この東大生がどのように振る舞うかを書くように求め、その際抑制操作を行った。単純抑制条件では東大生のネガティブなイメージに基づいて記述しないよう教示した。温かさ思考条件では、抑制教示に加えて、従来の東大生とは反対のイメージに基づいて書くよう教示した。有能思考条件では、抑制教示に加え、東大生の有能さに関するイメージに基づいて書くよう教示した。統制条件ではこうした教示はしなかった。第1フェーズが終了すると、実験者が変わり、第2の「フィラーフェーズ」において100マス計算を行った。つづいて第3の「測定フェーズ」では、ある人物の文章をパソコン上に呈示し、その人物の印象を評定させる対人認知課題を行った。この評定がリバウンド効果の測度であった。

3つのフェーズが終了した後、それぞれのフェーズの関連に気づいたか否かをチェックし、実験の目的および操作などについてデブリーフィングを行い、実験を終了した。

実験計画

実験は4（抑制操作：統制条件／単純抑制条件／温かさ思考条件／有能思考条件）×2（特性自尊感情得点：連続量）の被験者間計画であった。第1の抑制フェーズでは東大生の写真を呈示し、その人物とのグループワークについて記述させ、その際に抑制操作および代替思考の操作を行った。特性自尊感情尺度（山本他，1982）は実験前に事前に測定してお

き，連続変量として扱った。

参加者を実験の条件に無作為に割り当て，一度の実験につき 2~4 名の小集団で実施した。

仮説

研究 7 では以下の仮説を検討した。単純抑制条件および温かさ思考条件は，抑制後にリバウンド効果が生起するが，有能思考条件ではリバウンド効果が低減するだろう。ただし，高地位な対象の有能さを強調することは，自尊感情が低い参加者にとっては脅威となるため，リバウンド効果の低減は高自尊感情者のみにみられるだろう。すなわち，高自尊感情者は測定フェーズにおいて，単純抑制条件と温かさ思考条件は統制条件と有能思考条件に比べて，冷たさに関して曖昧な人物をより冷たいと評定するだろう（図 6-4-1）。ただし，低自尊感情者では，統制条件よりも有能思考条件は文章の人物を冷たいと評定するだろう（図 6-4-2）。

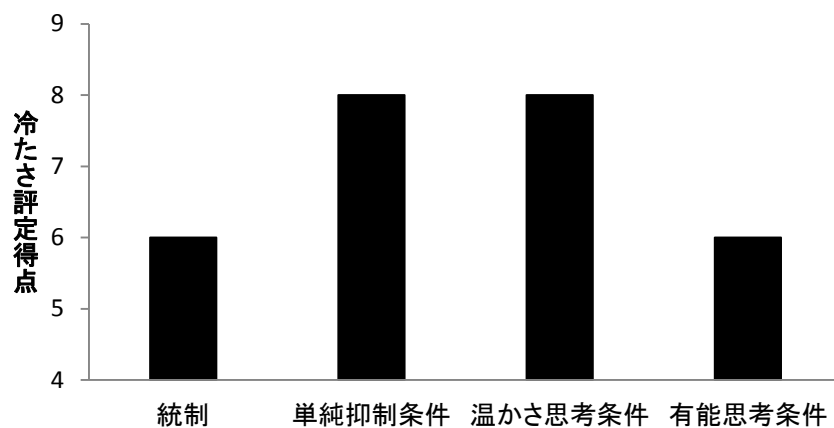


図 6-4-1. 高自尊感情者の冷たさ評定得点に関する仮説

注．冷たさ評定得点が高いほど，文章の人物を冷たいと評定したことを意味する。

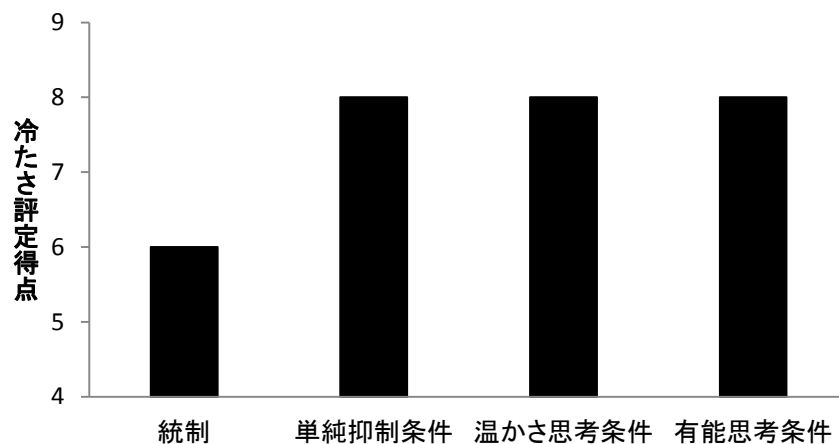


図 6-4-2. 低自尊感情者の冷たさ評定得点に関する仮説

実験参加者

実験参加者は、事前調査への回答を行った東京都内の大学で心理学関連の授業を受講している大学生 78 名であった（男 54 名、女 24 名、平均年齢 19.19 歳、 $SD=1.14$ ）。参加者は実験に参加することで授業の出席点を与えられた。78 名の実験参加者を無作為に条件に割り当てた結果、統制条件は 19 名、単純抑制条件は 21 名、温かさ思考条件は 23 名、有能思考条件は 15 名であった。なお、実験参加者の中に、予備調査の協力者はいなかった。

実験材料・刺激

研究 7 は研究 6 とほぼ同様の手続きで実施したため、変更点についてのみ言及する。

抑制フェーズの教示

抑制フェーズのステレオタイプ対象を、金融ディーラーから東大生に変更するに伴い、質問紙および刺激写真を変更した。

質問紙の構成 質問紙は 7 ページで構成された B5 サイズの冊子であった。

表紙には「みなさんの将来の就職活動場面について想像する能力を調べている」というカバーストーリーを明記した。質問紙を開くと、2 ページ目には課題の説明を明記した。この課題では参加者とライバルの東大生の就職活動場面が以下のように記述されていた。自分が以下の文章中の「あなた」の立場になったと想像して、あたかもその場にいるような気持ちで文章を読むように教示した。

あなたが就職活動をしている場면을想像して下さい。今日はあなたが昔から憧れていた第一希望の企業の第三次試験です。今日の試験ではいくつかの課題が行われますが、応募者同士のディベートが第一課題でした。

あなたは東京大学出身の写真の人物と賛成派・反対派に分かれて、ディベートをすることになりました。

この写真の人物は休憩中も本を読んでいることが多く、あなたはこの東大生のことをあまりよく知りませんでした。ディベートでは、この東大生は論理的で説得力のある発言をしていました。またあなたが発言をすると、たびたび意見の問題点を指摘される場面がありました。

次の課題はグループワークです。この後、あなたはこの東大生を含む数人で、グループワークをしなくてはなりません。

3 ページでは、上記の場面設定のもとで、Oe & Oka(2003)を参考に、東京大学出身の写真の人物のグループワーク中の様子について、「東大生は__」から始まる文章を記述するように求めた。その際の注意事項として、a.) この写真の人物について、あなたを含む他の応募者に接する態度や、課題への取り組み方などを書き入れること、b.) 1 つの文章には 1 つの事柄だけを書き入れ、同じ文章は書かないこと、c.) 終了の合図があるまでは 5 分間課題を続けること、を明記した。

そして、統制条件以外の 3 条件では、課題の説明の最後に、強調のために以下のように下線を引いた記述によって抑制操作をした。

ちなみに「東大生のようなエリート男性は他人に冷たい」などといったイメージがありますが、そういったイメージに基づいて書かないように注意してください。

その後、引き続き温かさ思考条件および有能思考条件では代替思考を操作する教示を与えた。温かさ思考条件では、強調のために以下のように下線を引いた記述によって代替思考を呈示した。

そのような考えの代わりに「人あたりが良い」というような、従来の東大生とは反対のイメージに基づいて書くようにしてください。

そうすることはこの課題でとても重要なことなので、最大限の努力を払ってください。

有能思考条件では、強調のために以下のように下線を引いた記述によって代替思考を呈示した。

そのような考えの代わりに「かしこい」というような、東大生の有能さに関するイメージに基づいて書くようにしてください。

そうすることはこの課題でとても重要なことなので、最大限の努力を払ってください。

4, 5 ページには「東大生は__」で始まる文章を書くための空欄を 15 個設けた。

6 ページは目隠しのページになっており、7 ページには、記述課題が終了した後に課題への感想を回答してもらうとして、課題の指示に従ったかどうかを尋ねる項目を 3 つ尋ねた。

刺激写真 抑制フェーズでは、Macrae *et al.*(1994)の手続きを参考に、東大生の男性の写真 を 1 枚呈示し、その人物の就職活動場面を書くよう求めた。刺激写真は、大学生くらいに見えるスーツを着た男性で、顔がはっきりとうつつていることを基準に、4 枚の写真を実験刺激の候補として選出した。いずれの写真が本実験の刺激として適切であるかを調べるため、予備調査を行った。予備調査として 15 名の調査協力者に 4 枚の写真を呈示し、それぞれの男性に対して以下の特徴がどの程度あてはまると思うか、として「優しい (逆)」、「冷たい」、「とっつきにくい」「謙虚な (逆)」といった冷たさに関する形容詞 4 語に対して 9 件法 (1: 全くあてはまらない~9: 非常にあてはまる) で回答を求めた。その数値が最も高かった写真 ($M=6.10$, $SD=0.22$) を、「冷たい」という東大生のステレオタイプにあてはまるものとして、本研究で使用する事とした。最終的に選ばれた写真は、黒のスーツを着て、メガネをかけた男性の写真であった。写真は EPSON の L 版 (89×127mm) の写真用紙 (光沢 EG) にインクジェットプリンタでカラー印刷し、ラミネート加工をした。用いた写真は付録 A に示した。

なお、東大生に対する「冷たい」というステレオタイプが一般的に持たれているかを検討するために、本実験を行った大学において 15 名の協力者に予備調査を行った。調査では、一般的な東大生に対してどのようなイメージを持っていますか、として上記の冷たさに関する形容詞 4 語に対して 9 件法 (1: 全くあてはまらない~9: 非常にあてはまる) で回答を求めた。これらの合算平均値に対して、中点 (5: どちらともいえない) との差の検定を行ったところ、東大生に対して有意に冷たいという評価 ($M=5.65$, $SD=1.13$) をしていた ($t(14)=2.23$, $p<.05$)。よって、本研究を行った大学においては、東大生に対して冷たいというステレオタイプが持たれていることが確認された。

測定フェーズ

対人認知課題における装置および文章は、研究 5、研究 6 で用いたものと同様であった。よって、ここでの記述は割愛する (詳細は研究 5 を参照)。

評定項目 評定に用いた項目は、沼崎（2013）を参考に、東大生の「冷たい」というステレオタイプに関する評定語として「優しい（逆）」、「冷たい」、「とっつきにくい」、「謙虚（逆）」といった4語を冷たさステレオタイプ語として用いることとした。また、有能ステレオタイプに関する評定語として、研究5と同様の「決断力のある」、「有能な」、「知的な」、「頭の悪い（逆）」といった4語を有能ステレオタイプ語として用いることとした。

ただし、以上の8語のみを評定項目として呈示すると、実験意図に気づかれる可能性があるため、「積極的」「華やか」などの東大生ステレオタイプとは無関係なフィラー語を6語用いた。さらに、ステレオタイプ語とフィラー語をランダムに配置した。

実験後の質問紙の構成

3つのフェーズが終了した後、実験全体に関するアンケートと称した質問紙への回答を求めた。質問紙はA4用紙で3ページで構成し、ゴシック体で記述した。質問項目は実験1（抑制フェーズ）に関する項目、実験2（フィラーフェーズ、測定フェーズ）に関する項目、実験全体に関する項目、参加者の属性を尋ねる項目の4種類で構成された。

実験1（抑制フェーズ）に関する質問項目は4種類あった。1つ目に、操作チェックの一環として、記述課題時に東大生の冷たいイメージを書かないように努力したかを7件法で回答するよう求めた（1：全く努力しなかった～7：非常に努力した）。2つ目に、代替思考操作のあった温かさ思考条件および有能思考条件にのみ、記述課題で書くように指示された内容は「(ア)『人あたりが良い』など、人柄に関するネガティブなイメージとは反対のこと」、「(イ)『かしこい』など、能力に関するポジティブなイメージ」のどちらだったかの回答を求めた。3つ目に、代替思考が生成しやすかったかどうかを検討するために、指示された内容を書くのはどのくらい難しかったかを7件法で尋ねた（1：全く難しくなかった～7：非常に難しかった）。4つ目に、東大生に対して「競争意識」、「不安」、「劣等感」、「脅威」をどの程度感じたか回答を求めた（1：全く感じなかった～7：非常に感じた）。

実験2（フィラーフェーズ、測定フェーズ）に関する質問項目は、これまでの研究と同様に100マス計算が出来た程度と、対人認知課題にきちんと取り組んだかを尋ねた。

実験全体に関する質問項目では、実験意図への気づきを調べるために、課題間の関連など気づいたことを自由に記述する空欄を設けた。

質問紙の最後では、参加者の属性を調べるため、参加者の性別、年齢、留学生か否かを尋ねた。

手続き

特性自尊感情の測定

実験の1か月以上前に、個人差調査として特性自尊感情を測定した。Rosenberg (1965)の Self-Esteem Scale の邦訳版である自尊感情尺度（山本他，1982）への回答を5件法で求めた（1:あてはまらない～5:あてはまる）。得点が高い程，自尊感情が高いということを示すように逆転項目を処理し，合算平均値を自尊感情得点とした（ $\alpha=.83$ ）。

本実験

第1の抑制フェーズを実験1として第一実験者が実施し，第2・第3フェーズを実験2として第二実験者が実施した。

実験を開始する前に，第一実験者は参加者に挨拶をし，カバーストーリーとして「将来の就職活動場面について想像する能力に関する実験」と「人の瞬間的な判断に関する実験」の2つの無関連な短い実験に参加してもらおうと伝えた。匿名性の保証をし，実験への参加を承諾する場合には承諾書にサインをしてもらい，携帯電話の電源を切るよう求めた。

第1の抑制フェーズでは，競争場面をより鮮明に想像してもらえるように，「みなさんの将来の就職活動場面について想像する能力を調査」しているというカバーストーリーを伝え，参加者が就職活動場面にいることを想像させた。冊子状にしたB5サイズの質問紙と男子東大生の写真が入った封筒を配布した。つづいて，この実験ではこの東大生がグループワークでどのようにふるまうと思うかを想像してもらおうと伝えた。場面の説明をした後，『東大生は__』で始まる文章を5分間でできるだけ多く作るよう求めた。その際，統制条件以外の3つの条件では，抑制操作として，『東大生のようなエリート男性は他人に冷たい』などといったイメージがありますが，そういったイメージに基づいて書かないように注意してください。」と教示した。単純抑制条件には以上の教示のみ与えた。温かさ思考条件では上記の抑制教示に加えて，「そのような考えの代わりに『人あたりが良い』というような，従来の東大生とは反対のイメージに基づいて書くようにしてください。」と教示し，代替思考の操作を行った。また，有能思考条件では抑制教示に加えて，「そのような考えの代わりに『かしこい』というような，東大生の有能さに関するイメージに基づいて書くようにしてください。」と教示し，代替思考の操作を行った。統制条件では抑制操作の教示および代替思考の操作の教示はしなかった。課題を5分間行った後，実験への集中の程度について7件法で回答を求めた（1：全くあてはまらない～7：非常にあてはまる）。全員の回

答が済んだことを確認し、第一実験者は、以上で 1 つ目の実験は終了であると伝え、退室した。

これ以降のフィラーフェーズと測定フェーズの手続きは、研究 5 および研究 6 と同様であった。2 つ目の実験として、第二実験者が以下のフェーズを実施した。まず、フィラーフェーズにおいて 100 マス計算を 2 分間行った。その後、測定フェーズにおいて、ターゲット人物の文章を呈示し、印象を評定する対人認知課題を行った。評定は「優しい (逆)」, 「冷たい」, 「とっつきにくい」, 「謙虚な (逆)」といった冷たさステレオタイプ語を 4 語, 「決断力のある」, 「有能な」, 「知的な」, 「頭の悪い (逆)」といった有能ステレオタイプ語を 4 語, およびフィラーの 6 語の、合計 14 語であった。その単語が「佐々木さん」の印象にどの程度あてはまるかを 9 件法ですばやく回答するよう求めた (1: まったくあてはまらない～9: 非常によくあてはまる)。評定が終了したら、第二実験者は 2 つ目の実験は終了であると伝えた。

つづいて、2 つの実験に関するアンケートだと説明し、代替思考に関する質問や、実験意図への気づきなどを調べる質問紙に回答した。参加者の回答が終わったことを確認し、実験は以上で終了であると伝えた。最後に、実験の目的および操作についてデブリーフィングを行い、実験を終了した。

6-4-3. 結果

データの整理

本研究では、抑制対象とのより直接的な競争場面を設定するために、就職活動場面を呈示した。そこで、大学卒業後の進路として、企業への就職を希望している 62 名 (男性 42 名, 女性 20 名, 平均年齢 19.31 歳, $SD=1.18$) を分析対象とした。なお、分析から除外した 16 名の卒業後の進路は、大学院志望が 12 名, その他は 4 名であった。以上のように、全 62 名のデータを用いて分析を行なった。条件ごとの人数は、統制条件は 15 名, 単純抑制条件は 17 名, 温かさ思考条件は 17 名, 有能思考条件は 13 名であった。

分析の結果

分析の方針

本研究では、自尊感情得点を連続変量として分析に投入するため、自尊感情得点はセンタリングした ($M=3.18$, $SD=0.64$)。そして、条件とセンタリングした自尊感情得点の積の項

を求めた。次に、上記の条件、自尊感情得点、およびそれらの積の項を独立変数とした一般線形モデルによる分析を行った。

なお、抑制対象として東京大学の男子学生の写真を呈示したため、参加者の性別を要因として含んだ分析を行ったが、いずれの分析においても、性別を含む有意な効果は見られなかった。よって、以降の分析では参加者の性別は要因として含めなかった。

抑制フェーズ

抑制フェーズにおける操作の有効性を確認するため、記述された文がどの程度東大生ステレオタイプ（能力、人柄）に当てはまるかを、評定者は条件がわからない状態で 9 件法で評定した。それぞれ記述冷たさステレオタイプ度（1：温かい～5：どちらともいえない～9：冷たい）、および記述有能ステレオタイプ度（1：無能～5：どちらともいえない～9：有能）とした¹⁸。条件ごとの平均値と標準偏差を表 6-4-1 に示した。

統制条件以外の 3 条件が東大生の冷たさを抑制していたかを検討するために、記述冷たさステレオタイプ度に対して先述した一般線形モデルによる分析を行ったところ、抑制操作の主効果のみが有意であった（ $F(3, 54) = 24.02, p < .001$ ）。多重比較（Bonferroni の検定）の結果、統制条件に比べて、単純抑制条件（ $p < .01$ ）、温かさ思考条件（ $p < .01$ ）、有能思考条件（ $p = .11$ ）はいずれも記述冷たさステレオタイプ度が低かった。また、温かさ思考条件は他の 3 条件に比べて有意に記述冷たさステレオタイプ度が低かった（ $ps < .001$ ）。このことから、抑制の操作は有効であったと考えられる。

また、単純抑制条件および温かさ思考条件において、反ステレオタイプの温かさを代替思考としていることを確認するために、記述冷たさステレオタイプ度について、中点（5：どちらともいえない）からの差の検定を行った。その結果、統制条件は有意に中点よりも記述冷たさステレオタイプ度が高く（ $t(14) = 3.55, p < .01$ ）、冷たさを記述していた。他方、単純抑制条件および温かさ思考条件は有意に中点よりも記述冷たさステレオタイプ度が低く（それぞれ $t(16) = 2.79, p < .05$; $t(16) = 6.96, p < .001$ ）、温かさを記述していた。このことは、単純に抑制を行った場合には、抑制する特性と同次元上の反ステレオタイプを代替思考として用いることを示している。また、温かさ思考条件では教示通り温かさに基づいて記述していたことから、代替思考の操作は有効であったと考えられる。なお、有能思考条件は中点との差はなかった（ $t(12) = 1.00, ns.$ ）。また、自尊感情の主効果および交互作用は有意ではな

¹⁸ 抑制フェーズにおいて記述された文の具体例を付録 F に示した。

かった ($F(1, 54) < 1, ns.$)。

また、有能思考条件の代替思考の操作が有効かを検討するため、記述有能ステレオタイプ度に対して同様の一般線形モデルによる分析を行った。その結果、条件の効果が有意であった ($F(3, 54) = 9.56, p < .001$)。多重比較 (Bonferroni の検定) の結果、有能思考条件はいずれの条件よりも記述有能ステレオタイプ度が高かった ($ps < .001$)。よって、有能思考条件の代替思考操作も有効であったと考えられる。なお、自尊感情および交互作用は有意ではなかった ($F(1, 54) < 1.23, ns.$)。

表 6-4-1. 抑制フェーズにおける記述ステレオタイプ度

	統制条件	単純抑制条件	温かさ思考条件	有能思考条件
記述冷たさステレオタイプ度	6.07 (1.16)	4.06 (1.39)	2.71 (1.35)	5.08 (0.28)
記述有能ステレオタイプ度	5.73 (0.70)	5.35 (0.86)	5.29 (0.77)	7.31 (1.44)

注. 括弧内は標準偏差を示す。値が高いほど、抑制フェーズにおいて東大生ステレオタイプに基づいて記述したことを意味する。

抑制フェーズに関する事後報告

測定フェーズ後に、抑制フェーズに関する質問への回答を事後的に求めたので、その質問に関する分析結果を報告する。

抑制フェーズでの抑制意図 抑制フェーズにおいて東大生のネガティブなイメージを書かないように努力したかを 7 件法で尋ねた (1: 全く努力しなかった～7: 非常に努力した)。回答に対して先述した一般線形モデルによる分析を行ったところ、抑制操作の主効果が有意であった ($F(3, 54) = 7.04, p < .001$)。多重比較 (Bonferroni の検定) の結果、統制条件 ($M = 2.87, SD = 1.60$) に比べて、単純抑制条件 ($M = 4.35, SD = 1.87$)、温かさ思考条件 ($M = 5.18, SD = 1.67$)、有能思考条件 ($M = 5.23, SD = 1.24$) は東大生のネガティブなイメージを書かないように努力していた ($ps < .05$)。これは前述した実際の記述の結果と整合しており、この結果からも、抑制操作は成功していたと考えられる。

測定フェーズ

リバウンド効果の生起 第3フェーズの対人認知課題においてリバウンド効果の測定を行った。評定に長時間かかった回答は、社会的望ましさを考慮していた可能性があり、ステレオタイプのアクセシビリティを反映した指標として望ましくないため、除外することとした。Bargh & Chartrand (2000) に基づき、単語ごとに印象評定の回答時間の平均値と標準偏差を算出し、回答時間が3SD以上遅いデータを除外した（全体の1.61%）。

評定は9件法で、逆転項目を逆転し、それ以外については評定値をそのまま用いた。「優しい（逆）」、「冷たい」、「とっつきにくい」、「謙虚な（逆）」の冷たさステレオタイプ4語への評定値を合算平均し、冷たさ評定得点（ $\alpha=.68$ ）とした。この得点が高いほど、冷たさに関するステレオタイプのアクセシビリティが上昇したことを意味する。この値に対して同様の一般線形モデルによる分析を行ったところ、いずれの主効果も有意ではなかったが（ $F_s < 1.3$ ）、予測していた抑制操作×自尊感情の交互作用項が有意であった（ $F(1, 54)=4.45$, $p<.05$ ）。自尊感情得点の $\pm 1SD$ の地点でのそれぞれの条件の効果をみるために、自尊感情得点高低（-1SD, +1SD）ごとに単純主効果を検定した。その結果、自尊感情得点が低い場合（-1SD）に抑制操作の主効果が有意であった（ $F(3, 54)=3.37$, $p<.05$ ）。図6-4-3に示したように、多重比較（LSD）の結果、統制条件に比べ、単純抑制条件（ $p=.137$ ）、温かさ思考条件（ $p<.05$ ）、有能思考条件（ $p<.01$ ）の3条件は文章の人物をより冷たいと評定していた。すなわち、以上の3条件はリバウンド効果が生起していた。

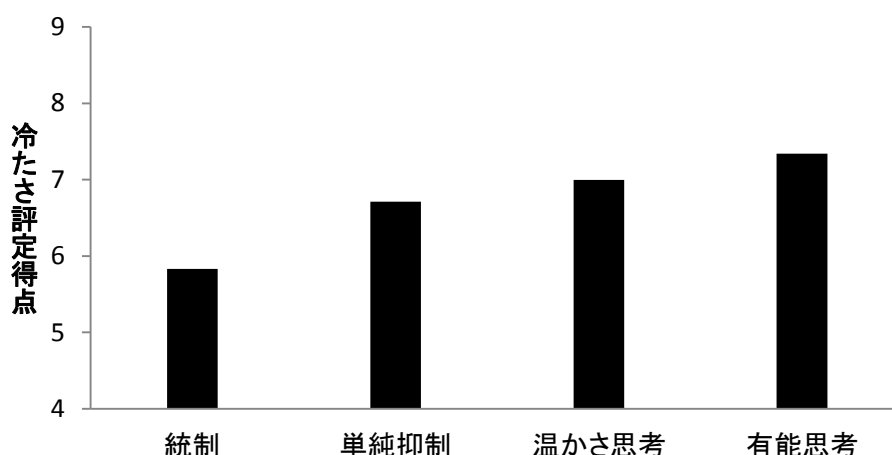


図6-4-3. 自尊感情が低い場合の冷たさ評定得点

注. 上記の結果は自尊感情得点の-1SDの地点での予測値である。なお、得点が高いほど文章の人物を冷たいと評定したことを意味する。

他方、自尊感情得点が高い場合 (+1SD) も抑制操作の主効果が有意傾向であった ($F(3, 54)=2.62, p=.06$)。図 6-4-4 に示したように、多重比較 (LSD) の結果、有能思考条件は、統制条件 ($p<.05$)、単純抑制条件 ($p=.125$)、温かさ思考条件 ($p<.05$) の 3 条件に比べ、文章の人物をより冷たいと評定していなかった。すなわち、有能思考条件は冷たさのアクセシビリティが低減していることを示唆している。

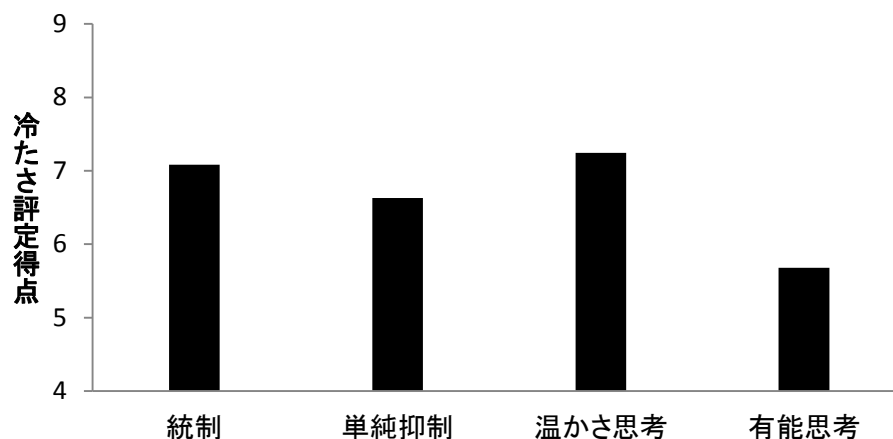


図 6-4-4. 自尊感情が高い場合の冷たさ評定得点

注. 上記の結果は自尊感情得点の+1SD の地点での予測値である。なお、得点が高いほど文章の人物を冷たいと評定したことを意味する。

その他の項目の評定 同様に、「決断力のある」、「有能な」、「知的な」、「頭の悪い (逆)」の有能ステレオタイプ 4 語への評定を合算平均し、有能評定得点とした ($\alpha=.46$)。この得点が高いほど文章の人物を有能と評定したことを意味する。この値に対して同様の分散分析を行ったところ、いずれの主効果、交互作用も有意ではなかった ($F_s < 1.61, ns.$)。条件ごとの平均値は表 6-4-2 に示した。

表 6-4-2. 印象評定課題における評定値

	統制	単純抑制	温かさ思考	有能思考
冷たさ評定得点：低自尊感情	5.83 (0.33)	6.71 (0.48)	7.00 (0.43)	7.34 (0.37)
冷たさ評定得点：高自尊感情	7.08 (0.43)	6.63 (0.35)	7.24 (0.30)	5.68 (0.50)
有能評定得点	5.08 (0.88)	4.50 (0.98)	4.71 (0.91)	5.25 (1.39)

注. 値が高いほど文章の人物をステレオタイプに沿って評定したことを意味する。なお、括弧内は、冷たさ評定得点の場合は標準誤差（SE）を、有能評定得点の場合は標準偏差（SD）を表す。

本研究のメカニズムに関する傍証

競争意識と脅威の知覚 本研究では、研究 5, 6 を受け、競争意識を感じやすいような場面を設定したうえで別次元思考方略の有効性を検討した。そこで、抑制操作や参加者の特性自尊感情によって競争意識の知覚には差がないことを確認するために、記述課題の東大生に「競争意識を感じた」という項目への回答に対して同様の一般線形モデルによる分析を行った。その結果、いずれの主効果、交互作用も有意ではなかった ($F_s < 1.21$)。よって、抑制操作や自尊感情は競争意識の知覚には影響を及ぼしていなかった。この結果から、高自尊感情者が東大生をそもそも競争相手として捉えていないという可能性は排除された。また、本研究の場面設定によって、競争意識を感じていたことを確認するため、中点（4）との差を検定したところ、中点よりも有意に得点が高かった ($M = 4.58$, $SD = 1.62$; $t(61) = 2.83$, $p < .01$)。これらの結果から、条件や自尊感情によらず、本研究の場面設定によって、全体的に競争意識を感じていたと考えられる。

他方で、本研究では、脅威の知覚が自尊感情によって異なることを想定していた。そこで、東大生に「不安」、「劣等感」、「脅威」を感じたという項目への回答を合算平均し ($\alpha = .86$)、脅威の知覚の指標とした。この指標に対して、同様の一般線形モデルによる分析を行った。その結果、自尊感情の主効果が有意であった ($F(1, 54) = 10.83$, $p < .01$)。自尊感情得点の-1SD を自尊感情が低い場合、+1SD を高い場合としてそれぞれの予測値を算出した。その結果、自尊感情得点が低い場合 ($M=5.03$) は高い場合 ($M=3.65$) よりも東大生に脅威を感じていた。これは、自尊感情が脅威の緩衝材になっているという知見と一致する結果であった (Pyszczynski et al., 2004)。なお、抑制操作の主効果および交互作用はいずれも有意ではなかったものの ($F_s(1, 54) < 1$, ns.), 自尊感情得点の±1SD の地点でのそれぞれの条件の効果を見るために、探索的に自尊感情得点高低(-1SD, +1SD)ごとに予測値を算出した。その

結果、自尊感情得点が低い場合には、東大生の有能さに関して考えるよう指示された有能思考条件において他の条件よりも脅威の知覚の程度が高いパターンが見られた（図 6-4-5）。この結果から、自尊感情得点が低い場合には、東大生の有能さについて考えることは、ことさらに脅威の知覚を強めてしまうという可能性が示唆された。

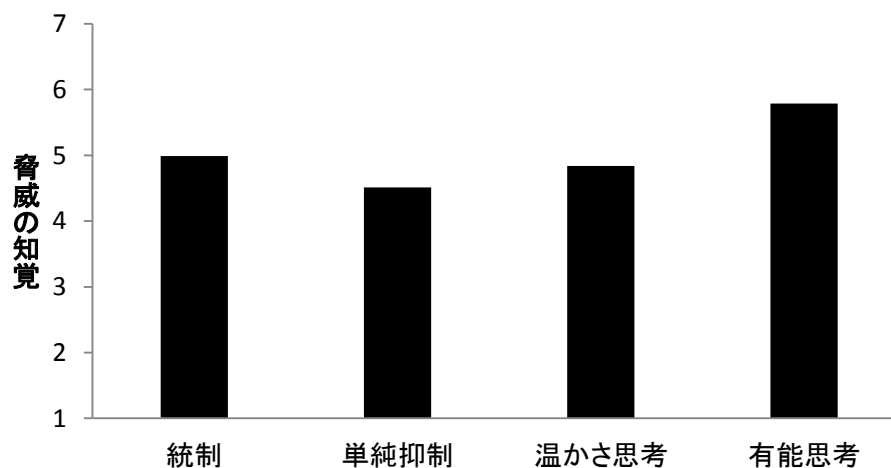


図 6-4-5. 自尊感情が低い場合の脅威の知覚

注. 上記の結果は自尊感情得点の-1SD の地点での予測値である。なお、得点が高いほど脅威を知覚していたことを意味する。

他方、自尊感情得点が高い場合には、以下のように条件間に差は見られなかった（図 6-4-6）。

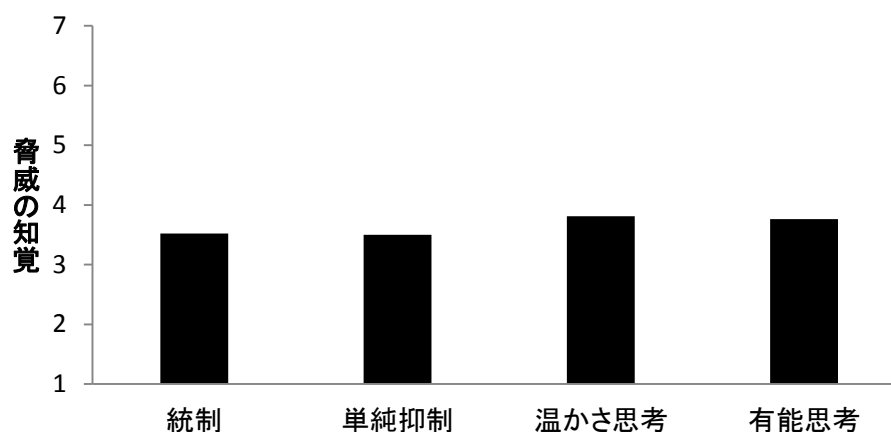


図 6-4-6. 自尊感情が高い場合の脅威の知覚

注. 上記の結果は自尊感情得点の+1SD の地点での予測値である。なお、得点が高いほど脅威を知覚していたことを意味する。

代替思考の生成しにくさ 本研究では、代替思考が生成しやすいかどうかガリバウンド効果の生起に影響を及ぼすと予測した。そこで、代替思考の操作のあった温かさ思考条件と有能思考条件の参加者に「指示された内容を書くのはどのくらい難しかったか」と 7 件法で尋ねた。この項目について、温かさ思考条件・有能思考条件×自尊感情得点（連続量）の一般線形モデルによる分析を行った（図 6-4-7 参照）。その結果、いずれの主効果も有意ではなかったが（ $F_s(1,26) < 1 \text{ ns.}$ ），交互作用項のみ有意であった（ $F(1, 26)=5.16, p<.05$ ）。そこで、代替思考の内容の生成しにくさが自尊感情によって異なるのかを simple slope 検定を行い検討した。その結果、温かさに関する思考の生成の難しさは、低自尊感情者（ $M=4.34$ ）と高自尊感情者（ $M=4.97$ ）で異ならなかった（ $\beta = 0.25, t = 1.04, \text{ns.}$ ）。他方、有能思考の生成に関しては、低自尊感情者（ $M=5.44$ ）は高自尊感情者（ $M=3.84$ ）よりも生成は難しかったと評定していた（ $\beta = 0.63, t = 2.07, p<.05$ ）。また、加えて、高自尊感情者は、温かさ思考の方が有能思考よりも生成しにくかったと評定する傾向が見られた（ $p=.107$ ）。この結果から、反ステレオタイプである温かさ思考の生成しやすさは自尊感情による影響がないものの、別次元の有能思考の生成しやすさは自尊感情によって異なることが示された。すなわち、高自尊感情の場合には有能思考は生成しやすいものの、低自尊感情の場合には有能思考は生成しにくいことを表していた。

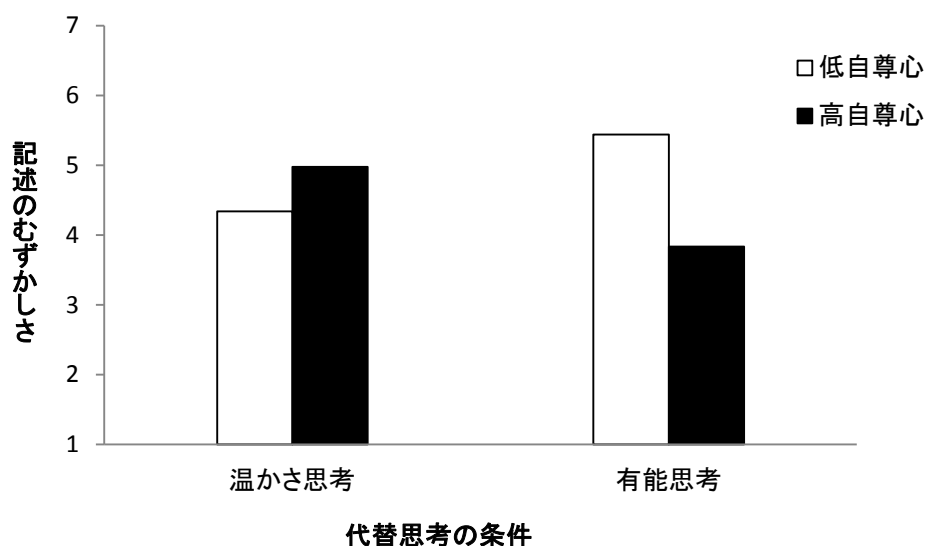


図 6-4-7. 代替思考の生成しにくさ

注. 得点が高いほど、代替思考操作の教示通りに記述するのは難しかったことを意味する。

その他の分析結果

本研究の仮説とは直接関連しない質問項目に対する分析では、いずれも条件間で有意な差が認められなかったため、本論文での報告は割愛する。

6-4-4. 考察

研究 7 では、東大生に対する嫉妬的ステレオタイプを題材として、競争状況における別次元思考方略の有効性とその制限条件を検討した。これまでの研究で示されてきたように、反ステレオタイプの「温かさ」に関する思考は生成が難しいため、リバウンド効果が生起すると予測した。他方、抑制とは別次元の「有能」に関する思考は、その有効性が制限される可能性があるだろう。すなわち、一般的には有能思考はステレオタイプであるため生成がしやすく、リバウンド効果が低減すると考えられる。ただし、低自尊感情者の場合のみ、高地位者の有能さを考えることは脅威を及ぼすため、ステレオタイプであっても生成が難しく、リバウンド効果が生起すると予測した。

リバウンド効果の生起と本実験の示唆

対人認知課題における冷たさ評定得点をリバウンド効果の指標とした。実験の結果、これまでの研究と同様に、低自尊感情の場合、単純に抑制した場合や反ステレオタイプの「温かさ」を代替思考とした場合にはリバウンド効果が生起していた。加えて、別次元思考である「有能」を代替思考とした場合でもリバウンド効果が低減しなかった。すなわち、慈悲的ステレオタイプの抑制とは異なり、嫉妬的ステレオタイプの抑制においては、低自尊感情者では別次元思考方略が有効ではなかった。低自尊感情の場合には、対象の有能さを考えることで脅威の知覚が高まっており、代替思考として生成しにくいという報告がされていた。このことから、高地位者を有能であると考えことはステレオタイプであっても難しいため、リバウンド効果が低減しなかったと考えられる。

他方、高自尊感情の場合には、統制条件における評定値が高かったため、単純抑制条件および温かさ思考条件におけるリバウンド効果の生起は確認できなかったが、有能思考条件はすべての条件と比べて冷たさのアクセシビリティが低減していた。高自尊感情の場合には、高地位者の有能さを考えることが脅威の知覚を高めておらず、ステレオタイプであるために生成もしやすかったと報告されていた。すなわち、別次元思考方略の有効性が示された。このことから、脅威への耐性がある場合には、相手の能力を認めることがリバウ

ンド効果の低減には有効だと考えられる。

以上のように、研究 7 では競争状況を前提とした上で、別次元思考方略の有効性とその制限条件を見出したといえよう。

6-5. 第 6 章の示唆と今後の展望

第 6 章では、嫉妬的ステレオタイプを題材として、リバウンド効果の生起に関わる調整要因、および別次元思考方略の有効性を検討した。

その結果、研究 5 および研究 6 によって、嫉妬的ステレオタイプを抑制する際に競争意識を感じていると、リバウンド効果が生起することが明らかになった。

研究 7 では、嫉妬的ステレオタイプの抑制における別次元思考方略は、高自尊感情者において有効であったが、場合によっては脅威を高めるため、有効性が限定されることが示された。このことから、高地位集団を否定的に考えないためには、抑制対象が自己にとってどのようなものと捉えられるかといった点を考慮することが重要であることが示唆された。昨今の競争社会においては、外集団成員からの脅威を知覚する状況は頻繁に生じうる。そのため、このことを前提として、本方略の効果の有効範囲と制限条件を示すことで、より現実に即した応用が可能になると考えられる。

第Ⅲ部：総合考察

§ 第7章 総合考察

本章では、第Ⅱ部の実証研究で得られた知見を基に、本研究が与える示唆について述べる。はじめに実証研究の知見をまとめる。その後、本知見が抑制研究および関連領域に与える示唆や意義について論じ、社会的意義について述べる。その後、今後の展望を論じていく。

7-1. 実証研究の結果のまとめ

本論文では、対人認知としてのステレオタイプ抑制という観点から、抑制が困難になるメカニズムや状況を明らかにした。その上で、ステレオタイプ抑制におけるリバウンド効果の低減方略として、ステレオタイプ内容モデルに注目し、抑制する特性とは異なった次元のポジティブなステレオタイプの特性を代替思考とする別次元思考方略の有効性を検討した。第Ⅱ部の実証研究では、第5章において慈悲的ステレオタイプの抑制に関して、第6章において嫉妬的ステレオタイプの抑制に関して検討を行った。以下では、それぞれの研究結果に関してまとめる。なお、第5章および第6章での研究知見を図7-1にまとめた。

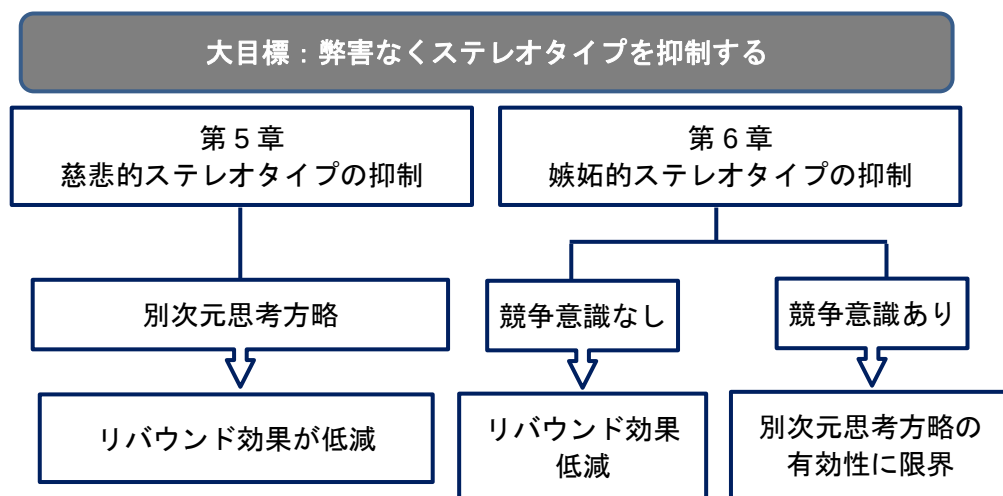


図7-1. 実証研究の全体像

7-1-1. 慈悲的ステレオタイプの抑制

第5章では、慈悲的ステレオタイプを題材として、ステレオタイプ抑制における代替思考方略に関して検討した。

研究1では、家庭的女性に対する「無能」だというステレオタイプを抑制する際には、反ステレオタイプの「有能」を考えた場合にはリバウンド効果が生起した。しかし、「温かい」と考える別次元思考方略を用いれば、リバウンド効果が低減することが示された。ただし、単純に抑制した場合はリバウンド効果が生起しておらず、リバウンド効果の測定の際にステレオタイプの適用を測定したために、社会的望ましさや要求特性が働いた可能性が示唆された。

研究2では、研究1の限界点を考慮し、先行研究にならった抑制状況を設定し、リバウンド効果の測定としてステレオタイプのアクセシビリティを測定した。高齢者ステレオタイプの「無能」というステレオタイプを題材として研究を行ったところ、抑制を行う際には反ステレオタイプの「有能」を代替思考として用いることが明らかになった。また、そうした反ステレオタイプを代替思考として用いても、ステレオタイプのアクセシビリティが上昇しており、リバウンド効果が生起することが確認された。

研究3では、高齢者ステレオタイプを題材にして、実際に代替思考を操作することで方略の有効性を検討した。その結果、単純に抑制した場合、および、反ステレオタイプの「有能」を考えても、リバウンド効果が生起してしまった。しかし、「温かい」と考える別次元思考方略を用いれば、リバウンド効果が低減することが示された。

研究4では、研究3の知見の頑健性を示すことと、代替思考の生成しやすさに関する傍証を得ることを目的とした。研究の結果、別次元思考方略の有効性が再度確認された。加えて、別次元思考である「温かさ」は、反ステレオタイプの「有能」よりも代替思考として生成が容易であることが示された。

以上の結果から、反ステレオタイプの「有能」は、代替思考の生成が困難なため、リバウンド効果が生起するが、生成が容易な別次元思考の「温かい」を用いることでリバウンド効果が低減することが示された。

7-1-2. 嫉妬的ステレオタイプの抑制

第6章では、嫉妬的ステレオタイプにおける抑制を検討した。

これまでの抑制研究では、嫉妬的ステレオタイプに対する抑制は検討されてこなかった。嫉妬的ステレオタイプの場合には、抑制対象と自己との関係によって競争意識の知覚が異なり、その結果ステレオタイプの顕現性が異なる可能性がある。そこで、研究5および研究6では、競争意識の知覚が抑制後のリバウンド効果の生起に及ぼす影響を検討した。

研究5では、キャリア女性の「冷たい」というステレオタイプを題材とした。研究の結果、事前にキャリア領域においてネガティブなフィードバックを受けた場合には、キャリア女性に対して競争意識を知覚しやすくなり、リバウンド効果が生起することが示された。他方で、ネガティブなフィードバックを受けず、競争意識を知覚しにくい場合には、リバウンド効果は生起しなかった。

研究6では、エリート男性として、金融ディーラーに対する「冷たい」というステレオタイプを題材とした。研究の結果、金融ディーラーに競争意識を知覚しやすい関連学部の参加者においてのみ、リバウンド効果が生起した。以上のように、研究5および研究6の結果から、嫉妬的ステレオタイプの場合には、外集団成員に競争意識を知覚しやすい場合に抑制が困難になり、リバウンド効果が生起することが示唆された。

以上のように、嫉妬的ステレオタイプが特に問題となるのは競争意識を知覚しやすい場合であるという知見を受け、研究7では、競争状況を設定した上で、嫉妬的ステレオタイプの抑制における代替思考方略を検討した。その結果、慈悲的ステレオタイプと同様に、単純に抑制しても、反ステレオタイプの「温かい」を考えてもリバウンド効果が生起した。他方、嫉妬的ステレオタイプにおいて「有能」という別次元思考を用いる方略の有効性は、自尊感情によって調整された。すなわち、自尊感情が高い場合には、別次元の「有能」という特性を代替思考として考えることが容易であるため、リバウンド効果を低減させることができた。しかし、自尊感情が低く、抑制対象の有能さを考えることが脅威を高める場合には、「有能」と考えることが難しいため、リバウンド効果が生起した。この結果から、嫉妬的ステレオタイプにおける別次元思考方略は、脅威を高める場合には有効ではないという限界点が明らかになった。このように、嫉妬的ステレオタイプにおいては、別次元思考方略の一定の有効性とその制限条件を明示することができた。

7-1-3. 結果のまとめ：研究方法の特徴の観点から

以上のように、本研究では、ステレオタイプ抑制のメカニズムに着目し、リバウンド効果を低減するための方略を検討することができた。

ステレオタイプ抑制研究では、抑制時の思考内容を詳細に検討した研究は多くない。しかし、本研究では、抑制時の思考がリバウンド効果の生起に関わっていると想定し、抑制時の代替思考の内容をコーディングによって分析した。また、その思考が生成しやすいものであったかという点に関しても事後報告によって検討した。これによって、抑制時に用いられやすい代替思考を明らかにし、その生成しやすさがリバウンド効果の生起に関わっていることを明らかにすることができた。

また、リバウンド効果の指標として、研究 1 ではステレオタイプの表出を扱い、研究 2 以降は対人認知課題によってステレオタイプのアクセシビリティを測定した。このように、ステレオタイプの表出とアクセシビリティについて、複数の指標を用いてリバウンド効果を測定することができた。

本研究でリバウンド効果の指標として中心的に用いた対人認知課題は、ある特性（e.g., 「無能」、「冷たい」）のアクセシビリティを測定するものではあるが、刺激人物はステレオタイプ対象集団の一員ではなかった。今後はより直接的な測度を用いることも有効だろう。本課題はこれまでのステレオタイプ抑制研究において、リバウンド効果の指標として繰り返し用いられてきたものであり（e.g., Galinsky & Moskowitz 2007; 田戸岡・村田, 2010; 田戸岡・石井・村田, 審査中; Wyer 2007）、本研究のように、アクセシビリティに焦点をあてることで、意図的な統制を伴わない反応を詳細に捉えることができたといえよう。

7-2. 本研究の意義

以上のような結果は抑制研究および関連領域の研究にさまざまな示唆を与えると考えられる。そこで、以下では、抑制研究における示唆、および関連領域に与える示唆を論じた後、社会的意義について述べることにする。

7-2-1. 抑制研究に与える示唆と意義：個人差に注目して

これまで、ステレオタイプ抑制では代替思考方略の限界が指摘されてきた (e.g., Galinsky & Moskowitz, 2007)。しかし本研究では、生成しやすい代替思考として抑制する特性とは別の次元のポジティブな特性を利用すれば、代替思考方略はリバウンド効果を低減させると示すことができた。このことは、ステレオタイプ抑制の個人差に関する研究に以下のような示唆を与える。

ステレオタイプ抑制研究では、リバウンド効果の頑健性が示されるにつれ、その調整要因も検討されてきた。例えば、偏見が弱い人よりも強い人がステレオタイプ抑制後にリバウンドすることが示されている (Monteith *et al.*, 1998)。また、偏見を示すことはよくないという信念を保持している内的偏見抑制動機 (internal motivation to respond without prejudice; Plant & Devine, 1998) が高い人ではリバウンド効果が生起せず、弱い場合にのみリバウンド効果が生起したといった抑制動機による効果が明らかになった (Gordijn, *et al.*, 2004; Tado'oka & Murata, under review; Wyer, 2007; Wyer *et al.*, 2000)。

このように偏見が低い人や内的抑制動機が高い人においてリバウンド効果を避けられるというメカニズムについては、いくつかの説明が可能である。一つ目の説明としては、そもそも低偏見者がステレオタイプを持っていないということが考えられる。ただし、Monteith *et al.* (1998) では、低偏見者であってもステレオタイプが思い浮かぶことが明らかになっており、同様のことはステレオタイプの古典的な研究の中でも示されていることである (e.g., Devine 1989) ため、こうした可能性は低いだろう。二つ目として、Monteith, Spicer *et al.* (1998) は、低偏見者は日常的にステレオタイプを抑制しているために、代替思考として平等主義的な思考を用いることができるからだと説明している (for a review, Monteith *et al.*, 1998 参照)。すなわち、内的抑制動機が高い人は普段から抑制しなれているという練習効果がリバウンド効果の低減に関わっていると考えられる。これに示唆を与える研究として、Zhang & Hunt (2008) では、集団主義文化の参加者は抑制をしなれているため、個人主義文化の参加者に比べてリバウンド効果が生起しないことを明らかにしている。

これらの解釈を言い換えれば、日常的に抑制をしている人でなければ、ステレオタイプを抑制することは難しいと考えられる。Monteith *et al.* (1998) は、抑制時の記述内容を報告していないため、平等主義的な思考がどのような代替思考なのかが明らかではない。しかし、本研究の観点からいえば、低偏見者が利用した代替思考には、別次元思考に基づいた代替思考が含まれていたのかもしれない。そのように仮定すると、低偏見者のように抑制

を日常的に行っている個人でなくとも、本研究で取り上げたような適切な代替思考を提案することで、リバウンド効果を生起させずに抑制することができる可能性がある。本研究の結果は、抑制に慣れていない人でも使える適切な代替思考を提案したという意味で意義があるだろう。加えて、本研究において、リバウンド効果を低減させるためには、代替思考の内容が重要であるということが示された。このことから、低偏見者はリバウンド効果が生じにくいという結果だけでなく、どのような代替思考を用いているかを、今後検討する必要性も示唆されたと言えるだろう。

7-2-2. 抑制研究に与える示唆と意義：対人認知の観点から

思考抑制研究では代替思考方略が有効であるにもかかわらず (e.g., Wegner *et al.*, 1987), これまでのステレオタイプ抑制では適切な代替思考を提案することができなかった。それは、ステレオタイプ抑制が対人認知の文脈で行われるという点を看過してきたからだと考えられる。本研究では、この点を考慮することで、二つの重要な示唆を得ることができた。

一つ目に、思考抑制とは異なり、対人認知文脈で抑制を行うためには、代替思考が抑制対象に関わることでなければならない、という制限があることを明らかにできた。実際、本論文の実証研究において、反ステレオタイプが代替思考となっていたことが繰り返し示された。また、この制限を明らかにしたことで、生成しやすい代替思考として、抑制対象に関するもう一方の次元の特性を代替思考にするという提案を行うことができた。

このように代替思考が生成しやすいことがリバウンド効果の生起に影響を及ぼすということが明らかになったが、抑制時に用いられやすい反ステレオタイプが有効な時はないのだろうか。そのことに示唆を与える研究として、Galinsky & Moskowitz (2000) は、高齢者のステレオタイプを抑制する際に、相手の立場になったつもりで記述する視点取得という方法を用いた。その結果、視点取得を行った場合にはリバウンド効果が生起しなかった（同様の知見は Galinsky, Ku, & Wang, 2005）。視点取得とは、自分とステレオタイプ対象の表象を重ね合わせるような操作である (Galinsky & Moskowitz, 2000)。本研究の知見から解釈すると、通常反ステレオタイプは抑制対象の表象に含まれないため生成がしにくいですが、視点取得によって自己と抑制対象の表象が重なった結果、ステレオタイプに反するポジティブな代替思考が思いつきやすくなり、リバウンド効果が低減されたと考えられよう。このように、本研究の知見からこれまでの研究を解釈することで、代替思考として用いられることが多い反ステレオタイプが生成しやすい状況や操作を提案することが重要であるという

ことも示唆されただろう。

二つ目に、本研究では、外集団成員との関係性がリバウンド効果の生起に影響するということを明らかにできた。これまでの抑制研究では、偏見の強さ (Monteith *et al.*, 1998) や偏見抑制の内的動機付け (e.g., Gordijn *et al.*, 2004) といった個人差要因がリバウンド効果の生起を調整すると示してきたが、外集団成員と自己の関係性には注意を払ってこなかった。ステレオタイプ抑制は対人認知の際にこそ必要なものであるということを考慮すると、本研究で示した認知者と抑制対象との関係という要因を検討することには意義があると思われる。第 6 章では、その一つとして外集団への競争意識の知覚を扱い、嫉妬的ステレオタイプの抑制には、その対象に競争意識を感じているかがリバウンド効果の生起に関わることが示された。特に研究 5 は、個人差要因ではなく、状況要因がリバウンド効果の生起を調整することを示した初めての研究である。今後も対人認知としてのステレオタイプ抑制という点を考慮し、抑制対象者との関係性など、対人関係のダイナミクスを考慮した上での研究を行うことが期待されるだろう。

7-2-3. 関連領域に与える示唆

以上のように、本研究の知見は、抑制研究にさまざまな示唆を与えるが、ステレオタイプ研究などの関連領域にも示唆を与えるだろう。

ステレオタイプ内容モデルへの示唆

まず、本研究の知見はステレオタイプ内容モデルの理解を深めることにつながると考えられる。本研究で提案した別次元思考方略は、低地位者に対しては有効であったが、高地位者の場合には有能さが認知者に脅威を与えるために、方略の有効範囲が限定された。すなわち、低地位者とは異なり、高地位者への否定的な認知を回避することは困難であることが示唆された。こうした方略の有効性に、高／低地位者間で非対称性があるのは、高地位者との上方比較が、自己価値への脅威をもたらすためである。ステレオタイプ内容モデルでは、慈悲的ステレオタイプと嫉妬的ステレオタイプは両面価値的なステレオタイプとして総括されるが、その内容は、我々に及ぼす影響の強さという点で大きく異なると考えられる。すなわち、高地位な外集団成員は有能であるがゆえに、我々を搾取しようとしているのか、協力関係にあるのか、といった点は認知者の利益に直接関わってくる。そういった意味で、認知者の得る結果は高地位者の行動や意図に依存する傾向が高く、結果依存

性が高いといえるだろう。そのため、嫉妬的ステレオタイプの低減は、慈悲的ステレオタイプの低減よりも困難を伴うのかもしれない。実際、ステレオタイプ内容モデルを行動予測にまで拡張させた BIAS map (behavior from intergroup affect and stereotypes; Cuddy *et al.*, 2007) では、社会が安定的で脅威状況にない場合には、利益を得るために有能な外集団と協力関係を築く受動的援助が生じやすいが、不況などの脅威のある状況では一転して能動的危害が生じやすいことを主張している。以上のように、Cuddy *et al.* (2007) は社会的な脅威状況について議論しているが、本研究では、自己への脅威といった個人的な脅威状況であっても、高地位者のステレオタイプ抑制に影響を及ぼす可能性があることを示している。そうした点で、ステレオタイプ内容モデルに新たな知見を加えたといえるだろう。

システム正当化研究への示唆

また、本研究の知見は、システム正当化動機に関する研究にも示唆を与える。私たちは、自分たちが暮らす世の中やシステムが公正なものであるという信念を持っており、そうした知覚を維持したいという動機を持っている。そういった中で、両面価値的ステレオタイプはシステム正当化機能を持っていると考えられている (Jost & Banaji, 1994; Jost *et al.*, 2007)。「高齢者は無能だが温かい」、「エリートは有能だが冷たい」といったネガティブ特性とポジティブ特性が混在することで、この世の中は公平にできており、システムとして正当だ、という知覚を与えるという。実際、Kay & Jost (2003) は、「貧乏だが幸せ」や「金持ちだがみじめ」というステレオタイプの例を示されると、「貧乏で不幸せ」など認知的に一致した例を見せられるよりも、社会の現状を公平だと知覚した (同様の知見は Jost & Kay, 2005; Kay, Jost, & Young, 2005)。このように、システム正当化研究では、両面価値的ステレオタイプの両次元が相補的に働くことが正当化動機を満たすためには重要であると主張されてきた。

他方、本研究では、ポジティブなステレオタイプの特性を代替思考として使用することで、ネガティブなステレオタイプの特性を抑制することができた。このような知見は、相補的なステレオタイプの一側面を強調することで、抑制対象を好意的に評価できるという点で利点があると考えられる。加えて、ステレオタイプのポジティブな側面があることで、他方のネガティブな側面が正当化されるという正当化研究の主張とは異なり、一方の次元を強調することで、他方の次元を抑制できるという点で、これまでのシステム正当化研究とは一線を画す研究である。ただし、正当化機能という視点で考えると、ポジティブなス

ステレオタイプを利用することに伴う問題点も見えてくる。この点に関しては、7-3 節において今後の展望と共に再考することとする。

ジェンダー研究への示唆

また、本研究は、研究 1 において家庭的女性のステレオタイプを、研究 5 において男性におけるキャリア女性のステレオタイプの抑制を扱っており、ジェンダー研究としても示唆を与えられられる。

昨今、多くの女性が社会進出を果たしており、男性は、本来自分たちが優位であるはずの仕事という場において、キャリア女性に競争意識を感じていると考えられる。そのため、伝統的な家庭的女性は保護の対象として家庭に押し込められ、他方で伝統的な性役割観に反する女性は、男性によってより否定的に評価されるバックラッシュを被ることがある (e.g., Rudman & Fairchild, 2004)。たとえば、Sinclair & Kunda (2000) は、男性参加者が、女性から否定的な評価を与えられた場合は、当該の女性に対してより否定的に評価するが、男性から否定的な評価を与えられた場合には、当該の男性を否定的に評価しないことを示している。研究 5 における「キャリア女性は冷たい」という敵意的なステレオタイプの高まりも、伝統的価値観を脅かす女性への否定的な反応として生じた可能性があるだろう。とくに、本研究の知見は、キャリア女性といった非伝統的な対象に関するステレオタイプ抑制が競争意識を持っている状況では特に困難なことを示しており、これまでのバックラッシュ研究に新たな知見を加えるとともに、実際の社会的状況とも符合する部分があると思われる。

また、近年では、女性の社会進出が進んだ結果、女性と一言で言っても、専業主婦のような伝統的な女性と、キャリア女性のような非伝統的な女性の 2 つのサブタイプに分類でき、それぞれ異なったステレオタイプが持たれている (Glick & Fiske, 1996; 2001a, 2001b ; 高林, 2007)。伝統的な女性は「無能だが温かい」という慈悲的偏見を抱かれ、保護の対象とみなされるため、家庭の役割を強調され、社会から排除される。他方、非伝統的な女性は「有能だが冷たい」という敵意的偏見を向けられ、扱いにくいというレッテルを貼られることとなる。すなわち、いずれのタイプのステレオタイプであっても、女性を社会から排除するような機能を持っている。そこで、男女平等の規範を意識するとき、私たちはこうしたステレオタイプを避けようと抑制をすることがある。しかし、研究 1 および研究 5 の結果は、女性に対するネガティブなステレオタイプを避けるために、「家庭的女性は有能である」や「キャリア女性は温かい」といったステレオタイプに一致しないように考えるこ

とは困難であり、かえってステレオタイプを強めてしまう可能性を示唆している。私たちはこうした適切な代替思考を用いないステレオタイプ抑制を日常的に行ってしまうが、こうした行為こそが、女性に対する偏見や差別を避けようという試みがなされているにもかかわらず、男女平等が進まない原因の一端なのかもしれない。こうした意味で、本研究の知見は現存する偏見問題の理解に示唆を与えたといえるだろう。

7-2-4. 本研究の社会的意義

また、本研究は労働場面や面接場面におけるステレオタイプ抑制を扱っているという点で、社会的な意義もあると考えられる。

例えば高齢者の雇用について、梅沢・浅尾（2012）によると、66歳以上でも働きたいという高齢者は43%にも上っており、60歳を超えても十分に働けるという人は多い。また年金支給開始年齢の引上げ等による経済事情もあり、働く必要性が高まっているという。このように、高齢社会と言われる現代では、働く意欲のある高齢者が多いにもかかわらず、その雇用は制限されたものになっている。これは高齢者に対する「無能である」というステレオタイプが影響を及ぼしている可能性がある。実際、高年齢者就業実態調査（厚生労働省 2008, 2012）によると、60歳以上の労働者の雇用を今後2年間は増やさない予定であると回答した事業所は全体の36.0%にのぼる。これらの事業所が高齢者を雇用しない理由として（複数選択式）、「高年齢労働者に適した仕事がない」が43.4%と最も多く、次いで「高年齢労働者に限らず、採用の予定はない」が40.6%、「高年齢労働者は体力、健康の面で無理がきかない」が29.7%であった。「高年齢労働者に限らず、採用の予定はない」という回答は、現在の不景気を反映した回答であったとしても、その他の2つの理由は、高齢者に対するステレオタイプを如実に反映した結果であると考えられる。すなわち、多くの研究で認められてきたように、「高齢者は能力が低い」というステレオタイプがあるため、高齢者には仕事の制限や特別な配慮が必要であり、適した仕事がないと考えたり、健康面への配慮が必要だと考えるのである。こうした現状を考慮し、本研究で示した別次元思考方略を用いれば、高齢者雇用へのハードルが引き下げられるかもしれない。実際、モスバーガーでは、店員募集の年齢制限を緩和したところ、高齢者の温かな接客によって好評を得ることができ、それを契機に高齢者の積極的な雇用を進めているという（MSN産経ニュース, 2008）。高齢者の雇用の促進を考えるためには、制度の改革は必須であるが、それに加えて、本研究で示したような心理的メカニズムによるアプローチは有効であると考えら

れる。そうした意味で、別次元思考方略によってネガティブなステレオタイプを避けられるという本研究の知見は、こうした高齢者雇用における現状の改善に寄与する可能性があるかもしれない。

また、女性の社会進出を例にとっても、働く女性が増えているにもかかわらず、いまだに男女平等が実現されていないという意見は根強く存在する（内閣府大臣官房政府広報室，2012）。その一因として、家庭的女性に対する「無能である」というステレオタイプが影響していることが考えられるだろう。本研究の結果は、そうしたステレオタイプを避けるために、「家庭的女性は有能である」と考えることはかえってステレオタイプを強めてしまう可能性を示唆している。他方で、キャリア女性に対しては「有能だが冷たい」というステレオタイプが抱かれているが、競争社会の現代において、本研究で取り上げたような外集団への競争意識を知覚する状況は少なくない。本研究の知見は、競争状況においてステレオタイプを避けようとする行為自体が、結果的に偏見を維持させてしまう危険性を示唆している。いずれのステレオタイプにしても、女性に伝統的な性役割観を押し付け、男性の高地位を維持するように働く危険性があることが示唆される。しかし、本研究において、別次元思考方略の有効性が示されたことから、それぞれの優れた部分に注意を向けることが、雇用や労働現場における男女不平等の解消につながる可能性を示していると思われる。

7-3. 今後の展望

以上のように、本研究の知見は、抑制研究や関連分野だけにとどまらず、現実社会における偏見の問題に対しても示唆を与えると考えられる。以下では、さらに今後の展望について議論する。

まず、ステレオタイプ抑制における代替思考の生成しやすさとリバウンド効果の関係についてである。本研究では、別次元思考方略によって、リバウンド効果を低減させることができた。しかし、反ステレオタイプを思考した条件においては、ポジティブな内容を代替思考としたにもかかわらず、リバウンド効果は生起していた。このように、本研究の結果は、代替思考は単にポジティブな思考にすればよいのではなく、その生成しやすさに注目することが重要だということを示唆している。ただし、本研究では、抑制する特性とは異なる他方の次元の特性を、生成が容易な代替思考の指標として用いたため、生成が容易

かどうかとリバウンド効果の関係を直接検討したわけではない。例えば、反ステレオタイプであっても、生成が容易な場合と難しい場合を操作したうえで比較するなど、今後は、リバウンド効果の低減に及ぼす影響をより直接的に検討する必要があるだろう。

また、本研究では、嫉妬的ステレオタイプの人柄特性に特有の問題を踏まえ、リバウンド効果が生じしやすい状況を明らかにした上で、別次元思考方略の有効性を示した。ただし、低自尊感情者のように、脅威を知覚しやすい人にとっては、高地位者に対するステレオタイプ抑制は難しいという問題が指摘された。今後は、本研究の知見を踏まえ、競争関係があることを前提としたうえで、心理的操作によって、脅威を超えステレオタイプに対処する方略を提案する必要があるだろう。

最後に、本研究の結果は、抑制する特性とは異なる次元のポジティブな特性を代替思考とするとリバウンド効果が低減する可能性を示唆するものの、代替思考としてステレオタイプを用いることに伴う問題が指摘されるかもしれない。ステレオタイプ内容モデルを主張している Fiske らは、ネガティブなステレオタイプの特性は社会的に常に問題視されているが、その影で、ポジティブなステレオタイプの特性が偏見の維持に寄与していると主張している (Fiske & Cuddy, 2006; Fiske *et al.*, 2007; Glick & Fiske, 2001a)。例えば、「温かいが無能」という高齢者や障害者に向けられるステレオタイプは、温かいというステレオタイプを付与された対象集団をその地位に押しとどめ、偏見を維持する結果になるという。このように、ポジティブなステレオタイプを強調することが、むしろ偏見の維持や強化につながる可能性があることには留意が必要である。

しかし、ネガティブなステレオタイプを変化させることで社会的な構造関係を大幅に変革するよりも、すでに付与しているポジティブな特性を強調することの方が受け入れやすく、これは偏見低減への一つの手段になるという可能性も主張されている (Glick & Fiske, 2001b)。また、ステレオタイプを変容させることは多量の訓練を要する (e.g., Kawakami *et al.*, 2000, 2007) など日常的な応用には未だ限界も残っているため、ここで提案した別次元思考方略によって、少なくとも短期的にはリバウンド効果を避けることができたという本研究の結果には、一定の意義があると考えられる。

さらに、長期的に本研究の方略を用いた場合でも、有益な知見を得られる可能性もあるだろう。私たちは、対人認知の際に、ある一つの面が優れていると、他の面も優れているように他者を認知することがある。この認知傾向はハロー効果 (halo effect) と呼ばれ、例えば美人は性格も良いというような評価をされやすいことが知られている (Dion, Berscheid,

& Walster, 1972)。本研究で提案した別次元思考方略によって、ポジティブな側面を強調し続けることで、ハロー効果が生起する可能性もあるだろう。例えば、慈悲的ステレオタイプの場合、別次元思考方略の「温かい」という思考は、人の全体的な印象を決定する中心特性 (Asch, 1946) であるため、全体的な印象を向上させる効果があるかもしれない。また、嫉妬的ステレオタイプの場合、高地位者の「有能さ」を強調する本方略は内外集団の積極的な接触や協力を促す可能性がある。Cuddy *et al.* (2007) の BIAS map によれば、私たちは望ましい結果を得るために、高地位で優秀な外集団成員と協力することがあると指摘されている (受動的協力)。通常、外集団成員との相互作用は避けられる傾向があるものの、集団間の接触を繰り返すことで、お互いに好意的な印象をもたらすということが明らかになっている (接触仮説; Allport, 1954)。そのため、有能な外集団成員との接触が、最初は義務的なものであったとしても、接触を続ける中で相手の印象を好転させたり、内集団の知覚を高めるといった可能性もあるだろう。こうしたことを考慮すれば、別次元思考による抑制を行った後に、内集団成員と知覚されるかどうかを測定することも有効であろう。今後は、ポジティブなステレオタイプの問題点も考慮に入れた上で、長期的な視点を持ちつつ、ステレオタイプ抑制に有効な抑制方略を検討していく必要があるだろう。

7-4. 結論

本研究は、社会的認知研究の観点から、どのようにすればネガティブなステレオタイプの適用を避けられるのかを検討した。具体的には、ステレオタイプ抑制がうまくいかないメカニズムを明らかにし、その上で、適切な方略を提案することを目指した。

本研究は、有効な代替思考方略が示されてこなかったステレオタイプ抑制において、ステレオタイプ内容モデルに注目することで、リバウンド効果の低減に有効な代替思考方略を示すことができた。さらに、ステレオタイプ抑制が対人判断場面で行われるため、抑制者と抑制対象者との関係性もリバウンド効果の生起に影響を与えることが示された。このような本研究の知見は、ステレオタイプ抑制の研究に新たな視座を与えたといえるだろう。

加えて、ステレオタイプ研究に限らず、システム正当化研究やジェンダー研究などの関連分野への貢献、および社会的意義についても議論をしてきた。今後は、本研究の知見を社会的な場面に応用していくことが、今後の課題となるだろう。

引用文献

- Alexander, M. G., Brewer, M. B., & Hermann, R. K. (1999). Images and affect: A functional analysis of outgroup stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 78–93.
- Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wesley.
- (原谷達夫・野村昭 (共訳) (1968). 偏見の心理 培風館)
- Amodio, D. M. & Devine, P. G. (2010). Regulating behavior in the social world: Control in the context of intergroup bias. In R. R. Hassin, K. N. Ochsner, and Y. Trope (Eds). *Self control in society, mind and brain*. New York: Oxford University Press. pp. 49-75.
- Anderson, M. C., Bjork, R. A., & Bjork, E. L. (1994). Remembering can cause forgetting: Retrieval dynamics in long-term memory. *Journal of Experimental Psychology. Learning, Memory, and Cognition*, **20**, 1063-1087.
- Andreoletti, C., Maurice, J. K., & Whalen, H. (2001). Gender, race, and age: Compound stereotypes across the lifespan. Poster presented at the Second Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, February, 2001, San Antonio, TX.
- Asch, S. E. (1946). Forming impression of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **41**, 258-290.
- Ashcraft, M. H., & Kirk, E. P. (2001). The relationships among working memory, math anxiety, and performance. *Journal of Experimental Psychology: General*, **130**, 224-237.
- Avolio, B. J., & Barrett, G. J. (1987). Effects of age stereotyping in a simulated interview. *Psychology and Aging*, **2**, 56-63.
- Bandura, A. (1977). *Social Learning Theory*. New York: General Learning Press.
- Baumeister, R. F., Bratslavsky, E., Muraven, M., & Tice, D. T. (1998). Ego depletion : Is the active self a limited resource? *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1252-1265.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, **103**, 5-33.
- Beilock, S. L., Rydell, R. J., & McConnell, A. R. (2007). Stereotype threat and working memory: Mechanisms, alleviation, and spill over. *Journal of Experimental Psychology: General*, **136**, 256-276.

- Boden, J. M., & Baumeister, R. F. (1997). Repressive coping: Distraction using pleasant thoughts and memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 45-62.
- Bradac, J. J. (1990). Language attitudes and impression formation. In H. Giles & W. P. Robinson (Eds.), *Handbook of language and social psychology*, New York: Wiley. pp. 387-412.
- Brehm, J. W. (1966). *A theory of psychological reactance*. Academic Press.
- Brewer, M. B. (1988). A dual process model of impression formation. In T. Srull & R. Wyer (Eds.), *Advances in Social Cognition*. Vol. 1, Earlbaum.
- Brewin, C. R., & Smart, L. (2005). Working memory capacity and suppression of intrusive thoughts. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **36**, 61-68.
- Bruner, J. S. (1957). On perceptual readiness. *Psychological Review*, **64**, 123-151.
- Bargh, J. A. (1999). The cognitive monster: The case against controllability of automatic stereotype effects. In Chaiken, S., & Trope, Y. (Eds.), *Dual process Theories in Social Psychology*. New York: Guilford Press, pp.361-382.
- Cohen, C. E. (1981). Person categories and social perception: Testing some boundaries of the processing effect of prior knowledge. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 441-452.
- Cuddy, A. J., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008). Warmth and Competence as universal dimensions of social perception: The stereotype content model and the bias map, In M. P. Zanna. (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 40, New York: Academic, pp.61-150.
- Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. (2007). The BIAS Map: Behaviors from intergroup affect and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 631-648.
- Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., Kwan, V. S. Y., Glick, P., Demoulin, S., Leyens, J-Ph., Bond, M. H., Croizet, J-C., Ellemers, N., Sleebos, E., Htun, T. T., Yamamoto, M., Kim, H-J., Maio, G., Perry, J., Petkova, K., Todorov, V., Rodríguez-Bailón, R., Morales, E., Moya, M., Palacios, M., Smith, V., Perez, R., Vala, J., & Ziegler, R. (2009). Stereotype content model across cultures: Towards universal similarities and some differences. *British Journal of Social Psychology*, **48**, 1-33.
- Cuddy, A. J. C., Norton, M. I., & Fiske, S. T. (2005). This old stereotype: The pervasiveness and persistence of the elderly stereotype. *Journal of Social Issues*, **61**, 267-285.
- Dasgupta, N., & Greenwald, A.G. (2001). On the malleability of automatic attitudes: Combating automatic prejudice with images of admired and disliked individuals. *Journal of Personality*

- and *Social Psychology*, **81**, 800-814.
- Davison, H. K., & Burke, M. J. (2000). Sex discrimination in simulated employment contexts: A meta-analytic investigation. *Journal of Vocational Behavior*, **56**, 225-248.
- Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice : Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 5-18.
- Devine, P. G., & Monteith, M. (1999). Chapter.17 Automaticity and Control in Stereotyping. In Chaiken, S., Trope, Y.(eds.) *Dual-Process Theories in Social Psychology*. NY: Guilford Press. Pp.339-360.
- Dion, K. K., Berscheid, E., & Walster, E. (1972). What is beautiful is good. *Journal of Personality and Social Psychology*, **24**, 285-90.
- Dovidio, J. F., & Gaertner, S. L. (1991). Changes in the nature and assessment of racial prejudice. In H. Knopke, J. Norrell, & R. Rogers (Eds.), *Opening doors: An appraisal of race relations in contemporary America*. Tuscaloosa, AL: University of Alabama Press. pp. 201-241.
- Duncan, S. L (1976). Differential social perception and attribution if intergroup violence: Testing the lower limits of stereotyping of blacks. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 590-598.
- Eysenck, M.W., & Calvo, M.G. (1992). Anxiety and performance: The processing efficiency theory. *Cognition and Emotion*, **6**, 409–434.
- Fazio, R. H., Jackson, J. R., Dunton, B.C., & Williams, C.J. (1995). Variability in automatic activation as unobtrusive measure of racial attitudes: A bona fide pipeline? *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 1013-1027.
- Fiske, S. T. (1998). Sterotyping, prejudice, and discrimination. In D. T. Gilbert., S. T. Fiske., & G. Lindzey. (Eds.), *The handbook of social psychology*, 4thed(vol.2, pp.357 -411). New York: McGraw-Hill.
- Fiske, S. T., & Cuddy, A. J. C. (2006). Stereotype content across cultures as a function of group status. In S. Guimond (Ed.), *Social comparison and social psychology*. New York: Cambridge University Press. pp.249-263.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., & Glick, P. (2007). Universal dimensions of social cognition: Warmth and competence. *Trends in Cognitive Science*, **11**, 77-83.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype

- content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 878-902.
- Fiske, S. T., & Neuberg, S. L. (1990). A continuum of impression formation, from category-based to individuating processes: Influences of information and motivation on attention and interpretation. In M. P. Zanna. (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 23, New York: Academic Press. pp. 1-74.
- Fiske, S. T., & Taylor, S. E. (2008a). Chapter11.Stereotyping: Cognition and bias. In *Social Cognition: From Brains to Culture*, New York: McGraw-Hill. pp.257-283.
- Fiske, S. T., & Taylor, S. E. (2008b). Chapter12.Prejudice; Interplay of Cognitive with Affective Biases. In *Social Cognition: From Brains to Culture*, (pp.284-309). New York: McGraw-Hill.
- Fiske, S. T., Xu, J., Cuddy, A. C., & Glick, P. (1999). (Dis)respecting versus (dis)liking: Status and interdependence predict ambivalent stereotypes of competence and warmth. *Journal of Social Issues*, **55**, 473-491.
- Follenfant, A., & Ric, F. (2010) Behavioral rebound following stereotype suppression. *European Journal of Social Psychology*, **40**, 774–782.
- Foster, J., & Liberman, N. (2001). The role of attribution of motivation in producing postsuppressional rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 377-390.
- Foster, J. & Liberman, N. (2004). A motivational model of post-suppressional rebound. *European Review of Social Psychology*, **15**, 1-32.
- Friend, R.M., & Vinson, M. (1974). Leaning over backwards: Juror's responses to defendants' attractiveness. *Journal of Communication*, **24**, 124-129.
- Gailliot, M. T., Plant, E. A., Butz, D. A., & Baumeister, R. F. (2007). Increasing self-regulatory strength can reduce the depleting effect of suppressing stereotypes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **33**, 281-294.
- Galinsky, A. D., Ku, G., & Wang, C. S. (2005). Perspective-taking and self–other overlap: Fostering social bonds and facilitating social coordination. *Group Processes and Intergroup Relations*, **8**, 109-124.
- Galinsky, A. D., & Moskowitz, G. B. (2000). Perspective-taking : Decreasing stereotype expression, stereotype accessibility, and ingroup favoritism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 708-724.

- Galinsky, A. D., & Moskowitz, G. B. (2007). Further ironies of suppression: Stereotype and counterstereotype accessibility. *Journal of Experimental Social Psychology*, **43**, 833-841.
- Geraets, E., Merckelbach, H., Jelicic, M., & Habets, P. (2007). Suppression of intrusive thoughts and working memory capacity in repressive coping. *American Journal of Psychology*, **120**, 205-218.
- Gilbert, D. T. (1999). What the mind's not. In Chaiken, S., & Trope, Y. (Eds.), *Dual-process theories in social psychology*. New York: Guilford press, pp.3-11.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The Ambivalent Sexism Inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 491-512.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001a). Ambivalent sexism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol.33. San Diego, CA: Academic Press. pp. 115-188.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001b). Ambivalent stereotypes as legitimizing ideologies: Differentiating paternalistic and envious prejudice. In J. T. Jost & B. Major (Eds.), *The psychology of legitimacy: Emerging perspectives on ideology, justice, and intergroup relations*, New York: Cambridge University Press. pp.278-306.
- Gordijn, E. H., Hindriks, I., Koomen, W., Dijksterhuis, A., & Van Knippenberg, A. (2004). Consequences of stereotype suppression and internal suppression motivation: A self-regulation approach, *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 212-224.
- Haddock, G., & Zanna, M. P. (1994). Preferring “housewives” to “feminists”: Categorization and the favorability of attitudes toward women. *Psychology of Women Quarterly*, **18**, 25-52.
- Harber, K. D. (1998). Feedback to minorities: Evidence of a positive bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 622-628.
- 林文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科) , **25**, 233-247.
- Heider, F. (1944). Social perception and phenomenal causality. *Psychological Review*, **51**, 358-374.
- Higgins, E. T. (1989). Knowledge accessibility and activation: Subjectivity and suffering from unconscious sources. In J. S. Uleman., & J. A. Bargh. (Eds.), *Unintended thought*, New York: Guilford Press. pp.75-123.
- 保坂久美子・袖井孝子 (1988). 大学生の老人イメージ—SD 法による分析— 社会老年学, **27**, 22-33.

- Howell, A., & Conway, M. (1992). Mood and the suppression of positive and negative self-referent thoughts. *Cognitive Therapy and Research*, **16**, 535-555.
- 池上知子 (1992). 社会的認知の情報処理 多鹿秀継・川口潤・池上知子・山祐嗣 (著) 情報処理の心理学：認知心理学入門, pp.106-156, サイエンス社
- 池上知子 (1999). 学歴ステレオタイプ 岡隆・佐藤達哉・池上知子 (編) 偏見とステレオタイプの心理学 現代のエスプリ, 384, pp.130-142.
- Inquisit 2.0 [Computer software] (2004). Seattle, WA: Millisecond Software.
- Inquisit 3.0.5.0. [Computer software] (2011). Seattle, WA: Millisecond Software.
- 石井国雄・沼崎誠 (2011). 自己価値への脅威が男性のジェンダーに関する潜在的態度に及ぼす影響 社会心理学研究, **27**, 24-30.
- Jost, J. T., & Banaji, M. R. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, **33**, 1-27.
- Jost, J. T., & Kay, A.C. (2005). Exposure to benevolent sexism and complementary gender stereotypes: consequences for specific and diffuse forms of system justification. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 498-509.
- Jost, J.T., Pietrzak, J., Liviatan, I., Mandisodza, A., & Napier, J. (2007). System justification as conscious and nonconscious goal pursuit. In J. Shah, & W. Gardner (Eds.), *Handbook of Motivation Science*. New York: Guilford. pp.591-605.
- 上瀬由美子 (2002). ステレオタイプの社会心理学 サイエンス社
- 金井篤子・佐野幸子・若林満 (1991). 女性管理職のキャリア意識とストレス：インタビュー調査の結果から 経営行動科学, **6**, 49-59.
- Katz, D., & Braly, K. (1933). Racial stereotypes of one hundred college students. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **28**, 280-290.
- Kawakami, K., Dovidio, J. F., Moll, J., Hermsen, S., & Russin, A. (2000). Just say no (to stereotyping) : Effects of training in the negation of stereotypic associations on stereotype activation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 871-888.
- Kawakami, K., Phills, C. E., Steele, J. R., & Dovidio, J. F (2007). (Close) distance makes the heart grow fonder : Improving implicit racial attitudes and interracial interactions through approach behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 957-971.
- 川西千弘 (2000). 印象形成における対人情報統合過程 風間書房

- Kay, A. C., & Jost, J.T. (2003). Complementary justice: Effects of “poor but happy” and “poor but honest” stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 823–837.
- Kay, A. C., Jost, J. T., & Young, S. (2005). Victim derogation and victim enhancement as alternate routes to system justification. *Psychological Science*, **16**, 240-246.
- Kelly, A. E., & Kahn, J. H. (1994). Effects of suppression of personal intrusive thoughts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 998-1006.
- 木村晴 (2003). 思考抑制の影響とメンタルコントロール方略 心理学評論, **46**, 584-596.
- 木村晴 (2004). 望まない思考の抑制と代替思考の効果 教育心理学研究, **52**, 115-126.
- 木村晴 (2005). 抑制スタイルが抑制の逆説的效果の生起に及ぼす影響 教育心理学研究, **53**, 230-240.
- Kimura, H. (2006). Stereotype correction: consequences of egalitarian norm induction via internal and external means. *7th annual conference of Society for Personality and Social Psychology*, Palm Springs.
- 厚生労働省 (2008, 2012). 平成 16 年, 平成 20 年高年齢者就業実態調査結果の概況 <<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/3-20c.html>> (2013 年 9 月 13 日閲覧)
- Koyano, W. (1989). Japanese attitudes toward the elderly: A review of research findings. *Journal of Cross-Cultural Gerontology*, **4**, 335-345.
- Linville, P. W. (1985). Self-complexity and affective extremity: Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, **3**, 94-120.
- Lippmann, W. (1922). *Public opinion*. New York: Harcourt, Brace, Jovanovitch.
- (掛川トミ子 (訳) (1987). 世論 (上・下) 岩波文庫)
- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., & Milne, A. B. (1995). The dissection of selection in social perception: Inhibitory processes in social stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 397-407.
- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., & Milne, A. B. (1998). Saying no to unwanted thoughts: Self-focus and the regulation of mental life. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 578-589.
- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A.B., & Jetten, J. (1994). Out of mind but back in sight: Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 808-817.

- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A. B., & Wheeler, V. (1996). On resisting the temptation for simplification: Counterintentional effects of stereotype suppression on social memory. *Social Cognition*, **14**, 1-20.
- Monteith, M. J., Sherman, J. W., & Devine, P. G. (1998). Suppression as a stereotype control strategy. *Personality and Social Psychology Review*, **2**, 63-82.
- Monteith, M. J., Spicer, C. V., & Tooman, G. D. (1998). Consequences of stereotype suppression: Stereotypes on AND not on the rebound. *Journal of Experimental Social Psychology*, **34**, 355-377.
- 森敏昭・吉田寿夫 (1990). 心理学のためのデータ解析テクニカルブック 北大路書房, pp.157-165.
- 森津太子 (2000). 対人認知における文脈効果—生起メカニズムと調整要因— 風間書房
- 森津太子 (2001). アクセシビリティ 社会的認知ハンドブックⅢ章—1 認知的アプローチの基礎用語 北大路書房 p.251.
- MSN 産経ニュース 2008 働く高齢者&外国人 (現在は, 株式会社モスフードサービス ホームページを参照 <http://www.mos.co.jp/company/social_activity/society/relation/> 2013 年 9 月 13 日閲覧)
- 内閣府大臣官房政府広報室 (2012). 世論調査報告書 平成 24 年 10 月調査 男女共同参画社会に関する世論調査 <<http://www8.cao.go.jp/survey/h24/h24-danjo/>> (2013 年 9 月 13 日閲覧)
- 沼崎誠 (2006). 潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討 科学研究費補助金研究成果報告書, 課題番号 15530402, 2003 年度～2005 年度, 基盤研究(C) <<http://hdl.handle.net/10748/2164>> (2013 年 9 月 5 日閲覧)
- 沼崎誠 (2013). システム再生産に寄与する心理メカニズムの検討—社会変革の促進に向けて— 科学研究費補助金研究成果報告書, 課題番号 22530675, 2010 年度～2012 年度, 基盤研究(C) <<http://cdn27.atwikiimg.com/numazaki/pub/22530675seika.pdf>> (2013 年 9 月 5 日閲覧)
- 野寺綾・唐沢かおり (2005). 罰がステレオタイプ活性に対してもつ抑制効果の検討 社会心理学研究, **20**, 181-190.
- 大江朋子 (2007). 意識的なステレオタイプ抑制の研究 東京大学博士論文
- Oe, T., & Oka, T. (2003). Overcoming the ironic rebound: Effective and ineffective strategies for

- stereotype suppression. In K. S. Yang, K. K. Hwang P.B. Pederson, & I. Daibo (Eds.), *Progress is Asian social psychology : Vol3. Conceptual and empirical contributions*. Praeger. pp. 233-248.
- 大江朋子・繁枘算男 (2007). ステレオタイプ抑制後の抑止効果とファン効果 理論心理学研究, **9**, 1-11.
- 及川昌典 (2005). 意識的目標と非意識的目標はどのように異なるのか? 教示またはプライミングによるステレオタイプ抑制の効果 教育心理学研究, **53**, 504-515.
- Olson, M. A., & Fazio, R. H. (2006). Reducing automatically-activated racial prejudice through implicit evaluative conditioning. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 421-433.
- Phills, C. E., Kawakami, K., Tabi, E., Nadolny, D., & Inzlicht, M. (2011). Mind the gap: Increasing associations between the self and blacks with approach behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, **100**, 197-210.
- Plant, E. A., & Devine, P. G. (1998). Internal and external motivation to respond without prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 811-832.
- Pyszczynski, T., Greenberg, J., Solomon, S., Arndt, J., & Schimel, J. (2004). Why do people need self-esteem? A theoretical and empirical review. *Psychological Bulletin*, **130**, 435-468.
- Renaud, J. M., & McConnell, A. R. (2002). Organization of the self-concept and suppression of self-relevant thoughts. *Journal of Experimental Social Psychology*, **38**, 79-86.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Rosenberg, S., Nelson, C., & Vivekananthan, P. S. (1968). A multidimensional approach to the structure of personality impressions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 283-294.
- Richeson, J. A., & Ambady, N. (2001). Who's in charge? Effects of situational roles on automatic gender bias. *Sex Roles*, **44**, 493-512.
- Rosen, B. & Jerdee, T. H. (1976). Influence of age stereotypes on managerial decisions. *Journal of Applied Psychology*, **61**, 428-432.
- Rubin, K. H., & Brown, J. (1975). A life-span look at person perception and its relationship to communicative interaction. *Journal of Gerontology*, **30**, 461-8.
- Rudman, L. A., Greenwald, A. G., Mellott, D. S., & Schwartz, J. L. K. (1999). Measuring the automatic components of prejudice: Flexibility and generality of the Implicit Association Test.

- Social Cognition*, **17**, 437-465.
- Rudman, L. A., & Fairchild, K. (2004). Reactions to counterstereotypic behavior: The role of backlash in cultural stereotype maintenance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 157-176.
- Rudman, L. A., Greenwald, A. G., Mellott, D. S., & Schwartz, J. L. K. (1999). Measuring the automatic components of prejudice: Flexibility and generality of the Implicit Association Test. *Social Cognition*, **17**, 437-465.
- Ruscher, J. B. (2001). *The social psychology of prejudiced communication*. New York: Guilford Press.
- 佐々木美加 (1997). 学歴が人物評価に与える影響 産業・組織心理学研究, **10**, 145-154.
- Sherman, J. W., Stroessner, S. J., Loftus, S. T., & DeGuzman, G. (1997). Stereotype suppression and recognition memory for stereotypical and non-stereotypical information. *Social Cognition*, **15**, 205-215.
- Sinclair, L., & Kunda, Z. (2000). Motivated stereotyping of women: She's fine if she praised me but incompetent if she criticized me. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 1329-1342.
- Schmader T., & Johns M. (2003). Converging evidence that stereotype threat reduces working memory capacity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 440-452.
- Strull, T. K., & Wyer, R. S., Jr. (1979). The role of category accessibility in the interpretation of information about persons: Some determinants and implications. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1660-1672.
- 鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, **65**, 34-41.
- 田戸岡好香・石井国雄・村田光二 (審査中). 競争意識の知覚が嫉妬的ステレオタイプの抑制に及ぼす影響
- 田戸岡好香・工藤恵理子 (2007). 偏見抑制動機によるステレオタイプ抑制の可能性の検討. 日本社会心理学会第 48 回発表論文集, 776-777.
- 田戸岡好香・村田光二 (2008). 非意識的抑制動機がステレオタイプ抑制に及ぼす効果. 日本社会心理学会第 49 回発表論文集, 438-439.
- 田戸岡好香・村田光二 (2010). ネガティブなステレオタイプの抑制におけるリバウンド効

- 果の低減方略：代替思考の内容に注目して 社会心理学研究, **26**, 46-56.
- Tado'oka, Y., & Murata, K. (under review). Consequences of the internal suppression motivation on stereotype suppression toward women in the workplace.
- 田戸岡好香・村田光二・石井国雄 (印刷中). 嫉妬的ステレオタイプの抑制における代替思考方略の効果 対人社会心理学研究.
- Tadooka, Y., Takabayashi, K., & Murata, K. (2008). Gender stereotypes on the rebound in Japan, *Poster presented at 29th International Congress of Psychology*. Berlin.
- 高林久美子 (2007). 自己への脅威が女性に対する偏見に及ぼす効果：両面価値的性差別理論からの検討 社会心理学研究, **23**, 119-129.
- 高林久美子・村田光二 (2005). 日本語版偏見抑制の動機づけ尺度作成の試み (1) 日本心理学会第 69 回大会論文集 p.125.
- 高林久美子・村田光二・埴田健司 (2007). 日本語版偏見抑制尺度作成の試み (2) 日本心理学会第 71 回大会論文集 p.242.
- Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 21, New York: Academic, pp.181-227.
- 月本敬・川口潤 (2006). 検索誘導性忘却研究の展望 人間環境学研究, **4**, 31-41.
- 梅澤眞一・浅尾裕 (2012). 高年齢者の継続雇用等、就業実態に関する調査 労働政策研究・研修機構 <<http://www.jil.go.jp/institute/research/2012/094.htm>> (2013 年 9 月 13 日閲覧)
- 若林満・宗方比佐子 (1986). 女性管理職に対する態度 (WAMS) と女性リーダーシップの評価に関する研究 名古屋大学養育学部紀要 (教育心理学科) **33**, 229-246.
- Wegener, D. T., & Petty, R. E. (1997). The flexible correction model: The role of naïve theories of bias in bias correction. In M. P. Zanna. (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 29, New York: Academic, pp.141-208..
- Wegner, D. M. (1994). Ironic processes of mental control. *Psychology Review*, **101**, 34-52.
- Wegner, D. M., & Erber, R. (1992). The hyperaccessibility of suppressed thoughts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 903-912.
- Wegner, D. M., Erber, R., & Zanakos, S. (1993). Ironic processes in mental control of mood and mood-related thought. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 1093-1104.
- Wegner, D. M., & Gold, D. B. (1995). Fanning old frames: Emotional and cognitive effects of suppressing thoughts of past relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**,

782-792.

Wegner, D. M., Schneider, D. J., Carter, S. R., & White, T. L. (1987). Paradoxical effects of thought suppression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 5-13.

Weiner, B., Perry, R. P., & Magnusson, J. (1988). An attributional analysis of reactions to stigmas. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 738-748.

Wenzlaff, R. M., Wegner, D. M., & Roper, D. W. (1988). Depression and mental control: the resurgence of unwanted negative thoughts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 882-892.

Wilson, T. D., & Brekke, N. (1994) Mental contamination and mental correction: Unwanted influences on judgments and evaluations. *Psychological Bulletin*, **116**, 117-142.

Winer, B. (1971). *Statistical principles in experimental design*. New York:McGraw-Hill.

Wittenbrink, B., Judd, C.M., & Park, B. (2001). Spontaneous prejudice in context: Variability in automatically activated attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 815-827.

Wyer, N. A. (2007). Motivational influences on compliance with and consequences of instructions to suppress stereotypes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **43**, 417-424.

Wyer, N. A., Mazzoni, G., Perfect, T. J., Calvini, G., & Neilens, H. L. (2010). When Not Thinking Leads To Being And Doing: Stereotype Suppression And The Self. *Social Psychological and Personality Science*, **1**, 152-159.

Wyer, N. A., Sherman, J. W., & Stroessner, S. J. (1998). The spontaneous suppression of racial stereotypes. *Social Cognition*, **16**, 340-352.

Wyer, N. A., Sherman, J. W., & Stroessner, S. J. (2000). The roles of motivation and ability in controlling the consequences of stereotype suppression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 13-25.

山本真理子・原奈津子 (2006). 他者を知る－対人認知の心理学－ セレクション社会心理学 6 サイエンス社

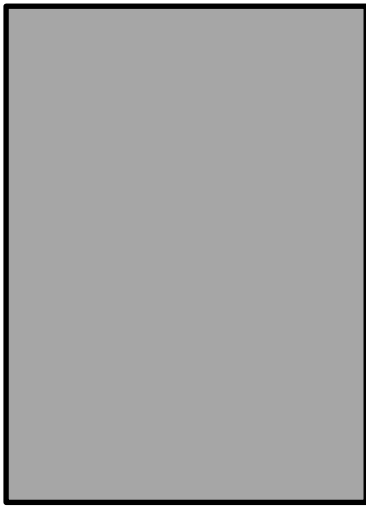
山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

Zhang, S., & Hunt, J. S. (2008) The stereotype rebound effect: Universal or culturally bounded process? *Journal of Experimental Social Psychology*, **44**, 289-500.

付録

- A. 実証研究で用いた刺激写真一覧
- B. 対人認知課題のパソコン画面
- C. 対人認知課題で使⽤したやや無能な人物の⽂章
(研究 2, 研究 3, 研究 4 で使⽤)
- D. 研究 5 におけるテスト問題とフィードバック
- E. 対人認知課題で使⽤したやや冷たい人物の⽂章
(研究 5, 研究 6, 研究 7 で使⽤)
- F. 抑制フェーズの記述課題における記述内容

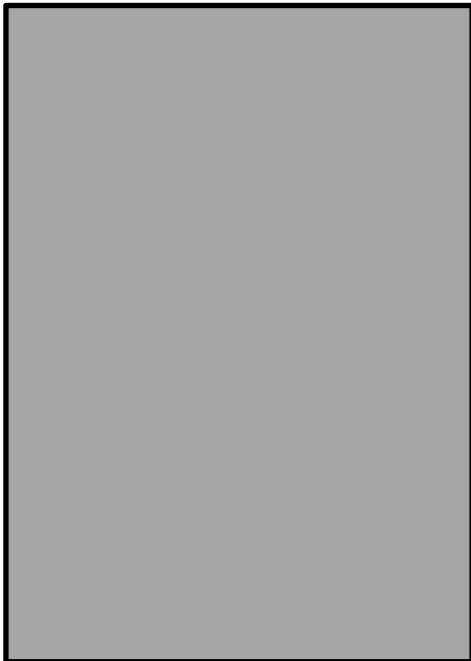
付録 A. 実証研究で用いた刺激写真一覧



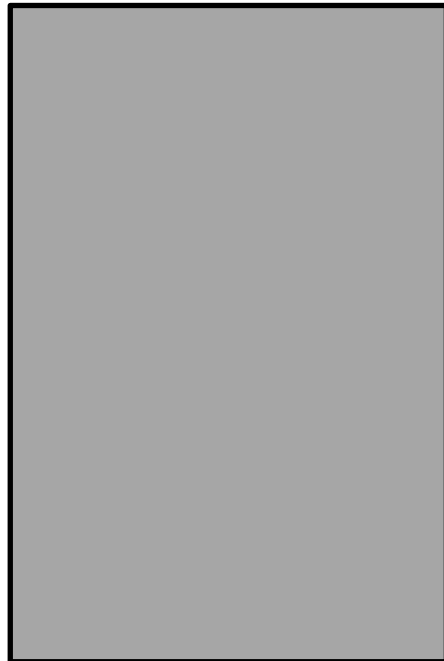
研究 1 で用いた家庭的女性の写真



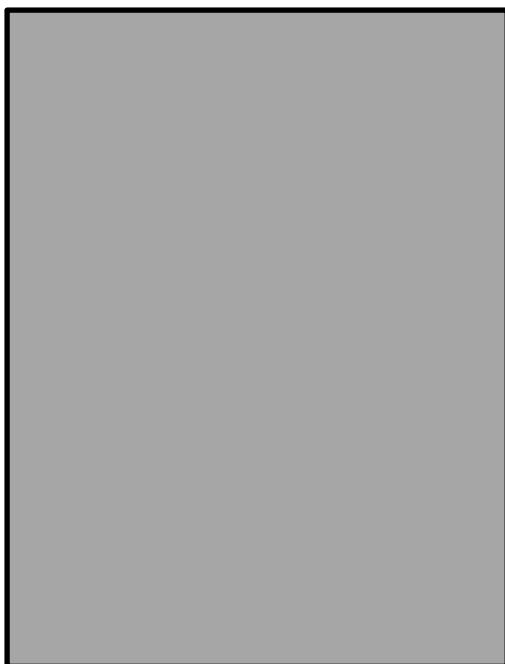
研究 2・3・4 で用いた高齢者の写真



研究 5 で用いたキャリア女性の写真



研究 6 で用いた金融ディーラーの写真

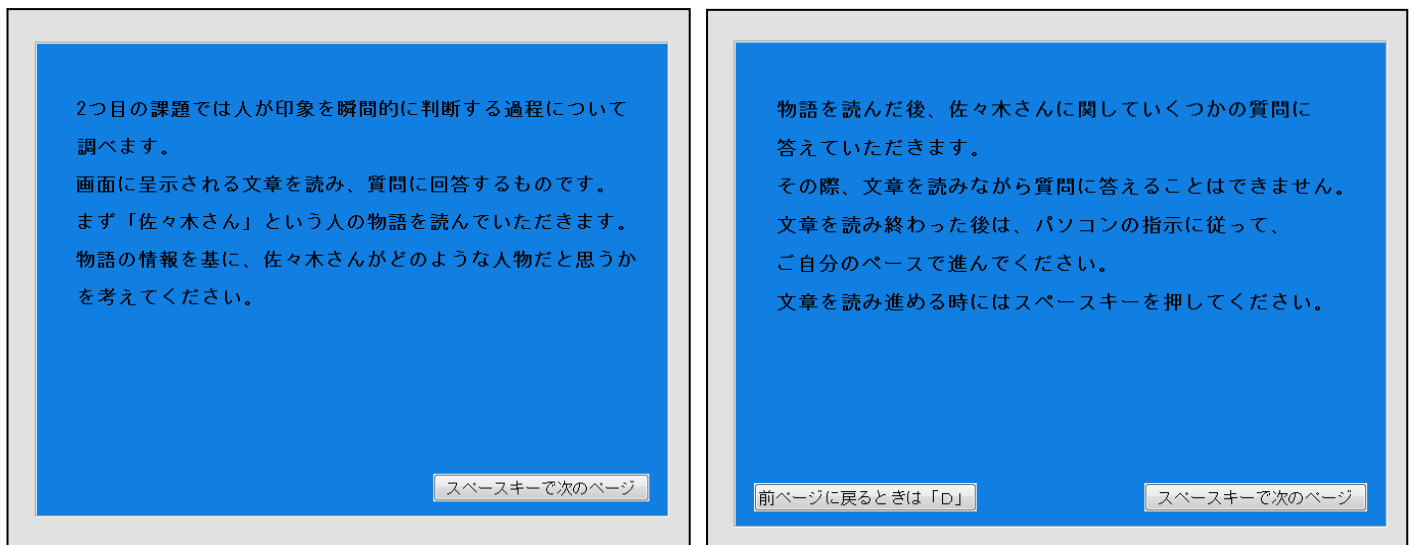


研究 7 で用いた東大生の写真

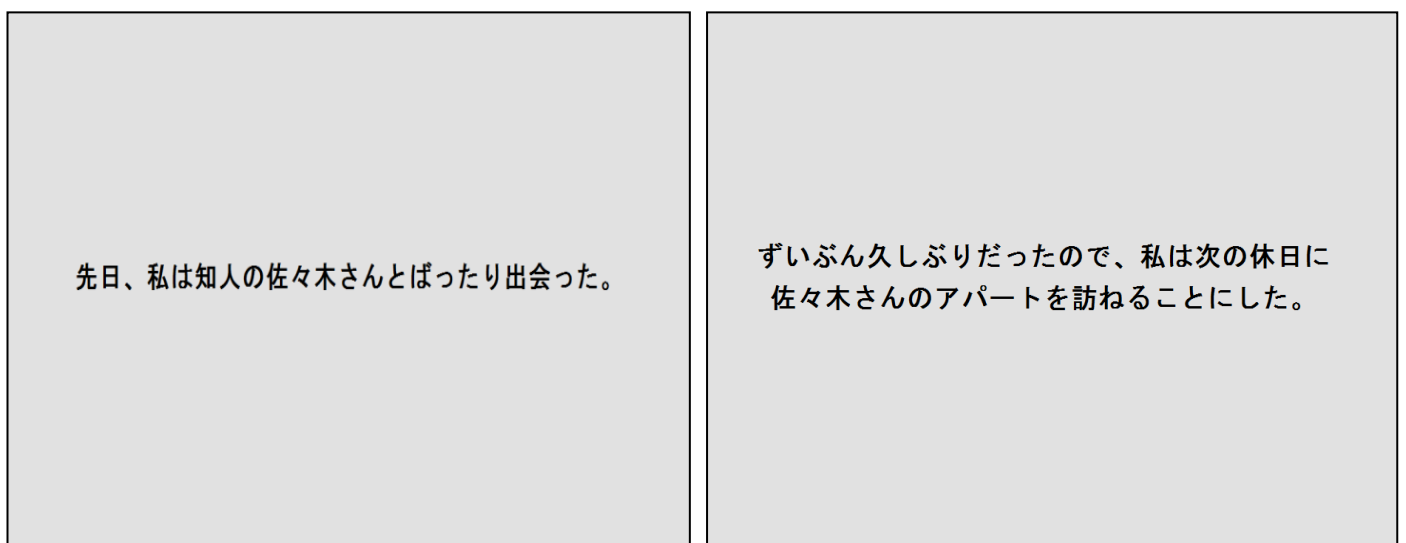
注. 本研究で用いた写真は，研究実施においてのみ使用許諾を得ることができた。
インターネットへの掲載許諾が得られないため，肖像権およびプライバシーを
考慮し，インターネット上での公開を控えることとする。

付録 B. 対人認知課題のパソコン画面

①課題の説明－2 ページにわたって課題の説明を呈示した。



②文章の呈示－文章を 1 ページにつき 1 文ずつ呈示した。スペースキーを押すと次のページに進み、同様に文章が呈示された。



例. 1 文目

2 文目

- ③印象評定の説明－文章の呈示がすべて終わると、自動的に印象評定の説明画面が呈示された。課題の説明は 2 ページわたって行われた。

引き続き、ご自分のペースで課題を進めてください。 続いて、これから今読んでいただいた「佐々木さん」という人物への印象を答えていただきます。 以下の課題の説明をきちんと読み、回答をしてください。 <課題の説明> これから画面に単語が表示されますので、その単語が「佐々木さん」の印象にどの程度あてはまるかを回答して下さい。 スペースキーで次のページ	「佐々木さん」に当てはまる程度を 1～9 の数字で入力してください。 “全くあてはまらない” を 1 “どちらともいえない” を 5 “非常によくあてはまる” を 9 として、1～9 の数字を入力し、よければenterキーを押して下さい。次の単語が呈示されます。 なお、この課題では人が瞬間的に印象を判断する過程を調べていますので、できるだけ速く判断し、入力するようにしてください。 判断が遅い場合には、自動的に次の単語に切り替わってしまいますので、速く判断するように注意してください。 スペースキーで次のページ
--	--

- ④評定画面－評定する単語は 1 項目ずつ画面の中心に呈示された。
- 実験参加者が数字のキーを押し、Enter キーを押すと、自動的に次の評定語に進んだ。

めずらしい

まったくあてはまらない どちらともいえない 非常によくあてはまる

1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 — 8 — 9

付録 C. 対人認知課題で使用したやや無能な人物の文章

(研究 2, 研究 3, 研究 4 で使用)

先日、私は知人の佐々木さんとばったり出会った。ずいぶん久しぶりだったので、私は次の休日に佐々木さんのアパートを訪ねることにした。佐々木さんの部屋はこざっぱりとした和室だった。私が部屋に通されると、まもなく家の電話が鳴ったが、佐々木さんがうかうかしていると電話は切れてしまった。しばらくするとまた電話が鳴り、今度は電話に出ることができた。佐々木さんは電話を切ってから、「急だけど、近所の人たちに誘われて、公民館でお菓子作りをすることになった。」と言った。私は興味があったので、佐々木さんについていくことにした。私たちはアパートを出て、駅前の大通りを通って徒歩で公民館に向かった。佐々木さんは公民館には一度しか行ったことがないと言っていたが、無事公民館に到着することができた。公民館に着くと、受付の人に「お菓子作りは2階でやっています」と案内されたので、私たちは2階の調理室に行った。お菓子作りが始まると、佐々木さんはさっき砂糖を入れたのに、もう一度入れてしまい、お菓子が甘めになってしまった。みんなで作ったお菓子を食べてお菓子作りの会は終わった。その後、私たちは帰り道にスーパーに立ち寄ることにした。佐々木さんはスーパーに行く前に銀行の ATM に立ち寄ってさっとお金をおろし、私たちは明日の食事の買い物をした。買い物を済ますと、食事どきになったので、私たちは近くのレストランで夕食を食べて、佐々木さんのアパートに帰ることにした。アパートに着くと、佐々木さんは食卓の上に買い物のメモがあるのを見つけて、人参を買いそびれたことに気づいた。私が部屋でくつろいでいると、佐々木さんはちょうど当番に当たっている地域の防犯パトロールに協力するために再び出かけることになった。出かける準備を始めたのだが、佐々木さんは支度するのに時間がかかってしまい、開始時刻ギリギリになってしまった。パトロールを始めて、繁華街に差し掛かったところで、私たちは酔っぱらいを見かけた。繁華街は今日もとても賑わっていたが、特に何事もなく私たちは防犯パトロールを終えた。すっかり夜も遅くなってしまったので、私たちは駅前で別れ、家に帰ることにした。私たちは、また近いうちに会おうと約束した。

注. 下線部は慈悲的ステレオタイプの能力次元のステレオタイプ特性である「無能さ」に関連した行動である。実際の実験に際しては、下線は引かずに呈示した。

付録 D. 研究 5 におけるテスト問題とフィードバック

はじめのテスト問題は両条件共通で、以下のように呈示された。

大学生における適性テストの実施

ID: 0601355

まずは練習です。
あなたの性別をクリックしてください。

[女性](#) [男性](#)

例題
問題部分の図形の法則性を考え、「？」の部分にあてはまる図形を選択肢の中から選んでください。

<問題>

<選択肢>

[次へ](#)

例題
三角形は反時計回りに90度ずつ移動している。
三角形の色は白黒交互になっている。

この図から90度三角形が移動し、色が黒である図形が正解

<選択肢>

[次へ](#)

問題部分の図形の法則性を考え、「？」の部分にあてはまる図形を選択肢の中から選び、その選択肢をクリックしてください。
30秒が経過すると自動的に次の問題に移ります。

【準備がよければ、[ここ](#)をクリックしてください。】

問1

<問題>

<選択肢>

[\(A\)](#) [\(B\)](#) [\(C\)](#) [\(D\)](#) [\(E\)](#)

問2

1

<問題>



<選択肢>



(A) (B) (C) (D) (E)

問3

1

<問題>



<選択肢>



(A) (B) (C) (D) (E)

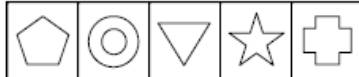
問4

1

<問題>



<選択肢>



(A) (B) (C) (D) (E)

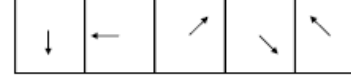
問5

1

<問題>



<選択肢>

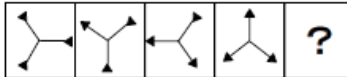


(A) (B) (C) (D) (E)

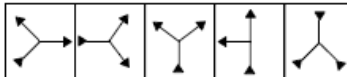
問6

1

<問題>



<選択肢>

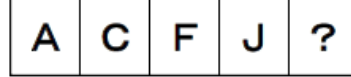


(A) (B) (C) (D) (E)

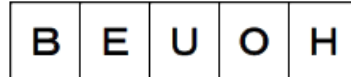
問7

1

<問題>



<選択肢>



(A) (B) (C) (D) (E)

問8

1

<問題>



<選択肢>



(A)

(B)

(C)

(D)

(E)

問9

1

<問題>



<選択肢>



(A)

(B)

(C)

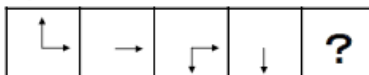
(D)

(E)

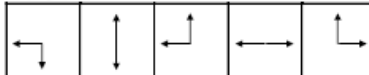
問10

1

<問題>



<選択肢>



(A)

(B)

(C)

(D)

(E)

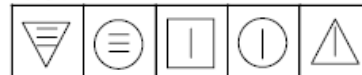
問11

1

<問題>



<選択肢>



(A)

(B)

(C)

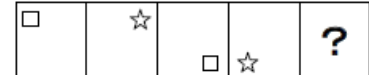
(D)

(E)

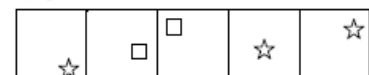
問12

1

<問題>



<選択肢>



(A)

(B)

(C)

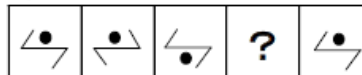
(D)

(E)

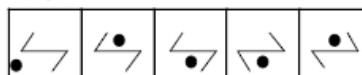
問13

1

<問題>



<選択肢>



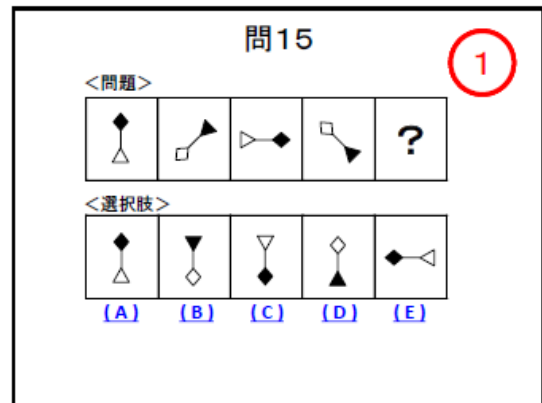
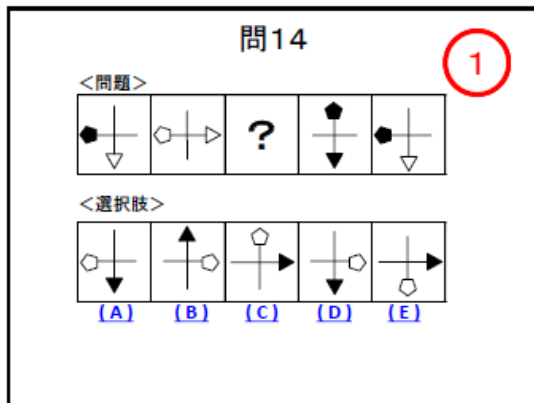
(A)

(B)

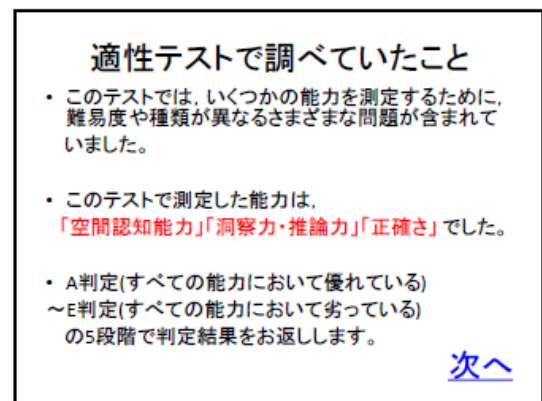
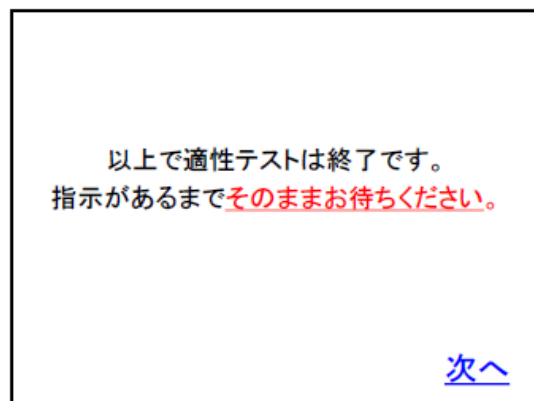
(C)

(D)

(E)

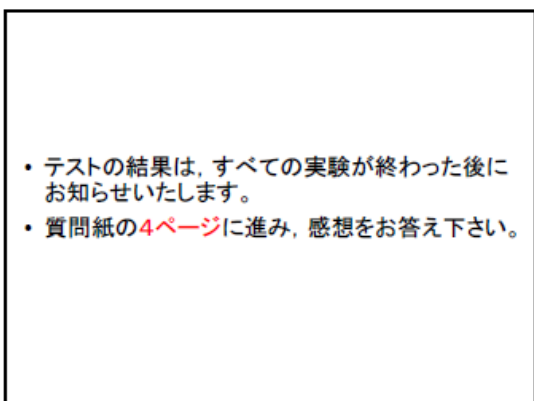


15 問の出題が終わった後、テストで調べたことを解説した。



これ以降は条件によって提示画面が異なった。

<ネガティブフィードバックなし条件の画面>



<ネガティブフィードバックあり条件の画面>

最初にダミーの結果の集計画面を呈示した。

【結果の集計】	集計が終わりました。 結果が表示されるまでお待ちください。 ■ ■ ■ ■ ■ 結果の集計中です。しばらくお待ちください。
-----------------------	---

その後、実際の成績とは関係なく、ネガティブなフィードバックをした。

あなたの成績 ID:0601355 性別:男性 評価:D判定 総評:いずれの能力においても、全体的に低い傾向にあります。きめ細かい視点で問題を読み解いたり、効率的に作業を行う力がやや欠けている傾向にあります。重要な仕事を任せられた時に、致命的なミスを犯したり、人より作業が遅くなってしまう可能性があります。 次へ	質問紙の4ページに進み、感想をお答え下さい。
---	--

付録 E. 対人認知課題で使用したやや冷たい人物の文章

(研究 5, 研究 6, 研究 7 で使用)

先日、私は知人の佐々木さんとばったり出会った。ずいぶん久しぶりだったので、私は次の休日に佐々木さんのアパートを訪ねることにした。佐々木さんの部屋はこざっぱりとした和室だった。私が部屋に通されると、以前佐々木さんが飼っていたインコがいないことに気付いた。どうしたのか尋ねると、インコの世話ができなくなってしまったので、知人にあげてしまったのだそうだ。私たちはひととおり自分達の近況を話し終えると、佐々木さんの持っているアルバムを見ながら昔のことを話した。アルバムの中には昔みんなでよく行った喫茶店が写っている写真があった。私たちは懐かしくなって、その喫茶店に行くことにした。アパートを出ると、近所の人に「こんにちは」と声をかけられ、佐々木さんは目を合わせずに軽く会釈した。私たちはアパートの前の大通りを通って、徒歩で駅前のバス停に向かった。バス停に着くと、バスは出発したばかりだったので、私たちは近くのコンビニに寄り、お茶を買った。再びバス停に着いてから数分でバスが来た。バスに乗ると、近所で祭りがあるためか混み合っていたので、座れなかった。吊革につかまり立っていると、バスが右折をした時に大きく揺れ、佐々木さんは人のかばんにあたってしまったが、謝らなかった。バスが目的地に着いたので降りると、町並みは昔とほとんど変わっていなかった。バス停から少し歩いたところに喫茶店はあった。佐々木さんは久しぶりに会った喫茶店の店主とうれしそうに雑談した後、昔よく食べたナポリタンを頼んだ。私たちがナポリタンを食べながら話していると、隣の人がこれからお祭りで花火があがると言っていた。お祭りをやっている神社は近所なので、私たちは花火を見に行くことにした。神社に近づくとすでに花火が始まっていて、非常に賑わっていた。花火が終わったところ、佐々木さんの携帯電話が鳴った。電話について尋ねると、職場の後輩から電話が来たが、仕事の話は休日にはしない主義だからと言って断ったのだと言っていた。私たちは再びバスに乗ろうとしたが、非常に混んでいてなかなかバスに乗ることができなかった。30 分後、私たちはやっとバスに乗り、駅前のバス停で降りた。すっかり夜も遅くなってしまったので、私たちは駅前で別れ、家に帰ることにした。私たちは、また近いうちに会おうと約束した。

注. 下線部は嫉妬的ステレオタイプの人柄次元のステレオタイプ特性である「冷たい」に関連した行動である。実際の実験に際しては、下線は引かずに呈示した。

付録 F. 抑制フェーズの記述課題における記述内容

抑制フェーズにおける記述課題での記述内容を以下の表に示した。表では、人柄次元および能力次元を大きな枠組みとして、参加者の記述内容を基にいくつかのまとまりに分類し、その具体例を示した。

付録 F-1. 家庭的女性の労働場面に関する記述の分類（研究 1）

大分類	小分類	具体例
無能さ	決断力のなさ	・ どうしていいか分からず，上司にまわした ・ 上司やまわりに聞かないと対応できなかった
	能力のなさ	・ 誤った入力をしてしまった ・ 何もできなかった
	記憶力のなさ	・ 覚えるまでにかなりの時間を要した ・ すぐに覚えられなかった
有能さ	決断力のある	・ 自己判断で対処した ・ 自分の考えで行動した
	能力のある	・ 丁寧かつ迅速に対応することができた ・ すばやく対応した
	記憶力のある	・ 一生懸命覚えた ・ すぐに新しい仕事を覚えた
温かさ	コミュニケーション力の高さ	・ 笑顔でかわした ・ もちまえのコミュニケーション力でなんとか対応した
	従順さ	・ 素直に従った ・ 内心ムッとしたが笑顔で対応した
無関連	仕事内容の記述	・ 上司に報告する ・ お茶を出す
	能力や人柄がわからない曖昧な記述	・ 丁寧に対応する ・ 一般的な対応をした

付録 F-2. 高齢者の労働場面に関する記述の分類（研究 2, 3, 4）

大分類	小分類	具体例
無能さ	動作の緩慢さ	・ 金額の計算にてまどっている ・ もたもたしている
	身体能力のなさ	・ 疲れているようだ ・ 重いものを運ぶのが苦手である
	記憶力のなさ	・ 覚えが遅い ・ すべての商品の値段を覚えきれておらずとまどっている
有能さ	動作の迅速さ	・ てきぱきとお釣りを渡す ・ 客が多くてもあわてない
	身体能力のある	・ 朝早くてもいつもどおりの動作で仕事ができる ・ 眠そうなそぶりを見せることもなく働いている
	記憶力のある	・ 商品の値段をしっかり覚えている ・ よく来る客の顔を覚えてその人にはあいさつをする
温かさ		・ にこやかだ ・ よくお客さんに話しかける
無関連	仕事内容の記述	・ 新聞を売る ・ 客が多いので忙しそうである
	能力や人柄がわからない曖昧な記述	・ 頑張っている ・ 丁寧な接客をしている ・ 毎日時間どおりに売店に到着する

注. 研究 2 から研究 4 の記述課題では、高齢者を題材としたため、3 つの研究を通して頻繁に記述された内容をまとめた。

付録 F-3. キャリア女性の労働場面に関する記述の分類（研究 5）

大分類	小分類	具体例
冷たさ	他者への厳しさ	・他社員に対して厳しい ・ミスを許さない
	愛想がない	・笑顔が少ない ・いつも不機嫌に見える
	単独行動を好む	・大勢のなかでワイワイするのが嫌い ・飲み会にあまり出ない
	他者に対する優越感	・他地区担当者より自分が優れていると思っている ・心の中で見下している
温かさ	他者への優しさ	・派遣社員への面倒見が良い ・同僚にも優しい
	愛想がある	・笑顔で接する ・いつもにこやかである
	集団行動を好む	・休憩中は談笑することも多い ・上司との飲み会を嫌がらない
	他者に対する平等	・派遣社員にも他の社員と同じ態度 ・男性社員と女性社員の区別なく接してくれる
有能さ	指導力のある	・分かりやすく指示を出す ・リーダーシップがある
	能力のある	・与えられた仕事を的確にこなす ・無駄なく仕事をこなす
	他者からの賞賛	・営業部の憧れのまどである ・人望がある
無関連	仕事内容の記述	・残業が多い ・パソコンを使った仕事が多い
	仕事への情熱	・仕事一筋である ・仕事で妥協しない，自分に厳しい
	見た目に関する記述	・身だしなみに気をつかう ・りんとしている
	仕事以外の日常生活	・男に興味がない ・高級マンションに住んでいる

付録 F-4. 金融ディーラーの労働場面に関する記述の分類（研究 6）

大分類	小分類	具体例
冷たさ	他者への厳しさ	・部下に対して厳しい ・部下や派遣社員の失敗に厳しい態度で接する
	利益重視	・金のことなら何でもやる ・多くの利益を上げるために手段を選ばない
	単独行動を好む	・ほとんどの仕事を自分一人でこなそうとする ・部下を信用しないで自分で仕事をこなしている
	高圧的態度	・派遣社員を見下している ・命令口調で部下に接している
温かさ	他者への優しさ	・部下に対して優しい ・怒鳴ったりしない
	集団行動を重視	・グループワークを大切にしたい ・部下とのコミュニケーションを大事にしている
	平等主義的態度	・男女分け隔てなく接する ・仕事上では男女の区別はしない
有能さ	指導力のある	・部下たちを導くリーダーシップがある ・部下にてきぱきと仕事を割り振る
	能力のある	・てきぱきと仕事をしている ・仕事をバリバリこなしている
	他者からの信頼	・顧客に信頼されているやり手である ・部下に信用されている
無関連	仕事内容の記述	・冷静に市場の動向を分析する ・夜遅くまで仕事をしている
	仕事への情熱	・仕事に一切の妥協を許さない ・家庭より仕事を優先する
	見た目に関する記述	・身だしなみを常にきちんとしている ・暑くても背広を着たまま仕事をする

付録 F-5. 東大生の就職活動場面に関する記述の分類（研究 7）

大分類	小分類	具体例
冷たさ	他者への厳しさ	・ 他人の意見に批判的だった ・ 他人の意見を採用しない
	他者の意見の軽視	・ 平気に話をさえぎってくる ・ 人の話を聞かない
	高圧的態度	・ 自分の意見で他を圧倒した ・ 馬鹿にしたような目で自分を見てきて腹が立つ
温かさ	他者への優しさ	・ 冷たく見えるが、配慮を多くする ・ 難しい言葉をできるだけ使わない
	他者の意見の重視	・ 人の話をよく聞いている ・ 他人の意見にもよく耳を傾けた
	人当たりの良さ	・ コミュニケーション能力が高い ・ 社交的だ
有能さ	指導力のある	・ グループワークの中心になっている ・ 私たちの意見の要点をうまくまとめる
	洞察力のある	・ 問題点を指摘してグループ全体の評価を上げる ・ 矛盾点を正確につく
	論理的な	・ 常に論理的な発言をした ・ 客観的に物事を判断する
無関連	動作	・ ジェスチャーを用いて話す ・ よくしゃべる
	グループワークへの態度	・ 積極的に発言をする ・ 熱心にグループワークに参加していた
	見た目に関する記述	・ メガネが似合う ・ オシャレである

謝辞

本論文を無事作成することができたのは、本当に多くの方々にご協力いただいたからです。この場を借りて深く感謝申し上げます。

はじめに、指導教官である村田光二教授には、修士課程の頃から長い間ご指導いただきました。ネガティブ思考で優柔不断な私ですが、先生のご指導に背中を押していただいたおかげで、なんとか研究成果を博士論文という形にすることができたと思います。また、博士論文執筆中に結婚および妊娠をしましたが、親身になって相談にのっていただき、さまざまな配慮をしていただきました。大変感謝しております。

博論指導委員の稲葉哲郎教授には、リサーチワークショップや博士課程の入試など、多くの機会でご指導いただきました。本論文の審査にあたっては、安川一教授と西野史子准教授にも有益なアドバイスをいただきました。ありがとうございました。

また、一橋大学の村田ゼミの院生の皆さんには貴重なアドバイスとサポートをいただきました。研究で行き詰った時には悩みや愚痴を言い合ったり、皆さんの優しさがあったおかげで、大変ながらも楽しい大学院生活を送ることができました。

実験実施におきましては、授業やサークルでお忙しい中、実験に参加してくださったさまざまな大学の皆様、ありがとうございました。刺激文の作成や写真の提供など、一番大変な作業と一緒に頑張ってくれた一橋大学の学部生や、実験者役として手伝ってくれた院生にも大変お世話になりました。紙幅の関係で皆様のお名前を出すことはできませんが、お一人おひとりに感謝しております。

そして、最後になりましたが、共同研究者であり、夫でもある明治学院大学の石井国雄助手には、公私ともに支えていただきました。研究で悩んだ時には、夜遅くまで相談にのってくれて、疲れている時には優しく励ましてくれました。また、長年かかった大学院生活の中で、文句も言わずに私を信じ続けてくれた両親にも感謝します。夫や両親など家族のサポートがなければ、この博士論文は書きあげられなかったと思います。言葉では伝えきれませんが、心より感謝を申し上げます。

2014 年 1 月 田戸岡好香